

それは、拳と極意の武俠片。  
ファンタジー

それは、飛翔く華と、地を覇う漢の  
はばた おんな は おとこ

極上中華的運命。  
デイスティニー

幻想 武 俠 片 “ 極上中華的運命 ”

エイテイ・アルティマ

《訃界告の雷声》

やましたよくや

作 山下弋也

サラ

絵 斎 欄 レイ

○、序 《神 槍》

オーディンザレイ

己が弱さを見据え、それでもなお運命に飛び込むか否か。

さだめ

即ち、 “ 八 極 ” とは、唯それだけの覚悟。

エイティアルティマ

ただ

こと

雷 信 文

レイ

シンブン



その少年の眼差しは、世界が霞むほど眩かった。

なによりそれは、まごころ事なき漢<sup>おごころ</sup>だった。

まだ空の色が、漆黒を思わせる黒から、群青色に変わり始めたばかりの刻。  
その刻に、その漢は戦場に赴いた。

目につくのは、草藪も乏しい不毛なる荒野。そこで動いているものと言えば、びゅうびゅうと  
哭いてうねる風と、それにあおられてなびく雑草 ……そして力サ力サと転がる土  
埃のみ。

否。

ザリッ、

と、足音がその事実に興を唱える。

その足音を立てた主は

なんともこの場に全くそぐわない、

絶世の美少年だった。

肩まで無造作に伸ばして、手櫛でしか整えてなさそうな、ぼさぼさの金髪。  
しかしその金髪は、光を反射しているのではなく、髪そのものが自ら光っているのではないか  
と錯覚してしまいそうなほど、美しく、そして艶やかだった。

長い前髪から覗くその大きな二重瞼の瞳は朝焼けの、さざ波一つない湖の様に青く、澄んでい  
る。その下には、女でも嫉妬しそうなほど形の整った鼻梁に、男の筈なのにまるで少女のよ  
うにあどけない桃色の唇。そしてマシユマロの様に柔らかそうな白磁の頬。

女性ならば一目で陥落。男ですらも思わずときめいてしまうほどの美貌。

着ている服は白に近い水色の拳法着に、靴はカンフーシューズ。

そして背中には、

赫く、大きく、

“ 崩壊突撃 ”

の文字。

拳法着の色が白に近い水色だから、その文字はなおさら赤く映えていた。

ともすれば美少女が無理して男装をしている。そうと言っても差支えないほど

りないのも相まって 彼には輝く美貌があった。

背丈が足

そして……その少年の右手で鈍く光る存在<sup>もの</sup>。

それはあまりに大きすぎて、大きすぎて少年には余りに似合わなくて、観る者がその場にいたら絶句する事は間違いないだろう。

それは一見『鉄柱』に見えた。

信じられない事に、鉄柱に。

鍛え上げられた鉄で出来た実に頑丈そうな柱。

とはいえ柱にしては少々細い。

しかしそれはよく見れば

……『槍』であつた。

それが鉄柱に見えたのは、それがあまりに規格外のサイズだつたからだ。

されどそれを鉄柱と呼ぶには、それはあまりにも臍物臭がきつすぎた。

そして、鉄柱と見紛わんばかりに大きい柄の先には、そのこつい柄にふさわしい、斧のごとく分厚く、剣並みに長い槍の切っ先が、赤い穂を従えてそそり立っている。

少年はその、槍と呼ぶにはあまりに規格外の代物を、なんと軽々と持ったまま、物憂げに視線を前方の先のそのまた先へと向けている。

その槍の柄の直径はあまりに太すぎて、少年の小さな手では握ることも困難そうではあるが、不思議な事にまるで吸いついているかのようにぴたりと槍は少年の手の中におさまっていた。

なんといつ異常な光景<sup>シチュエーション</sup>。

そして、少年の視線の先には、天を覆わんばかりに大きい影。

移動要塞『刃城』<sup>ディアオ</sup>。それがその影の名であつた。

「刃様<sup>ディアオ</sup>、この城に接近する敵影が一騎 ……

雷です！雷信文<sup>レイシンブン</sup>が来ました！」

薄暗い、大広間。

そこに駆け込んだ一人の伝令兵が、この大広間の、否、この城の主である、玉座に座った人影に報告する。

「ほう……確かに一人、一人だつたのだな？」

玉座に座った人影が口を開き、下弦の月の様に白い歯が口元からこぼれる。笑っているのか。

「はい、確かに一人、一人でした！」

兵が返事をする、その玉座に座っている人物の、右手側から押し殺した、しかし愉快そうな

笑い声が。

「ククク……馬鹿め、まさか本当に一人でこようとは……真正直といつかもう純真過ぎて、白痴としか言いようがありませんな、刁様」

老人である。左目が弱視なのか、瞼を閉じんばかりに細め、その代わりの様に右目を大きく開いた、異貌の老人。

その老人の言葉が聞こえているのかいないのか、玉座に座っている人影は、兵に、否この城にいる自分の全下僕に、即座に下知する。

驚かざるを得ない、命令を。

「全軍一人残らず出陣し、南門を固める。一人残らず、だ。そしてこの城に備え付けてある砲門の標準をすべて雷に合わせろ。

今、すぐに」

その全戦力をたつた一人にさし向けるといつ、あまりに大げさな命令に兵も、老人も驚きに目を見張る。

「な！？デイ、刁様何故に、何故にたつた一人の愚かもの相手にそんな大げさなッ……?!」

当然うるたえる老人に、頬杖をついたまま、それでも玉座に座った人影      ディアオ 刁はにやにやと

笑っていた。

「わか理解らぬか？」

ディアオは老人と兵の反応を楽しむかのように、さらに唇をにやにやと歪めたまま、真意を告げる。

「たつたひん奴が漢からだ」



あり得ないほど、大気が震えている。

刃城の前に、あまりに壮絶な数の軍勢が奔めき、ものすごい殺気と闘気を少年にぶつける。誰もが泡を吹き卒倒するか最悪ショック性心臓マヒを起こすであろうその威圧に、しかし少年は驚いたことにそんなものなぞ唯の涼風、と言わんばかりの無表情。

“よく来たな雷、約束を守ってくれてうれしいよ。さっそく歓迎しよう……”

刃城から、大音量の刃の音がスピーカーから流れてくる。

「……」

少年　雷は無反応。

“しかし正気の沙汰とは思えんな……気は確かかね？”

少し、呆れるような刃の声。

それに対し雷は手に持っている槍の切っ先をピツ、と城の方に向け、そうして初めて言葉を紡ぐ。

「戦いに赴いてこそ、漢。」

貫かわばこそ、愛。

死なぞ、物の数ではない」

やたら　絶世の美貌を持つ少年が発する声にしては、

やたらと低く、渋い声。

しかしその声にこめられた烈気はまちがいに本物。

「ッ……………」

ポツリとつぶやいただけに ……

たった一人の少年の言葉に、大軍の兵がなんと気圧されていた。

「……それにこの程度のブリキのおもちゃ風情で俺をどうこうできると思っているのか？」

次いで、雷はそう付け加えるのも忘れない。

この言葉が挑発でもなければ虚勢でもないのを識るのは、刃のみだ。

「おのれえ……女が腐って出来たようなナリの小童風情が……」

雷の唇の動きを読み取り、齒をきしらせる老人。

その後ろで、刃は二タ二タと唾つのみだ。

「“結界域”抽出装置、作動！」

老人の喚きじみた命令と共に、城の地下あたりで、このときの為に拘束されていた奴隷数百人が悲鳴を上げた。

「うギャアアアアアアアアアッ！ち、ちか、力が吸い吸い取られレレ……」やめて止めてやめて止めてやめおギャアアアアッ！……」

勾城の地下で拘束されていた奴隷数百人は、体中に付けられている管から全生命力ごと「結界域」を吸い取られ、たちまちのうちに干からびたミイラとなり、物の数秒で全員死亡した。

数百人も人命が、だ。

《結界域》 抽出率、100%です！》

部下からの報告に即座に次の命令を飛ばす老人。

「よし！300ミリ砲等とにかくすべての主砲に、結界域」を充填しろ！」

42年前のある日突然、全人類が「結界域」を展開できるようになってから、化学兵器の類は徐々に無用の長物になっていった。

何せ「結界域」を展開したとたん、人は「超人」になり、(流石に限度は残念ながらあるが)いかなる銃弾、毒ガス、高高度の熱も低低度の冷気も一切通用しなくなるのだ。もちろん老人が叫んだ諸々の大口径の砲弾ですらも、だ(ー)。いまや武術全盛の時代になり、不意打ちならともかく、「結界域」を展開したものには「結界域」を展開したものでしかやれない。それが今の常識だ。

しかもほぼ接近戦で、である。「結界域」というものが展開者から離れば離れるほど拡散して無くなるという性質である以上、いくら大威力の兵器でも遠距離用の物は今の時代、無用の長物となりつつある。

ならば、多少拡散しても威力が減らないように、「結界域」を兵器に込められる装置を作ればいい。その単純な発想から考え出されたのが、

この、「結界域」 抽出装置だ。

この装置を使う事により、数々の化学兵器が往年の脅威を復活させる事が出来る。

しかしご覧の通り、一回の使用に付き数百単位の人命が犠牲になるため、そのあまりの非人道的性とランニングコストの無駄な大きさからやはりこの装置はお蔵入りとなった。

今現在この装置を使うのはよほどのレトロな化学至上主義者かもしくは 人命を弄ぶ事に慣れて、そして倦んだ最低の者ぐらいたろう。

《結界域》 充填率、各門100%です！》

「よし！照準はあのぶざけたクソガキだッ！遠慮はいらんッ！ブツ殺せ！全門開放ッ！！」

撃ええええええ

「ッッッ……」

その老人の大絶叫と共に  
数百人の命を犠牲にして、“結界域”の輝きに縁取られた刁城の城壁の上に備え付けられていたすべての旧時代の兵器が……  
一斉に火を噴く！

轟ッ！！！！

「総員、伏せえ

ッ……」

刁城の南門を固めていた全兵士は、部隊長の命令と共に目と耳をふさいで、地面に伏せる。雷に迫りくる、“結界域”が籠められて往年の脅威をよみがえらせた、

300ミリ大口徑砲彈その他諸々の大破壊の象徴の群れ！

しかし雷は、唯「フン」と鼻を鳴らすのみ。  
その直後

爆音。

雷は爆音とともに、“結界域”を展開。  
青い、蒸気とも陽炎ともつかない輝きが、雷の爪先から頭頂部の髪の毛の先まで全身からくまなく放射され、雷の体を大きく縁取る。

その輝きは …… 青く、碧く、深い、沁み渡るような……しかし激しく燃え盛る 蒼。

その輝きの不吉さは自身の方に向かってくる破滅の輝きよりも、なんと……  
なんと、それより凄じかった。  
そして。

「……フッ……」

という短く鋭い呼気と共に、自身の、“結界域”を込めた手元の槍を縦横無尽に振り回す。  
刹那。

あまりにあり得ない現象が起こった。

222ミリバルカンフラックスの弾丸が槍に触れた途端あらぬ方向へねじ曲がり、なんと、すべ



て、ねじ曲がり、AIM7スパーロミサイルの数々が全て槍にあたった瞬間吹っ飛び、あまつさえ300ミリの大口徑砲弾が全て槍に打ち返される!!

転瞬。

あらぬ方向に飛んだ大口徑砲弾の数々は周りの荒野を爆音とともにさらに醜い荒野に変え、あまつさえそのうちの何割かは飛んできた方向へと帰っていく!

激音。

「うぐおわあああ

ッ!?!」「ヒイ

ッ?!?!」

断末魔の悲鳴と共に刃の配下の約二割が死亡。約三割が「結界域」を展開して防いだ物の、重軽傷を負ってしまう。

大地震そのものと言いつの派手な縦揺れと共に、城内に響き渡る破壊音。

もちろん老人も床にへたり込んでいた。

「しょ……しょんなバキヤな……」

老人が尻もちをついているのは、城を揺さぶる震動のせいなのか、それとも眼前の光景があまりに既成概念を余裕で越えた代物<sup>シロモノ</sup>だったせいか。

「ッ……通常ならともかくッ……「結界域」数百人分のこもった戦略兵器攻撃だぞッ……

かなりの実力を持った武俠数万人を余裕で屠れる攻撃を、そんなッ……

たやすく打ち返しただとッ!?!

ああッ……あり得んッ!?!いったいこれはッ……なんの三文漫画の光景だっ?!?!ワシは夢でも見とるのかッ!?!」

尻もちをついたまま、自分の頬をつねる老人。

しかしその頬から伝わる痛みは、残念ながらこれは現実の光景だと伝えていた。

「さて蔡<sup>ジョン</sup>の茶番<sup>デモンストラション</sup>も終わったところで」

いつの間にか刃が寄ってきて、「ひょい」と猫の首根っこをつまみ上げるように老人 蔡の奥襟をつかんで持ち上げて立たせてやる。

「で……茶番……」

少々シヨックな蔡。

「全軍、突撃準備。」

生きながらえると思うな。命を捨ててかかって、産毛ほども傷つけられたなら恩の字だと思えと伝える」

「はッ……」

そばに控えていた伝令兵に、刃は非常なる命令を下した。

実に楽しそうに。

そして伝令兵も、刃の命令に嬉々として答えた。

死地に赴けるのが、この上ない喜びだと言わんばかりに。

ザザザッ

音楽的な正しさで、雷の眼前にいる軍勢が皆銘々の武器を構える。

……皆、驚くほど恐怖の色はない。

むしろ、非道く狂気じみた喜びすら感じている。

先刻、雷の、あり得ないまでの実力を目の当たりにしたというのに、  
薬で恐怖をごまかしているのか。

それとも 皆、そう言った類の 終わっている人間なのか。

雷は、その軍勢に対し、少し目を細める。

ややあつて、彼らに向かって口を開く。

「貴様らに、問いたい」

その小柄な体格から響いてきたとは思えないほど、よく通る渋い声。

「貴様らの中に、誰に強制されたわけでもなく、自分の頭で考え、自分の意思で決めて自分の足でこの戦場に赴いたものはいるか？」

その問いに

ヒュン、と音を立てて雷に向かって一本の槍が飛んできた。

しかし槍は雷にあたることなく、雷の「結界域」にぶつかり、音を立てて爆ぜ割れ、そして虚空に消える。

槍は当たっていない が、しかしその返答の意は痛いほどに伝わった。  
痛いほどに。

「……」

無表情の雷に対し何人かの兵がククク……と嘲笑したり「分けわかんねー」と言ってるじゃねーよボケガキ」とヤジを飛ばしたりしていた。

ふ……と、目を閉じる雷。

ああ煌月。  
レウヘナ

最愛の華よ。  
ひと

君はこんな暗愚共の為にその身をささげたのか？

思考停止の快楽に酔い、傷付け、奪う事しか出来ないクソ共の為に。

そして、ゆつくりと瞼を上げ、

ザッ……と雷は歩を進め始めた。

その雷に対し、眼前の兵たちは“結界域”を一斉に展開。  
その“結界域”の揺らめきが大気をいびつにゆがませる。  
そして ……

「突撃

ッ……」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ……！

盛大に土煙を上げ、迫りくる軍勢。

雷は敵対する軍勢のその烈気に呼応するかのようにつくつくと槍を天に向けるように上げる。

……天へ

自分の愚かな決断を下すには、あまりにも青い空へ

僕の問いに、貴方はそれでも「是」と答えるだろう。

ああ、遠くに来てしまった。

あなたが僕に「人を癒す生き方をしてくれ」と願ったあの頃から、遠く遠く。

あなたが僕に「勇ましく死ぬ為ではなく、生きて、守り抜くために強くなりなさい」と、そう  
言い聞かせてくれたあの日から、遙か彼方に。

あなたは僕の愚かな決断を赦しはしないだろう。

雷の胸によぎる、かつての笑顔、温もり。

でも、それでも。

“ たった の に、 の い事全部を押しつけてそれで とする世界なんて って  
いるっと思うから…… ”

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ……！

敵の軍勢の呐喊の音が雷の真近まで迫っている。

そして雷は、槍を持つ手に力を込め、

ポツリと、しかしはつきりとこの世界に“宣告”した。

「守るために、殺す。

敵を、己を。

そして世界それさえも。

守るために ……

殺す」

そうして彼は。

後に、“破界の漢”とも、“神槍”とも、“訃告界の雷声”とも呼ばれることになるその漢は。

世界を滅ぼす事を決断した。

そして槍は振り降ろされた。

背中の、“崩壊突撃”という響きの焰が、悲しいほどに赤かった。

守るために、殺す。

敵を、己を。



そして世界それさえも。

守るために …… 殺す。

多くの人口を占めるヒューマン族を筆頭に、エルフ族、ドワーフ族、コホルト族、ゴブリン族、オーク族、そしてマライカ族その他諸々の民族を含め、人類にはそう

天敵が存在した。

人類の発祥とほぼ同時にこの世界に現れたその天敵を、その魔物を、人類は何時の頃からか、

「アナザーワンス異思の物共」と呼んだ。

知性らしきものは確認されてはいるが人類からのコミュニケーションは有史以来一切不可能、生態系もいまだに分からないことがほとんどで、ただわけも分かんず人類を一方的になぜか敵視し、その圧倒的な戦闘力で人類を蹂躪し喰らい尽くす、まさに「異思の物共」。

この怪物どもは有史以来、人類を常に脅かす存在であり続けた。人類の歴史は「異思の物共」との戦いの歴史といっていい。

人類は、科学技術を進化 発展させることによってこの「異思の物共」に対抗してきた。銃の発明に始まり大砲を編み出し、戦車 戦闘機を造り、またレーダーを造って索敵機能を増し、もしくは体の一部を、もしくはは大部分を機械に換装してサイボーグ戦士になり……

しかしそれでも、「異思の物共」は圧倒的だった。まるで人類の文明の進歩に合わせるかのように、対抗するかのよう to 忌々しくも自身の存在を進化してきた。

機銃を発明すればそれをかわせるほどの俊敏性を鬼種<sup>オレガ</sup>達は高め、バズーカ砲を編み出せばそれをはじくほどの硬度を持つ岩巨人<sup>ゴレム</sup>が現れ、戦車 一個大隊を数秒で殲滅するほどの灼熱の息を恐竜種<sup>ワイバーン</sup>共が吐く。

一時期人類はこの『異思の物共』によって絶滅の危機にひんするほど危うい時があったが、ある日を境に全ての理<sup>リゾ</sup>がひっくり返るほどの事が起きる。

現在<sup>いま</sup>から42年ほど前。

神州といつちっぽけな島国で、一人の風変りな老人が、戦場の しかも最前線にふらりと現れた。ちよつと『異思の物共』と激しく交戦している最中である。

その老人の最初の遭遇者であったナオキムライ中佐の日記にはこう書かれてあった。

帝都歴56年10月23日<sup>ツロノサマアキ</sup>一五三六、腕時計を確認したらちよつとその時間をさしていた。爆風と爆炎と轟音と死の絶叫が吹き荒れる中、私は目を疑った。ちよつと私の一時の方向に着物と袴に草履という今時珍しい格好をした老人が、何やら扇でゆるゆると顔を仰ぎながら平然と立っているのが見えた。最初私は「この老人は痴呆症か難聴で、「異思の物共」襲撃警報が耳に入らなかったんだ」と焦り、あわてて「そここの老人！何やってんですかー！」と叫んだが、タイミング悪くその時響いた爆音が私の叫びをかき消した。と、そこにさらに最悪のタイミングで、岩巨人がその老人の前に現れた！私が「！？」と驚く暇もなく、岩巨人の拳がその老人に振り降ろされる！しかし ！しかし老人はあわてることなく右手の扇を掲げ、そしてその扇と岩巨人の拳が交差した瞬間。老人の右手が「の」の字をえがくようにして岩巨人の拳に絡みつき、巻き取り、そ

して、  
その信じ難くまるで冗談のような内容で我ながら正気を疑ったのだが、しかしそれでも書き進めるが

なんと、交差した扇を中心に「フワッ」と岩巨人が宙に浮き、そしてものすごい豪音とともに、地面に叩きつけられたのである！

さすがの岩巨人もひとたまりも無かったのでしょう、すさまじい揺れとまるで隕石が落ちてきたかのようなクレーターの中心で粉々に砕け散っていました。

……そのあまりに異常な光景に交戦中だと言っのに私は絶句して固まってしまうました。

そしてハッと我に振り返り自分の頬をつねりながら目をこすりました。ええ、何度も何度も何度も。しかし目の前の岩巨人は砕け散ったまま、この光景が白昼夢でも何でもない現実と知った時はもう絶句するしかありませんでした。

と、その時気づいたのです。

老人の体から

「もしや……あれは……オーラ！？オーラって呼ぶべきものなのか！？」

としか思えない蒸気といつか陽炎みたいなものが老人の全身から立ち上り、

あまつさえその老人は地面から十数センチほど宙に浮いていたのです！

そのまま老人は滑るようになるすると移動をはじめ、私はあわてて「お、お待ちください！」と後を追いかけてました。いつの間にか私は敬語になっていました。

そしてそれからその老人に向かつて襲い掛かる「異思の物共」の群れ、群れ、群れ！

しかしその老人はまるで散歩でもしているかのようなんびりした足取りで構わずツツこみ、

蟻妖怪をブン投げ、鋼鉄蟲を張り手でたやすくぶっ飛ばし、鬼が強酸を吐きかけてもその身

にまとうオーラ？のようなものが強酸をかき消し、群がる「異思の物共」をちぎっては投げちぎっては投げちぎっては投げ。

何の装備も無く。ほぼ素手の徒手空拳と扇だけで。ええ、その間中ずっと頬をつねってましたから。間違いありません。

そしてけたたましい咆哮とともに、この群れのボスなんでしょう、火炎恐竜が現れ、火炎の吐息を吐きかけてきました。

しかしその炎が老人にぶつかる直前、パッと老人の姿が消え、なんといきなり火炎恐竜の真後ろに瞬間移動したではありませんか！



そして火炎恐竜が気付いて振り向くより早く。

老人は尻尾をつかみ、高々と火炎恐竜を宙に放り投げ、思いつきり地面に叩きつけました。  
断末魔と轟音。

そして衝撃で全身の骨が砕けて即死したであろう火炎恐竜の死骸を中心に広がるクレータ  
！。

そのそばで青白いオーラ？のようなものを全身から立ち上らせながら息も切らず静かにた  
たずむご老人。

「異思の物共」は、たった一人の、ほぼ素手の老人にたやすく全滅させられたのです。

其の神がかった光景にいつの間にか私は涙を流し、その老人のそばで深く土下座をし、尋ねま  
した。

「私の名は村井直樹といいます……どうかご老人、その御名前をお聞かせください……」と。

御老人ははにかんだように微笑んで、振り向き、答えてくださりました。

禿げあがった頭部に、反比例するかのようには胸まで届く白いひげ。そしてその双眸の神秘的な  
輝きを目の当たりにしたとき、大げさかもしれませんが、私はこの時、「神話」が始  
まった、とすら思えたのです。

「わしの名は植田盛雄。なあに、ただのよぼよぼのくたばりぞこないじゃよ」

これが人類史上はじめて、「結界域」を発生させることができた「武侠」の、その名前だ  
った。

ナオキムライ中佐の例えは間違っても大げさでもない。この瞬間から、「世界」は「SF」を  
紡ぐことをやめ、「ネオ・時代劇」しかも格闘もの、ともいつべき、力つ跳んだ物語を紡ぎ始  
めることとなる。

現在から42年前の出来事である。

災厄というものは最初は山頂の小石の様にちっぽけなものだが、一度転がりだすと次第にすべてを巻き込み、最後になるとそれを止める事は恐竜種にもできない。

この世すべての不幸というものは、たいてい皆が「タカが小石」と高をくくっていたことが原因である。

このことから、心すべきは、ある決意を持った人間が殺意を固めた時には、例え其れが凡夫であつたとしても神ですら逃れるすべはないということだ。なぜなら、死をものもしないのであれば、だれしも相手に危害を与えるくらい事は出来る。

#### b 李 権謀

“無様なものだな、麗しき八州役人さんよ！”

大音量のスピーカーから響き渡る嘲笑が、だだっ広い空間に響き渡る。

嘲笑を受ける有翼人種の女性は、それを聞き流し周りを見渡す。

そこはまるで、古き時代に奴隷に殺し合いをさせたといつ闘技場のようだった。

ただ似せるだけではない。実際に何らかの殺し合いをさせたであろう跡がそこかしこに見受けられた。そして惨劇を眺められるちよつどよい高さに、防弾強化ガラスで守られた観客席がある。そこには醜い欲望に人相をゆがませた豪華な服装の人々がいるのが見て取れた。

嘲笑、憐憫、そしてその倍はある獣欲の籠められた視線を浴びながらも、その女性はまるで嘘のように平然としていた。

だが、観客たちの期待の視線を受けるに値するほど女は美しかった。

まず目を引くのは蜂蜜色に輝く、腰の半ばまで伸ばされた金髪である。煌々と照らされる照明を反射して、見ているこつちの目が眩みそうだ。

続いて切れ長の、翠玉色に輝く瞳。一筆で書けそうなほどにすらりと通った鼻梁。薔薇の蕾を思わせる紅色の引き締まった唇。ツンとこがった顎に、化粧を全く施してないのに抜けるように白い頬。

純白の羽毛が生えた耳と背中から生えている純白の翼は、一目で有翼人とわかる。

よほど美的感覚が狂っている者でない限り、好みの差こそあれ、誰もが美形と認める容貌。

そして170cmはあるうすらりとした長身、形よく豊かに実った乳房にくびれた腰。股下の長い脚の臀部と太ももには絶妙なバランスで脂が乗っており、一昔前の言いかたを使うならまさしく、小股の切れ上がった良い華<sup>おんな</sup>である。

一部の人間や一部の地域では現在<sup>いま</sup>に有翼人を天の御使いとして崇拜しているが、彼女を見ればそれも肯けるといふものだ。

しかもその魅惑的な肢体を、これまた胸元が大きく開かれ、スリットが腰まで入った実に扇情的な純白のチャイナドレスで包んでいるものだから、それらの谷間と切れ込みに、特に醜悪な視線が集中するのも、見ている人間達の精神が劣っているせいばかりではない。腰にさしてあるガンベルトに収まった銃と無線機がなければ、とても皆が想像する“役人”とは思われない。



とどのつまり。醜悪な視線を発している人間達は期待していた。まもなく始まる惨劇に、この麗しき有翼人の美女の、その澄ました顔が、恐怖と屈辱に、それにもまして発情と淫猥に歪む様を。

“この私の情報網をナメるなよ！ 八州役人とは言え、たかが警官風情の動向を把握するこ

となぞ朝飯前だ！ こうして事前に潜入を察知して罠にはめるほどになあ！”

そう高慢にスピーカーから嘲笑い飛ばす声の主を、バルコニーの防弾ガラスで守られたVIP専用の特等席でふんぞり返ってがなり立てているその男を、有翼人の美女は物憂げに見上げる。

馬呉成<sup>マキシン</sup> このロシアの主<sup>オナ</sup>。中肉中背。40歳。しかしやたらキラキラした目と何よりむせ返りそうなほどの精気のせいで20代後半に見える。高そうな整髪料で髪をオールバックにし、これまた高そうな仕立ての良いスーツで上下を固め、けれど極彩色の趣味の悪いネクタイと何より爬虫類を思わせる光沢の靴がすべてを台無しにしている。

数年前に独自の犯罪結社“馬幫<sup>マバン</sup>”を創設。以来臓器密売・武器密売・麻薬売買と手広くそして深く悪行に手を染めた。

そして纏州<sup>てんしゅう</sup>・蘭州<sup>らんしゅう</sup>・杭州<sup>こうしゅう</sup>・衢州<sup>こうしゅう</sup>・嵐州<sup>らんしゅう</sup>・疏州<sup>しゅしゅう</sup>・然州<sup>ぜんしゅう</sup>・空州<sup>くうしゅう</sup>の八つの主要国家を自在に行き来し、大規模の犯罪を解決するための数々の権限を与えられ、殺人許可証の所持すら許された“八州役人”に目を付けられたわけだ。

しかし百戦錬磨の馬は八州役人の動向を事前に察知、気付かれずに潜入したと思い込んでいる間抜けな有翼人をここまで誘導し罠に嵌めることに成功した。それだといつのに女は白けたように鼻からため息を漏らす。

“ さて今週のイケニエこと八州役人の達理花<sup>ホーリアン</sup>さんと今週の催しに来てくださった皆様方にこれからはじまるゲームの概要を説明いたしますー！”

女 理花<sup>リアン</sup> の内心とは裏腹に馬<sup>マ</sup>の上機嫌な声がスピーカーから響き渡る。

“ ルールはいたって簡単！ これから出てくる我が馬幫<sup>マバン</sup>が誇る薬物強化兵士全四体と理花<sup>リアン</sup>さんに殺し合いをしてもらいます！”

続いてスピーカーからパチン、と指を鳴らす音。

そして、理花<sup>リアン</sup>の前にある巨大な格子状の門が轟音と共に上へと開く。

そしてそこからクリーチャーが四体現れた。

まず背丈がすごい。“天を衝くような”という表現がピッタリの、明らかに2m以上はある巨軀。みな一様にスキンヘッドにしており、岩のように発達した筋肉で全身を鎧<sup>よろい</sup>っている。上半身

裸で下半身には黒革のスボンひとつで素足。口には猿轡ギャグが嚙まされており、目は死んだ魚色で何を考えているのか全く分からない。しかし股間は大きくスボンを盛り上げてテントをなしており、別に表情から読み取らなくても4体全員頭の中は何でいっぱいなのかは明白だ。

まさにクリーチャー。なおかつ四体全員の両腕にはまっすぐに延びた太い錐のような鉄の爪がついた籠手をはめており、しかも鉄の爪に直結するように何かの液体が入ったカートリッジが装着されている。

「……………」

その液体が何なのかは理花リアンには大体想像が付いている。

スピーカーからの説明が続く。

「何せ生唾ものの八州役人さんが相手、後のお楽しみには抽選で数名ではありますが皆様もご参加していただきます！」

観客席から、この説明だけで大体察した悪漢たちからの歓声が響く。

それに応えるように四体のクリーチャーが籠手の取っ手をグッと握る。それに連動して爪の先からピュピュッと液体 超強力毒薬 が飛び散る。

「ちなみに理花さん！そのご自慢の羽根を使って空中に飛ばうとしても無駄ですよ！あなたの頭上から約15メートルあたりに斬鋼線ワイヤをびつしりと張り巡らせています！不用意に空を飛ぶとトロボンのようになっちゃいますからお気をつけて！」

理花はその言葉に従い、宙に目を凝らしてみる。するとなるほど、わずかに光を反射して斬鋼線ワイヤがびつしりと張り巡らされているのが見て取れる。

「もっともそれ以前に宙に浮けるかどうか分かりませんがね！わがクリーチャー達は特殊なおくすりで筋力と瞬発力と反射神経を極限まで高めていますからね！飛ばうとした瞬間に掴まるのがオチで」

しかし理花は、馬の言葉に聞き飽きたのだろう、最後までセリフを聞き終わる前に、胸元から取り出したこの施設の設備を勝手にいじれるリモコンのスイッチの一つを押した。

すると  
シューウウウウ……と観客席とバルコニーの特等席の空調から毒ガスがばらまかれる。それは無味無臭無色の麻痺ガスで、中の観客たちは「ウツ……!?」「ガッは……?!」「と訳も分からず胸を押さえたりバリバリと苦しげに引っ掻いたりして呻き、昏倒していく。防弾ガラスの中で密

閉されているだけに速攻で効果が表れているようだ。

“ なッ………こんな………何故………馬鹿な………”

見ると、馬ももがき苦しんでいる。

理花の調べによると、この毒ガス発生装置は馬の奴がいざという時に、自身が敵とみなしたものを観客席におびき寄せ、敵を無力化するための切り札だ。まさかそれを敵とみなしたものに使われるとは思ってもみなかったに違いない。

「！」「………？！」

外野の思ってもみなかった異変に、有翼人種の八州役人の目の前を鬱陶しくさえぎる4体のクリーチャーどももつろたえている。

目の前に敵がいることも忘れて。

“ 今だ …… ”

まるで発破を仕掛けたかのような、地面を爆ぜる音。それが理花が地面を蹴った音とは思うものはいまい。理花はリモコンをしまいながら一気に踏み込み、横一列に突っ立ったままのクリーチャーのうち、向かって一番左にいる奴に肉迫する。

「！ウツウガ…」とあわてながらも反応し、みな一様に、結界域<sup>けつがいいき</sup>を展開してくる。薬物で能力を底上げしているだけはある。しかしそれでもこの麗しい八州役人には遠く及ばない。

彼女は、白鶴拳<sup>ホウイトクレンヒル</sup>の達人なのだ。

理花も、“結界域”を展開。

自慢ではないが4体の大男どもとは比較にならないほどの真ッ白な、“結界域”が理花の体表に現れ、奴らはつろたえる。

理花は、下から両手を交差させて、その交差させた両手首を相手の攻撃なり顔面に向かってハネ上げ、そのまま振りぬく技をアゴを引いて額を突き出すように頭を下げつつ、両肩と両耳がくっつく様に繰り出す。当然その左端にいた禿頭の大男はそれを両腕でガード。

されど、豪音がしてその両腕が弾かれる。

“ もろい。その筋肉は飾りか。薬を使ってそれか。これはあくまで見せ技なのに。”

内心軽く落胆する理花。

そう。これは見せ技なのである。こうやって注意を上に向けて

ゴギグンッ！…と嫌な音が響き渡る。敵の注意が上に向いたスキに、同時にひそかに放った、ツマ先を外にひねりながら踵で踏む様に繰り出した右の前蹴りがやつの左膝を蹴り折ったのだ。膝は折り曲げた状態なら人体で12を争うほど頑丈な武器になるが、まっすぐ伸ばした状態

なら実にもろい弱点になってしまふ。特に見た目通り体重の重い大男にとってはなおさらだ。

『ギャツ……』と悲鳴を上げ終わるより早く、白鶴拳の基本である右土形手（入差し指の第二関節がせり出るような握りの拳）がクリーチャーの喉笛にめり込む。猿轡<sup>ギャツ</sup>越しに大量の濁った血を吐き出す大男。どんな大男でも鍛えようのない喉笛を思いつきり突かれては一撃でやられるしかない。

『コアッ……ガアッ……』と理花の左右から挟み撃ちにするように襲い掛かってくるほかのクリーチャーが二体。理花は最初に仕留めた敵の死体の首筋に左手刀を叩き込む。嫌な音と共に首が余裕でへし折れ、そのまま向かって左から襲いかかってくる奴の方へとフツとび、ぶつかり、『ガッ……』と呻いてそいつの動きが止まる。

理花はその隙に腰の得物を取り出し、それに『結界域』を込める。  
途端、燃えるように白く輝きだす理花の得物。

ニューナンブオメガカスタム。個別名称『牙狩り』<sup>ファンザハター</sup>。ノーマルの警察官用拳銃を文字通り限界

まで改造。銃把と銃口の先には接近戦用のスパイクを装着。しかも銃身と銃把の間に厚さ3cmの鉈の如きソードブレイカー。櫛の歯のようにギザギザに刃が並ぶ特殊な形状の剣で、ギザギザに並んだこの刃の間に敵の刃物を挟み、ひねってへし折るように使うことからソードブレイカーと呼ばれた。も装着し徹底的に接近戦に対応した理花専用の化け物銃だ。八州役人ともなると自分の銃を自由に改造することも許される。しかも使用する弾丸は主にダムダム弾（対大型猛獣用の大口径弾）だ。

それを腰ために構えて引き金を引いたまま撃鉄をもう一方の手で撫で付けるように撃つ。狙いは理花の方に向かって右から突進してくるクリーチャーの眉間と心臓。

パパン……と軽くて安っぽい発砲音とは裏腹にズシッとくる反動<sup>2</sup>。吸い込まれるように的確に敵の急所に着弾する。

しかし、『結界域』というものは自身の体から離れるほど拡散する。弾丸の威力は半減し、『結界域』に守られた筋肉と皮膚にバスッ！ピスッ！とわずかにめり込んだだけで終わる。構わず突進してくる大男。

しかし甘い。

理花は内心鼻で笑う。別に銃というものは弾の威力だけが全てという訳では無いのだ。案の定大男は突進してくる途中に

『……』といきなり痙攣し、急に膝をつき動けなくなる。

実は弾丸に毒を塗ってあったのだ。象すらも一発で倒れる毒が。いくら『結界域』で体を強化しているとはいえ<sup>2</sup>発もくらってはたまらないだろう。

そして理花は『ハイヤー……』のかけ声と共に『牙狩り』<sup>ファンザハター</sup>を縦横無尽に振り回す。クリーチャー

「<sup>フランクハタ</sup>牙狩り」のソードブレイカーの部分で喉笛を掻つ切られ、悲鳴を上げる事すら出来ず絶命する。

その理花の後ろから、吠えながら一体のクリーチャーが右拳を繰り出すが、事前に察知していた理花は一步大きく踏み込みながら地面に左手を突きつつしゃがみこんでかわし、そのまま自身の後方に向き直る。

奇声をあげてクリーチャーは再度右拳を繰り出す。

「ふっ！」

理花は敵の空いた右脇に頭を突っ込むように左斜め前方に上体を傾けつつ左足を左斜め45度の角度に踏み込み、左掌低で敵の籠手の部分を横からまっすぐ貫く様にはじいて敵の突きを捌く。

と同時に右手に握つてある「牙狩り」が、その左腕の下から、内側から外へと軌道を描きながら振りあげられ、ソードブレイカーの部分がクリーチャーの上腕屈筋へと突き刺さる！

「ギァウッ！？」

たまらず苦鳴を漏らすクリーチャー。

上腕屈筋は、「力瘤」とも言われているように強靱そうに見えるが、しかし実際のところ、ちょうど屈筋の真ん中あたりに親指の爪を立てるように握り込まれるとたやすく激痛が走ってしまつ、存外にもろいところである。

そこにあまつさえ鉋の様な刃を突き込まれるとたまつたものではないだろう。

さらにそのソードブレイカーの部分で上腕を押さえられてしまっているものだから、理花の方へと向き直る事が出来ない。

そしてそのまま理花は右膝を、胸に抱え込む様に振りあげ、

「シィッ！」

気合一闪、右足刀蹴りを、上から下へクリーチャーの右膝の横に叩き込む！！

膝靱帯がちぎれる、嫌な音。

「グッギァアあああああああああっ！？」

クリーチャーの右膝はあり得ない方向にねじ曲がり、そのまま理花に背を向けるように片膝をついてしまつ。

そしてそのクリーチャーの後頭部に銃を突き付け、二度引き金を引く理花。

一発目は頭蓋骨にめり込むだけに終わるが、立て続けに放たれた弾丸はその最初の一発目を後押ししつつ脳髓にめり込み、そして二発目に放たれた弾丸に後押しされた一発目の弾丸はそのままクリーチャーの額を割って出る。

そしてそのクリーチャーの額からこぼれ出るピンク色の脳髓を、理花はなぜか素早く左手ですくい、

（そのまま「ドゥッ……」と倒れこむクリーチャー）



理花はおもむろにそのすくい取った脳髓を振り返りざまビッ！と弾き飛ばす。

弾き飛ばされた脳髓の向かう進行方向先では、最後に残った敵が丁度仲間の死体をどかしたところであり

ぴぴぴッーと多量の眼つぶしが最後の敵の顔にぶつかかる。

「ッッッアッ……」とあわてて眼のあたりをこする。いい感じに血と脳髓が目に入ってくれたようだ。

“銃ではだめだ、より万全を期すなら、拳で”

理花は、フランクハター“牙狩り”をホルスターにしまいながら、

そのまま理花は

「オオオオオオオオッ！！」と叫びながら一気に踏み込み、うろたえる大男の、

左足の甲を、思いっきり右足の踵でつま先を内側にひねりながら踏みつけて固定し、その踏みつけた右足の、膝の方向に打つつもりで

腰を真下に落とし、膝を抜き、体を沈みこませながら

上から見て肩を一直線にするイメージで

左腕を逆方向へ曳きながら

右肩を下から動かし前に出すイメージで繰り出し

縦拳の人差し指と中指の拳頭を敵の鳩尾にあて

そして、腰骨を弾丸にして相手の鳩尾から背中はおるか魂すらも貫くイメージで……

「はああッー！！」

衝く。

轟音。人体を打って出てきた音とは思えないほど、ものすごい衝撃音。周囲の空気がビリビリと苦鳴を漏らす。

……その後、時が止まったかのようなほんの数秒の間の後。

ごぶ、と最後の一体は濁った血の塊を猿轡の間から吐き出し、絶命。

ズスウン……とおお向けに倒れる。

ちなみに理花が使った技は俗に「寸剄」ショートバストと呼ばれる技である。打ち方はいろいろあるが

理花はオーソドックスな打ち方で打っている。

簡単に繰り出しているように見えるが、結構練習を繰り返したものだ。何せ、精密機械の様な

巧妙な動きを、一瞬のうちにやらなければならないのだから。

しかも相手は置物ではなく、もちろん動き回る。そのために眼潰ししたり足を踏みつけたりといった工夫が必要なのだ。

ホワイトレンビル

白鶴拳とはその優美な響きとは裏腹に、実に強力な戦闘理論の集大成だ。少なくとも弱いといった話は聞いた事がない。

……とにかく理花は敵の全滅を確認。ちなみにこの間ほんの数秒。理花は再び胸元からリモコンを取り出すとさつきとはまた別のボタンを押す。

とたんに頭の上の斬鋼線がフイフイフイ……と脇へ脇へと動いて行き、しまいにはよく見ると壁にあった細い溝に全部吸い込まれるようにして消えていくのが斬鋼線の反射具合で見取れた。

“さあ、後は馬の奴をとつちめれば終わりだ”

理花はバサツと背中の中を羽を飛ばたかせるとそのままバルコトまで飛んでいく。確か麻痺ガスは数秒間出ると自動的に止まるはずだからリモコンをいじる必要はない。

そして防弾強化ガラスの前まで飛ぶと、目があった。

携帯用ガスポンベを口にくわえて、怒りに目を血走らせた馬の奴と。その手にはいわゆる

棘付き鉄球モーニングスターと呼ばれる武器が握つてあった。

“アラまあガスポンベとはまた用意周到だ事”

内心他人事のように軽く感心する理花。その暇いとまもあればこそ。

ガシヤアアアアアン！と防弾強化ガラスすら余裕でぶち破つてこっちにやってくる鉄球

とガラスの破片をすんでのところかわす理花。

“おいしいもつとノーモーションで攻撃に移れる武器ならば私に一矢報いたものを”

「ここにくそアマガくそアマガくそアマガああああああッ……」

怒りに口角泡をこぼしながら鉄球を引き戻し第二撃を繰り出そうとする馬。見ると鉄球にありたけの、結界域”を込めている。

“だからノーモーションでかくて隙だらけだつて”

理花は手じかにあった手頃な大きさのガラス片をつかむとすばやく、結界域”を込め、素早くフリスビーの要領で投擲した。

「カッ……」とうめく馬。見事ガラス片は馬の喉笛にヒット。鉄球に、拒絶域”を込めすぎて自身の守りがあるそかになっていたのだ。それが致命傷だった証拠に鉄球にこめられていた、結界域”は急速に霧散して無くなる。こうなってしまうえば只の鉄球になど恐れるまでもない。とどめだ。

理花は「そいやああアッ……」の掛け声とともにこちらに向かってきていたその鉄球を思いっきり蹴とばす。馬の頭めがけて。

自分の鉄球と壁に挟まれ、脳漿と脳味噌と粉々になった頭がい骨の破片と眼球と多量の血飛沫をまき散らす馬の首から上。

残った馬の体はビクンツ……と痙攣したきり動かなくなる。

“馬鹿な奴。余計な抵抗しなけりや殺したりはしないのに。まあ頭が良ければ犯罪者になんてならないか。それに今までいい思いをそれなりにしてきたみたいだし人生の幕を引くにはいいころ合いだっただろうな。”

ま、とりあえずひと段落は付いたかな。まだまだやるべきことは残っているけども”

そう思うと理花はフツと吐息を吐くと腰の無線を取り出し、外で待機している現地の警官に告げた。

われながら虫唾が走るが、頭の悪そうなしゃべり方で。

「大体終わりましたわん お後のおカズブけ、お願いしますわあ……」

理花が夢見る乙女のような　つまりは頭の悪そうなぼんやりした顔で「むふっ　おーいし」とアップルパイをほおぼっている横で、現地の警官たちがせつせとまだ意識の戻つてない悪党どもを担架で運んだり、理花の殺った馬やそのクリーチャー4体の“残骸”を青ざめた顔で死体袋に詰めたりして働いている。

そして理花の傍でもみ手をしながら卑屈な笑顔で突っ立っていた現地の警官たちの署長　いかに小物そつなバーコード頭の肥満中年　がおずおずと声をかけてくる。

「い……いやあ、理花さんリアンもお人が悪い……一声かけてくだされば手伝いましたのに……」

「でもでもお、皆さんわたくしをお金とコネだけで八州役人になっただけのバカ女」としか見てくれなくて非協力的だったじゃあないですかあ。こうなったら一人でやるしかないですもんねエ?」と言ってウインクする。

署長はひきつった笑いで「ははは……」と呻き、周りの警官たちもただのバカ女だとばかり思っていた乳と尻だけの女が、実は羊の皮をかぶった人食い虎だと知り、恐怖全開の視線でこちらを見ている。大体軽く9人の猛者をただの肉塊に変えて、しかもその横でおいしくおやつを頬張っている時点でかなりの、人でなし”だ。仕方がないかもしれない。

今回の事件を担当するにあたり、理花は徹底的に現地の警察官たちに侮られる必要があった。その為我ながら虫唾の走るバカ女を演じたり、実際にもたもたした、無能と呼ばれても仕方がない捜査をしたのだ。まあ八州役人という肩書があったため、面と向かって無能と呼ぶ命知らずはいなかったが。

なぜ現地の警官に侮られる必要があったか。それは勿論もちろん

「まあ、そちら方があ、ただのバカ女とお、みてくれないと困りますからねえ」

「え?」

“もうストレスのたまる猫かぶりはもういいだろう”

理花は、素の顔に戻って細めた眼で署長を見やると、ただそれだけでビクンッ！と署長は凍りついた。

「まず今回この事案を担当するにあたり、真っ先におかしいと思ったのが何故こうもこの馬幫は好き放題にやっていたのか、という点よ。……臓器売買麻薬売買武器密売奴隷の売り買いにこのような殺人シヨを代表とする非合法的娯楽の展開……いくら何でもやりすぎだわ。もっと邪悪を働くのならどんな何かにばれない様騙し騙しやるはずよ。こうも派手な事しといてなぜ警官の“手入れ”がない？なぜ他の幫どもの報復がない？ まい

ちおう私の調べでは地元あなの警察官も職務はしていたけども。どうして没収したはずの馬幫の資金がほんのわずかでしかないの？

“ここまでくれば後は明白。”馬幫とつるんであまゝいお汁をすすっている誰かがいるってことね。それもけっこう高い地位にいる誰かが。

だから私は無能の振りをしといたのよ。始末する邪悪はも一人。背後うしろにいるってね。寝首かかれたくないね。

そういえば署長？いろんな事件があるけども。あなたの腰つて結構重いですよね？しかし私の調べでは、なぜか“馬幫”がらみの事件のときだけ自ら現場に赴くフットワークの軽さを見せてますよね？何かいろいろ勘繰りたくなってしまつのは考えすぎでしょうかね？”

大声で嫌みたるぶりに言つてやったせい、この場にいる警官全員が仕事の手を止めてこちらを凝視している。

理花は視線を外さない。署長はもう滑稽なほどガタガタ震えている。

「な何を言つて……」

署長がセリフを言い終わる前に理花は胸元からリモコンを取り出し、ボタンの一つをピッと押す。

すると闘技場このスピーカーからある会話が響いてきた。

“さて黄さん？何でも八州役人さんが私をとつちめに来るとか？”と、今は亡き馬の声。ちなみに、黄、とは署長さんの姓も、黄、だった様な。

ガハハと笑う声。何か聞き覚えがある。

“いやあなに、金とコネだけで高い地位に就いたのが見え見えのバカ女ですよ。いかにも頭の悪そうなしゃべりに顔！おまけに捜査という捜査もせず日がな一日中来客用のソファでぐーぐー寝ているか紅茶をがぶ飲みしながらお菓子をポリポリド力食いしているかの2つしかしてないもんですから……いやはや八州役人も地に墮ちたといつか世も末といつかまつたく”

“ブヒヤツヒヤツ！それはそれは！嘆かわしいもんですなあまったく！近頃の娘さんとき

た日にやあ一体全体市民の平和を守る警察官の仕事は何だと思っているのか!”

“そこでですね、馬さんに少しお灸をすえてもらおうかと”

“ホウ?”

“いやあなに、そのバカ女、蓬理花つー名前で無能だけどルックス良しで乳尻がけしからんほどブルンブルンに発育してましてね、八州役人をやらせるよりも泡風呂に沈めた方がふさわしいくらいでして”

本人がその場にいないのをいいことにセクム全開のなめたセリフを言ってくれる。

不快もあらわに理花はハッ、と嘲笑う。

“ホウホウ”

“そこでどうでしょう、今度のお祭りに……”

“ブハッ! いいでしょう! 公開奴隷調教とシャレ込みますか! 黄信孫太子さん、貴方様も悪いですね、ともう手垢まみれのセリフを言ってみたり?”

ちなみに黄信孫、とは署長のフルネームだ。

“ゲラゲラ! 私調子に乗っていいえ馬さんには及びませぬ、と使い古され切ったセリフを言ってみたり!”

“ブハハハハハハ!”

“ゲラゲラゲラゲラゲラ!”

“それでは黄署長の前途にカンパイ!”

“いやいや馬さんの前途にこそカンパイ!”

そこでスピーカーからの音声が切れる。

もう理花の目の前の署長の顔色は、青を通り越して、白だ。

「ちなみに今のは馬の奴が署長さんが万一裏切らないように録音してたやつですね。署長さんも似たような準備してたと思いますが? 夫、共犯者が裏切らないようそれなりの準備をするのは犯罪者のたしなみでしょうがそれが裏目に出たようですね。それでも白を切るといつならまだ越後屋と悪代官のチンプな三文芝居のテープまだありますからお聞かせしましょうか?

ちなみに今のテープ地元の新聞社に送り済みですからそろそろ大量の報道陣が押し寄せてくるころだと思えますわよ」

じりっ……と周りの警官たちの輪が狭まる。その中の一人が手錠を取り出しながら「署長、少々心苦しいですが署まで来てもらえませんか?」と言って手錠を力チリ、とはめる。

署長は取り乱して暴れ、それをほかの警官たちが取り押さえる。部下だったものに関節を決められながら、

「なぜだ、いったいつの間にかこんな決定的な証拠を?! 第一貴様ずっとソファで「ロロロ」するか菓子食べてたかそのどちらかしかしてなかったじゃないか! 協力者がいるようにも見えなかった!

何よりもなんんだその 闘技場の施設の電波をハックして自由に操れるそのリモコンはあーっ」

「あら、知りたいのなら教えて差し上げますわよ。 私のかわいい飛羽、でていらっしやい」と

にゅっつっつっ……と理花の持っているリモコンから、何か が出てきた。

それは理花ぐらゐの背格好でしかし肩から先が鳥の羽根になっていて、足も逆関節に曲がり、これまた鳥のようなかぎづめを備えている。胴体は持ち主に負けず劣らずナイスハディで出るべきところは出ていくびれるところはくびれている。その外にさらすには危険な体を覆う衣装は、これまたきわどい踊り子のような服のみ。

顔の方も主人に似て金髪碧眼。ただしこの子のほつは髪をショートカットにしている、顔にはまるで京劇みたいな奇妙なメイクをしている。

突然現れた異形の「鳥人」の出現にこの場にいる理花以外のものが驚きに目をみひらいている中、一人の警官が

「まさか……式神！？」と叫ぶ。

「その通り。ああ、知らない人のために一応説明いたしますとですね、専門技術で作られた特殊な人形に術者が一定以上の「結界域」を込めることによって作動する便利なロボット、とでもいいまじょうか。どのように便利かといいますとご覧のように自由自在に電波の世界へ侵入したり、また術者の実力次第ではシステムをハックして乗っ取ったりできますのよ。」

理花の言葉に警官たちの顔に理解の色が浮かぶ。

「そっか、その式神の力を使って……！」

「ええ、闘技場の管理システムにハックしてシステムを掌握、その情報をもとにこのリモコンを作りましたのよ。『いつの間にこんなのを作ったのか』という質問が来る前にその質問に答えますけど、じーさんのように」

ぐっ、式神 飛羽の姿がぐにやりと歪む。

と思っている間にその姿が何の変哲もない作業服を着た電気工らしき男の姿に変わる。

おお……と感嘆の声を漏らす警官たち。

この子の姿を変えさせて人目に付かなさそうな町はずれの廃墟に材料を持ち込んで作らせましたのよ。 最もそんな精密な作業をさせるには術者が瞑想状態に入って、大半の「結界域」を式神に注がなければできませんが」

ちなみに式神の能力は術者の能力に比例する。八州役人をする前、私は軍隊に所属して工作員やってました、だからこつこつ電子工作は大の得意だということを付け加える理花。

「！そ、そうかッ……碌な捜査もせずに寝てばかりいたのはその式神を操るため……！」

と、悔恨の極みとばかりに呻く署長。理花はにんまり笑って、

「その通りですわ元署長さん。も一つなぞ解きをしますと、お菓子をむさぼり食べていたのもこの子进行操作していたせいですわ。とにかく大量のカリヤーを取ってそれを“結界域”に変換しないと間に合わなかったんですもの。」

「式神……なんて反則技だ……」

ガクリ、とうなだれる元署長。

こう言っている間も、警官たちはまじまじと飛羽をみている。飛羽は無表情のまま浮かんでいる。

「これが式神か……始めて見た……」「高位の“武俠”でないと操れないと聞いていたが……なるほど八州役人にもなるとこんなぐらいは朝飯前か……」「こんな“裏技”ズルイつよ。そりゃ証拠集め放題じゃないですか」「しかしエロいな……」「ああ……エロいな……」

“……これだから男つて奴は……見るべき点は結局そこしかないワケッ”

まあ馬鹿共はほつていて。

「さて。ザッソールフォークス……これでおしまいと。」

理花はそう締めくくった。

これが八州役人、方 理花の日常である。

ちょうどその頃。

とある場所で。

「よし！これではつちり！いやー相変わらずそこらの美少女とは比較にならないほど可愛いわー！」

「……ねえ、こんな大雑把な作戦でうまくいくと思う？ほとんど運任せの様な気が……」

「ふふ、普通ならそうでしょうね。でも自覚ある？あなたって普通の格好してても同性に狙われるなりしてるって」

「それはもう骨身にじみてる……」

「十中八九成功するって！目論見通りアホ共が寄ってくるし狙い通り二人が正義の味方気取りでこのこやつてくるって」

「……………」

てんじゅう  
てんきょう  
纏州の首都 夫京。

8つある主要国家の中でも“人種のるつぼ”といわれるほど多くの人種や民族がこの地に住んでおり、猥雑ではあるが実に活気あふれる街になっている。行列に並びながら町並みを見渡しつつこう思う理花。

嫌いではない。この空気は。毎日がお祭り騒ぎだ。

右を見れば緑色の肌をして口の両端から牙をはみ出している人種　ゴブリンの若者5人がだばだばの服を着て騒音じみた音楽に合わせて激しいダンス　ブレイクダンス　をしており、頭で倒立して開脚したままくるくる回り、さらにそのまま、軽功<sup>けいこう</sup>を使って宙に浮く。差ながら人間プロペラと言うべきか。周りに集まったギャラリーが歓声と拍手を送る、と同時におひねりが放り投げられる。

その横では全体的に小柄で中年か壮年の様な容貌ではあるが、実に筋肉質な体型をした人種　ドワーフのトリオがお手玉を披露。ただしたただのお手玉ではない。膝を抱えた子どもほどもある岩と鉄球だ。それぞれ赤青黄に塗り分けられており、それを危うげなく巧みに操っている。なかなか、易筋経<sup>えききんけい</sup>をやっているのがよく分かる。そのままそのトリオは三人で同時にお手玉を共同で宙に舞わす。三色に塗り分けられた重量物が宙できれいに幾何学模様を描く。

さまざまな見世物で自分の目を和ませている理花の隣を、胸を強調した制服を着た、比較的整った容姿で耳がとがって伸びている人種　エルフのウエイトレスがローラープレートで巧みに人込みを縫うようにして移動、そして、軽功<sup>けいこう</sup>を使ってふわり、と宙を舞い、目的地に到着。「3番テーブルのお客様お待たせしましたー！」と、トレイをそのテーブルに置く。宙に浮かばもちろんスカートの下が見えるわけだが、しかしその下は見せてもいい下着　アンスコ　なのでこのウエイトレスも平気で見せている。しかし男はアンスコと知ってもついのでいてしまうものだ。そのためかなりの集客率を誇っている。品性はともかく、これを考えた奴はかなりの策士だろう。理花は苦笑する。

空を見れば理花とおなじ有翼人種<sup>マライイカ</sup>の配達員が様々な出店の材料をひっきりなしに運んだり、また出店から出たごみを回収したりしている。こういったデリバリー関係は有翼人種の独壇場だ。

「へい、らっシャイッ！」と声がかかる。

ちなみに美香の並んでいるこのお店は、たこ焼きランラン<sup>だこやきらんらん</sup>だ。ご覧の通りかなり繁盛している。

「こんにちは、大将。出汁<sup>だし</sup>入りタコ焼き4パック頂戴」と、事前に買っておいた食券を渡す。

「おう、美香ちゃんかい！相変わらず別嬪<sup>べっぴん</sup>だねえ、出張から帰ってきた所かい！」



この大将と理花とは顔なじみだ。最近髪の毛が後退してきたのがちょっと悩みだという粹でいなせな40代のゴブリン。とはいえ理花が八州役人をしているのは内緒だ。美香という偽名で通している。八州役人はその強権もあり敵が多いからだ。仕事もOLという事になっている。ちなみに今の理花の格好もOL。ぼく白のスーツにタイトスカートだ。とはいえ理花には羽根があるから背中が大きく開いたタイプのスーツで、よく男性からそこが扇情的でいいと言われる。女として男性の注目を浴びるのは嫌ではないが、理花の心中は割と複雑な心境である。

「ええ。そんなとこ。今日は軽く報告書を提出したら帰っていいことになってるから、久々の休暇を楽しもうってスポンサーなわけ」

「そーかいそーかい！じゃあ今日は文字どおり羽を伸ばしとくんナ！」

そう愛想良く返事をしているうちにも、ものすごい速さで腕が動く。どれくらい速いかと言うと、残像ができて腕が6本も7本もあるかのように見えるくらいだ。

大将の両肩の経穴には、<sup>ブリスター</sup>補助経穴が付いているのが見える。それはちょうど小さく丸

い素子<sup>チップ</sup>のようなものが埋め込まれており、それを中心に10センチかそこらのチューブが経絡にそって走っている。これを体に埋め込むことでその部分の、<sup>ブリスター</sup>気の流れが活性化。普通の約3倍の速さで動けたり物を持ち上げたりできるようになる。今の大将のように。

とはいえあまり多くつけすぎると体に負担がかかりすぎて健康に悪いから、法律で付けるのは多くて3つまで、と定められている。

それなりにお金がかかるが、ちょっと無理をすれば届く範囲の値段で、埋め込む手術もほんの数分で済むから、今は大半の人間がこの<sup>ブリスター</sup>補助経穴を付けている。周りを見渡せば、目につく人全員がつけているのが見える。もちろん理花も付けている。

これを見てると、つくづく思う。時代は変わった。それも急速に。

理花が物思いにふけっている間にも、大将はシューババババッ！と瞬間にタコ焼き6個入り5パックを詰め終える。

おっと！つ多いような。理花は首をかしげる。

「あいお待たせ！1つサービスしとくよ！美香ちゃんに負けず劣らず別嬪な上司さんにもよろしくな！」

「あらありがとつ。また寄らせてもらうわね。」

「あい！ありがとやんした〜！」

待ち合わせ場所はこの先の一本杉の下の乗合馬車のベンチ。どこに座っているのかは、理花の上司は目立つから、そうあわててはいない。

……お、いたいた。

理花の目線の先には、平均して比較的魅力的な容姿を持つエルフ族の中でも、頭一つとびぬけた美貌を持つエルフ族の美女がいた。

純度の高い銀をそのまま柔らかい系にしたかのように柔らかくうねる銀髪。その肌は理花より白く、しかし病的な感じはしない、温かそうな柔肌。長いまつげの下で輝く切れ長の瞳は物憂げにひかり、すっと通った鼻梁の下、赤い唇を見るたび理花なんかは同じ女のはずなのにいつも思わずどきどきしてしまうほどなまめかしい。

長いとがった耳には2つ3つ高そうなイヤリングが付いており、あれだけ高そうだとけばけばしく感じるものだが、この人が付けると実に似合っている。エルフ族というものは平均してスレンダーなのだが、しかし彼女は比較的巨乳で、サイズは理花と同じくらいというつらやましき。胸元が大きく開いた、スリットが深く入って金糸で豪華な虎の刺繍が施されている漆黒のチャイナドレスを着ているものだからなおさらそこが強調されている。

男はホモでもない限り一目で陥落、女さえ思わずときめく美女だ。老若男女問わず彼女の周りには輪ができるようにして人が椅子やベンチに座っており、しかしあまりの美貌に近寄りたいたいものを感じて話しかけることもできず、遠巻きに顔を赤く染めてチラ見している。

そして、その美女が何をしているかといえば 携帯用ゲーム機。

物憂げな表情はフリで、真剣に「モモンガーハンター x x」に没頭している。理花は彼女に近づき、声をかける。

「方さん。方さん！方さんってば！方九娘さん！」

「つひやー。」

あ、やっと気付いてくれた。

普段澄まして見えるだけに驚いた表情は間抜けで、可愛い。もちろん、口に出して言うほど理花は間抜けでも命知らずでもないが。

彼女が理花の上司 つまりは八州役人の総元締め、方九娘だ。もちろん偽名。

「んもっ！いきなり驚かさないでよ！あと九娘って呼ぶなって言ったでしょ。」  
 「何度も呼びましたよ。まったくはまりすぎです。普段からそれぐらい真面目に仕事してくだ  
 さいよ。」

この人は下の名前で呼ばれるのを嫌う。理由を聞くと、「クーにゃん、って響きが何か無駄に媚  
 びて嫌」とのこと。「かわいくていいのに」と率直な感想を述べたら理花は道場で「っぴどく



可愛がられた事がある。「べっ別に照れ隠しであなたをボコボコにしたわけじゃないんだから  
 ね！？勘違いしないでよね！」とはそのときの本人の談。そのとき理花は薄れゆく意識の中、  
 「い…一体それとこのへタクソなツンデレよ……ガクッ」と思ったものだ。

偽名なんだから別のにすりゃいいのに。」  
 理花は何時もそう思う。

このように近寄りがたい外見とは違って中身はとても愉快的な人間だ。無論理花はそれを口に

するほど進歩のない人間ではない

そう。この人は私よりはるかに強い。太極拳<sup>タイチーアイツ</sup>の達人なのだ

「まあちよつと待って電源切るから。……はい、お待たせ。まず先にたこ焼きよこしなさいさあよこしなさい早く早く早く」

「ふーそこは仕事の話してから言うセリフだと思つんですが。ほんとスカッとするぐらい不真面目ですね全く。……はいどうぞ。」

「何いつんのよ。どんなに言い訳しても結局権力を笠に着て暴力をふるう人殺し稼業なんて不真面目でいいじゃない。……いただきます」

「それはまあ……そういつ考え方もありますが」

理花が口ごもっている間にも、さっそく彼女はふたを開け、つまようじでたこやきをつつきだした。

しばし沈黙が訪れる。理花の上司は食べている間は無口になるタイプだ。理花は所在なく膝の上に左肘を立てて頬杖をつき、周りの景色を眺めるとする。

ちようど理花の視界に、ヒューマン族3人とゴブリン族1人とホルト族1人の合計5人のちようど小学校高学年当たりだと思われる子供グループが、“軽功”を使って3メートルあたりまでぴょんぴょんとびはねながら連れ立って駆けているのが見えた。

あ、通りすぐりのエルフ族のお姉さんのスカートをめくった。

スカートをめくられた女性はいやん！、こらー！このくそガキ共！と喚くが、子どもたちは「イー！お姉さんのパンツはクマさんパンツ！」「いい年してクマさんかよー！」「もつと色気のある奴穿けよなー！」「キャッキャッ」と笑ってそのままぴょんぴょんとびはねながら人込みに紛れていく。

あ、さらに通りすぐりの女の人のスカートをめくっていく。

まったく困ったお子様たちだ。理花は平和なこの光景に苦笑を洩らす。

しかし “軽功”。“易筋経”。そして“補助経穴”。ほんのつい40年前まではこんな単語と実物、誰もが一般的に使う事がなかったのに。マアの人間しか使わなかったはずなのに。

時代は変わった と思う。それもあまりに急速に。

理花は遠い目をする。

「時代は変わったわよね……40年くらい前を境に。例えるならジャンルがSFの漫画が途中で時代劇にガラッとおもいつき変わるぐらい変ったわよね……」

と、口に青のりを付けながらエルフの美女はつぶやく。

理花は苦笑する。どうやら上司も同じことを考えてたらしい。

「本来ならその例えは大げさすぎなはずなのですが。しかし時代の変化を見てきた私たちに全然大げさには聞こえませんか……」

基本的には有翼人種<sup>マライイカ</sup>と何よりエルフ族というものは平均寿命が長い。有翼人種では541歳

まで、エルフ族ではなんと1236歳まで生きて大往生を決め込んだ人がギネスに載ってあった。ちなみに理花は今年で130歳、隣に座っている上司の方九娘は三十四歳だ。他の種族にとっては40年とはけっこう大昔かもしれないが、彼女たちにとってはほんのつい最近だ。

いや、他の種族の年配の方にとっても、ほんのつい最近の事だと確信している。それぐらい短期間に、思いつきり時代は変わった。

エルフの上司の言葉ではないが、ジャンルがSFの漫画が、路線変更していきなり時代劇になっ  
てしまったぐらいに。

長い物思いにふけりながら、目の前の平和な喧噪をぼんやり眺める理花。

「あ、馬車よ馬車」

と、九娘が声を上げる。

物思いを中断して理花が顔をあげると、四隅に天馬<sup>ベガス</sup>を数頭配置し、浮遊槽で宙に浮かぶ大型飛行馬車が、天馬の放つ「結界域」に守られながらゆつくりと降りてくる。

これはこの光景は、まるで今の時代そのものを象徴している光景だ。

そのさまを見て、九娘はくすくす笑う。

「天馬、か……。あの“武化大革命”<sup>ベガス</sup>が起きる前まではあんなの特権階級<sup>ブルジョア</sup>の道楽に過ぎなかつたのに……いまや私も生まれてなかつた中世の様に様々な産業の中心に返り咲き、だなんて……」

「もー飛行馬車を見るたびその台詞言ってますねほんと。耳にたこができてんですが。」

「だって理花ちゃんもそう思ってるんでしょ?」  
「結界域」を体得するための修行体系をそのま

ま天馬や一角獣<sup>ユニコーン</sup>の調教に応用、なんと天馬や一角獣に「結界域」を展開させることに成功!

「ウオオ!しかも、“結界域”を展開させた騎獣らは天馬なら最大時速五〇〇キロ、ユニコーンなら地上で三〇〇キロ走ることができて、しかも下手な戦車よりもはるかに“装甲”が厚くて「異思の物共」の攻撃をもとめせず、逆に轢き殺す事ができるなんて……ハッキリ言っていまだに信じられないわ」

と、言っ自分の頬をつねるジエスチャー。

「……確かに。しかも排気ガスを出さずにとってもエコロジーです。まさか“戦車”<sup>タンク</sup>よりも“

戦車”<sup>チャイロツト</sup>がはるかに有効な時代が来るなんて……」

「しかも現在<sup>いま</sup>や一部の「異思の物共」すら騎獣にできるなんて、ね……そんな時代がこよう

とは……。まるでできの悪い三文漫画の中にいるみたいだわ」

そう、数奇な世界の流れにお互い苦笑しながら、馬車へと続くタラップに足を踏み出しかけた時だった。

二人の視界の端に、不愉快なモノが移った。

「やあじょーちゃん、まるで人形さんの様にキレイだねー」

「オイオイそんな似合わない猫なで声出すなよ気味悪い。ごめんねー僕ら別に口リってわけじゃないんだけどキミがすくく可愛いからさーちょっとはしゃぎすぎてんだよねー」<sup>W</sup>

こういう盛場では珍しくもなんともない、それはチンピラ数人が一人の女の子に絡んでるといつ、ベタな光景だった。

エルフ族のチンピラが二人、ヒューマン族のチンピラが二人、そしてあのグループのリーダーらしいオーク族の巨漢が一人、だ。合計五人。

珍しいのはむしろ　絡まれている女の子の方だ。

一言で言い表すならその子はいわゆる「ゴシック・ロータ」と呼ばれる格好をしていた。

黒と灰を基調にして丹念にフリルとリボンを縫い合わせ、ところどころにアクセントとして赤のリボンと白のレースを編み込んでいる、見るからに高そうなゴシックドレスに、ピカピカに磨かれた黒革の靴。肌の露出は顔以外全くなく、なのに割と暑いのにその子は汗一つ掻いてない。その汗一つ掻いてない容貌がこれまた人形じみた印象を与える。

そう。その容貌がこれまた

「うっつわあ〜可愛い……」

女の理花でもどぎまぎしていた。

象牙色の肌にうっすらとメイクをし、思わずつきたくなるほど柔らかそうな頬。書いてもいないのにきれいな弧を描く眉の下にはきれいな二重瞼のぱっちりしてすんだ碧眼。そのあどけない容貌とは裏腹に何かを訴えるかのようにわずかに開かれた唇はえらく色気がある。

その、見る者に「何としても守ってあげたい欲」と同時に「さらってしまつて滅茶苦茶にしてしまいたい欲」を同時に喚起させてしまう危うい美貌を、丁寧に梳かれた綺麗な金髪と、その上に結ばれたピンク色のリボンが、華を添えている。

これは別にロリコンの類じゃなくてもたまらないものがある。性欲を持て余した者ならなおさらだろう。

「……」

やれやれ。こんな不愉快な光景を見せられて黙っている訳にも行くまい。ダー其め、私が相手になつてやる。

そう思つて理花は奴らの方歩一歩踏み出した、　より早く。

理花は、隣にいたはずの九娘がいつの間にかいなくなっているのに気づいた。

「まさか」

理花は思わずチンピラ五人を注視する。

五人の影が、「フッ……」と揺らいだのを理花が確認した直後。

肉を打つ鈍い音が五つ響く。

「グゲッ……」「グオツッ……」「ウガッ……」と、短く呻いて倒れていくチンピラども。周りのヤジ馬が「オオオツ……！！」と感嘆の声を上げる。

そして残像をちらつかせながら霞の様に表れる九娘。

なんといつ早業。彼女は気配を隠して接近、そして素早く当て身を喰らわせたのだ。

やれやれ、といった感じに理花は九娘に声をかける。

「つくづく呆れるほど気配を操るのが上手いですよね本当に。これでも少し真面目に働いてくれればいいのに……」

「なあに言ってるのよ。私が頑張ると美香ちゃんが成長しづらくなるじゃない。」

……全くああいやこいつ。口の減らない九娘に、理花は少し嘆息。

ヤジ馬達も三々五々、散っていく。九娘さんが薄気味悪いのもあるだろう。みな視線をあらぬ方向へ向けてこつちと視線を合わせないようにして、足早に通り過ぎていく。

と。見ると、絡まれていた「シック・ロリータ」の格好をしたあのかわいい女の子が、くい、くいと九娘のチャイナドレスのすそを引っ張っていた。

「あら、あなた？逃げ出してもよかったのに。大ジヨブ？怪我不い？怖くなかった？もう大丈夫だからね」

九娘は相好を崩してしゃがみこんで少女と目線を合わせ、頭を左手でなでてやる。

少女はくすぐったそうに目を細めながら、鈴を鳴らすような声で、

「あり、がとつ……」とお礼を言ってきた。

ものすごい美声。この容貌と相まって、良くも悪くもこの少女は人をひきつけてやまない魅力でいっぱい。

その美声に聴き惚れたのかさらに九娘は相好を崩し、

「まあ、ありがとつ、いい子ねえ。あなた、名前は？」

「レラ……」

「まあ、レラっていつの？いい名前ねえ。あなた、迷子？親御さんは？」

「マオ……」

「マオっていつの？あなたのお母さん？」

「……お姉ちゃん……」

「ぶっん。あなたのお姉ちゃん、マオって言うんだ。ここで待ち合わせしてたの？」

「うん……」

「そーなんだー。……あ、ちよつと待つてね。すぐ済むから。」

と言うと九娘さんはなぜか、倒れ伏しているチンピラ達の方へ振り向く。

胸元にさしていたボールペンを逆手に持ちながら。

あれ、何で？と理花は一瞬思ったが、ああ、それでか、と九娘の行動に納得する。

見ると、最初の不意打ちで倒れていたチンピラの一人が立ち上がり、自前のナイフをポケ

ットから取り出してきたからだ。

「んーちょっと当たりが浅かったかしらね。手加減も難しいわ。」  
事前に察知していた九娘は余裕だ。

チンピラは痛みと屈辱に逆上して目を血走らせながら、  
「こんの……くそったれがああああああッ！」

と喚きながらナイフを振り上げながらこつちに突進してくる。

しかし刃物を持ったチンピラ程度で九娘はあわてない。

口元に笑みすら浮かべながらボールペンを構え、  
すると次の瞬間。

バツ！…とこのゴスロリ少女が両手を広げて九娘をかばった。

「あらッ……」

と九娘は少しあわてる。

少女は九娘をかばったつもりでいるかもしれないが、逆にこの場合足手まといだ。これでは九娘は動けない。

しょうがない。私がこのチンピラをぶっ飛ばして

と理花が思った次の瞬間。

「殺ッ！」  
「ッ！」

という奇声とともに一陣の風が舞いこみ、ドゴンッ！…とチンピラをぶっ飛ばした！

「ぶっあッ……」

と断末魔の悲鳴とともにまるで枯葉のように吹っ飛び、すぐそばにあった電柱に轟音と共にめり込むチンピラ。

……すごい。なんて威力。

理花は目を見張る。

見ると一陣の風と思われたのが一人の少女で、どうやら靠（こっ） まあ要するに中国拳法式の体

当たり でぶっ飛ばしたらしい。

チンピラが動かない あの威力で当たり前だ のを見て取ったその少女は残心を解くと、  
こつちに振り向いた。

この子もこの子で結構な美形だ。二人は感嘆する。

まず目を引くのは血統書付きの長毛猫を思わせる、ふんわりとした白い髪の毛だ。柔らかそうなショートボブの髪型。同じような柔らかそうな白い毛が首の周りにも生えている。

バステト  
猫耳族だ。

髪の毛と同じように白い毛におおわれた、猫の耳とおなじ形の耳。くりくりと大きな瞳には、これも猫を思わせる縦に広がる瞳孔。その瞳は釣り目で勝気な印象を与えるが、決してきつい



という印象は感じない。この子の持つ明るく、勢いがある感じがそうさせているのだろう。アイドルとしても通用しそうなほど整った目鼻立ちにメイクが決まっている。

短い黄色いジャケットを着た背は二人より一回り小さいが、胸は「爆乳」、とよんでもさしかえなないほど發育している。理花や丸娘より一回り大きい。まるで肌色の小玉西瓜が二つ並んでいるかのようだ。そんな危険な果実をサラシのような白いビキニで覆うだけになっているのだから胸の上半分が丸見えだ。きつと、いや確実に男性には抗えない引力を發するであろう谷間がくつきりと見えている。小憎らしい事に動いた、いちいちゆさゆさ揺れて軽く二人の氣に障る。

何もつけていないおなかの部分はくびれていて、鍛え込んでいるのだろう、くつきりと浮かんだ腹筋線が健康的な色氣を振りまいている。まあ、ウエストに自信がなければへそ出しルックはできるものではないが。

腰回りもまた露出度が高い。タイトなミニスカートはハイキックなんかしようなものなら下着が丸見えなのは確実だ。そして続く太ももは黄金律を忠実に守っているかのようになめらかな肉付きをしている。その足回りをさらに引き締めて見せるかのように白いハイニッソックスを履いており、二丁ソックスとタイトスカートの間から覗く白い太ももの露出部分がすごく蟲惑的だ。

しかし履いている靴は今までの描写を裏切るかのような、軍人が履くようなこつこつ編上げブーツをはいている。この点が、この子が決して軽薄な色氣だけで生きてきてはいないということを示している。

その点が、さっきの靠にも表れている。ただ才能だけで、鍛えてもいないのにあれだけの威力を持つほどの功夫に達するわけがない。

チャラケた恰好は「擬態」で、この子は結構な武俠だ。間違いない。そう理花はあたりを付けた。

この猫耳族の少女はレラを視認すると、シュバー　！と飛びかかって抱きしめた。

「いやんレ　レラ大丈夫大丈夫大丈夫うううう！？ごめんねごめんねまったまったああアア？！ちよっとトイレに行ってた間にすごいことになっちゃってええええええん！！怪我ない！？貞操は大丈夫！？犯されてない！？もう大丈夫だからね！！」

とまくしたてながらシャバシャバシャバツ！とすごい勢いでレラの頭をなでまくっている。レラちゃんはされるがまま。

……テンション高いなあ。

「ええと。マオさん？」

おそろくこの子がレラちゃんの姉だと見当をつけて問いかける理花。レラは見る限りヒューマン族のなりだが、まあ、義理の姉妹かなんかだろう。そう当たりを付ける理花。

「あ！そうですそうです、わたしこの娘の姉のマオといいます、この子から聞きました？マオと呼んでくださいね。いや察するに私の大切なレラちゃんを助けてくださったんですね？ほん

「ありがとうございますねえ」  
と、深々と頭を下げる。

「馬車を待つてたら急に催しちゃって。ちょっと離れただけでそう危険はないだろうと思ってたんですけどレラちゃんがすごい美少女だってこと忘れてまして。これからはもっと注意しますね。」

あ！もしかして私たちとおんなじで馬車を待つてたんですか？でしたら一緒にしません？と、その前にこの後ろの生ゴミ共どうしましょ？こいつらが道端で雑草の養分になるうがカラスの餌になるうが心の底からどうでもいいんだけどこのままほっといたら警察の方に怒られませんかねえ？」

ポンポンとよく言葉が出る。しかも遠慮がない。笑顔でシレッとひどいことを言う。

なんか愉快的な人と縁ができたようだ。

そう思うと、理花と九娘は顔を見合わせて苦笑する。

マオ



神州の暦で帝都歴五六年一〇月三日。つまり現在<sup>いま</sup>から四二年前。

あの、異思の物共、の軍勢を、植田盛雄という老人が素手で、何と素手で容易く殲滅してから。

神州国の科学者たちは老人の体を徹底的に調べたが、ただこの老人の体は一般の同年代の老人と比べて壮健である、ということ以外何一つ普通の人間と変わらなかったのである。

しかしこの老人が念じると闘気と呼ぶよりほかない陽炎か蒸気のようなものが全身から出てきて、植田盛雄という「人間」はたちまち「超人」になるのである。  
本人いわく、

「何も特別な事はしとりやせん。ただいつものように世界平和を願って一人稽古しとったら、ある日いきなり体の芯から何かが爆発したかのようにほとばしって気が付いたらこんなものが体から出るようになってしまった。わしもこの青白い水蒸気みたいなものが何なのかはわかりやせん。全く持って不思議じゃのう。」

と本人も不思議がつていた。

この老人、 というよりこの老人の家系である植田家は、代々有力な軍人を排出する武門の一族とのこと。

しかしこの老人以外の血縁関係者は皆戦死。つい最近長年連れ添ってきた奥方も老衰で亡くなり、この老人は天涯孤独の身になった。

「ただいつものように世界平和を願って一人稽古」と老人は軽く言ってたが、それは毎日血反吐を吐き、血の小便を出すほどずさまじいものだとして老人の住んでいた屋敷の近所に住む者は皆口をそろえてそう証言したと言っ。

一人稽古。

実は代々植田家は、「大東流会気柔術」という古流武術 この化学兵器全盛の時代にあつてとつての昔に廃れたものを伝承している一族でもあった。

もしかこの武術とこの老人から発生するオーラとしか呼びよふのないものは関係があるのではないかと研究者たちが注目したところだった。

なんとこの植田盛雄老と同じようにオーラのようなものを出し、たやすく人類の天敵ともいふべき「異思の物共」を撃退する者がポツリポツリと表れだしたのである！！

上地流空手という古流空手の修行者の放つ貫手が、あつさりと鋼鉄虫の心臓をえぐりだした。天然理念流という総合剣術の修行者が放つ居合いが、一気に数十の鬼種を切り捨てた。

骨法といつほとんども知られてない武術を使う者が、神州国最大の魔王とよばれていた「ヤトノカミ」といつ名前の恐竜種を、なんと倒した、などなど……

この者たちにはあからさまな共通点がある。

ひとつ古流の それも「気」とか「オーラ」とか呼ばれる胡散臭いものを重視する、時代遅れの武術の修行者であること。ボクシングとかレスリングとか、近代において成立した格闘技の修行者にはものの見事にいなかった。

もう一つは体を機械に換装しているものが少数であったこと。

体を機械に置き換えているものもいたが、その機械に置き換えている部分からは一切オーラのようなものは発生せず、

もしかと思ひ研究者が、本人の二つ返事の快諾を得て機械の部分を、有機培養してつくった生身の肉体に戻しなおしたら、  
見事そこからオーラのようなものが発生したとのこと。

こんな話をこ存じだろうか。

二トログリセリンという物質の話である。

この物質は理論上は結晶化が可能な物質だった。化学式まではつきり分かっていたと言う。だが、科学者たちがいくら試行錯誤しても長い間グリセリンは結晶化ができなかった。だがある日ある場所でグリセリンが偶然結晶化ができた。

すると、その日を境にして、世界中のあらゆるところで結晶化ができるようになったと言うのだ。方法などは一切変わってないと言うのに。

シンクロニティ。量子力学と呼ばれるほとんどオカルトじみた化学部門の言葉を使うと、この不思議極まりない現象はこう呼ばれる。

最早これは、そついった類のシンクロニティが起こったとは思えなかった。

この異様な事態に神州国の要請を受けて集まった、「オーラ」としか呼びようのないものを出せる古流武術修行者」達とこの国最高の科学者たちは頭を寄せ合つて話し合つ事になる。

後にこの会合は、「武神会議」と呼ばれるようになる。

なぜ、我々はこんなものを出せるようになったのか。なぜ、こんなものを出せると、「異思の物共」ですら虫のようにあしらえるのか。

なぜこれを出せるようになったのが今なのか。もつと早く出せるようになってれば人類はこうも苦労しなかったと言うのに、というほとんど愚痴のような意見まで。(気持ちはずごく分かるが。)

ただ、この会合の中心人物である植田盛雄老の

「もつ、うだうだいても仕方ないことかもしれない。まあ、原因はそのうち解るじやろ。もしかしたら永遠に解らないままで終わるかもしれないが……」

とにかく、我々人類にはそついつ「時期」が来た。そついつ事が出来る様になった「時期」が。今はそうとしか言えんのつ……」

というセリフで締めくくられた。締めくくるしか他なかった。

そしてこの会合の議題はより切実な事柄に移る。

即ち

“このオーラのようなものが出せる者の共通点は、(気)と呼ばれるものを重視する武術の修

行者ばかりだ。

ならばもしも現在<sup>いま</sup>、これらの古流武術を何の変哲もない一般人が修行をしたら、この会合に集まった者たちの様にオーラのようなものをらせて無敵になれるのだろうか……？

という事であった。

結論から言つて、それは“大当たり”であった。

人類には、“そういう事が出来るようになる時期が来ていた”のだ。本当に。

本当に、そうとしか、言いようがなかった。

ちなみにこの会合で植田盛雄老はこのオーラとしか呼びよつないものをなぜか

“結界域”

と呼ぶことを譲らなかつた。科学者たちが「なぜ？もう“オーラ”とか“闘気”という呼び方でいいのでは？」とまっとうな疑問を口にしたら盛雄老は何時になく渋い顔で、

「この我々から立ち上るこの陽炎のようなものは古来より呼ばれる“気”と呼ばれるものによく似てしかし、完全に非なるものじゃ。これを出した途端銃弾も毒ガスも炎も「異思の物共」も兎に角あらゆる仇成すものが無効になる。」

そんな生物が実在しているのじゃろうか？文字通りこれはこの世の理を“拒絶”して余りあるものじゃ。我々は戒めを込めてこれを“結界域”と呼ばねばならん。調子に乗ってこれに溺れたら、今度は我々人類が世界に拒絶されかねん」

この言葉にほかの「古流武術を修行してオーラのようなものを出せるようになった人達」は、特に反対もせずこのオーラのようなものを“結界域”と呼ぶことを受け入れた。皆、口にはせずともそういった類の“畏れ”を抱いていたのだらう。

とにかく、のちに“武神衆計画”と呼ばれることになる国家的プロジェクトが神州で始まった。

今から四二年前の事である。

二、屠<sup>ト</sup>愈<sup>シ</sup>く天下<sup>ノ</sup>を貫<sup>サ</sup>き穿<sup>イ</sup>つゝ

それが秩序とやらの側だとしても、貴様にとっての「善」であるとは限らない事は肝に銘じておくべきだ。秩序なぞ、「狂言回し」にとっての八百長の手先にしかすぎないからだ。

基本的に「秩序」にとって事の真偽は二の次で、どの狂言回しがどれだけ多く「正義」という名の甘い甘い思考停止<sup>シヤブ</sup>を与えてくれるか。これぐらいしか脳にない。

つまりは。この世に、善や悪など、実在しない、という事だ。ただあるのは、愚劣な狂言回しと、暗愚な観客がいるだけだ。……故にこの世は無駄だらけ。

そして、国家の言つ大義名分もまた、実在しない。ただあるのは、体よく中心に座する事の出

来た、愚劣な狂言回しの手前勝手があるだけだ。

そしてその手前勝手に踊らされる観客の騙され具合を彼の者はこつ嗤<sup>ツ</sup>つ。

愛国心と。

石田戎右著・楽園不要論<sup>『</sup>

……九娘さん(と少しだけマオさん)がチンピラどもを軽くのしてから。

あの後もちろん警察が来たが、正当防衛かつこちらが全員女性という事で無事無罪放免になった。「いくら正当防衛でもやり過ぎだ」と警官の一人がこねて少々手間取ったが。

まあそれはともかく。

馬車のなかでのこと。

前の章でもわかるとおり、マオはさながら口から機関銃とでも例えるべき勢いでしゃべくり倒した。

それだけなら耳障りなだけなのだが、会話はとてもウェットとゴモアにあふれていて、なんというか滑ることがない。

ちゃんと理花と九娘がしゃべれるように絶妙な「間」でこちに水を向けてくるし、他愛もない雑談でしかなかったが二人にとっては実に有意義な時間だった。

もちろんファーストクラスの席で彼女たち以外誰もいなかったから他のお客様には迷惑はかかってない……はずだ、と理花は自分に言い聞かせる。(マオは「わー！すごい！私ファーストクラスの部屋なんて初めてくぐったー！」としきりに感動していた。)

レラはおとなしい拳動通り、無口だったけど終始ニコニコしていた。

「私、あんまりしゃべるの、上手じゃないから……あまりマオの、話し相手になれなくて……楽しそうなマオを見て、私も楽しい……」とのこと。そのあまりのいい子ぶりに、理花と九娘は目を細めた。

何でもこの姉妹、姉のマオさんが昇給して仕事でボーナスが出たから観光で天京までやってきたとのこと。

しかも奇遇にもこれから理花と九娘さんが止まるリゾートホテル(第一ホテルイン天京)に同じく泊まるのだという。

「いやーでも賞金稼ぎの人ってこんなに間近で見るとなんて初めて！いつも遠目で、あ、何か捕り物やってる、って時に眺めるだけだけど。ねえねえ、賞金稼ぎってやっぱりお金になるの？」いつもファーストクラスの席とかに乗れるの？私OLやっててキャリア積んでやっとこんな贅沢ができるようになったけどさ。」

九娘は八州役人になるまでは賞金稼ぎでご飯を食べていたし理花もご飯を食べていた。だから真実を混ぜてうそをつくことはたやすい。

九娘はマオに、

「うーん、お金とれる時と取れないときの差がとても激しいからね。こーやってこんなふかふかのソファーの上でキャビアを食べているその数日後に病人と売春婦と相部屋の木端宿でカッブラーメンすすってたり。」

ほら賞金額見ると結構高額だったりするけどあれ手取りじゃないからね。いろいろな税金とかなんかでこっそり引かれるから。そーいった税金払わなくて済むための法律テクとかノウハウとかを肌で確立するまでけっこ悔しい思いしてきたわ。」

「警察の人ってこーゆーときだけ強気よね。それぐらい犯罪者に対しても強気になれって正直思うわね。」とマオ。

理花は苦笑して、

「まあ……警察の人間って有能だけど無力でね……面倒な書類手続きとかなんであるんだろと最初は私も思ったけどあれがないと警察が権力を持ちすぎちゃって一昔前の独裁国家のようになっちゃうから。」

とはいえこの警察機構の暴走を抑えるための手続きで逆に間に合わなくなるってことが往々にしてあるから、そこらへんジレンマだとは思っけど。」

「何で？税金収めてんだからそれぐらい警察働けって思わないの？」と、真つ当な事を聞いてくるマオさん。

「うーん……そりゃあ私も賞金稼ぎになる前はそう思っていたわ……何でいわゆる“正義の味方”って実在しないんだろって。何で正義の味方のはずの警察ってこんなに動きが遅いんだろって。」

でも私、そのうち気付いたの。正義の味方なんて、実在しちゃいけないって。だって、そんな便利なものが存在したら 私たち何もなくなるでしょ？自分たちででき



ることを一切やらないで何か都合の悪いことが起こったらその正義の味方に頼って責任をほっぽって。そのうち、確実に　その正義の味方が少しでもへマをすると私たちはものすごい非難をしてしまうでしょうね。自分たちの怠惰を棚に上げて。

そんな手前勝手な存在になり下がった私たちを、果たして正義の味方とやらは何時までも守ってくださるかしら？

まあ、私だったら速攻で愛想尽かしてるわね。マオさんはどう思う？

そういつとマオとレラはうーん、と腕を組んで考え込んでしまう。

「だから私は賞金稼ぎになったの。誰に頼ることなく、自分にできることをしようって。確かに私にできることなんてたかが知れてるけど。でも私は、自分にできることもしないで、ほかの誰かにできもしないことばかり望む奴らになんてなりたくないかった。

誰かのためでもなく、その時の決断が、今も私を動かしているわ。」

そこまでいつと、なぜか場の空気が、シーン……と静まり返ってしまう。

……あ。

いけない。今のセリフクサ過ぎた。

理花は取り繕うとわざとおどけて、

「ほ……ほらマオさんもそう思っているんでしょ？あのチンペラをぶっ飛ばしたときのあの靠

あれはかなりの修練を積まないとあんな威力は出せないわ。

やっぱり誰に頼ることなく、自分の身は自分で守らなきゃって思ってるんでしょ？そうでなくっちゃあ。」

「……そりゃまあね……」

そういつとマオは隣に座っていたレラをひょいと持ち上げて、自分の膝の上に置く。

そうしてから、本当に慈しむ様にレラの頭をなでる。レラは目を細め、されるがまま。

「それだけじゃなく、自分より大事なものも守んなきゃいけない場合なおさらだし。この子がいてくれるから私もここまで頑張れたんだし。」

「マオ、はずかしう……」

なんの照れも無く厚い好意を口にするマオに、レラの方が真っ赤になって照れている。

いやん、かわいい

さつきから理花の頬の筋肉がゆるんでしょうがない。

と、同時に理花は舌を巻いていた。

全くこの子は天性の悪女だ。この擬態の裏に、いったいどんな牙をもっているのやら。

やがて目的地に馬車は到着。馬車のタラップを降りて早々、

「ひゃ　！これがテレビにも出てた第一ホテルイン天京かあー！やつは本物はでっかいわね

ー！」

と、堂々たる威容の高層ホテルを見上げ、マオは感嘆の声を漏らす。

九娘が

「ねえねえ、これも何かの縁だし、七時あたりに一緒に食事でもしない？」  
とマオとレラを誘う。だけどマオは申し訳ないという顔で両手を合わせ、

「ごめんなさい、予算の関係で食事は外でとろうと思っているの。パンフレット見たけどホテル  
のレストラン、値段が高すぎて……」

九娘はマオの言葉にケラケラ笑って、

「うん、ナイス判断だわそれ。確かにホテルのレストラン、まあおいしいけど値段がね……」

実は私たち、このホテルの近くに「穴場」ともいつべきお店知ってて。そこは実は繁華街のコ  
ックさんたちがお店を終えてからくるお店なの。しかも料金も普通の料理店とおんなじぐら  
いの値段だから安心して」

そのお店を発見できたのも九娘がろくに仕事もせずそこらへんをほつき歩いていたから。褒  
めると調子に乗るからいつの間にか理花の口元は苦笑の形になっていた。

そんな理花の内心を当然知らず、マオは喜色満面になって、

「えー！コックさんが通うお店ってサイコーのお店じゃないですかー！しかもお値段が普通の  
お店と変わらないなんて！行く行く、絶対行きます！」

ええと、今四時だから、それじゃあ三時間後、待ち合わせ場所はホテルのフロントでいいですか  
ー？」

「ええ、そうしましょう。美香ちゃんもそれでいい？」

「ええ、もちろん。異存はないわ。」

「いやー！うーじゃあ今から着ていく服準備しなきゃー！」

と、張り切ってマオはホテルのドアをくぐっていく。やや遅れて、レラがてくてくと近づいてき  
て、へこり、とほほ笑みながらこちらに頭を下げ、またてくてくとマオをおとり追いかける。

理花は余計なことを知りつつも、レラの背に声をかける。

「……まあ、マオさんの様に誰に頼ることなく自分の身は自分で守らなきゃって思っているのは  
レラちゃんもそうだと思うけど。」

実はレラちゃん、レラちゃんも結構武術の実力あるんじゃない？」

「……ふ。」

レラは振り返り、不思議そうに首をかしげるだけ。

んもつ、いちいち愛くるしい。

理花はつい微笑んでしまう。

「別にとばけなくてもいいわよ。もうわかっているから。それに何もしないから。」

そおねえ、最初にアレ？って思ったのはそう ヒューマン族のチンピラが最後にナイフ抜いて

襲い掛かってきたとき、あの九娘さんよりも早く動いてかばったほど反応が早かったことかし

ら。」

「……………」

少し、レラの目が丸くなり、かすかに息をのむ気配。あからさまにしまった、という感じの。それはどんな言葉より雄弁な肯定のあかし。

「もちろん私は九娘さんの強さを骨の髄まで知っている。その反応速度も、ね。」敵として認識してなかったとはいえ、あの九娘さんより早く動けるなんてすごい、おかしい、って思ったわけ。それから逆算して考えて、さらにおかしいと思ったのは、九娘さんにふつつにお礼を言ったこと。かしら？

あまりに自然にお礼を言っただけから気付かなかったわ。

だって。常識で考えて、まるで日常動作のように平然と、気配を消してチンピラ五人を一気に戦闘不能にできる暗殺者女にふつつに声をかけられるなんて。よほどの天然が感覚がおかしいかもしれない。そういつ光景を見飽きてるかのどちらかしか無いもんねえ。

その時戦闘の一部始終を見ていたほかのヤジ馬たちの様に事が終わればそそくさと逃げるのが普通の人間の行動だと思うし。どんなに薄情でも、ね。」

「……………」

レラは無言。しかし何か気まずそうなのもう手に取るように分かる。それを知ってこのマライカの女は自分をどうするつもりなのか、という警戒がにじみ始めているのも。

まあ理花はただの好奇心でカマを掛けただけなのだ。そう警戒されても困る。

レラの警戒を解こうと理花は手をパタパタ振って、

「やあなに、ただの好奇心でちょっと聞いてみたただだから、そう緊張しないで。レラちゃんがたとえ暗殺者が相手でもキチンとお礼を言えるいい子だってわかってるから。」

ただ、余計なお世話かいたったかなーって思っただけ。チンピラ達から守ったの。」

レラは首を振る。

「……………うん。こんな世界でも、見ず知らずの誰かの為に、体を張れる人がいてくれるって、わかったから、うれしい……………」

後、訂正……………」

「……………」

「自分の身は自分で守らなきゃ、って言うだけじゃなくて、自分より大事なものを守らなきゃって思っているのは、マオだけじゃないから……………私も、だから……………」

その答えを聞き、理花は相好を崩してレラの頭をなでる。

「そう……………いい子いい子。」

さ、早くマオさんのそばへお行きなさい。引き止めてごめん。それじゃあ7時にね。」

うん、またあとで、といって手を振り、とてとマオを追いかけるレラ。

九娘は目を細めて、

「世界」 とはまた、突き放した言い方よね……」

「うん……」

きっとあの姉妹、結構苦勞してきたんだろぅなあ。マオさんが猫耳族でレラちゃんがヒュ  
ーマン族なのにもそこらへんにあるのだろう。

でも、きっと大丈夫。あの二人は幸せになれる。たとえ血はつながって無くともしっかりとした  
絆があるし、自力本願で決して自分の人生を誰か任せになんてしないだろうし。たとえ何があ  
ろうと二人で力を合わせて切り開いていくんだろぅ。

私や九娘さんがそうであるように。

そう内心でひとりこちる理花。

「さ、私たちも早くホテルに入って七時までくつろぎましょ。」

「ええ。」

理花も九娘を促してホテルのドアをくぐる。

その際、九娘が独り言のようにぼつりと

「……しかし暗殺女とは、美香ちゃんも言うつよになったわねえ……」

ともらすのには、理花はまいってしまつ。

でも、言いすぎとは思いませんよ。九娘さん。

無言でそう反論しておく理花。

だつて……ねえ。

803号室。たぶん、その部屋が8階の非常階段から3番目にある部屋だからそんな数字が当  
てられてるのだろう。そこがいましばらく彼女たちの住みかとなる部屋。

部屋について荷物をおろして早々、「7時の食事のためにおなか減らしておかなくちゃ」と九  
娘は日課の鍛錬を始める。

カチあげるように左肘撃を繰り返す。顎を引き、肩と耳をくつつけるように。このとき相  
手に見せるように掌をしっかりと返しておく。そうすると、速さが増す。

と、同時に、突き刺すように左膝を繰り返す。右手は頭部右側面をカバー。体はわずかに前傾。  
そして素早く切り替えて、右肘と右膝を繰り返す。左右切り替えて、この同時攻撃を繰り返  
す。

足を踏み変える際、どしんどしんと音をたてない。衝撃で足首に負担がかかるから。だから音  
をたてないよう、そつと踏み変える足をおろして、そして膝を一気に持ち上げ、繰り返す。

そつと足をおろして、一気に膝を繰り返す。

ゆえに、激しい動作の割に、……、……、……、ととても静かだ。

この単式動作は太極拳の套路(型)のうち、“金鶏独立”という動作のうち一つを、抜き出した

ものだ。

套路のうち、特に実戦の際とても有効な動作を抜き出して反復練習する。この鍛錬は実は秘伝に属するもののだが、彼女たちの太極拳の師匠は惜しみなく教えてくれた。

理花は適度な硬さと柔らかさを持つベッド　この絶妙な弾力のベッドからしてやはりここは一流ホテルと分かる　に腰掛けながら、バッグから書類を取り出す。

「それじゃあ方さん、今回の馬幫の事案の報告、しますわね。」

「フッ！フッ！…いいわよ…ウッ！」

そして理花は、バッグから一つの立方体を取り出す。

その立方体にはカメラのようなレンズが一つにボタンが一ついわばそれは「拳太の大きさの箱型カメラ」とでもいふべきものだ。

見た目だけなら。

もちろんそれもできるが、ただそれしか出来ないようなちやちなモノじゃなく

理花はその球体に唯一ついてあるボタンを押す。

するとレンズから立体映像が「パアアアアッ……」と空中に投影され、今回の馬幫の事案に関する証拠や事前に書いた報告書がずらりと虚空に浮かび上がる。

これぞ八州役人の秘密道具が一つ、超最新ノートパソコン。通称「ポロン」。

このように持ち運びに超便利。しかもちょっとしたスーパーコンピューター並みに容量がある、八州役人たちのようなものしか所持することが許されないまさにオーバートテクノロジーの代表格。しかもこのパソコンの中には八州役人専用のすごい機能のソフトが数多くインストールされている。

もちろんこれは一般には出回っていない。世間ではまだノートパソコンといえばこれよりまだかさばるものであるし、この型のパソコンは世間一般の常識からすればまだSFの部類に属するものだ。

理花はその中の、事前に書いた報告書を読み上げる。

途中、九娘が「ああ、やっぱり現地の警察官も式神の飛羽ちゃんを『そりゃ反則だ』って言うてたんだ…」と、くすくす笑う。理花も苦笑しながら、

「ええ。まあ私も反則だと思えますけどね……しかし飛羽がいなかったらまず決定的な証拠はつかめなかったでしょうね。何せ主犯格の片割れが警察署長なんですから……現地の警察官の間でも馬幫と署長の癒着はもう「公然の秘密」と言ってもいいほどバレバレだったようです。ただ内部告発しようにも証拠を上から握りつぶされ続けられては、ね……」

現地の警察官も事件の後、感謝していいのか疎ましく思ふべきなのか、複雑な顔をしてましたねやつぱし。本来自分たちの手だけはじめをつけるべき「身内の恥」を、八州役人とはいえ結局

はよそ者の手を借りないといけなかったわけですから……」

「まあ、素直に理花ちゃんにお礼を言えるほど割り切れるもんじゃないわよねコレ……あ、こめん話の腰を折って。報告、続けて。」

「はい。それで最後にですな。」

と、一通りの報告をし終える理花。

「以上です。この件のあらましは」

「ん。分かったわ。理花ちゃん、ご苦労様」

そういつて軽く理花をねぎらう九娘。

ねぎらいながらも、まだ九娘は修練を続けている。

……やる事がなくなった理花は、ふと、一緒に修練をしようかと思ったが、何となくその気になれなかった。

何か、この年になって母親（代わりの人）と一緒に体を動かすが、理由もなく気恥かしかったからだ。

仕方なく理花は頼杖について物思いにふけることにした。

現在から四二年前の神州での事。

とにかく、のちに「武神衆計画」と呼ばれることになる国家的プロジェクトは始まった。

それは歳端のいかない孤児達を引き取り、それぞれの古流武術の達人たちがマンツーマンで自己の流派を教え込むというものだ。孤児には特に運動神経の鈍い子供を選ぶ。「結界域」を展開できるものが天才にしか開得出来ない奇跡ではなく、学べば一律に使用可能になる技術であることを証明するためだ。

目論見通りであった。

修行開始3カ月目で全員程度の差こそあるものの、「結界域」の展開が可能になった。

半年で武装したサイボーグ一個大隊を手玉にできるようになった。

一年で戦車一個大隊を軽くあしらう事ができるようになり、

そして一年半後、彼らを「武神衆部隊」と名付け実戦投入、たった十数名で大規模な「異思の物共」の軍勢を殲滅することに成功。

彼らを教え込んだ盛田植雄老を筆頭とする古老達を始めとする国家首脳人科学者たちは狂喜乱舞し、半年後、「武神衆計画」を最終段階に移すことにする。

即ち 彼ら「武神衆部隊」を鍛え上げた修行の体系メソッドを、書籍 テレビ放送 インターネット問わずありとあらゆる情報媒体に乗せ、半分だけではあるが 広く神州国民に開放する。全神州国民は喜び勇んで、むさぼるようにこの修行体系を学び、実践していった。当然だ。あの忌々しい「異思の物共」を紙の様に引き裂くことができるのなら悪魔にすら魂を売る

ものがほとんどだったのだから。“結界域”なんて胡散臭すぎる、というまっとうな意見の持ち主は本当に少数派だった。

後にこの修行体系一般公開を歴史の教科書は「武化大革命」と呼ぶ。今からちょうど四〇年ほど前の話だ。

もちろんこの計画は大成。才能あるものは一カ月で“結界域”を展開できるようになり、ほぼ神州国民全員が「異思の物共」を圧倒するほどの戦闘力を有するようになる。

そしてたったその後一年 たった一年で領土内の全「異思の物共」を全滅に追い込み、神州国の「異思の物共」を率いていた「ヤマタノオロチ」と言つ最大級の恐竜種を討伐したことにより、神州国は「異思の物共」根絶宣言をした。

たったの一年で。このちっぽけな島国は世界最大の軍事国家となった。

もちろん、他の国々も負けてはいない。神州国にならって自国の、今となつては時代遅れのはずの伝統武術の再生に取り組んだ。

（この世界的な動きを後に「武盛復古」と呼ぶ。）

例えば理花の使つホワイトレンヒル白鶴拳とか、小林拳とか、太極拳、八卦掌、洪家拳、醉拳とか。

そして武術の流派を問わず、氣の流れをもつて筋肉を鍛える鍛練法（というより氣功法といった方が正確か）、「易筋経」と、反射神経を主に鍛える、「輕功」を修練することを国は奨励した。

そしていつの頃からか、“結界域”を体得した人間を、我々は「武侠」と呼ぶようになった。

そして、人類は誰もがほんの少しの努力でその「武侠」になる事ができ、

人類は誰もがほんの少しの労力で「異思の物共」を超える戦闘力を得ることができるようになる。

何より人類が「異思の物共」に対して有利になったのは、

この“結界域”を出せるのはあくまで人類側だけで、「異思の物共」側からは一切「結界域」を出せる個体が発生しなかったのである。

かつて人類の化学兵器の類には進化対応できたというのに、「異思の物共」はこの「結界域」に対しては対応できなかったのである。

「異思の物共」はいまだに人類にとつての脅威ではあるが　しかしこれによって、人類の絶滅の心配は皆無になった。

そしてその翌年、人類は、「異思の物共」平定完了宣言」をし、半恒久的な平和を手に入れたと浮かれ騒いだ。

当時の理花も涙を流して九娘と抱き合つて喜んだ。

今から三五年程前の事。

そしてこれまでの経緯を年表的にまとめると、こうなる。

現在から

42年前、　「植田盛雄」が人類で初めて、「結界域」を体得。

同年、「武神会議」が為され、それをもとに「武神衆計画」が発動。

40年前、　「武化大革命」が神州におこる。

39年前、　神州は自国内の「異思の物共」根絶宣言」をする。

同年、世界的に「武盛復古」が起こる。

35年前、世界規模で、「異思の物共」平定完了宣言」がなされる。

こうしてこの世界の歴史は、「武術」とその修練によって発生する、「結界域」を文明技術の根幹となす、いわゆる

“武導文明”時代

へと突入していくことになる……

“　「異思の物共」平定完了宣言」……あれから三五年か……微妙よね……振り返るにはあまりに短く、忘れるには余りに長い……”

時代の移り変わりをリアルタイムで見てきた理花なら、人類最初の武侠「植田盛雄」が自身の、そしてのちに全人類が少しの修練で出す事が出来るようになるこの「オーラみたいな物」を、恐れと共に、「結界域」と呼んだ気持ちがよくわかる。

“この「結界域」という「超能力」が一体何なのか、誰も、現在だによく分からない……”



からである。

これが人類にとつての希望の福音なのか、  
これが人類にとつての破滅への足音なのか。

「……まあ、少なくとも『異思の物共』なんてメじゃなくなつたていつのは大歓迎だけどさ…

…」

……そう長い物思いにふけりながら、目の前で修練を続けている九娘をぼんやり眺める理花。  
その後、一定の回数こなした九娘が「う……………」と息をついて修練を終える。

「……………」

と、九娘がぬれたタオルで軽く汗をぬぐうと、理花の方に振り返り、

いきなり「せいやあー！」の掛け声とともに理花に向かって飛びかかってきてベッドに押し倒した！

「どうわッ！…くーにや 方さん、いきなり何をッ！…うづうづ…！」

九娘は理花の胸をがっちり力こばさみ、理花の顔を、エルフ族にしては豊満な部類に入るその美巨乳の谷間につづめてがっちりホールド。

男だつたらうれしいのだろうが、彼女はノンケの女だ。あまりうれしくない。 はずなのだが。

しっとりした、柔らかい肌。しかも得に柔らかい部類に入る、乳房。

しかも九娘は汗をかいたばかりだから、なんか甘酸っぱいいい香りが ……

つていかんいかん。

持つてかれそんな意識を理花は何とか引き戻して、

「もがもガッ！…ぶハッ、ちょ、何なんですかいきなり、！」

「いいからじつとして。じつとしないとこのまま胴体を挟みつぶすわよ？」

「(ムシムシムシッ)うげげげッ！…わわ、わかりましたからやめやめッ……………」

「そっ……………素直な子はお姉さん、好きよ……………」

もうお姉さんって歳ではとっくの昔にないだろうに。

理花はその台詞がのど元まで出かかったが、生存本能が警笛を鳴らしたので何とかストップ。

「……………」

理花は抱きすくめられるがまま、じつとしている。

九娘は彼女を抱きしめたまま、そつと頭をなでたり、くんかんと彼女の髪に鼻先を埋めて彼女のにおいをかいだりしている。

いつもの習慣である。九娘は昔と変わらず、彼女をこつやって抱きしめてスキンシップを取ってくる。……………本当に昔と変わらずに。

理花は実の両親を失ったころ、こつしてもらつて何度うなされる悪夢から助けてくれたことだろう。

いまではもちろん照れくささ全開だから少々

いやかなり疎ましいのだが、斯様に強引な

九娘のおかげで彼女は今でも子供のようになつて抱きしめられている。

そして何より疎ましいのは、こつやて抱きしめられることが、彼女自身とても安堵をおぼえてしまうことだ。

いい歳こいて ……今いくつだ自分。

理花はそんな自分に苦笑する。

やがて九娘がポツリと漏らす。

「しかし悔しいわあ……私の大事な理花ちゃんが、あつて間もないこまつしゃくれた媚び媚びの猫耳族バーストの小娘にたぶらかされるなんて……」

？マオさんの事？

理花はちよつとあわてる。

「うていつ私がマオさんにたぶらかされたといつんです？」

「だって……ついばろつと漏らしたじゃない。八州役人になつた本当の理由……私じゃなくてマオちゃんに……」

“わたし、異思の物共”との戦争が終わつたら、パン屋を開きたいの……”なんて死亡フラグビンビンの台詞言つて私を心底ビビらせたくせに、いざ終わつたら急にお国の要請を受けて八州役人になつちやつたんだもん……調理師免許まで取つてあつたのに……

なんか“やー、なんかやつぱり性にあわないわ”なんて理花ちゃんらしくない半端な理由でパン屋になるの諦めたわね、つて思つたらそーいふ事だったのねえ……べつに、まあ、なんて青臭い(笑) “なんて笑わないの”……」

「青臭いつて言つてるじゃないですか……しかも(笑)までつけて……だからヤだったんですよ……」

理花はぶうつと頬を膨らませて九娘の胸の中でそっぽを向く。

「つぶぶ……」こめんなさい……でもあれよね、美○すずえ調にいつなら、マオちゃんッ……恐ろしい子ッ……”とどこかしら……」

九娘さん、よくわかりませんがこの世界、一応ファンタジーなんだからそういう伏字の入るセリフ言わない方がいいと思いますよ。いや、本当によく分からないから。

無言でそう突っ込みを入れる理花。

「だって人見知りの理花ちゃんがあつて間もない誰かにそういう事をぼろつと漏らすなんてありえないもの……あの子にはそういう才能があるかもしれないわね……絶対に誰かに弱いところを見せない、見せる必要がないほど強い人がつい本音とか弱音とかを思わず漏らしてしまうような雰囲気というか……私も気をつけなくっちゃ……」

「……」

言われてみればそうかも。私も迂闊だわ……精進しないと。

理花はそう自分を戒めた。

「つぶぶ、でもね理花ちゃん、私理花ちゃんのそついつところ大好きだわ……」

世界の残酷さを知って、そこに住む人たちの、怒りすら覚えるほどの脆弱さを知って、自分もその人たちと同類とわきまえた上でなお、自分の決意を優先するその心が……

本当にもう……どうしようもないほどに……」

そう言っただけはきゅ……と、わずかに娘を抱きしめる腕の力を強くする。

「そうね……理花ちゃんの秘密一つ知っちゃったから私もひとつ秘密にしたいことを話すわね

……」

そんな杓子定規にしないでいいですよ、と理花は言おうとしたけど、好奇心が勝った。

「……なんですいつたい？」

「私の使っている偽名の語源。前から理花ちゃん、くーにゃんって響きがいやなら別のにすりゃいいのになって思ってたんでしょ？」

「そりゃまあ……」

「あれはね……理花ちゃんの前に、今まで9人、娘や　娘同然に暮した子がかつていたことを、忘れないためよ……」

「」

そう……だったんだ……

かつていた。　過去形か……。

「私にはおなかを痛めて産んだ実の子が二人いたけど、結婚して間もなかった旦那もろとも『異思の物ども』に食われて死んだわ……」

その二人をはじめ9人……孤児院から引き取った子もいれば理花ちゃんのように戦場で拾った子もいたし、私が戦場で生き残るすべを教えた、いわば弟子という子も　みな私を置いて苦しまなくていい世界に行っちゃった……腹の立つことに、みな寿命で天寿を全うした子は一人もいなかった……一人もよ……異思の物共に食われたり疫病にやられたり……中には仲間の裏切りで殺されたり……一人くらい寿命で苦しまずに死んでくれる子がいてもいいと思わない？」

「……」

理花はこの台詞にどう答えていいかわからない。

たぶん、九娘さんより長く生きても分らない気がする……

「みな人として生まれたはずなのに、虫けらのように横死していつちゃった……どの子もそう、生きてれば何かを誰かに残せたはずなのに、生き残るのはそう、私の様にいざという時何も出来なかった無能女……」

その事実が悔しくて、私薄情者だから年齢を無駄にとることにだんだんとあの子たちを忘れてしまっただけで、忘れた事実すら忘れてしまっただけで、だから忘れないように偽名を九娘ってしたの。これなら名乗るたびに、思い出せるでしょ……

ほんと無理花ちゃんにも九娘って呼ばせたいとこだけど、さすがにね……まだ辛くて……」

「……」

理花は、おずおずと九娘さんの背中に手を回す。

この年で親に甘えるのはこっぱずかしいことこの上ないが、せめて後から、あの時、もっと素直に好意を表せばよかった」と悔いないように。

理花は偽名ではなく本名で、大切な母の名を呼ぶ。

「……大丈夫ですよ、花鈴さん。<sup>ファレイ</sup>私、貴女に十娘って偽名、名乗らせませんから……」

しかし彼女の母は寂しそうに首を振って、

「心配しなくてもいいわ……どっちにしろもう、そんな事になったら私、耐えきれそうにないから……」

エルフ族やマフイカ族など、一般に「長命種」と呼ばれる人種の中の死亡率で、最も高い死因は？

答えは簡単。病気でも怪我でもなく、ましてや百年千年生きれるから天寿でもなく、むしろ百年千年生きて、生きること疲れ果てた末の重度の鬱病による自殺。……なのである。

1236歳まで生きて大往生をしたエルフ族の人の事を話したが、実はそんな人は本当にまれなのである。

理花はその事実が悔しくて、せめて今だけでもそれを忘れてほしくて、

「ふわっ……」と背中 of 羽根も使って母を抱きしめる。

この世界の残酷さから守るように。

包むように優しく。

それでいてしっかりと離さぬように。

強く。

「……十娘って偽名、名乗らせませんから……」

もう一度、繰り返す。

無意味だとわかってはいるけども。

今だけは、本当に心安らいでほしくて。

母はちゅっちゅっとな娘の頭頂部にキスを繰り返して、

「うん……うん……ありがと……ほんとありがと……私の天使……」

彼女たちは部屋に備え付けられた古時計が、六時を知らせる鐘を鳴らすまで、そうしていた。

「やっとな尾をつかんだぞ……腐れ反逆者共め……」

「ハ……何やら逃亡者だといつのにやたら目立つ真似をしていると思ったら、奴らと接触するのが目的だったとは……どうやら奴らの持っている『鍵』を奪うのが目的の様です。」

「リーダー、ここはやはりメンツ云々を棚上げにして奴らと協力した方が……」

（じろり、と睨む。）

「うっ……す、すいません……」

「まったく。わきまえろよ、我々は、ブラックモンク黒衣僧だ。我々の仕事は誰にも知られてはいけないし、何よりあの偽善者どもに借りを作っては断じてならない……だな？」

「はい。申し訳、ありません……」

「だが……そうだな、ちょうどいい機会だ。人員をかき集められるだけ集めろ。ついでに事故として奴らも巻き添えになつてもらおう……」

「え……（セリフの内容を理解するのに時間がかかり、） ってまさか奴らもろとも標的を！？ いいいいいけません！ そりゃ奴らと我々は敵対してますが仮にも同じ国家机关の」

「だから、事故だと言っているだろっ？？ そう処理できるだけの人員を集めろ、と言っている。

それとも貴様、私に逆らう気かね？」

「いいいいえ滅相もございませぬ！ はい、わかりました、さっそく手配します！」

「フン……早くしろ……」

そしてその報せは、一人の男の許へも届いた。

ヒーストコネット心意六合拳の「拳」とは単に「こぶし」を意味するものではない

「拳」とは「裁定」「裁くこと」を意味する。即ち、善悪・正邪・曲直・遅速・勝敗を裁定するくせき矩尺（物差し）を意味するのである。

「フン……！ フン……！」

ズズ ……ン ……ズズ ……ン ……

……樹齡何百年にもなるうか。下手をすれば千年以上は永く生きているのかもしれない。

そう思わせるほど、巨大な、巨大な、大樹木。

その大木が、揺れに揺れている。

その原因が、地震とかではなく、一人の男の この大木に比べれば、本当にちっぽけなはずのこの男が、大木に掌打を打ち込んでいるせいで揺れている、と他の者が知ったら、にわかにはその事実を信じる事の出来る者はそうはいないだろう。

樹木の前で、馬歩で立ち、頭頂部を吊り上げるように意識しながら、顎を引き、力を抜いて、呼吸に合わせて、打ち込んでいる。

その掌打は、打ち込む際膝の力を抜いて体幹部を沈め、逆に腕は、まっすぐな軌道を取る

のではなく、すりあげるように斜め上へ斜め上へと打ち込む。

こうして掌打による攻撃の衝突時の衝撃は踵を通して地面へ逃がし、逆に掌打を当てる相手は上へ上へと崩す。

これは打撃の修練であると同時に、そう、崩しの修練でもある。

ちなみに、男は、結界域を出していない。

繰り返し言おう。男は、結界域を出していない。

心意六合拳は例えるなら、「戦車」の様に直進する「爆発」力である。そして、外面から隠れている装甲の内部には非常に「猾い、鋭い」ものを秘めている。

即ち。

手要狼 「狼」とは「狼」ではない。根という字は地中深く張っている根っこを表す。この字

の木偏を人の心を表す立心偏に変えれば「恨」になる。心の底に深くわだかまる感情であったものが「狼」である。狙ったら絶対に倒すという残忍さ、非情さであり、快（スピード）を要する。

次に心要毒 「毒」には「速い」「強い」という意味があるが、心意六合拳では「三毒」（心毒、手毒、眼毒）というものが要求される。

一言でいえば凶悪さ、非情さであり、瞬時の発想転換と手段変化が要求される。

そして最後に心毒 怒っている狸が獲物をとらえるときの気持ち（民間伝承では、狐の頭の上において、狐に指令を出す霊的な存在の事も狸といふ。この気分は、心意六合拳の特徴を深い所で表している）。

さらに。

これは獲物に声をたてさせずにしとめる心でもある。狸に操られる狐は最初に獲物の首筋を狙い、気管を損傷させてなき声をたてさせない。

ふと。

男が、この大木に掌打を打ちこむことをやめる。

どうやら一定の回数分打ち込んだのだろう。次の部位の鍛錬へと移る。

木を軽く両手で抱え、そして口の中で舌を上顎にピタリと付け、顎を引いて頸椎を固定してから、額の左右の部分、そして真ん中を、最初は軽く、そして徐々に強く木にぶつけていく。

「フン……フン……フン……フン……」

再び、揺れだす大木。

しかしなぜか、男はそんなに多く回数をこなしていないのに、その頭突きの鍛錬を止める。ややあつて。

男は瞼を閉じながら、背後に生じた気配に、声をかける。

「……闇姫レリエルか……」

修練の間、邪魔はするなと言っておいたはずだが……何事が起きたというのだ？」

男の背後で、闇姫と呼ばれた女が、

「申し訳いぎません。ですが大至急、お知らせしなければならぬ事が……」

「……言ってみる」

そして闇姫は手短に、こう報告した。

「……目標を捕捉ディファオしました、刃ナイフ様

……雷です。雷が、動き始めたそうです」

「……………」

ずっと閉じられていた瞼が、カツ！と開く。

刹那。

男は、結界域マナ領域を展開！

続けざま、その結界域マナ領域のこもった頭突きを、大木に叩き込む！

「シッイッイッイ！！！！」

その男の肺腑から、爆音が轟く。

転瞬。

鼓膜を劈つく物凄い轟音と共に、

なんとこの巨大な大木が信じられない事に、そう、信じられない事に

横に真っ二つに裂けて吹っ飛んだッ！！

高々と、宙を舞う、大木の筈なのに小枝の様に、宙を舞う、千切れた大木。

「……ッ……ッ……ッ……」

……驚愕に、声を詰まらせる、女。

「ほう……それはまことか、閻姫レリエルよ……」

男は、“結界域”を展開したまま、閻姫、と呼んだ女の方を振り向く。

「は……はい、どうやら纏州の中心部の様です。今までももの見事に消息を絶っていたようですが……どうやら事を起こすようです」

“結界域”を展開した男の、その威容に震えながらも、なんとか、ようよう、そう返事をする閻姫。

くくく、とこらえきれないように忍び笑いをする男。

「フ……下らん温いエモモラルに縛られてずいぶん腰を上げるのが遅かったが……そうかそうか、やっとやる気を起こしてくれたようだな……」

「それでは……力様、命令を」

男は、何が嬉しいのか、もはやこらえきれないと言わんばかりに爆笑。

「フ……フははははあ！！いいだろう、先兵を差し向けるッ！！丁重にもてなすが良い！！取り急ぎ我々も向かうとしようぞッ……！！」

同時に。

ズズ……ンンン……ッ！！！！

ほかの木々をも巻き込んで、はるか遠くまで吹っ飛んだ大木が、とっさには立ってられないほどの地響きを伴って、地面に倒れこむ音がする。

ギヤァ、ギヤァ、とあたり一面の木々から鳥たちが悲鳴をあげて、一斉に羽ばたいて逃げ惑った。

こうして、破滅は、転がりだした。

「……これはっ……ねえ九娘さん言っていい！？言っていい？！美○しんぼみたいに長ったらしくこのおいしさを評価してもいい！？」

「だめよマオさん、それはさすがに。これ一応ファンタジーなんだから。でも『ンまあああ〜』……いッ！！味に目覚めたッ！！』って言うのならOKかも」

多分いやー二〇パーセントだめだと思います、お二方。っーかなに一人揃って異次元の言葉しゃべっているんですか。こっちの世界の言葉をしゃべってくださいよ全く。似た者同士で意気投合したのは大変結構なんです。

ついてけない理花は、目を輝かせて料理を頼張るレラに、『どう、おいしいでしょ』と声をかける。レラは『うん……おいしい……ありがとっ……』と感謝の言葉を口にする。

現在七時三十分。場所は九娘の言っていた穴場のお店、ろどりげす「露怒李解巢飯店」。



……名前はもつとつから突っ込んでいいのやらといった感じだが、内装はきれいで従業員は普通、肝心の料理は「繁華街の『ツクさん』たちがお店を終えてからくるお店」だけあって絶品のひとこと。……これで名前さえあれでなければ。されど名付け主のセンスが最悪なんじゃなくてわざとこんなドン引きの名前を付けているのかもしれないが。

この店のメインターゲットが「仕事終えた後の料理人」だけあって、今現在客は彼女たちだけだ。

しかし。

九娘が「変ねえ……」と漏らす。

「何がです？」と理花。

「この時間、少ないとはいえもうちょっと他にお客がいるはずなんだけど……」

「ふっん。」

と、理花はほかのテーブルを見渡す。

そこに、すさまじい違和感があった。

いない。……彼女達以外に、客はおるか、この店の従業員並びにカウンターの向こうにいたはずの『ツクさん』まで、いつの間にかいなくなっていた。

刹那

「！」

いきなりレラが、テーブルを思いっきりこちらに向かって突き飛ばしてきた！

「ぎゃあー！」

「ひゃあー！」

たまらずテーブルの端を腹に食らい、椅子ごとひっくり返る理花と九娘。当然テーブルの上にあった料理と皿は床に落ち、けたたましい音を立てて割れていく。

と。

そんな彼女たちの目の前を、何か紐のようなものが高速で通り過ぎて行った！

ちよつとそう　二人が普通に椅子に座っていたら、大体首あたりの位置

「……」

理花と九娘は素早く頭のスイッチを戦闘モードに切り替える。後転受け身で座っていた椅子から離脱。そして理花は素早くバッグから飛羽のもとになる式神人形をとりだし、“結界域”を注入しつと叫ぶ。

「飛羽ー！！」

即座に理花の式神は起動。瞬時に彼女らと同じぐらいの大きさになると同時に、両の羽根をまるで鋼の様に鋼質化。その鋼質化した羽で、彼女たち四人を覆う。

次の瞬間、無数の弾丸が彼女達の方に向かって飛来してきたが、全部飛羽の高質化した羽にと

はじかれて終わる。

危なかった。“結界域”を展開する前だったから、直撃してたら流石に死んでたわ。

理花は安堵する。

理花と九娘は同時に、“結界域”を展開しながら、

「<sup>グッジョ</sup>GJ美香ちゃんとその式神ちゃん！って言うかいきなり急転直下ね！！」

九娘の言う通り。

この憩いの場はいきなり戦場と化した。

状況を確認。理花は思考を高速回転。

飛んできた紐 あれはたしか『グレイプニル』だった。

グレイプニル 一見黄緑色の、何やら不規則に糸が絡み合っていた紐だが、これには“結界域”を中和する効果があり、よく犯罪を犯した武侠の風上にも置けないやつを捕縛するために開発された、どの国でも警察官ならだれでも持っている標準装備だ。もちろん理花や九娘も持っている。

“結界域”を中和すると言っても、これで捕縛されたものの方が使ったものより、“結界域”が強ければただ“結界域”の威力が半減されるだけで、万能ではない。つまり欠点は「効果のほどは結局使い手次第」といつ点だ。故にその欠点をカバーするために、多人数で仕掛けるのが一般的な使い方だ。

“しかし あの型のグレイプニルはもしか……！！”

彼女の最悪の予想を裏付けるように、この店のドアから、裏口から、しまいには派手に窓をぶち破つてまで、大人数の 理花や九娘にとってはどんな時でも会いたくないやつらが、どこかと侵入してきた。

「ゲッ！？……黒衣僧！？」

と九娘がうめく。九娘がうめかなかつたら、理花がうめいていた所だ。

理花は下唇をかむ。

最悪だ。奴らの目的が何なのかはわからないが、ここまで派手な事をした以上、どんなことをしてでも最悪な結果になることは確実だ……！

ブラックモンク  
黒衣僧。

黒の皮靴に黒のスーツの上下に黒のネクタイ。まるきり葬式に行くときの格好だ。

サングラスをかけていて、皆の表情が読み取れない。

頭部は永久脱毛しており、額には、サイコロの六と同じように点々が六つ付いている。これは電子機器に接続するための彼ら式の外接デバイスだ。

ここに突入してきた者は、みなそういつ格好をしていた。

もちろん、全員“結界域”は展開済みだ。

気味悪い、ドドメ色の陽炎がそこらじゅうに立ち上っている。

彼らは理花と九娘と同じ、司法機関の工口たちである。

三五年前、「異思の物共」平定完了宣言の後、とくに多大な功績をあげた「ハイモクアーツ小林拳」一門を中心に「戦後、国家全体の治安を維持するために作られた、超法規治安維持部隊」である。

その活躍は目覚ましく、全武侠の憧れとして、また市民にとっては安全の代名詞として、ある意味絶対権力の象徴として崇められていた。

そう。……絶対権力。

賢明な読者諸兄におかれましては、こんな言葉を知っていることと思われる。

即ち

『絶対権力というものは絶対腐敗する。』

彼らもまた、この言葉通り、腐敗した。

英雄とあがめられ、思いあがり、暴君と化すのに、刺して時間はかからなかった。

正義の味方から、金と権力さえあれば何をしても許されると思いがった金持ち共の走狗へありきたりな賄賂から犯罪者との癒着、ほとんど暴力団と変わらない。否、権力というすごい背景があるだけに数倍たちの悪い所業の数々、とにかくありきたりな悪事を繰り返して、たまりかねた市民と何より在野の武侠達の蜂起により、一時は奴らは壊滅寸前までいった。

そのとき理花と九娘もその蜂起に参加した。当然である。彼女らはどれだけこいつらに失望したか。

その後、彼らは降参して悔い改めると言ったが、もちろんみな信用は全然してはいない。ちなみに。

実は八州役人は、今じゃ屑の代名詞となったこの黒衣僧ブラックモンクのカウンターの存在として、“小林拳

”以外の門派の武侠達によって作られた存在なのだ。理花がパン屋になるのをあきらめて八州役人になったのも、彼らの所業が、あまりに目に余った、というもある。

一応国家機関に属してはいるものの、半ば以上、いわば『民営警察』と言ってもいい存在なのだ、八州役人とは。

まあそれはともかく  
閑話休題。

そして大方の予想通り、黒衣僧たちの体制は変わらなかった。……そういつスポンサーには事欠かなかったからだ。

もちろん表向き、もとのいわゆる超法規治安維持部隊に戻ってくれたように見える。しかし見えないところではしっかりと金と権力さえあれば何をしてもいいと思いがった金持ちの走狗にあいも変わらずなっており、ただ以前は堂々と悪事をしたのが、今はこそそとするの

に変わったただけだ。もはや今では黒衣僧は「最悪」の代名詞だ。

かつては情け深い好漢侠客の集まりだった黒衣僧の、昔日の姿をしのぶ事すら空しい。そういう経緯があるだけに、同じ国家機関とはいえ、八州役人と彼らとの仲は最悪だ。それもそうだろう。

台所から出てきた黒衣僧の一人が、この店の従業員全員と思われる数人の遺体を、グレイプニルで首のあたりをひとまとめにして引きずってきたのを理花と九娘が目当たりにした日は。

当然グレイプニルでくびられたもの全員、真っ青な色になってつつ血で顔が膨れ上がって二目と見れない姿になって物言わぬ肉塊になっている。

さっきまで労働にいそしんでいた、おそらくは何の罪も無いものが

「ひとついいかしら？」

ギリと軋らせる齒の隙間から絞り出すように、理花は怒気を漏らす。

「仮にも、落ちぶれたとはいえ、法を守るものが、一般市民の店舗に押し入って、惨殺して、あなたたち、納得のいく説明をしてくれるんでしょうね……。」

「まさか。」

そんな納得のいく理由でこいつら司法機関の面汚し共は動くわけない。

こいつらは最早、何時だって、

この黒衣僧たちのリーダー格らしき男が口を開く。

「説明をする義務はない。ただ秩序を守るため、この場にいる者全員に、死んでもらうという事だけは宣告しよう。」

「へえ、私たちが何者かわかってそのなめたセリフほざいているの？」

おそらくは理花と九娘の身元は確認しているのだろう、確認してる上で言っているのだろう。

「それに、八州役人の私たちならともかく、この人ら（と言ってマオさんとレラちゃんを指す）は一般ピーポーにしか見えないけど？」と、九娘。

にやり、と最悪の化身のようなリーダー格らしき男が口をゆがませる。

「秩序を守るため、事故が起きた。あくまで事故だ。それを見届けた証人が、ほれ、こんなにもいる。」

“手前勝手なルールを作って悦に入るクソに尻尾を振ることしか考えてない。”

ほんとにこのなめた真似をして腐ったことに対する弁解も説明もしないな。

理花は怒りで視界が沸騰しそうになるのを戦士としての冷静さで抑えながら、頭の回転をさらに速める。

「まあ、今の状況に大体想像がついたわ。」

おそらく、マオさんとレラちゃんは、何か悪いことをしてる、いわゆる黒幕ブラックサといわれるウジ虫にとつて都合の悪いことを知ってしまったんだろう。そしてその二人を消すために黒衣僧をけしかけた。

……そして偶然知り合いになってた私たち八州役人という目の上のたんこぶを、ちょうどいい機会とばかりに消すことにして、こんな大人数を募ったんだろう。 勤勉チンケンだ事……」

そう理花はあたりを付ける。

確かに、これだけの人数はいくら九娘と理花がかなりの猛者だとしてもきついものがあるだろう。しかも腕は立つようだがしかし一般人でしかない者二人を守りながらだと、ここから生き残るのはかなり難しい。

理花は内心顔をしかめる。どうやってこの急場を凌いだ物か。

九娘が、

「……とりあえずマオさん、後で事情を説明してくださいね、私たちも素性を話すから。」  
と、いつつマオとレラの方を振り返りつつそういつ。

そこで理花と九娘は度肝を抜かれた。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!」

驚愕。

マオが、いきなり、大爆笑し始めた。

あまりにピンチな状況になって、気がふれた わけではない。それにしては、余裕がある。

……黒衣僧たちのみならず、理花と九娘たちさえ、何か不吉なものを感じずにはいられないほどに。

そう。なんとというか、その例えるなら、たとえゴキ虫がいくら集まってもゾウに勝てると思っているのか、と言わんばかりのような……

「あーはははおかしい……」

いいわあその相変わらずの下素野朗っぷりは……虐殺するのに何のためらいも覚える必要がないもの……むしろ爽快だわ……あなたたちが絶望と断末魔にまみれながらくたばるのかと思つと、今からもう濡れちやいそつよ……」

「マオ、それ下品」

そう窘めるレラの方は無表情。

そしてマオは八州役人の二人にこう言った。

「ああ、私達の方こそ後でちゃんと事情を説明するから。……逃げないでね。」



は理花の馬幫での戦闘で知ってくれたと思う。

これをカバーするために理花とかは弾丸に毒をぬったり工夫してはいるが、基本的に今の時代、銃などの飛び道具はいまや牽制<sup>ジャブ</sup>くらいにしか使えない。

使えないはずではあるが。

なのに

“あッ…相手も“結界域”を展開してたのよッ……なのにッ…貫通ッ!? しかも数人まとめてッ?! ありえない!?! どんだけ……”

どんだけの量の“結界域”を弾丸にこめられるといつのッ!?!?・

悔しいが、私では無理だ。そんな芸当。九娘さんでも!・

理花は内心驚嘆する。

マオが取り出した銃は、二挺。

ものすごい大きさの、オートマグナムが二つ。……それも異様な形状の。

銃の両側を挟むように、えんおうえつ(二日月)を上下両端を互い違いに交差するように組み合したような形状の、刃の付いた古武器(がそれぞれ2つ付いており、柄の部分は銃把と一体化、刃の部分は銃口の両脇にそれぞれボルトで固定されている。

それだけでも理花の“牙狩り<sup>フングハイヤー</sup>”よりトチ狂っているが、さらにすごいのは過剰なまでに鳳凰

の様な幻鳥の彫刻が刃にも銃身にも施されており、さらにさらにすごいのは赤、オレンジなどの目の覚めるような派手な色でカラーリングされていることだ。

なんと一つ、傾いた銃<sup>かぶ</sup>。

そして遅ればせながら、理花と九娘は気づく。

白炎、というものを、ご存じだろうか。

これは、とにかく高温になりすぎて真っ白にすら見える、とても熱い炎の事だ。

マオの体から、最早白炎としか言いようのない“結界域”が、ものすごい勢いで吹き出しているのである!?!・

青炎、というものを、ご存じだろうか。

これも、とにかく高温になりすぎて色が真っ青になった炎の事だ。

レラの体から、もはや青炎としか言いようのない“結界域”が、すさまじい勢いで噴き出しているのである!?!・

この場にいる、レラとマオ以外の者の、膝の震えが、止まらない。

“カッ格が違っ……”ランクニランクも格が違っッ!?!・

この場にいる誰もが、二人の“結界域”に恐れおののいて身をすくませていた。はずだった。

「ッハアアアッ!?!・」

と気合一闪、九娘は自前の得物である鎖付き鉄扇を『ジャララアアアアアアアッ!』と素早く投擲、理花と同じく呆けていた黒衣僧数人の首を跳ね飛ばす!

理花より先に動けるあたり、やはり九娘は理花の上司である。

先刻、『結界域』は自身の体から離れるほど効果が薄れる、といった。ならば離さなければいい。

ゆえに、九娘のように、距離は銃よりも限られてはいるが、鎖付きの武器を使うものは割と多い。それでも鎖でつながっているとはいえ、多少惜しい事に拡散してしまうのだが。

九娘の場合、この鎖付き鉄扇が二つ。

右手に持っている、吠える竜を彫り込んだ鎖付き鉄扇の名は『阿』。

左手に持っている、唸る虎を彫り込んだ鎖付き鉄扇の名は『云』。

どちらも結構大きく、扇の端に鋭い刃がついてあり、根元に鎖が付いている。

楯にも矛にも、距離が限られてはいるが飛び道具にもなる、九娘自慢の武器。

「クッ……飛羽!」

理花も呆けてはいられない。

理花は自分の式神に命令を飛ばすと同時に、『牙狩り』<sup>マングリヤ</sup>を抜こうと腰に手を伸ばしぬつといきなり眼前をふさいだものに拳動を制された。

とたん、何故か鼻孔に突き刺さる悪臭。

“え?何これ、……鉄柱?”

そう。

それは一見鉄柱に見えた。

鍛えあげられた鉄で出来た、実に頑丈そうな柱。とはいえ柱にしては少し細い。

しかしよく見ればそれは、

“いや違っっ……これは……”

!槍!?”

それが鉄柱に見えたのは、それがあまりに規格外のサイズだったからだ。

これが鉄柱では無く槍と気づいたのは、ただの鉄柱にしてはあまりにも臍物臭がきつかったからだ。

そして、鉄柱と見紛わんばかりに大きい柄の先には、このごつい柄にふさわしい…斧のごとく分厚く、剣並みに長い槍の切っ先が、赤い穂を従えてそそり立っている。

そしてこのごつい槍……といったには余りに物騒な代物の持ち主は……

「……レ……レラちゃん……」

なんとレラであった。

ゴシック・ロータの格好をした、絶世の美少女が、どんな力自慢でも持ちあげることが困難そうな槍を、片手で持っている様は……あまりにシールドだった。

“アか二人とも、歌舞いた銃といいこのごつい槍といい、どこに隠し持ってたのお!”



そして理花の方をちら、と振り返り、言つのだ。あの美声で。

「大丈夫。すぐ終わるから。あなたの手を煩わすことじゃ、ない……」  
ものすごいことを。

そういつとつかつかと無造作に黒衣僧たちに歩み寄り、

「ザザッ!」と黒衣僧たちは思い思いの武器を構え、

まるで小枝の様にレラは槍を軽々と振り上げ、

（黒衣僧の中で飛び道具を持っているものは引き金を引こうとし、接近戦武器を持っているものは間を詰めようとし、）

………  
するより早く。

レラは音速すら超えんばかりに槍をブン回し、

黒衣僧十数人を右上から左下へ袈裟切りに真つ二つにした!!

そして振りぬいた後、やっとな音が

轟つ!と吠えたてた時すでに、

黒衣僧十数人の上半身が斜めの形で下半身に別れを告げていた。

下半身達に別れを告げた上半身たちは、まるで紙のように空中でくるくるくると楽しそうに血飛沫や臓物をまき散らしながら床に行儀悪く寝そべっていく。

………このありとあらゆる意味であり得ない光景を目の当たりにし、理花は  
「ッ………!」と絶句するしか出来ない。

「ま、ま ああああッ!」と訳の分からない奇声をあげている九娘に突っ込みを入れる  
事すら出来ないほどだ。

たしかに、「結界域」を展開すれば、人は超人になれる。筋力だって倍増する。だがそれにだつ  
て限度というものがあるつ。

こんな幼子が、こんな冗談のようなサイズの武器を小枝の様に振り回すなんて、武侠の常識か  
らしてもあり得ない。

百歩譲って、修練で操れるようになったとでもしよう。これだけの「結界域」を展開できるの  
であれば、そんな真似ができてもおかしくはない。

問題はそこである。理花のあいた口がふさがらない。

「私たちのような八州役人になるほどの武侠よりも格が上だなんて……何者……なのものなの  
ッ?」

理花たちが恐れおののいている間にも、マオとレラは黒衣僧たちを蹂躪していった。

蹂躪。そう。

最早これは戦闘ではなく、蹂躪としか呼べないほど、一方的だった。

レラが片手でこともなげに槍を振り回すたび、大気がものすごい断末魔をあげ、そのたびに黒衣僧たちがぎぎれて吹っ飛び、元形をとどめることなく、死体ですらなく、肉塊になっていく。あはは。もう笑っしかない。

理花の頬がひきつった。

大気のあげた断末魔の名残が、血煙りをはらんで、いちいち二人の髪や服の裾をなびかせていく。槍の穂先に当たったものは当然ながら、柄の部分にあたった者も一様になめらかな切断面を見せて吹き飛んでいく。たとえ、柄の部分は「鈍器」であっても、こつも高速で振り回せば、それは「打撃」ではなく「斬撃」になるだろう。

マオの放ったマグナムの弾は黒衣僧たちの「結果域」をたやすく引き裂き、数人まとめて「田楽刺し」にしていく。

いまや逆に時代遅れになりつつある銃が、かつての猛威を取り戻したかのようだ。中にはすばやい黒衣僧がマグナムの弾をかくぐってマオに接近する。

確かに、ものすごい量の「結果域」で弾の「威力」は格段に上がってはいるが、しかし「スピード」自体は上がってない。逆にこちらは「結果域」で弾丸すら見きれほど動体視力も上がるから、そうすることも容易に可能だろう。

しかし理花は、

“ああそれをするなら、さっさと逃げればいいのに……”と思う。

相手は格が違つと言つた。

マオの腕が陽炎のようにぶれた後、スッピッと一音か聞こえる。その直後、

マオに肉薄した黒衣僧は突然小さくはらばらの細切れになって飛び散る。

“ああ、あの銃の、えんおうえつの部分で切られたんだ……”

と理花は漠然と理解する。漠然と、とあいまに言つのは、えんおうえつの部分には血が一滴も付いてないからだ。きつと返り血が付着する間もないほど振り回したからだだろう。

かくして、蹂躪はものの数秒で完了した。

槍が大気にすら悲鳴を上げさせ、

実に歌舞いた銃がやすっぽい歌をばばんと歌つたび、

確実に二桁の黒衣僧が安らかな思い出になっていく。

そして一番臆病なやつが　ある意味見どころがあるかもしれないがあの人相手ではきつと無意味だ　股間を自分の体液でぬらしながら「ひっひひひひひひひひひッ……」と

悲鳴を上げ逃走に入った背中を、無造作に振ったレラの槍がなでて、股間どころか全身どこからどこまでが体液なのかわかんない状態になった時、この蹂躪は完了。

ああ、本当に無意味だった。

理花と九娘は嘆息。

物の数秒。

ここまでくればもはや蹂躪ですらない。

ただの草刈りだ。

黒衣僧たちは腐った根性の持ち主ばかりとはいえ、鍛え上げられた武侠のはずだ。  
そんな武闘派集団の奴らが。

抵抗どころか、動く事すら出来ない雑草扱い。

「ああ、今地面がぬかるんでるから、さぞこいつらの『根っこ』を引っかく抜き易かったろうな……」とか理花は混乱しすぎて訳の分からない事を考えてしまう。

「っていつかレラ　　っていつのはもういいか　　雷<sup>レイ</sup>ってばひどーい……こいつらやったの殆ど雷<sup>レイ</sup>じ

やなーい！少しは私の分も残しておいてくれないじゃないの！」

とぷりぷり怒るマオ。しかしレラ　　否、本名は雷<sup>レイ</sup>とこいつらしい　　が涼しい顔で、

「いいじゃない。(と、ちら、と向かって左側の、へばりついた肉塊と血痕以外何も無いはずの壁に視線を向け、)　　食い出の多少ありそうなやつが残ってるんだし。」

という。マオもつられて視線を向けると、なぜか、「あ、ほんとだわ」といつ。

何を訳の分からないことを言っているんだろこいつら、と理花と九娘は一瞬思ったが、一瞬後、ピンときた。

「！まさか新手が　　！？」

当たり。

その一瞬後、実に鼓膜に優しくない破壊音が響くとともに、壁が外側から粉碎され、

何かが雷<sup>レイ</sup>に向かって飛んでくる！

しかし事前に察知していた雷<sup>レイ</sup>は事も無げにひょいと避ける。

理花は見た。

「あれは　　多節鞭<sup>タセツベン</sup>！？」

鞭、といっても皆が思うような皮とか紐を束ねて作ったやつとかではない。だいたい手首から中指の先ぐらいの長さの細長い鉄の棒を、複雑に編んだ鉄の輪でつないで作ったものだ。だから威力は皮や紐で作ったものとは段違いだ。

そしてその多節鞭の一撃で空いたドツ穴から二人の男がはいってきた。

「ふはああアッ！不意を打ったつもりだったが勘づくとはな！さすがだな　　八<sup>エニテイアルティマ</sup>極<sup>マ</sup>」の

雷<sup>レイ</sup>！

「フヘヘヘヘ！兄ジャア、八極はくれてやるから、崩拳<sup>マオ</sup>の猫<sup>ネコ</sup>はおでにやらせてくれよオオオオオ！」

一人は黒の上下のスーツに黒のネクタイに黒の皮靴、ここまでではほかの黒衣僧と変わらない。

しかしそいつはふざけたことに、型のサングラスをして、赤、青、黄のどぎつい三色に染めた髪をオールバックにしていた。貼り付けたような、瞬間的に見る者をいら立たせる様な笑顔を浮かべている。背は高く、痩せていて細長い。右手に多節鞭を握り、左手にトカレフを握っていた。理花は瞬間的に、「こいつは右手の多節鞭で相手の動きを封じ込めてから近づき、左手のトカレフで撃ち殺す、という戦法をとってくるだろう」とあたりを付けた。

今の時代、銃は逆に時代遅れになりつつある、といったが、それでも銃のいいところはいまだに評価されている点がある。

それは「引き金を引けばだれだって一律にダメージを与える事が出来る」という点だ。遠距離ならともかく、至近距離で発砲すれば、「結界域」はほとんど拡散せず残る。故に弾はかつての猛威を振るえるのだ。近距離限定だが。

しかしその近距離では、引き金を引くより、刃物とかで切りつける方が速いのはあるが。その点でも銃器は時代遅れになりつつある。

しかしきつとこいつは打撃力は弱そうだから、それをカバーするためにこの武装を選んだだろう。そう理花はあたりを付けた。

さらに、「結界域」というものは弾丸、炎、毒ガスありとあらゆる脅威を防ぐが、唯一防げないモノがある。

衝撃、である。これだけはなぜか防げない。

至近距離から頭部に向けて弾丸が当たれば、たとえ弾が「結界域」に防がれても、衝撃で相手は脳しんとつとかを起こしたりする。おそらくこの黒衣僧はそれを狙っているのだろう。

そう九娘はあたりを付ける。

もう一人は、こいつとは対照的に筋肉ではちきれんばかりであり、黒衣僧の制服である黒の上下を、ちょっと動くだけで破いてしまっそうだ。ノーネクタイで、だらしなくあけたシャツから分厚い胸板がのぞいている。

しかし顔は一目見ただけで「頭悪そう」といつ面構えをしており、こつこつと角ばった節々のある顔面に、黄色く濁った白眼に、だらしない笑みにゆがめた口から乱くい歯がのぞいている。こつちは普通に剃髪しており、それが逆にすごい迫力となっている。

基本的に素手だ。きつと見た目通りの力自慢だろう。

“ ああ、たぶん私と九娘さんは知っている、こいつらを。

「大蛇の張」と「鉄塊の古」だ。

この凸凹コンビは、黒衣僧の中でも、時に残虐で陰参ともつぱらの噂で……

なるほど噂通り、かなりの濃度の「結界域」だ。私や九娘さんでもこいつらをやる、としたらかなり骨が折れそうだ……” と、理花はほそをかむ。

しかしそれよりも、

この二人の言ったセリフが気になる。理花は思考を再び高速回転。

「エディカルレイマ 八 極 の雷……えいていあるていまって何かしら？ 武術の門派か何かかな？ しかしそれ

よりも……

『崩拳の猫』！？ 崩拳の猫』って……もしかしてあの？！』

『そんな？！ 崩拳の猫』って数年前に死んだと……！』

理花が思わず叫んだセリフに、マオはふふんとニヒルな笑みを漏らす。

イデアマインド 形意拳、という門派がある。

その風格は豪快にして剛直、そして破壊力だけを言うなら、なんと全門派一、と畏れられている。

この門派は「フックスセレンツ 五行拳」という五つの基本技と、「ビーストドウェル 十二形拳」という十二個の攻防技術、合わせてたった17の技法でだいたい修行体系を完成させた稀有な門派である。

たった17の技法で完成させていると言っても楽な門派ではない。むしろほかの門派と比べて大成するのが難しい門派だ。

形意、という名が表すとおり特に形と姿勢につるさい。師から伝承される際、この点の厳しさに大抵のものが音を上げる、といえどただけつるさいか理解してもらえと思う。

しかし厳しい門派ではあるが、決して不完全な門派ではない。むしろ「高級武術」とさえいわれている。

『五行拳』も『十二形拳』も動作が短く覚えやすく、練習も面倒ではない。しかも、『十二形拳』もすべてをマスターする必要がなく、自分が得意とするものを2、3種練習しておけばいい。

『形意拳』は一見するとシンプルに、シンプルすぎだと感じられる学習内容の中に、武術に必要なエッセンスがほぼ完全に内包されている。このことが、高級武術と歌われているのである。要するに、武術に必要なパワーとテクニックの2点をたった17の技法で身につけてしまえるのだ。

ゆえに、この門派から輩出される、いわゆる「達人」と言われる者は他門派に比べて極端に少ないが、しかし輩出された「形意拳の達人」と言うものは他門派からすら異論が出ないほど恐れ敬われている。

その恐れ敬われている形意拳の達人の中でも特に有名なのが、この

「崩拳の猫」こと「郭深猫」だ。

郭深猫は賞金稼ぎ、というよりも冒険者といった生活を送ったと言われており、ある街で悪名高い悪徳武俠を一撃で始末したり、幻とされていたレアものの「異思の物共」である「ゴールデンタイラント」を一撃で仕留めたり、人里離れた村を苦しめていた馬賊どもを、なんとたった一人で、しかも全員ほぼ素手の一撃で葬ったという。

素手の一撃。

そう。郭深猫は形意拳の基本技である五行拳のうち、崩拳（要するに前進しながらの中段突き）ひとつで、いかなる敵も、たった一撃で葬ってきたのである。

その工夫（<sup>クンフ</sup>武術家としての格の高さ）の高さを人々は

「半歩崩拳あまなく天下を貫き穿つ」とさえ称賛した。

弱きを助け強きをくじく、を地で行く性分から多くの人に、「真の武俠」と敬われていた。

しかし数年前

杭州にある風光明媚な環境都市 晴京の住民なんと一九六七人を惨殺、さらに駆け付けた警察官ならびに自衛軍をたった一人で全滅にまで追い込んだといふ。（！）

しかしさすがに消耗したのだろう、後から（案の定）おとり刀で駆け付け黒衣僧たちに始末されたのだといふ。

この事件の事はよく覚えている。

『異思の物共』完全滅殺宣言』が為されて以降、大人しくなつたはずの『異思の物共』が急に活発に暴れだしたり、主に10歳にも満たない子供を中心に原因不明の熱病がはやり、中には死亡してしまう子供が出たり、特に理由も無くやたらと全国で犯罪が前年度の3倍あたりも多く多発したり、12月なのに真夏並みの暑さになったり、逆に8月なのに雪が降るといった異常気象が起こったりと、世界規模でやたら不穏な事が立て続けに続いていたその翌年にとどめとばかりに起こったことだから、忘れたくても忘れられない。

（ちなみにこの「晴京大虐殺」の後、何故かそれらの世界規模の不穏な異変は急になりをひそめていったが。）

その際もちろん八州役人も出勤しようとしたが、「これは黒衣僧の縄張りだ」と黒衣僧どもに妨害された。それどころではないといつのに。それで半ば以上強引に理花を含め仲間数人で現場に駆け付けた時にはすでに事は住んでいた。

これがたった一人で起こした惨事なのか。「風光明媚」とはほど遠い廃墟と化した青洲に、理花と仲間数人は絶句したものだ。

報道関係に対する規制と情報操作で大規模の地震災害、と一般市民にはそう伝え、生き残った青洲の市民には催眠、洗脳でムリやり大規模の地震、と事実をすり替えた。それがどれだけ大変だったかもう言つまでも無い。

しかし八州役人たちが郭深猫の死体を確認してないと、執拗に黒衣僧たちが公明せず、「事件は我々が解決した」の一点張りでやたら隠ぺいに走つたので、「通」の人間は、

「郭深猫は何かの陰謀に巻き込まれて黒衣僧とかに謀殺されたんだ、でなければ郭深猫があんなことをするはずがない」と一様に思っていた。

だから八州役人の仲間のひとりが暇さえあれば別件でいまだにこの事件の真相を探っていた

りする。しかし当然黒衣僧どもの妨害のせいで調査は遅々として進んでない。

しかし理花自身も、そしてたぶんいや確実に九娘も忘れていた。今の今まで、事件の事は覚えていても、その主な容疑者である郭深猫の名を。

だつてそうだろう。

たった一人の人間が、あんな惨状を

一九六八人死亡。

しでかすなんて忌まわしすぎて。

その意図全滅した自衛軍の殉職者を合わせれば一体何人になつ……

黒衣僧どものセリフを鵜呑みにした訳では決してないがそれでも

「じつがおかしかったわあ。黒衣僧の奴ら、今の今まで私の尻尾をつかめなかったんだもん、あれ、私って自分が思うほど重要人物じゃない、私ってただの自惚れ屋？」と恥ずかしく思つてたほどだったわ。

ま、今までなるべく素顔がばれないように心掛けてきたかいがあつたとポジティブにとらえておきましようか。」

益体も無い理花の回想はマオのくすくす苦笑いで打ち切られた。

理花は経験上、先入観を持つて物事を見ると痛い目にあつといつ事を知っている。

だから努めて、物事を客観的に見るよう心掛けてきたが、それでも甘かったようだ。

“だつて。

あの……あの郭深猫が。

こんなかわいい女の子だったなんて。

どうやら「強くて有名な武侠」と聞いてつい「こいつ男」を連想してしまったようだ……”

呆然とする理花と九娘をよそに「ヒヘ」と「大蛇の張」が見た目通りの笑い方をする。

「そりゃあね、崩拳のマオの顔を確認できたのは我々黒衣僧だけだもんなあ、たちが悪いよね、

“有名で素性は知れても、素顔は知れない」って。

邪魔くさい噂が噂を読んで、どれが真実なのか特定できなくなる。

まさかこんなそるいい女だったとはね。こんな設定、一体どの三文漫画だったの。現実には小説より奇なりとはよういつたもんだわ。

ま、そこらへんあんたはさすがの武侠だよ。我々黒衣僧がこつも後れを取るとはね。

（それから、お仲間だった残骸がそこかしこに飛び散っているこの惨状を見渡し。）

しっかしお上もアホダヨネ。あんたほどのレベルの武侠相手に数で押したつて惨殺死体が転がるだけだつて数年前の大捕り物でわかつたと思つてただけどなあ。

雑魚任せにせずさつさと俺らにまかしゃあいいのによおう」

そう言つて、アップー系の麻薬をキメタ奴みたいにギャハハハハとカン高く笑う。

それから左手に持っているトカレフを突き付け、

「……んで？今頃になつてあほみたいにノコノコ娑婆に出てきたのはなんでだ？あんたはどか

くれんぼがつめえいけずな女なら、縁側で日向ぼっこが似合う賞味期限切れのくたばり損な  
いになるまで鬼さん役の俺らから逃げ回れたはずだが?」

ふふ、と嘲りと媚態の混ざった笑みを漏らすマオ。

「茶番ね。思わせぶりの口調はやめなさいよいけすかない。」

何で? 決まっているじゃない。そして隣にいるレラ　もとい雷と名乗る女の子を親指で指  
して)

雷が、決断したからよ。

スベテ  
世界を、滅ぼすことを。」

雷は、無表情。

その様子に理花は、少し自分の頬がひきつるのを感じた。

世界を滅ぼすって。

…… なんか、思春期で無駄にダウンナーになった14が15あたりのガキが、一度は考えそうな  
馬鹿なことを。滅ぼしてどつするのかと。リアルでそうしたら結構自分も困るだろうに。」

本来なら嘔き出すところだが、しかし本当の　文字通り桁違いの大量虐殺者の口からその  
台詞が出たのと、何より黒衣僧達の顔が「スッ……」と引き締まったのとで理花は笑つに笑え  
なくなつた。

「めえら…… 本気か?」

“ …… あれ。何で口調がマジなの張さんってば。ここは笑つとこでしょうに”

理花は自分の顔が間抜けっぽくひきつるのを感じる。

「本気じゃなきゃわざわざ娑婆に出てくると思う?」

マオも、微笑んではいるが目は本気だ。

“ え? え? ”

ついてけないんですが

おいてけぼりの理花と九娘をよそに、話はどんどん進む。

マオは持っていた馬鹿銃をどこかにしまい（本当にどこから出し入れしてるのか）  
顎を上げて黒衣僧たちを小馬鹿にするように見やり、くいくいと手招きをする。

「 ハンデよ。素手で、二人まとめてお相手して差し上げるわ。」

あんたたちのモノ、お粗末すぎて二人いっぺんじゃないと私をアへらせ無さそうだからね  
え……ふ。」

そう言つて右手で自分の右乳房を持ち上げ、左手で左太腿を膝からスカートの裾まで「つつ  
つ……」となぞる仕草。ちろり、となまめかしく舌がつつめく。

何そのエロい挑発。理花と九娘は少し呆れる。

「へええ?」



「大蛇の張」は眉間にしわを寄せながら、獰猛な笑み。

「愉快なことをいう女だなあ。オーケイいいだろう。おれのモノを奥の奥までぶち込まれてもその台詞が言えるものなら大したもんだよなあ。

何、すぐにそうしてやんよ。大事なトコからいろんな体液駄々漏れになって、白目剥いて舌突き出してよだれまみれになって猫そのものの悲鳴をあげてる滑稽な姿になあ?」

そう言つてククク……と含み笑いをしながら、前に出る張。

隣の古は少しあわてて、

「兄じゃア、約束がちが……」

と言いかけて、ギロリ、と張に睨まれて黙りこむ古。どうやら「序列」は張の奴の方が上のようだ。

「さあて、それじゃあ可愛がつてや」

セリフを言い終わるより早く。

理花と九娘は「今だ!」とアイコンタクトでタイミングを計つて、張の奴に不意打ちをかます!

ほえず猛らず牙を刺す!

安っぽい破裂音六つとともに「牙狩り」の猛毒入りダムダム弾を全弾発射!張の奴に全弾名中!

九娘は「阿」を縦横無尽に繰り出して張の奴に切りつける!

轟音。激音。爆碎音。

ものすごい音を立てて張の奴の姿はおろかこの店の壁や床が吹っ飛ぶ。

張の奴の隣にいた古は「うわあひゃ」と悲鳴を上げ、頭をかばいながら逃げ回る。

実はこの時、二人はマオにも攻撃を繰り出したかったのだが、それだと威力が分散してしまつた。

相手の戦力が分からない場合は、自分達の全戦力を、さらに一点集中。兵法の基本だ。マオと雷はどうやら理花と九娘たちを生け捕りにしたいらしい。黒衣僧が切り込んだ時も、彼女たちに牙をむけなかった。いくらでもできたはずなのに。

対して張の奴の方は八州役人である者たちなぞスキあらば殲滅対象にしようとは思ってない。

ならばこちらの戦力を集中する対象は選ぶまでも無い。

濛々と粉塵が舞い上がる。

そしてその後する事はただ一つ。

「今よ!逃げるわよ理 美香ちゃん!」

「いわれなくとも!」

ダツ!と逃走に入る八州役人たち。

ヤバそうだと感じたら即逃走。ここら辺彼女たちは武俠である以前に、戦争屋だったという事を思い出す。



の弾丸すら通さないほど肉体の頑強度はアップする。

けれど、

“私や九娘さんの”結界域”が多少拡散したとはいえ中距離攻撃をあれだけ受けて無傷だなんて…………”

とれだけ鉄布棧功と相性が良かったというのだ。理花は再度ほそをかむ。

「今じゃ拳法の攻防技術なんざアホらしくなるほど頑丈になってな、ごらんのとおり、飛び道具なんざもつこわくねえな。たとえ八州役人の攻撃でもな、接近戦でいくら”結界域”のこもった攻撃もらつてもダメ。ジゼ口だという自信はあるぜ？」

ん？ちよつとかゆいな？（と、理花のダムダム弾が着弾したあたりをぼりぼり搔いて、）

ははあん。マライカ族のねーちゃん、あんた弾に毒をぬつてたな？なるほど流石、考えたもんだな。しかし無駄無駄、おれの鉄布棧功の前じゃ、毒も通さねえよ。」覽の通りな。

もちろん崩拳のマオ、あんたの化け物銃でもな。」

その大胆不敵な張のセリフに、マオは首肯する。

「確かに、あんたほど鉄布棧功を極めたものなら、私の鳳凰の弾丸すら通さないでしょうね」

と、なんとあつさり認める。

とつかあの銃、鳳凰って名前なんだ。

どうでもいい事だが、理花は感心する。

「……けれど、さすがに近距離の全く”結界域”の減っていない攻撃を受けても、そのセリフが言えるかしら？」

そう言つて、「スッ……」と身構える。

直立した状態から、両手を外に開いていく様に上げていく。

肩の高さまで上げると、外から円を描く様にし、顔の前で右手を下、左手を上、両手を重ねていく。

そのまま左足を一步踏み出しながら、右手を腰まで引き、左手を胸の高さまで下ろす。

腕は完全にまっすぐ伸ばさず、軽く肘を屈したまま。

形意拳、三体式の構え。

彪…………ッ

「……………」

ただ構えたのに、ただ構えただけなのに、ぞつとするほど、雷以外のこの場で生きている者全員の寒気が止まらない。

張の奴もそれを感じ取ったのだろう、額に嫌そうな汗を浮かべながら、しかし「ヒュー……」とおどけるように口笛を吹いて虚勢を張る。

「へへ……あの『一撃必殺の崩拳』、か……それを喰らってもへっちゃら、というほどおれも自惚れ屋じゃないんでな……」

そう言つて多節鞭をもった右手首を、くりくりと回す。準備運動のつもりなのだろう。動きに合わせてちらちらと多節鞭が鳴る。

そろそろ戦いが始まる。

と、その前に、雷が、マオに声をかける。

「マオ　お願いがある。」

「なあに、手短に頼むわね、今いいとこなんだから」と、視線を外さず、マオ。目を細めながら、

「……僕は基本的に個人主義だ　ハッキリ言つて自分の半径5メートル以内の人間のことが興味がないし、それさえもどうでもいい時がある。半径5メートルより外存在については僕にとっては最早芝居の書き割り、薄っぺらな紙に書かれた絵空事でしかない。」「ここまではいいかい?」

「なあに知っているわよそんなことぐらい　昨日今日の付き合いじゃないんだから。」

雷は続ける。　この、もはや悲惨極まりない空間の片隅で、真つ先に黒衣僧どもに縊り殺された、この店の料理長および従業員の方々を見据えながら。

「　だからそこに転がっている、このお店で働いていた人たちがどこで死のうが生きようが僕にとつてはどうでもいいことだ。　本当なら。」

そう言いながらも、従業員の方々の死体から目を離さない。

“あれ?なんかしゃべり方が女の子っぽくない?僕?これが地かしら?”

内心首を傾げる理花。

「でも、つかつにも僕は、この人たちが作り、そして丁寧に僕の前まで運んでくれた料理を食べ、迂闊にも、　少しだけだけど、

感動した。…………おもしろかった……」

ついつつかり、半径5メートルの端に、この人たちをかすらせてしまった…………だから、

そして、雷の声が、

あの、とても美しい美声が、

ガラッと変わった

「お願いだ。僕の半径5メートルにいた人を虫けらのように殺したこのクソ共を、沢に輪をかけて惨殺してくれ。より惨たらしく、より酷く。……頼む」

そのさつきまで見事な美声を響かせていた雷の喉から、

まるで、長い事声帯を使い古した、男性の老人のようにしわがれた声が響いてきた。

「……もしかして、女装した男!?……!」

どうやら理花と九娘は見た目に、擬態に気付きながらもしかし、完全にだまされた、という事になる。

マオはそのお願いを聞きながら、しかしふん、と鼻を鳴らすだけで答える。

「何だそんな事。」

(そこで縦に伸びている自分の瞳孔を、さらに縦に伸ばしながら、)頼まれるまでも無いわよ、そんな事、同じ理由で、私も癪に障ってるんだから      !!」  
そして。

あの白炎の様な、“結界域”を、さらに四方八方に放射 展開      !!

その“結界域”に気圧されて一瞬張は怯むが、その屈辱的な事実を打ち消すがごとく次の瞬間、張が吠える。

「クッ      うわああああああああ      ッ!!」

張の多節鞭がハネ上がり、空を引き裂いてマオに襲い掛かる      !!

金属が人体にぶつかる音とは思えない、カン高い音とともに多節鞭が前手のマオの左手に絡みつき、(壁の様には碎けない)

同時に張は左手のトカレフの引き金を引こうとし、  
しかしそれよりもさらに早く

『<sup>ふしゅ</sup>出<sup>しゅ</sup>手!!」

とマオが気合一閃、多節鞭が絡みついた左手を一気に腰まで引いた!

刹那

「うっおわああああああー!!……!!」

とたんに上がる張の悲鳴。

なんと、マオが左手を引いた途端、冗談のようにフワッ!と勢いよく張の体が浮いた! そのせいであらぬ方向へ飛んでいくトカレフの銃弾。

「ああああああああああアッ!!」

勢いよく浮いた張の体の進行方向はマオの方。

理花は驚愕に目を見張る。

岱手。おそらくは何かの奥義なのだろう。これはかの世界最初の武俠、植田盛雄が使ったと言われる、対戦相手の自由を奪い、意のままに操るといふ絶技“合気上げ”に酷似した技だ。

理花は過去の経験に思いをはせる。

「岱手、といつてもただすごい勢いで多節鞭の絡みついた左手を下しただけでしょ？何で張まで一緒に吹っ飛ぶの？普通ただ張の手から多節鞭がすっぽ抜けるだけで終わるんじゃないの？」  
と思われる方も当然いるだろう。

普通そう思う。誰だつて。まあ張の奴が、命を預ける大事な武器を手放したくないが為に強く握っていた、というのもあるのだろうが……

実は以前、理花はこの岱手に酷似した技 “合気上げ” を喰らったことがある。

あの時の異常体験は理花は今でも忘れられない。

何せ、触れられた途端、力が抜けて、力を入れようにもどこかに流される感じがして、膝を屈したままぴくりとも動けず、握るわけでもなく、ただ添えられただけの手が何故か、本当に何故か振りほどけず、往生した、あの体験を味わえば ……

身動きの取れない空中で、ぐんぐんマオと張の間合いが縮まる。

「ぬっっっっっっっっっっっっがああアッ……」

それでも必死に体をひねり、左手のトカレフをマオに突きつける張。空中だからバランスが悪いが、それでもこの距離だ。おそらく張にとっては目をつぶっていても当たる距離だろう。

しかしここでも、先手を取ったのはマオだった。

張が引き金を引くより早く、

マオは体を前に傾けながら左足を一步踏み出し、

頭を低くしながら顎を引くように首をすくめ、

ながら肘を下にして、

手首から先を小指を下、親指を上にした縦の貫手、即ち曲げて人差し指の付け根あたりに固定した親指以外の、軽く全関節を曲げた四本指の先端で攻撃する手の型にした、

右腕を、顎を肩甲骨で包む様に肩と右耳がくっつくように勢いよく「ボッ！」と突き上げ、

自分の右手首の外側と、張のトカレフをもった左手首の内側が交差するように、

影のごとく素早く、「シューッ！」とマオは、

自分の前腕を張の奴の前腕の内側にそってスライドさせた！

「パン！」と同時に張の奴の銃が一曲歌ったが、弾といふ歌声は観客のいないどうでもいいところに飛んでいくだけ。

“上手い……”

八州役人の二人は状況を忘れて感心する。

あれなら敵の攻撃が向かう方向は、自分の腕そして体と平行になる。つまり間違っても当たらない。

と同時に二人は見逃さない。

もう一方の左拳が、右肘の内側に添えられているのを！

“まさか出るというの！”あの　すべての敵を一撃で葬り、平歩崩拳、あまねく天下を貫き穿つと謳われたあの”

崩拳が。

そしてぐん！とマオのその右手が張の奴のその左手をそのまま、上から押さえつけていき右下へと銃口をそらしながら、強引に隙を造り、

そしてマオが気合を放つ。

必殺だと言われている、

その一撃を。

「殺シメ！」

進行上の空間を真空に変えながら、拳銃の銃口を体の外側にそらした右腕の内側をガイドに、左半身になりながら繰り出した左縦拳が張の奴のみぞおち目がけて放たれる！

しかし敵もさる者。

「つおあアアッ！鉄布棧功、全ッ開ッッ！」

と叫ぶと同時に、張の奴の肌が鉛色になる！

と同時に、空中の不安定な体勢ながらも、右腕でマオの崩拳をガード！

ベキズドォッ！

ものすごい激突音が響いた後、

……静寂。

……やああつて。

パタタツと数滴、血が床に落ちる。

「へ…へ…どうやら肋骨が何本かイッチまったようだが、防ぎ切ったぜ郭深猫オ……」

口から血反吐をこぼしながら、張の奴がそう囁き。

見ると、崩拳をまともにガードした右手は完全に碎けてボッキリと折れ、しかしガードしきれず、胴体にめり込んでいた。

マオの左縦拳がめり込んだあたりの腕の部分が「ペシャン」になっている。

のみならず、だいたい肝臓の上あたりの胴の部分が、陥没している。

生きてはいる。……だが、もはやだれがどう見ても戦闘続行不可能のダメージだ。

“私と九娘さんの連続攻撃すら効かなかったヤツの体にあそこまでダメージを……！”

なんといつ威力。あれがマオの崩拳　。理花は言葉も無い。

しかし。張の奴はそれをしのぎ切った。……一発だけではあるが。

「へへ……知っているか？」一撃必殺って言葉はな、『一撃で必ず殺す技』という意味のほかにもう一つ意味があつてな、それはな、『一撃で殺せないところちが一撃で殺される技』って意味もあんだぜ、知ってたか？」

血泡をこぼしながら、張。しかし一撃でやれなかったとしても、この状況では依然としてマオの優勢は変わらない。虚勢もいいところだ。

「それで？」

当然、マオは平静だ。

そこに、

ピュルルルッ！という、空を割く音。

「！」

なんと、マオの両足にグレイプニルが絡みつく！  
縄を投擲したのは

……古。

「今だあ！……やれ兄ジャア！」

涙を流しながら、古が叫ぶ。

張の奴はそちらに一瞬だけニッと笑いかけてから、

「ふん！」

と張が何か力を込める。すると、『メキメキメキ……！』と音を立てながらマオの拳が食い込んだあたりの筋肉が収縮、なんと砕けてへし折れた自身の腕ごとマオの左拳を胴体の筋肉群がからめ取って、『キチギチィ！』と固定した！

「！」

「つまりは……いつことだあ……！」

そう叫ぶと同時に、張の左足の靴のつま先から『シャキン！』と刃物が飛び出す！

そのままお返しとばかりに、マオのこめかみ目がけて張は刃物付きの左つま先を振り回した！

“この場合、マオはどうする！……両足は縄でからめとられ、両腕はご覧のとおりふさがっている、この状況を！”

誰もが絶対絶命と全てを諦め、目を瞑るしかないこの状況で、理花と九娘は見逃すまいと目を見張る。

しかしマオは、

「バツカじゃないの？」

噂以上に……百戦錬磨だった。

転瞬。

爆音にも似た衝撃が、マオの肺腑から 迸った。





いわゆる「エロ効果」と言うやつだ。ボクシングの試合を終えた後、選手が何故か「腹を撃たれたのになぜか背中が痛い」と訴える奴である。この目の前の凄惨な光景は、その現象の極地だ。マオの崩拳の威力のすごさを物語っている。

ハッキリ言って理花の「寸剋」など足元にも及ばない。

しかし。

マオの攻撃はこれで終わらなかった。

思い出したかのようにマオが、

「あ。そういえば雷レイから（より酷くより惨く）という注文が入ってたんだっけ？」

とひとりうちる。

次の瞬間。

再びあの“爆音”がマオの肺腑から迸った。

「ツツツツ  
噫イツツツツ  
！！！！」

ドボオンッ！！

続けざまにマオは張の奴の遺体の鳩尾に、右肩から突き刺すようにすさまじい威力の靠を放った。

その衝撃でマオの足をからめ取っていたはずのグレイプニルが「ブチッ!」とちぎれる。

そして。

張の体は。

まず、バネが弾かれるような音がして、内側からなんと背骨が、半ばから千切れながらばねのように皮膚を突き破って飛びだし、

次に、そうやってできた縦長のドツ穴から、ずたずたの細切れのようになった腎臓、大腸、小腸、

肺臓、……とにかく五臓六腑すべての破片がまるでクラッカーの様に血煙とともに爆裂四散しながら飛びだし、

最後に粉々になった肋骨群が飛び出して花を添える。

そして七孔噴血して二目と見れない顔になった張の目玉が衝撃で飛び出し、

両耳から攪拌された脳味噌がまき散らされ、

口から体幹部に収まっていたすべての量の血反吐が噴水の様に吐き出されるッ！！

…そのまま張の体はぼろきれのように吹っ飛び、濡れた、しかも大量の雑巾を叩きつけたような音とともに壁に激突。

そのままべちゃッと床に着地。

以上。「大蛇の張」、惨殺完了。

……静寂がむしろ耳に痛いほど、あたりに響き渡る。

「……や……やりすぎだわ……」

その光景のすさまじさは、あの九娘が、鼻水をたらしながら思わずそう漏らしてしまうほど。

「やつ。」

そう言つて、マオは残りの黒衣僧に目を向ける。

即ち 古へと。

「うっ……うっ……ッ。」

マオと視線の合った古は哀れなほどにガタガタ震えながら二、三步後ずさり、しかし自暴自棄<sup>ヤケクレン</sup>になつて、

「うわあああああああ——！！！！」

と突進する。

バリィ！と筋肉が膨張して、服を突き破り古の筋肉まみれの上半身があらわになる。

その上半身が、「ピキピキピキッ！」と張の奴と同じように鋼色になる。

しかし。

理花には見えてしまった。

古の奴の顔に、あからさまな「死相」が浮かぶのを。

「くったばえええええええええッ！」

そう叫びながら右ストレートを放つ

「オッオレは鉄布棧功だけなら兄者より上だあああああああッ！」

見ると、古の奴の右拳が「ボンッ……」と倍以上に膨れ上がる。鋼色となった肌と相まってもう

拳の形をした岩だ。これが古の奴が「鉄塊」と呼ばれる理由。

けれど。

どんな攻撃も、当たらなければ無意味だ。

「……ヌルいわ」

マオは体を左斜め前45度の角度に前傾させながら、

右足を、つま先を外側にひねりながら左足と交差するように同じく左斜め前45度の角度に

踏み出し、

ながら右耳と右肩をくつつけるように、

先刻張の銃口を捌いたあの「突き上げ受け」を、

今度はマオ自身の右手首の外側が古の奴の右手首の外側と交差するように、

雷のごとく素早く、

自分の前腕を古の奴の前腕の外側とスライドさせた！今度は外側！

「ヒンッ！..」と空しく古の拳は空を切るのみ。

そしてからぶった古の腕の上からかぶせるように、マオの左貫手が古の目玉目がけて繰り出される！

「うおッ！..」

鉄布棧功の弱点は「さすがに目玉まで鋼のように固く出来ない」事だ。

しかし古は死に物狂いで

「碎け散れえええええッ！..」

とマオの左貫手目がけて迎撃せんと左拳<sup>フック</sup>を放つ。

しかし。

マオは「グリッ」と指先が反時計廻りを描く様に手首を柔らかく使い肘から先を回して左拳をかわし、あまつさえそのまま粘りつくように「パシッ」と手の甲で左拳を受け流し、さばいてしまう。

そして今度は手首から先を時計回りに回して掌で古の左腕に触れ、そのまま四指と親指の外側を使つて鉤の様にひっかけて（親指を使つて掴んでないのがミソ）「ガキッ！」と強引に下へ押し下ろす。

「あーッ！」

古、痛恨の呻き。右腕が下、左腕が上と交差するように両腕を封じられた！

そしてマオのフリーになった右手はさながら鷹の爪のように開き。

「念仏を唱えな」

ボズンッ！と音を立てて中指が左目に、親指が右目に思いっきりめり込んだッ！

「ッぴいやああああアアッ！..」

魂切る古の大絶叫。

「はいッ！..」

そのままマオは中指と親指の先を付けるように握り込み、一気にひっこ抜く！

同時に「カランッ.....」と床に転がった血まみれの骨の欠片みたいな物はきつと、目と目の間にあった鼻骨のなれの果てだろう。

「あぎょオオオオオオオッ！..」

見ると古の右目じりから左目じりにかけて横一直線にドツ六が。そこから多量に血が噴き出している。

「フィーンッ！..」

そしてその横一直線に空いたドツ六目がけて、マオは渾身の右貫手をぶちこんだッ！

マオの右實手は古の脳みそをえぐるのみならず、『ボギヤアッ!』と後頭部を貫いて向こう側へと躍り出た!

「お。びっ……」

舌を突き出して短く呻き。

それが古といつ黒衣僧の、最後の言葉だった。

ビクン、と痙攣したきり、動かなくなる。  
しかし。

マオの過剰殺戮は止まらない。  
オーバーキル

「殺ッ!」  
シヤア

と気合一閃、マオは脇をしめながら『グリンッ!』と時計回りに手首を一気に返して掌を上に向ける!

その動作のせいで古の目から上の頭部が、

デ!ピン<sup>①</sup>の要領で一氣に真上へはじけ飛ぶ。

そして古の目から上の頭部は天井にぶつかり、頭蓋骨の欠片と脳味噌と血をぶちまける。  
残った古の目から下は激しい勢いで赤い噴水をまき散らす。

「……」

理花と九娘さんは、寂として声も出ない。

間直から返り血を浴びながらマオは「んんん……」と気持ちよさそうに振り返りながらこちらを見、そして天井へ放射線状にへばりついた、古の目から上のなれの果てを「ちよいちよい」と意味ありげに指差す。

「?」と二人が首をかしげると、マオは艶然と微笑み

「汚い花火よね」

と、そう評価した。

「……うわっちゃー」

理花はもうその間抜けな感嘆符しか頭に浮かばない。

ビッと、雷が親指を立てて、『G』といわんばかりに頷く。  
確かに言われてみればそう見えるが。

「ヤバイ」  
ヤバイ。

やばすぎる。

私も結構な人でなしのつもりだったけど。

こいつ、私の後ろにいる雷というやつは。

比較にならないくらいシヤレになつて無いッ……ッ！”

理花と九娘の膝が、震える。

「さて。」

後ろから雷の音が聞こえ、理花と九娘は「ザザザッ！」と身構える。

雷の声色は、もとの小鳥の様な美声に戻っていた。

いやな汗が、二人の額から次から次へと湧いてくる。

“どうすれば、この状況から生き延びられる！？せめて、せめて九娘さんだけでも……ッ！”

必死で理花は脳細胞をフル稼働させて考えるが、一向にいい考えが浮かばない。

“どうすれば、どうすれば……ッ！”

「二人とも、」

雷の言葉に理花と九娘は反射的に、

「僕の目を見て。」

従ってしまった。

刹那。

ギンッ ……！！

目と目が合った瞬間、雷の目があやしく光った！

“！……”

“しまった。”

これはおそらく視線を媒介にして、“結界域”を放射、目を合わせた対象の意識を瞬間的に刈り取る、邪視／凶眼術』と呼ばれる幻の “ ”

そこで二人の視界がぐにやりと歪み。

ぷつり、と意識が途絶えた。

それはまだ人類の文明が 始まったばかりの大昔

迷信で「異思の物共」アナザーワンスを追い払おうとしていた時代

銃も無く 機械も無く

ただ「異思の物共」に狩られるだけの人類

されど 人智の及ばぬ天命に導かれ

素手で 何と素手で

「異思の物共」を殴り殺す

猛き者達が存在した

その者の拳 大地をたやすく割り

その者の蹴り 大海すらも両断した

そしてその力で 幾千 幾万もの

「異思の物共」の軍勢を うち滅ぼしてきた

人々はこの猛き者達を褒め称え 敬つてきた

されど 臆病な人類 卑屈な人類

この猛き者達の力を いっしか恐れ 疎んじ始め

猛き者達を 抹殺せんと 動き始めた

猛き者達 その力はすさまじいものであるが

しかしもとより数の少ないこの猛き物達

幾億 幾兆もの人類に 昼夜を問わず 攻め立てられ

次々に猛き者達 倒れて逝き

そして最後の 猛き者 自ら自害し

こうして猛き者達 一人残らず いなくなつた

今はただ こうして文字の中に その存在を偲ぶのみ

その猛き者達の名は 「かいぞく戒族」

その「戒族」の使った素手の業もまた 名前だけを残すのみ

「ピーストコネクト心意六合拳」

「ウーティンハイパー白猿通背拳」

“レハチン  
欄手拳”

……そして、エイテイアルティマ  
“八極拳”

八州役人第一級極秘文書「戒族忘備録」より抜粋

二五、間章フィタモルガーナ  
《飛翔く華》

思い出は、人間が追い出される心配のない唯一の樂園である。

快樂は色あせる花、

思い出はずと残る蓮ハナの華。

思い出は今そこにある現実よりも永く残る存在モノ。

私は永い事その華を保存してきたが、

しかし其の華が実を結ぶ事は決して無かった。

リー  
李輝龍アレクサンダー

それはまだその漢が、世界は美しいと信じるに値する世界だと、信じていた時の頃の話。

それはまだその漢が、憂いさえも、憂いという意味さえもまだ知らない、残酷な幼子だった頃の話。

「はい、それじゃあここまでで何か質問は？」

そう言つてその華オハナは、唯一の生徒である少年の方を振り向いた。今は国語の授業。

華オハナ、である。昔からこの国に生きる者は、特に器量のいい女性を華オハナ、と呼んでいるが、なるほど過去の人間も言いて妙な表現を残したものだ。

まず目につくのは腰まである艶やかな癖のない、まっすぐな黒髪である。黒曜石を溶かして伸ばしたらこんな麗しい髪になるのかもしれない。髪の艶が窓の外から差し込む光を反射して、前髪あたりにぐるりと天使の輪を形成している。

その前髪の下で緑色の光彩の瞳がやさしく生徒を見つめている。ぱっちり開いたそのまなざし



は少々つり眼気味ではあるが、きつきよりも意志の強さを感じさせる。細く濃く、描いてもいないのに奇麗に弧を描く眉は柳の枝の様に眼尻側に垂れており、それが柔和な印象を抱かせるせいだ。

その下にはすらりとした綺麗な形の鼻梁に、甘く微笑む桃色の唇。その頬は化粧もしていないのにさながら白磁の様に白い。

そして背中には有翼人種である証の、その頬と同じ色の、白い羽根が生えている。その白さの、なんとまばゆい事か。

足音ですら聞く者の心を陶然とさせ、指を少し動かすだけの仕草ですら芸術。まさに彼女は  
 “華”<sup>おんな</sup>と呼ぶにふさわしい存在だった。  
 さらに。

いま彼女はゆったりとした昔ながらの着物を着てはいるが、その下の肢体は黄金律を忠実に守った美しい体をしていることを少年は知っていた。

とても乳房が豊かであることを知っていたし、腰のくびれから太ももにかけてのラインは、まだ色も恋も知らない少年でも、素直にきれいだと感じていた。  
 毎日一緒に風呂に入っているからである。

否、色だけは別、か。

麻おばさんや<sup>ディアオ</sup>刃お兄ちゃんと一緒に風呂に入るのもいいなあ。麻おばさんはもちもちしてて柔らかいし、刃お兄ちゃんは筋肉ムキムキでかっこいいし。けど、やっぱり<sup>レウエナ</sup>煌月様とはいるのが一番楽しいな。少年はそう思っていた。

それに、煌月さまって桃のお花の様なとってもいい匂いがするものなあ。

そんな楽しい回想を打ち切って、少年はいろんなことを教えてくれる「せんせい」でもある煌月に、前から聞きたかったことを聞くことにする。

「はい！」と元気よく手を挙げてから、

「ねえ煌月さま、どうして人を殺したらいけないんですか？」

と、その少年は無邪気に聞く。

一瞬凍りつく煌月。

……あれ、きいちゃいけないことだったかな。

物心つく前からの経験から、人の感情の機微に異様に敏感になっている少年。その質問が、とても大切だと思っている人を困らせる事になるのは少年としては避けたかった。

「……そのごめんなさい、煌月さま、変な事聞いてしまって……」

訳も分からず謝る少年に、しかし煌月は困ったように笑って、

「うっん。そんな事はないわ。それはとっても大切な質問よ。」

そうね……じゃあこれから、桃が丘の方へ散歩に行きましょうか。」

桃が丘というのは、今いる教室代わりに使っている、空き部屋を包括するこの邸宅。その近くにある、文字通り桃の花がたくさん咲いている一帯を眼下に収める事の出来る丘の事である。煌月の好きな景色だったし、少年の好きな景色でもある。

特に懐いている煌月と行くのであればその嬉しさは倍増だ。

「うん！いくいくー！」

二つ返事で少年は賛同した。

絶景。こつこつ時どつこつ言葉でこの眼前の景色を彩れば誰かに伝わるのか見当もつかない。しかしただ地平線の彼方まで生命そのものとしか言えない、儂く淡い、しかし鮮明な極彩色で世界が埋め尽くされているという光景は、余計な修飾譜を付けずに、ただ一言、素直に絶景とだけ言えはいいのかもしれない。

その見晴らしを一望できる丘の上で、今にも頭を優しく撫でようと手を指し伸ばして来そうなほど青い空の下で、煌月は膝から先を体の外側に置いた座り方でべたんと座り、その膝の上に少年を乗せ、そしてその少年を後ろから包み込む様に抱きしめる。

「今日も綺麗ね……」と、煌月。

「うん！世界は、今日も綺麗！」と、少年。

そんな無邪気な少年に、煌月は寂しそうに笑う。

そうやって世界をほめちぎっているこの同じ時間に、その世界のどこかで綺麗といったこの世界を呪って死にゆく誰かが確実にいるのだという事を知った時、それでも少年はこの世界を肯定するだろうか？

益体がないと言えは益体がないのだろう。そんな暗鬱な空想は。

しかしそれでも煌月は、誰に裏切られても、例えば世界に裏切られても、せめて自分で自分を裏切らないよう、その少年に生きて欲しくて。

「雷、いい事を教えてあげるね……」

「んっ、なあに？」

「……この世界はね、鏡さんみたいに全てを跳ね返して映すように出来ているの」

「鏡さんみたいに？」

「ええ。例えば今見ている桃のお花さんたち、もともと綺麗だけど、雷が『とても綺麗！』って誉めたから、とっても喜んで、もときれいに輝いて、その綺麗が雷に跳ね返ってきて、雷の心を満たしてくれているでしょう？」

ちらり、と煌月の顔を見上げて、それから眼前の桃の花が咲き乱れている光景を見て、もう一度煌月の顔を見上げて、

「うん！」と、勢いよく返事をする。

「それと同じなの。人を殺してはいけないっていう事は。

そう決まっているの。人を殺したら、いつか誰かに殺されても文句は言えないの。

いい？よく聞いて。実は単純な事なの。でも大事な事だから、もう一回言うね。

因果応報、って言うてね、人を殺して生きるっていう事は、それが、鏡さんの様に確実に自分に跳ね返ってきて、いつか誰かに殺されても文句は言えないという事と背中合わせなの。

だから駄目なの。

雷も、誰かに殺されるのは嫌でしょう？。」

「殺されるってどんなこと。」

「目を閉じて眠りについて、ずーと、ずーと目が覚めなくなるんだよ。」

その煌月の言葉に、少年はんー、と考えてから、

「寝るのは大好きだけど、目が覚めなくなって煌月さまのお顔が見れなくなるのはいやだなー。」

それに、前のご主人さまの所で、たくさん怖い顔して殺された人たちを見てきたから、やっぱり

「いやだなー」

「……。」

でしよつ。」

何気にしたってくれていることを真っ直ぐに言われて、くすぐったい煌月。

と同時に、少年の自分の所に引き取る前の過去を思い出して、少し胸が痛む煌月。

「んー。分かったー！だから僕、人を絶対に殺しません！殺されるのやだし！」

「そう……いい子いい子」

「えへへ」

頭をなでられ、喜ぶ少年。

ふと、そこで「あ、そうだ」と声を上げる少年。

「ん？どうしたの？」

「じゃあさ、どうして煌月さまはぼくの前のご主人さまを殺したの？誰かを殺すってことはいつか誰かに殺されるってことなんだよねー。どうしてー？殺されるって煌月さまはこわくないの？ぼくはこわいなー。ねえどうしてー？」

「……。」

その少年の、残酷なまでに無邪気な質問に、のどを詰まらせる煌月。

ややあつて。

煌月は少しだけ、「きゅ……。」と、少年を抱きしめている腕の力を強くする。

それはどこか、すがりつく動作のようにも見えた。

「……愛情ある態度ってね、必ずしも相手の好きなようにさせる事ではないの。」

「えー？」

「雷、貴方の前のご主人さまって悪い事や酷い事をしていたでしょう？」

私はね、それをなんとしてでも止めたかったの。

もうその人にそれ以上罪を重ねて欲しくなかったの。

たとえ結果的に殺すことになったとしても。

いつか、自分が誰かに殺されることになっても。でもそれでも。

誰かがその手を汚さないと、一番汚れちゃいけない誰かの心が汚れてしまう。そんな時に、見て見ぬふりして自分だけおきれいなままにいる事が私は出来なかったの。

それだけ。それだけのことよ……」

煌月のことばに、少年は「んー」と考えてから、

「あー、悪い事や酷い事をしてたなあ。前のご主人さま。

やめて、って叫んでる女のひとのお腹を生きたまま裂いて内臓引きずりだしてたり、僕よりも

ちっちゃい子をバラバラにして喜んでたもんない。僕怖かったな！。

ああ、前のご主人さま、煌月さまに殺されてもしょうがなかったのかなあ……」

……しばし、沈黙が降りる。

ややあつてから。

「……ねえ、雷、覚えていて……」

と、雷に懇願する煌月。

「いい事？」

暴力を止めようとして暴力をふるう事は、結局、

……結局そう　暴力にしかすぎないわ。

雷、今貴方に八極拳を教えているけど。

それを一生使う機会がないに越したことはないの。

あなたは、貴方だけは私とは違う生き方をして。

誰かを慰め、癒やす生き方をして。

傷つけるのはたやすいから。

私はいつか裁きの刻が来て　……」

「赦すよ」

「え……ふ。」

不意に、少年にそう言われ、言葉に詰まる煌月。

「裁きの時なんて、きません。来るわけがないです、煌月さまになんて。

だって、前のご主人さまが悪い事するのを、止めてくれたでしょ？僕はこわくて、何も出来なかったけど。」

前のご主人さまは、いろんな気もちいい事を教えてくれたよ。最初は痛かったけど、おちんちんやおしりで、気持ちよくなることとか、ほかにも気持ちの良くなることとか。女の人で、気持ち良くなったり気持ちよくして喜ばせてほめてもらえる事や。

お前にだけは心を許せるって抱きしめてくれたこともあったよ。僕をポイしちゃったお父さんやお母さんの代わりにおいしいご飯を食べさせてくれたよ。きれいな服も着せてくれた。お前は私のよるこびそのものだって褒めてくれたよ。

だから、

だからそんな前のご主人さまが、悪い事をいっぱいして、罪を重ねていくのが、本当につらかった。辛かったよ。

そんな前のご主人さまが罪を重ねるのを煌月様は身を呈して止めてくれた。それはとても立派な事だと思うよ。

そんな立派な事をした煌月さまが裁かれるわけじゃないじゃん。

みんな、煌月さまがやったんならしょうがないって赦してくれるよ。

うん、僕も赦すよ。

それでも煌月さまを責める人がいたら、

今度は僕が身を呈して煌月さまを守ってあげるからね」

そう言っ、自分を抱きしめてくれている煌月の腕を、重ねて抱きしめる少年。

……ややあつて。

ぼろぼろぼろ……と、少年の髪の毛に水滴が落ちる。

「……煌月さま。」

見ると、煌月は顔をくしゃくしゃにして泣いていた。

「どうしたの？どこかいたいなの？」

「うつん……ちがつの……ひとはね……うれしくてなくこともあるのよ……」

大嘘である。本当は少しも嬉しくは無かった。

死ななきゃ自分のしてきた事の善悪も分からない外道を、お望み通り殺すという行為を、こんな風に肯定してほしくはなかった。

それは社会が円滑に動くために必要な事なのだと、下らない言い訳をする気にもならなかった。人殺しは人殺しだ。その事に、一体どんな言い訳が成り立つというのか。言い訳が成り立つなんて、反吐が出る。

ただ、自分という人間がほかに方法を持っていないだけの無能なのだ。そんな無能を、決して赦してほしくなぞなかった。

でも、それでも。

あれだけ人を殺しといて、赦されるわけがないのに。

現金な事に、私は。

この何も持っていないただ世界に対する喜びしか持っていない少年に赦されて、とても。

とても、……

……それは、なんと、罪深い……。

煌月は、その罪の痛みに身も心も、嫉じらせた。

「ぐすっ……ねえ雷、私の事、好き？」

「うん、だいすきー」

「じゃあ、一つだけ、約束してくれる？」

「うん。なに？」

「さっきも言ったように、誰かを慰め、癒やす生き方をして。誰かのいい所を見つけて褒めて、その人を幸せにする生き方をして。」

……お願い……」

「うん、わかったー、そうするー」

煌月は、そう返事をする雷の頭を、強く、優しく、抱きしめながら撫でる。

……それは今となつては、最早決して還る事の叶わない、

遠い日の約束<sup>うた</sup>。

三、震<sup>シン</sup>々<sup>チャキ</sup>雷<sup>ライ</sup>の斬<sup>ザ</sup>空<sup>クウ</sup>・爆<sup>バク</sup>裂<sup>レツ</sup>千<sup>セン</sup>手<sup>シュ</sup>観<sup>カン</sup>音<sup>オン</sup>》

真の武侠の頭の中にはただ一つの事しかない。

それは自分たちの自由だ。死して輪廻の枠に還る事は、挑戦でも何でも無い。

だがその反対に、死線の淵の周りをうろついて、なお自由であることは、究極の自由である。

李 輝龍

ドドドッ ドドドッ ドドドッ ……

ただところどころに申し訳程度にしか雑草が生えてないとある荒野。 “屍山ヶ原”。

その不毛、という言葉を必要以上に体现したこの地を、我が物顔で疾駆する存在が一つ。

その存在は、この足場が悪いことこの上ない所で、驚くことに150キロものスピードで爆走していた。

なんと、三頭の犀が引く、鋼鉄でできた巨大な馬車 否、ところどころに物騒なスパイクや、

あまつさえ車輪の横に凶悪極まりない巨大な鎌、が生え、さらに馬車の屋根の上には一抱えも

ふた抱えもある巨大な弩弓が据えられているのを見ると、どうやら戦車だ<sup>チャリオット</sup> 戦車が、物

凄<sup>サイ</sup>いスピードで横断していた。

その、鋼鉄でできた戦車の部分は、大昔に使われていた物の様にクラシックなデザインではなく、近代的な戦闘車両そのもののデザイン。ただエンジンが据えられている筈の所に、三頭、巨大な犀が繋がれているのである。

その犀を操る手綱を、鋼鉄でできた精巧な機械の腕が、本物の、しかも熟練の操者と遜色のない捌き方で動いて絶妙に操っている。

さらに奇妙極まりないことに、この戦車全体に、何かバリアーの様なものが張っており、それがこの全力疾走するには危険すぎるこの地形から、三頭の犀を、何より戦車を守っている。

“結界域”、である。三頭の犀が“結界域”を展開して、自身らを、何よりご主人たちが乗っている戦車を守っている。

その“結界域”の範疇に、「自分たちが存分に駆けるのに邪魔な空気抵抗、地面の抵抗、その他

諸々にある抵抗」もあるといつのは言つまでも無い。

このおかげで、150キロものスピードは軽く出せる。ハッキリ言つてこの程度は戦車の重量を差し引いても、この三頭の犀たちにとっては「よちよちばしり」もいい所だ。全力で書ければ、280キロ近くはすぐに出せる。

しかし今どきその程度のスピードなぞ、どの騎獣もすぐに出せる。一角獣もしかり、軍馬もしかり。

むしろこの場合、この足場が悪いなんてもんじゃないこの地形で、「よちよちばしり」で150キロものスピードをキープして走れることだ。そこはこの戦車の乗り手の慧眼、といつてもいいだろう。

その乗り手は、この実用性一点張りの戦車の中で、爆音といつても差支えない音楽を聴き、口ずさみながら、優雅ささえ感じさせつつ手綱を操っていた。

「」の多数の悪意が

少数の善意を レイプするこの世界で

Ah俺はこの華を Ah護る為 凶気を纏つ

全てをすべてを蹂躪するためにFuuuu~~~~~……」

車内音楽に合わせて軽く体をゆすりながら、その運転者は手綱を操る。

一見普通の自動車の運転席の様だが、ハンドルにあたる部分には何かぼんやりと発光する水晶球の様なものがあり、運転者はこれに両手で触れていた。

この水晶球は、車体の外部の犀たちを操っている機械の腕を操作するためのシンクロデバイスである。これに触れ続けることにより、両肩から先の腕の感覚が外の機械の腕と文字通りシンクロ、車体の外の機械の腕を自分の腕と変わらない感覚で動かせるのである。

その運転者は、まずぱっと見、街の表通りに立っていれば、確実にすれ違う女性が思わず振り向き、中には逆ナンパをするものがいそふほど、整った容姿と、何よりそれだけじゃない、観る者の緊張を取り除き、すぐに仲が親密になりそうな実にフランクな雰囲気纏っていた。

まず着ているものはこの戦車の乗り手にふさわしく、実用性一点張りの青い戦闘服だ。

耐刃防弾さらには対環境用温度調節装置が付いており、装着者の温度が高くなれば冷たくなり、低くなれば熱くなる、いわば「考える服」だ。

デザインはその機能にふさわしく丸つきり軍服だが、しかしところどころに軍服にはありえないワッペンやヘヴィメタルそのものの鉾やらハードコアなデザインの刺繍がパッチワークされており、装着者の個性がこれでもかと表れていた。

身長は高く、座席を限界まで後ろに下げないと収まらないほど足が長く、筋肉が発達しており、そのうねりや盛り上がりが戦闘服を着るにふさわしい威厳といつか格好よさを模している。



首から上は正に「美形<sup>ハンサム</sup>」といつてもいい。

堀が深く、すらりと通った鼻梁。すっきりした頬と、力強さと優美さを同時に感じさせるあのライン。きれいな、しかし弱々しさを感ぜさせないきりりとした太い眉。その下の瞳は、女性を一目で魅了しそうな、切れ長の流し目。そんな整った容貌を、肩まで届く黒髪の長髪が彩っている。

その長髪から覗く耳の形は丸い。ヒューマン族だ。実に魅力的な容姿だが、女性によっては軽薄さを感じさせるかもしれない。そこが欠点といえれば欠点か。

その青年が、隣の助手席の相棒に声をかける。

「へい<sup>フオラス</sup>雑狼、纏州まであとどんぐらいだ?。」

即座に、相棒の男は答える。

「俺がお前の方向感覚がイカレてなければあと二時間チヨイ、つてところか。地図を見るとあと30分当たり進めばこの方向に駐継基地っぽい感じの町があるらしいから、そこで休憩を取ってから運転を交代しよう。」

「オーライ。しかし今度の国はほかの国に比べて比較的平和っぽいみたいだからな、飯の種にありつけるといいんだが。」

「その心配はないだろう。どこの国も厄介事を抱えてるもんだからな。いや、厄介事の総称が国家といつてもいいかもしれん。ただ心配があるとすればそれが単純なものが多いのか複雑なものが多いのか、それが問題だな。」

「ふうん?。」

「農地を荒らす「異思の物共」の掃討とかそついつわかりやすいものなら大歓迎だが、命を狙われている金持ちの護衛をしながら真犯人を探し出すとか、なんてめんどくさいものは御免こつむりたい。」

たいていこつというのは依頼料が良くても、解決するための費用やら諸々で手取りが少ないからな。」

「何雑狼、回りくどい。暗に纏州はそつ言つめんどくさい所だと言わんばかりだな。」

「俺の独断と偏見ではあるがおそらくそうだろう。ホビット族の格言にかくありき、」

「そこがこぎれいな都会だからといって、安全とは限らない。」

人の住む所に楽園などあり得ない。こついつところは紛争地帯にあるだけの負の感情が、そのままそつくり孤独と孤立へと変換されてるだけなのだから。

見ろ、あの透明人間の死体は、こんなに人がたくさんいる中で、誰の心にも悲鳴が届かなかったのだ。」と。

さらにかくありき、

「じまるところ平和とは、仮面をかぶっただけの泥沼の戦場に過ぎない」とな。

それに考えても見ろ、纏州はあの八州役人の本拠地があるんだぞ？

纏州が比較的平和、て言うのはテレビの中だけのお話、ほんとには事実を握りつぶされてるだけかもしれない。……あの清京の件、もあるしな。

ま、おれのただの被害妄想であることを切に願うがな。」

フツとヒューマン族のその青年は、苦笑を洩らす。

「流石時代の流れの中でもまれていたかの代名詞となったホビット族の格言は違うな。たしかそれ、丹氏っていつホビット族の人の言葉だったか？」

そう言うてちら、と相棒を見やる。

シム・クレン  
殺殺狼。

21歳。ホビット族の生まれのせいか身長は武俠、と名乗るには足りない165センチそこそこだが、ドワーフ族と見紛うほど発達した筋肉が、有無をも言わせない迫力となっている。

ズボンは相棒とおなじ戦闘服のそれだが、こちらは茶色。上着は相棒の戦闘服より分厚い防弾耐刃チョッキを、薄い裾がずたずたに裂けたシャツの上から着こんでいる。裾がずたずたに裂けてのぞくむき出しの肩は大きく盛り上がっている。

そしてとくに目を引くのはその両手に装着された「ついあまりにこじすぎる籠手」だ。

前腕部の装甲の厚さは楯と遜色ないほど厚く、手首から先は「武器など持たなくても事足りるだろっ」といわれそうなほど無骨だ。

そしてその容貌は さながら抜き身の真剣、と比喻できそうなほど鋭い。

刃物の切っ先を思わせるとがった顎と、こけてはいないがスティックさを感じさせる頬に引き締まった口元がよく似合っている。

目は見事に三白眼をなしており、それは得物を文字通り虎視眈々と狙う虎のような気迫と、すべてを高めから見下ろし、見極めんとする鷹の様な冷徹さを備えていた。

額には鉢金を巻いており、その上からツンツンと生えた硬そうな髪が方々へと伸びている。

一見近寄りがたい雰囲気を持つてはいるが、そばにいくと不思議と落ち着く なんといつか、

「漢」の気配を有していた。

朗らかな雰囲気有し、背が高い引き締まった体のヒューマン族の青年。

落ち着いた雰囲気有し、背は大きくはないが筋肉質のホビット族の青年。

この二人は相反した属性の持ち主たちではあるが、だからこそそう よく似あったコンビとなっていた。

「おお、よく知ってたな金。おまえはこいつ古臭いことわざとか好きそうな感じはしないのだが。それは俺の偏見だったか？」と雑狼。

「いやあってる、偏見じゃないよ雑狼。ズバリ年寄りの説教の愛蔵版見てエナセリフは好きじやねえさ。でも相方がそういう言葉ばかり言ってるからね、いやでも覚えるさ。」

「ん？そんな耳にたこができそうなほど俺、言ってたか？」



「ハハ、自分のこととなるとやっぱわかりづれえもんだなやっぱし。」

「やっぱあれか？お前、実はお爺ちゃん子かお婆ちゃん子だろ？」

「ああ。俺の両親も今のおれたちと同じく冒険者として方々をかけ釣り回っていたからな、俺は同じく冒険者だった母方の祖父に育てられた。」

「おお、おまえんち三代にわたって冒険者だったのかよ。」

「ああ。おれもガキの頃は今のおまえと同じく口うるさい祖父の説教じみたセリフが嫌いだったが、成長するにつれ祖父の言葉が生きる上で実に役立つことに気付き、ガキの頃、もっと真面

目に祖父の話をきいときゃよかったと割と後悔している。

だから今、そういつた格言を勉強しなおしている。(と、懐のポケットにある本　世界の名言集というタイトル　をポンポンと叩く。)

しかし、年寄りの説教のありがたさを理解できるのは、その年寄りに近い年になってからというのなんだろうな？もつと若いころに理解してないと、合わなくていい痛い目にあうというのが分かっていたはずなんだがな……。」

その雑狼の独白に、のっぽのヒューマン族の青年　金<sup>キム</sup>　は、へっ、と皮肉げな笑い方をし、

「　しょうがあんめえ。風の上に、時化の事など思ってもみないのは、人類共通の弱点らしいぞ」

その金の言葉に雑狼もフツ、と皮にくげな笑い方を返す。

「ああ確かそれ、李　権謀の言葉だったな。あの権謀術数の語源となった。

フツ、千年王国と言われた瑯州の、しかしその腐敗を嘆き、47年ほど前、繁栄絶頂期だった頃に突然国外脱出して生き延びた輩の言う事は違つよな」

「47年ほど前？確かセーガクの頃、社会の授業で、そのころは「瑯州崩壊前夜」と習ったけどおれの覚え間違いか？」

あ、いや思い出した。確かそのころ、軍需景気でわいてたんだっただな、瑯州って。

確かその直後の45年前、「異思の物共」の集中攻撃を受けて陥落したんだっけな。」

ああ、と雑狼。

「おこれる瑯州久しからず、か……言いてて妙だ事……」

と。そう雑談してる時に、「プるるる、プるるる、」と金の上着のポケットから電子音。

「あ、悪い雑狼、今運転中だ、代わりに取ってくれ。」

「ああ。ついでに音楽のポリリズムも下げるぞ」

と、雑狼はつまみを小にひねりながら、金のポケットを探って携帯を開ける。

画面には発信者の名前がなく、番号が並んでいるだけ。だが雑狼には誰が掛けてきたのか大体想像が付いている。

「雑狼だ。この携帯の持ち主は今運転中で携帯が取れない代わりに俺が話を聞こう。」

(あら雑狼ちゃん、相変わらずシブい声ね。背丈に似合わない)

「ビッグなお世話だ。それより何の用だ、美狗<sup>ミク</sup>」

パツと携帯の画面に、「ポルト族の女性の姿が映る。

まず第一印象として、」とても人懐っこくてかわい子犬「、といった容貌だ。

年齢は自分たちと同じくらいだというのに、ともすれば中学生くらいの子の女の子と話をしているように錯覚してしまいそうなほどの童顔。くりくりとよく動く瞳がそんな錯覚に拍車をかけている。無意味にぴくぴくと、犬と同じ形の耳を動かすしぐさも、だ。活発そうな印象の茶髪ショートボブがとても似合っている。

しかし携帯の画面の下半分あたりから覗く乳房はその童顔からは想像がつかないほど發育しており、重そうに揺れている。

しかもその危うい肉果実の谷間を強調するようにボディコンスーツを着用している。容貌は少女ではあるが、その肢体は必要以上に大人の色香を発している。

この上と下とでとてもちぐはぐな印象の「ホルト」の少女は、雑狼と金にとっては昔馴染みの「情報屋」だ。

あどけない成りをしているがこれは擬態で、腕は実に確か。なんでも情報操作で株の動きを操り、常に大金を握っているとか。まあ二人は確認はしたことはないが。

常にキャンピングカーで移動をし、携帯の番号もいちいち変えてくるから二人にも彼女の動きは捕捉できない。彼女と顔を直接合わせて仕事をすることもあるが年に数回あるかないかだ。

その童顔巨乳の容姿を生かして、副業で金持ちのペドオヤジ相手に、赤詐欺もしているともっぱらの噂だ。こっちは一度しかに本人に確認したら、

「へえ聴きたい？ 私の口から。ききたい？ 後戻りはナッシングよ？ それでも聴きたい？」

と怖い笑顔で返されたので、それ以上は確認してない。まあ、この世に知ってはいけないことや知ってもどうにもならないことなど山ほどある。

後、どうでもいいことかもしれないが何で巷では女はかawaii生き物、というデマが流れているのかいつも二人は頭を抱える。

閑話休題。

このしたたかな少女　　もとい女は、犬そのものの黒い鼻先をべろべろりと舐めてからにんまり、と笑う。

その仕草に、雑狼は少し、眉をひそめる。

美狗が鼻先を何回もなめるのは、どこか興奮している証拠だ。よく見ると、目の下にクマができています。　徹夜明けか？

（やあなに、ただの営業よ。ちよつと、貴方達でないと出来なさそうなのでつかいお仕事の情報をつかんだの。もしかしたら、貴方達の手に残るかも。どう、聞く？ 聞かない？）

話し方も、どこかテンションが高い気がする。

隣で聞いていた金が、返事をする。

「ふ手に余る、ときたか。安っぽい挑発だが、あえて聞こう。どんなヤマだ？」

（雑狼ちゃんのように回りくどいのはあんま好きじゃないから単刀直入に言っわね）

「……俺って回りくどいか？」と雑狼。

「結構な。さうして。こんで？ズバツと言ってくれ」金が先を促す。

「じゃじゃーん。なんとあの形意大人、郭深猫が生きていて、昨夜未明、纏州の首都、天京

の一角にあった料理店に押し入り、従業員全員を殺害した揚句、駆け付けた黒衣僧合わせて1

02名をも37564にし、偶然居合わせた八州役人二人を拉致して逃走しましたー！いえ

いー)

郭深猫の名前が出てきた時点で二人はかたまる。

「……」

「……」

さらに沈黙。

ボリウムを落としたはずのウィメタルの響きが、やけに空々しく響く。

携帯画面の中の美狗は二人の反応が面白いのか、犬に似た容姿なのに猫のようにニヤニヤしている。

ややあつて。

「……それ、メジか？今日は4月1日じゃないよな？」と、金。

（今、バリバリの8月よん）と、美狗。

「……」

「……」

美狗のいつたことが理解できて、なおさら二人は絶句した。

「あ……あの……あの郭深猫、なのか！？」清京の件で黒衣僧とやりあつて、しかも生きてるっていう噂は……ほんとつだったのか！？」

喚く雑狼。

数年前、清京で大地震が発生、1900人を超える死傷者が出て廃墟と化した、という事件。

一般ではそう報道されているが、事件の真相など、少し気の利いた人間ならだれもが知っている。

たとえばこの冒険者の二人しかり、情報屋の美狗しかり。

しかし、真相は知られていても、「真実」は誰にも 美狗にも分からないことだ。いまだに。不意に、戦車が減速。そのままゆっくりと岩陰まで厩を操り、停車させる。

そうしてから金は、改めて美狗に問いたです。

「おい、美狗、詳しく聞かせてくれ、何が、どうなつて、そうなっているんだ？」

郭深猫というビッグネームが出てきて、金はもちろん、雑狼も興奮気味だ。

（このお話の出所は二つ、黒衣僧の方からと八州役人の方から全冒険者や全賞金稼ぎへとつい

さつき、おふれ」が出たばっかだけど、どうする？どつちの「言い分」を聞く？）

ふん、と金は鼻を鳴らす。……言い分、ときたか。

「そんなのわかりきっているんじゃないか。八州役人の方を頼む。」

即答。当然だ。今どき黒衣僧共の与太話を信じることなぞ、神の存在を信じるのと同じくらい空しい。

「おkじゃあ話すわね。八州役人さんの方を。」

じゃ二人とも、持つてるノーパーソを起動させてみそ。」

「オーケー。」

さつそく雑狼は、座席の後ろにしまっており、ノートパソコンを引きずり出して、電源を入れる。

たちまち美狗からフォルダが転送されてきた。タイトルは郭深猫。

さつそくフォルダを開く。

しかし、データが重いのか読み込みに時間がかかって開かない。

先に口頭で美狗が説明し始める。

（昨夜7時ごろ、実は猫耳族だった郭深猫が何かコスロリ格好をした少女連れ、そうとは知らない八州役人の一員であるエルフ族の方九娘さん（三二四歳）とその部下であるマライカ族の遥美香さん（二三〇歳）を露怒李解巢飯店という屋号の料理店におびき寄せ、拉致監禁しようとして強襲。

その際、なんと黒衣僧数十名が押し掛け、郭深猫と協力して二人の八州役人を襲ったという。

二人は抵抗したがあえなく拉致された模様。

郭深猫と黒衣僧らは二人の持っていた機密事項を狙い、犯行を犯したものとみられる。

八州役人役人長 黄点世氏は事態を重く受け止め情報公開し、民間の協力を大きく求める方針。

二人、もしくは郭深猫を目撃したという情報を知らせた方には賞金五千現、二人を救出された方には賞金五万現。

そして郭深猫を捕縛したものには賞金五千万現を。必ず生かしてとらえる事。

ご協力、お願いしたりしなかったり？みたいな？）

「最後の方でいきなり砕けた言い方をすんな。程よい緊張感が台無しだ。」

と、雑狼。

（何いつてんのよう。八州役人さんのおえらの方の本音を言っただけじゃない。この事件で八州役人のお偉いさんは黒衣僧どもといろいろ問い詰めるみたい。ま、当然だけど。

んでこれが、郭深猫の素顔と目される写真。こっちが拉致された間抜けな八州役人さんの写真。三人とも結構な美人つしょ。）

いいタイミングで読み込みが終了し、画面が出る。その画面に映る写真を見た金が、ひゅつと口笛を吹く。

「ウオオ！どの子もいい女だなオイ！」

つてゆーかこれが郭深猫！？マジか？！俺はてっきり売出し中の期待の超新人アイドルかと思つたぜー！」

雑狼も驚きに目を見張る。

「これがあの郭深猫……俺はさぞ金剛羅漢もかくや、といったますらおを想像していたが……なんとまあ器量よしの少女とは……」

なるほど、こつも皆のイメージする郭深猫像と実物が乖離していれば、今の今まで姿をくらませることも可能だな……」

「いやマライカ族の子とエルフ族のこのお姉ちゅわんもなかなかどうして……」

「か美狗！これドッキリじゃねえだろうな！実はこの三人、売出し中のアイドルユニットとかだったらシバくぞ！」

携帯の方の美狗は苦笑しながら。

（あほ。こんな状況でそんな真似ができてたまるわけないじゃん。まあ気持ちは分からんでもないわ。私もちよつと信じられないから。でもそれ、証新証明、八州役人から公開された写真よ。八州役人さんが陽気で頭がハシケて今日のこの日を四月一日と勘違いしてなきやの話だけだよ。）

「それでだ美狗。」

雑狼が質問する。

「その八州役人の言い分を信じると102名もの黒衣僧をブツ殺したのはそのマライカ族とエルフ族の役人さんが抵抗したから、ということになる。

どうして冒頭で102名の黒衣僧を殺したのが郭深猫と言いつつ切ったんだ？」

実は郭深猫は精神を病んでいて、一度切れると敵味方お構いなく惨殺せずにはいられないイカレ女だったとか？」

金も雑狼も冒険者という「そついつ世界の住人」だ。たまに……否、ときどきそついつ人間と遭遇することがまある。

（さあ。そこまでは流石に分からないわ。でももしかしたらそつかも。フォルダ内の現場の写真、つていつデータを開いてみて。私がそつ言ったのがよくわかるわ。）

「はっ。」

と、雑狼は言われるままにカチカチ、とダブルクリック。

とたん。

金と雑狼は硬直した。

その硬直した二人を知ってか知らずか、携帯で美狗は続ける。

（ちなみに参考までに黒衣僧どもの言い分を話しくわね。

何でも八州役人のそのお二人が、実は生きてた郭深猫と手を組んで、何か犯罪をやらしたんだとか。そして事件を解決しようと乗り込んだ102名の黒衣僧を返り討ちにして逃走、そして民間の方、協力を云々、といったところね。

ま、私も信じちゃいないし誰もこいつらの言い分を信じるわけないと思うけどね。

だって何か犯罪を犯した、って何よ。どんな真似をしたのか具体的に話せて感じよね。何か黒衣僧の方が後ろめたい事があるの全開よね。）

金と雑狼は返事をしない。



返事が出来ない。

（今現在、八州役人さんと黒衣僧の奴らはお前が悪いやお前の方こそ悪いといった頭の悪い水かけ戦争の真〽最中。ま、当然黒衣僧どもの方が旗色悪いけど。これを機会に黒衣僧ども、本格的に解体されないかしら。そしたら世の中少しは静かになるのに。

いやまあ私の独り言はどうでもいいんだけどさ。

ところで二人とも、黙ってないで何か言つてよ。私寂しいんだけど。）

しかし二人には美狗の軽口につきあえる余裕がない。

……やああつて、なんとか金が口を開く。

「……人の死体を見て、吐きそうになるの、駆け出しだった頃以来だ……もうこんなの、慣れたはずだったのに……」

と、口元を押さえる。雑狼も、口元を押さえる。

「奇遇だな……俺も、だ……」

ノートパソコンの画面全体に大きく映った現場の写真を見て、二人の気分はブルーを通り越してダークそのものになっていた。

「いや、これは死体ですらない……！残骸だ……！……」

ちぎれた腕だったもの。内臓だったもの。足だったもの。頭だったもの。

もとはヒトガタだったものが、こつも徹底的に破壊され、分解され、血の海にまき散らされるという光景は、二人にとってもショックがでかった。

あまりに酷い。

あまりに惨い。

二人は戦慄した。

黒衣僧は今では墮落しきった外道集団だが、しかし未だに、忌々しい事に、八州役人に匹敵するほどの武闘派集団である。それが、102名も雁首そろえて一方的に屠殺されるなんて。

これが郭深猫の実力？それともこの八州役人二人の？

どちらにせよ最悪だ。今売出し中の新人アイドルユニットの三人組と言われれば一発で信じてしまいそうなのほどの美女のこの成りは、詐欺もいいとこだ。

しかし二人は熟練の冒険者だ。口元を押さえ、青ざめながらも、ホイールを回して画面をスクロールさせ、写真から必死に情報を集める。

いつの間にか携帯画面の中の美狗はひきつった笑みを浮かべている。

（すこいっしょ、流石に吐きはしなかったけどしばらくは肉料理を食べれない自信があるわ私。おかげでいいダイエットになりそうだわ。それでそのフォルダの隣に現場の全体の略図ものせたとわ。それも参考にして。）

美狗の言葉通り、隣のフォルダをダブルクリック。

すると、どの位置にどの、部品が転がっているのか、を事細かく記した全体図が出てくる。

「丁寧に解説付きだ。どの写真がどの位置のを映したのかという解説もある。」

「……なあ美狗、この写真とか、いったいどうやって手に入れた？ちょっと詳しくするのだが」  
 雑狼の質問に、美狗はうん、とうなづいて、

「やっぱり一番の理由は八州役人さんが混乱してくれていたから、というのが大きかったわね。詳細はそのデータの中に乗ってるけど、さらわれた役人さん、かなりの腕利きみたいね。なん

でもエルフ族の人は、ジテサイドチャクラム 残虐天輪、マライカ族の人は、ネメシスフェザー 復讐女神の一翼、と言っふたつ名を

もっていて……」

その美狗のセリフに、二人は声を張り上げた。

「何、残虐天輪と復讐女神の一翼だと！？」

ふたりの反応に、美狗はにやっと笑う。

（あら二人ともこの二つ名の事知ってるの？）

美狗のすつとばけたセリフに、金は声を荒げる。

「何が知ってるの？だよしらじらしい。俺らの世界でこの二つ名の武俠を知らないものはいねえだろうが……！」

曰く、単身で武装テロリスト集団「ケイオスレーベル」に乗り込み、物の半日で壊滅させたという狂戦士、残虐天輪！

曰く、どんな逃げ足の速い犯罪者でも、法の手の届かないほど金持ったクソ黒幕でも構わず、まるでスポンの様なしつこさで獲物を追い詰め、殺人許可証の名の下、天懲を下す、さながら復讐の女神の生まれ変わり、復讐女神の一翼！

このあだ名だけが独り歩きしてて、どんな顔なのかどんな名前なのか全く知られてなかったのだが、……オイオイすげえいい女じゃねえかよ……

そうかこれがあの、八州役人を代表する「人でなし」だったとは……」

金は興奮してまくしたてる。

美狗はまじめな顔でうなづく。

（つん、貴方達が驚いたように、八州役人内でもかなりショックが大きかったみたい。

昨夜八時前、そのマライカ族の遙 美香さんの持っていた式神、飛羽って個別名を復讐女神の一翼さんは付けてただけで、その式神がものすごい大急ぎで八州役人総本部に駆け込んで事の窮状を知らせただけ。

その式神のデータによると、なんでも当日4時ごろ、そうとは知らずにひょんなことから知り合った猫耳族の女の子 郭深猫の事ね と仲良くなって連れだって7時あたりに食事に出かけた二人は、7時半ごろ、黒衣僧たちに強襲されたんだって。

けれど、本性を現した郭深猫はその黒衣僧たちを秒殺。

それでどうやら八州役人さんをねらってた郭深猫はそのあと、まあ余計な茶々が入ったけど目論見通り二人を拉致出来たんだって。

ただここでミスを犯してしまって、郭深猫は美香の式神を逃してしまったの。）

なるほど腐っても八州役人だったという訳か。しかしまだ美狗がここまで詳しい情報を確保で

きた理由がまだだ。二人はさらにだまっぺ耳を傾ける。

（式神を逃してしまっぺ それで事の窮状を知ったほかの役人さんらは上を下への大騒ぎ。大急ぎで式神のメモリに記録されてたデータを本部のコンピュータに移して、速攻で情報公開したってわけ。

んで、私も情報屋のはしくれだから他の誰よりもこの公開された情報を知って、まあ私もびびったわ。

しかしそこでふと思ったの。昨日の今日で情報公開するなんて、いくらなんでもあわてすぎ、って。

もしかしたら、あわてすぎて、何か大事なデータをプロテクトし忘れてるんじゃないか、って。）

「……」「……」

二人は声も出ない。なんという抜け目のなさ。なんという頭の回転の速さ。なんという悪魔的ひらめき。つくづく恐ろしい女だ。敵に回さず、味方でよかったとしみじみ思う。

（まあ私もそんなに期待してなかったけど、それがまさかまさかの大当たり。プロテクトし忘れてた、式神から落としたデータを見つけてハックして、そしてその情報が今あなたたちのもとに届いてる、というわけよ。……まあでも、もしかしたらこの情報、八州役人がわざと流した敵を欺くための誤情報かもしれないけどね）

よくそんなこと思いつくもんだ。そして思いつくだけでなく、よく実行に移せたもんだ。

「いや……その可能性もあるけどさ、たぶんそれはないと思うな。さすがに美狗、おまえの抜け目のなさは八州役人のそれを超えてる可能性が大だ……」

頬をひきつらせながら、金。しかしその金のセリフに、美狗はプブツと笑って、

（なあに言っぺんのよ、八州役人から幹部候補としてスカウトされたことが実際にある貴方達に比べりゃ私なんてまだまだよ。）

「……」「……」

二人は苦虫をかみつぶしたような顔で、黙りこくる。

（あ、ごめんごめん。とりあえず、どう？八州役人さんからの賞金を、555の山分け、っていう条件なら情報収集協力するけど、どう？）

「っておい、何で半々なんだよ。そこは俺らが7でお前が3だろうが。」現場でドンパチやんの俺らだろうが」と金。

しかし美狗は余裕の態度を崩さない。

（ぶつぶつん？じゃあやみくもにそこらを探して回る？出来ないわよねえそんな事。確かにあんたらは超一流の武卿だわ。

いわく、春雷の斬空脚と謳われるテコンドーの使い手。

かたや、爆裂千手観音と恐れられる拳闘士。

でも知ってる？戦争における勝利つてのは大体始める前の準備で7割方決まるんですって。しかもお相手はあの郭深猫よ？少しでも多く情報を手にしときたいとは思わないの？

ぬー……

口ごもる雑狼。そんな二人にさらにたたみかけるように、挑発するように、携帯画面の中のことまじやくれた忌々しいコボルトの小娘……否、女は、両腕で挟む様に自分の胸を強調しつつ、私、ベッド上のギシギシアンアンだけが取り柄の使えない女じゃあないつもりだけだな

ああ、知ってる。骨の髄までその恐ろしさも。

その前に。ちょっとだけ、そんなに期待はしてないけど、気になったことがあったので、雑狼は聞いてみる。

「じゃあちよつと質問だ。なあ美狗、実は生きてた郭深猫が八州役人を拉致つてまでほしい機密つて何だろつな。」と、雑狼。

しかしその質問に、美狗はやはり肩をすくめるのみ。

「さあ？そんなの、ありすぎてどれの事やら、って感じよ。だって八州役人という存在自体が機密事項の塊みたいなもんじゃん。叩けばいくらでも万単位の金に換金できそうなオートギバナシが聴けそうよ。」

あ、ちなみに期待してほしくないんだけど、私が八州役人のメインコンピュータにハックして得た情報はそのフォルダが限界よ、いくらでも疑ってくれて構わないけど、これがほんとの所よ。

と、想像通りの返答。まあ、いくら美狗が油断ならなく、抜け目がなく、大胆な女でも、そこまで詳しい情報は無理だろう。郭深猫がほしそうな情報の確保など。

アイコンタクトで、雑狼はどうする？と聞いてくる。

金はうなずいた。

「オーケイそれでいこう。んじゃあなるべく早く郭深猫の居場所、探り出してくれよな。」

「おつすー もし分け前をネコババしたらあんたらを社会的に抹殺するからそのつもりでね」

あ、ちなみに今送った郭深猫のデータ、今からあと大体30分後に自動的にアンインストールされるから、なるべく早めに丸暗記しといてね。何せ八州役人様のコンピュータからハッキングしたものだからさ。

「……」

雑狼は鼻から嘆息。

これで話は終わりのはずだった。

しかし携帯の、受話器を置くマークのボタンを雑狼が押そうとする前に、美狗が続ける。

( あ、それでさ、その )  
「?.....なんだ?」

( まあ、この仕事とは関係ないんだけどさ、聞きづらかったんだけどさ、その、何でなの? 八州役人からのスカウト、蹴った理由:.....

だって滅多にないよ? あんな光栄な事。超一流の武俠として認められた証拠じゃない。それに二人も言ってたじゃない。一冒険者で収まるつもりはないって。それなのにどうして:.....)

雑狼は再び苦虫をかみつぶしたような顔になり、それでも精一杯無理に笑ってから、

「お前お得意の情報収集能力で調べたらい事だろう。きっと当の本人の俺らすら知らなかったことが知れるようになるぜ。」

その、無理やりな笑顔でそういう雑狼に、しかし美狗は肩をすくめて、鼻から嘆息。

「それがめんどくさいから直に聞いてんのに:..... まあいいわ。私の仕事は人のプライベートに踏み込んでなんぼの卑しい商売だけど、もつ済んで終わったプライベートの事は弱みどころか嫌みにしかなんないからもういいわ。」

それに貴方達の様な上玉のお得意様の心証、これ以上悪くする訳にもいかないしね。

退屈な雑談に付き合ってくれてありがと。..... それじゃ、またね。)

「ああ、よろしく頼む。」

そう言つて、やっと通話を切る。

「.....」

「.....」

しばし、車内に沈黙が流れる。

金も雑狼も、あと30分当たりで消える貴重な資料を、必死に頭に叩き込んでいく。

.....できれば一刻も早く頭から消したい光景の写真ばかりだが。

そうしながら、ポツリと、金が。

「..... そついや、郭深猫というビッグネームが出て、興奮してしまつて失念してたんだけどさ、これ八州役人が大いにかかわつてたんだよな、この仕事。いや当たり前前の事だけどさ。」

「 八州役人役人長、黄点世様、か:..... 」と、雑狼。

さらに、雑狼は続ける。

「考えてみると、事件が起きた昨日今日の内に情報を公開して発表、広く民間の協力を大きく仰ぐ、なんて思ひきつたことをしすぎだな。ふつーこーゆー事件は内密に内輪の人間だけで解決しようとするもんだらうに。民間に情報公開なんて最終手段もいいとこだ。」

八州役人に限らず、<sup>ヤクザ</sup> 幫や警察など、なめられちゃ終わりの商売は面子といつものがすべてだ。

その大事なメンツを、自分たちには面目がありません。なんて、早々にかなぐり捨てて、本当に思ひつきり過ぎだな。」

「何いつてんだよ雑狼。八州役人を代表するあの二大武俠が拉致られた時点で面目なんてない.....  
..... ってああ、そついつことか。ほんと回りくどいぜ雑狼、つまりお前が言いたいの

「……」

「ああ」

“八州役人は存在自体が機密事項”。美狗が何の気なしに言っただろうセリフが、二人の脳裏をかすめる。

そして二人は。

異口同音に同じ結論を口にする。

「あの土饅頭屋は、二人の貴重な武俠もろとも、すべてを闇に葬る気だ」

…… 再び、車内に沈黙。

「……だとしたらこのあり得ないほど思い切ったことをするのもうなづけるぜ。」

八州役人はそこらの警官やヤクザとは比較にならないほど面子が大事だ。何せ腐れ切った黒衣僧に変わる、正義の象徴として存在しなきゃなんないからな。

たとえよほどの事情通 例えば美狗とか にすらこんな役人のメンバーが拉致られたなんてスキャンダル、知られちゃなんねえ。しかも八州役人内で双壁をなすほどの実力者二人もろともだ。もうこの時点であの土饅頭屋、メンツ丸つぶれ、と判断するだろうな。それだけじゃない……」

と、金。続けて金が言わんとしたことを、雑狼が続ける。

「……ああ。あの数年前の清京の郭深猫の事件も含めて、黒衣僧共が何か必死に隠そうとしてきた、(知られちゃ実に都合の悪い事)を暴く大チャンスだ。上手くいけばこれを恰好の口実として、しぶといあの黒衣僧どもの息の根を止める事も可能だろう。」

その機会を手にする旨みを思えば、貴重な武俠の一人や二人、惜しくないと考えるだろうな実際。」

「ああ。…… 実際やるだろうな、あの土饅頭屋……」

あの あの郭深猫を生け捕り、って言っているのがいい証拠だな。普通あんな大量殺人犯、“生死問わず”っていつのが普通なのにな。明らかに黒衣僧にいちやもん付けるための口実を聞き出すために生かしてとらえよ、って言っただろうな。」

「……」

「……」

しばし沈黙。

「……どうしよう？俺としてはもう八州役人にかわるようなヤマノセンキョーと言いたいところだが、でも、こないだ女達、“ドサクサまぎれに消される”と分かっていて、ほとくのは俺のポリシーに反するしなあ……」と、金。

「俺の美学にも反する」と、雑狼。そこはかとなく、やる気になっている。

「それに、あの土饅頭屋には、いつか“借り”を返したいとは思ってたんだ。」

……いい機会だ。真つ向切つて『おまえは間違っている』と看破する、な」

その雑狼のセリフに、金もやる気になってきたようだ。

雑狼は続ける。

「とりあえず、郭深猫はしかと、だ。拉致られた二人の八州役人さんを救出することだけを考えよう。八州役人のあわてようといひ黒衣僧が102名も出張してきたことといひ、絶対何か裏がある。」

「オーケーその方針には賛成だ。上手くいきやこの上玉の八州役人さんと仲良くなれるかもな」

その相棒のやる気<sup>ベクトル</sup>の方向性が自分のそれとズレているのを知り、雑狼は苦笑する。

「やつぱ見た目通りの助平だなおまえは。……まあいい」

「よし！まずはこの先の街でクリとクラとクレ（注この戦車を牽引している雇たちの名前）にたらふく飯を食わせ、十分に休ませてから、美狗の情報を待とう！一見消極的だが、焦りは禁物だ。作戦は、とりあえず丸暗記したこの胸糞悪い情報からでもじっくり検討できる。」

そう言つと、さっそく金は雇たちに鞭をくれて、戦車を再び走らせた。

同時刻、とある町はずれの森の中。

森の中、といつても舗装された道路の路肩だ。そこにハザードランプを点灯させて止まっているキャンピングカーが一台。牽引する騎獣は、オーソドックスな軍馬が二頭だ。

キャンピングカー、といつても、それはただのキャンピングカーではない。一見その車はまともに見えるが、しかしその内側には分厚い装甲タイルがびっしりはられ、さらにはボタン一つで隠してある機銃が外装をめぐって表れるといひ、物騒極まりない改造車だ。

その中で、電源を落としたパソコンの、何も映つて無い画面の前で、さらに通話が切れて待ち受け画面に戻った携帯を持つて、ぼんやりとしている人物が一人。

美狗である。『そついつ世界』において、その名を知らぬ者はいない、腕利きの情報屋の女。

……しかしその話が少々信じられないほど、今美狗は何といひか、安心してた。

ほんのり頬が赤くなつていたりもする。

これでは、腕利きの情報屋、といひより、恋に恋する十代の少女、といった方が正しく見える。

やがてポツリと、漏らす。

「……雑狼のバカ。なあにが『お前お得意の情報収集能力で調べてみる』よ。スかしちゃつてさ。」

そつ漏らした後、のろのろと服を着替える。

派手なボディコンスーツから、地味な、そこらの量販店でお手頃な値段で買えそつな服に。

「人がどんな思ひでこんな恥ずかしいでーはーな服を着ているのか、きつと想像もしたことないんでしょつね、あの野暮天……」

そつしてつてあるコンタクトレンズをはずした後、コンタクトレンズ用の目薬をさして、アン

ダーリブの、メガネを付ける。こうすると、丸つきり「少しシャイな」ポルトの文学少女、ただし豊満な肢体を隠した」としか見えなくなる。

「好きだからこそ、踏み込めないってものがあるっていつの……」

そしてさらに同時刻。

「……う……ん……?」

少し呻きながら、

理花は気だるく視界をふさいでくる重い瞼を、なんとか薄く開けて眼を覚ます。

とたんに、意識を失う前の記憶がよみがえり、理花は一気に目が覚める。

「っ!?!」

がばつと半身を起してあたりを見回し、少しでも現状を把握しようとする。

まず理花の格好は意識を失う前の、白チャイナドレスのままだ。しかし腰には愛銃はない。腕は胴体もろとも、神呪捕縛縄で拘束されていた。

まず目につくのは、こいつい鉄棒の群れ。鉄格子だ。鉄格子が、この空間を二分するように床と天井を貫いている。

四方と上下には何の塗装もせず、また壁紙も張つて無い、実に殺風景な、しかし頑丈そうな壁が理花を囲っている。

そのまま、監獄そのもの、としか言いようのない場所。

鉄格子の向こうには、見覚えのある、理花と九娘の手荷物。そこにまとめて、理花の銃と九娘の『阿』が転がっている。もちろん鉄格子のおかげであそこまで手が届きそうにない。

見覚えのない、バッグやらなんやらは ……

「きつと、奴らの荷物でしょうよ。」

理花の右隣から声が出る。九娘だ。九娘も理花と同じく、意識を失う前の黒チャイナドレス姿のまま、しかし神呪捕縛縄で拘束されている。理花より先に目が覚めていたらしい。ペタンと女の子座りをしたまま、じっとしていた。

まだまだ理花は九娘より未熟なのだと知り、すこし悔しがる。

「……おはよう方さん。とりあえず現時点では、寝てる間に何かされてはいないようですね。多分」

「ええ、たぶん何かされては無いよね。」

でもいざとなったら わかるわね?」

と、何か決意を秘めた顔で、花鈴が言う。

理花も、何故か顔を引き締め。

「ええ。分かっています……」

そう返事をしてから、理花はあたりを見渡す。

「しかし……」



「ここには上下左右前後の石壁と、鉄格子と、荷物。それしかない。理花は疑問を口にする。

「ここ、出入り口がここにもないですよ。あいつらどうやって私たちをここに入れたんでしょうか。私たちをここに入れた後、コンクリで出口をふさいだ、って感じじゃないですし……」

「ええ、それをさっきから考えてたの。……何かしらね、ここ。」

彼女達が首をひねっていると、不意に第三者の声が聞こえた。

「……ここは僕たちの、“空間圧縮”して持ち運びしやすくしたプライベートルームの一室だよ。遥花鈴さんと遥理花さん」

……すぐぐざらざらした、まるで長い事声帯を使い古した老人の様な、低く渋い声。

その声が、あるつことが彼女たちの本名を口にする。

“……この声は　ッ……”

理花と九娘は瞬間的に身をこわばらせる。すると。

なにも無かったはずの、鉄格子の向こうの石壁に『ボウ……ッ』と光がともり、そしてその光はたちまち大きく広がる。

そしてその淡い光は人一人くぐれるくらいの大きさまで広がると、なぜか八角形の形で固定される。

そしてその、八角形の形で固定された淡い光の中から、一人の男の物らしい手が「ぬっつ」と現れる。

“え！？何？？なんなのこの超常現象の様な光景！？”といつかそのもの！？”

理花と九娘が驚きに目を見張っている間に、次に足、次に頭と、全身が現れる。

そこにあらわれたのは　……

「……おはよう、女装趣味の変態少年くん」

雷　……確か郭深猫がそう呼んでいた。

なりは美少年だが、おそらく郭深猫より格上の、化け物……

その化け物相手に、理花は何とか虚勢を張る。

　　そうでもないかと、彼女は彼に見とれてしまいそうだったからだ。

肩まで無造作に伸ばして、手櫛でしか整えてなさそうな、ぼさぼさの金髪。

……しかしその金髪は、光を反射してのではなく髪そのものが自ら光っているんじゃないかと錯覚しそうなほど、美しく、そして艶やかだった。

長い前髪から覗くその大きな二重瞼の瞳は朝焼けの、さざ波一つない湖のように青く、澄んでいる。理花の本心としてはいつまでも眺めていたいが、しかし吸い込まれそうな錯覚がして、なんとか視線を引きはがす。

その視線を引きはがして下に移したら、女の彼女でも妬嫉しそうなほど形の整った鼻梁に、男

のはずなのに少女の様なあどけない桃色の唇に、マシマロの様に柔らかそうな頬が見える。  
来ている服は、白に近い水色の拳法着だ。靴もカンフーシューズ。

今はもちろん女装を解いて、こつこつして性別にふさわしい格好をしている。

しかし、ともすれば美少女が無理して男装をしている。そうといっても差支え無いほど  
丈が足りないのも相まって 彼には輝く美貌があった。 背

“こいつは 天性の年上殺しだ……”

理花はそう断定する。

# 文 信 雷

ナマリ  
落ししました



彼女に変態呼ばわりされた雷は、困ったようにはにかんで、

「変態、か……まあ、言われてもしようがないよね実際……」

とはにかんでからポリポリと頬をかく。

その仕草は可愛いが、なんというか、声がやたら低いのですごく違和感がある。

「……その容姿に似合わない、低い声ね貴方。」

と、率直にそう感想を述べる。

「ん？不快かい？」

「まあ、そんな不快ってほどでもないけど、違和感になれるまで時間がかかりそうだね。」

「だよな……じゃあ、これならどう？」

途端。

彼のセリフの、『じゃあ』の所から、なんと声色が、年かさの男の渋いバリトン から、声変わりする前のあどけない少年のかわいい声 となった。

しばし、声を失う理花と九娘。

「……驚いた。あなたって声帯模写とかできるの？」

「うん。キーの高いソプラノからヘヴィメタルの人の超低音の歌声までなんでもござれさ。ああ、ちなみに理花さん、あなたが渋い、と言ってくれた声色は、僕が一番リラックスしている無作為の状態を出す声だから。まああれが僕本来の声、といってもいいのかな。」

といつて微笑む。

オッといかん、美声も相まって、ちょっと見とれてしまいそうだった。

理花は気を引き締める。

「そんなことより。」

不意に、九娘 いや、どうやらもう本名は知られてしまっているみたいだから、花鈴で

花鈴の固い声が二人の会話を遮る。

「いったい私たちにこんな真似をしてどういつもり？納得のいく説明をしてくれるんでしょうね？」

花鈴の詰問に、雷は首肯する。

「うん。説明はするよ。出来る範囲で、としか言えないけど。」

それと、そうそう」

と、雷は続ける。

「理花さん、あなたの式神ですが、確か個別名飛羽ちゃんって言いましたっけ？彼女、ちゃんと逃がしておきましたよ。今頃僕やマオに関する情報を携えて、八州役人本部にたどりついて、本部の方は大騒ぎになっている頃でしょうね。」

「え？」

当然、理花はもちろん花鈴も呆然とする。

「…… ちょっと聞いていい？」

眉根を寄せながら、質問する理花。

「どうぞ？」

と、小憎らしいほどに普通な雷。

「あなた……貴方達って私達をさうったんでしょ？」

「はい」

「できるだけその事実が私達の仲間には知れない方がいいんじゃないの？」

「まあ当然いずればれる事ですが、そうですね、できるだけ一日でも遅くばれない方が好都合でしょうね」

「しかも自分たちの情報まで知られちゃまずいんじゃない？」

「そりゃまあ」

平然と返す雷に、うん、と理花と花鈴は首をかしげまくる。

「な……なんで飛羽を逃がすなんて……そんな自分たちに不利になりまくる酔狂極まりない真似を……」

「む……むちゃくちゃ理解に苦しむんだけど……」と、こちらは花鈴。

呻く二人に、しかし雷は気取った仕草で「こつも気取りすぎると逆に滑稽なはずのだが、この美少年がすると厭味なくらいムッている。両手をゆるりと広げ、

「さあ」

と、露骨にはぐらかすのみ。

「ともかく。」雷は鉄格子の鍵を開けながら、

「朝食の準備ができたから、我が家の食堂まで案内しよう。いろいろ聞きたいことや突っ込みた

いことがあるだろうから、食事がすんでからでも遅くはないでしょう。

どうしても早く聴きたいのであれば、食事しながらでも構わないよ。」

そう言うつと。

なんとあるつとことか、彼女たちを縛っている神呪捕縛縄をほどき始めたではないか！

「……どついつつもりなの……」

流石に思いがけない事をする雷に、二人は狼狽する。

「こつもこつも」雷はシレっ。

「ただ食事に案内しようとしているだけさ。」

私達は舐められている……

自分の実力なら、私たち程度、いくらでもあしらえらるても言うつのか……

瞬間的に「カアッ！」と頭に血が昇る二人。

そして二人のやることは一つ。

ちよつとした爆音とともに、即座に“結界域”を展開！

「ムアあっ！」

「フウッ！」

そのまま理花は手のひらを上に向け、肘から指先までを力点とし、肘を開かず、むしる締めるように注意しながら体の内側から外に向かって掌を上にした貫手、俗に地獄突きと言われる手の形。このとき人差し指・中指・薬指の先が横一列に並びようにするのがポイント。雷の喉笛に、繰り出す。

花鈴は爪先蹴りを奴の後頭部に繰り出す。

決まれば一撃必殺の急所攻撃！

しかし。

ビタアッ！

「！？」

「！？」

何が起ったのか分からない。

なんと、急所攻撃が雷の体に当たる直前、彼女達の体が勝手に硬直してしまったではないか！

当然、理花の指先と花鈴のつま先は何もない虚空に縫い付けられたかのように動かない。

ぶるぶると筋肉が痙攣するが、しかしそれ以上の事が出来ない。

「クッ……」

虚空から引きはがすように、なんとか飛び下がって雷から距離を離す。

「……………」これは一体！？

うめく花鈴。

雷は微動だにしてない。不意に、口を開く雷。

「貴方達、自分の左鎖骨下あたりを見てもらん。」

「……………」

雷がおかしなことをしたら即座に反応できるように気を張りながら、二人はチャイナドレスの、胸元のスリットを少しめくって確認してみる。

「……………」これはもしや！？

なんと雷が言った左鎖骨下あたりに、何かこう、携帯読み込み機専用のバーコードの様な

奇怪な模様が刻印されている！

「まさかこれ、……………」プリズンナノマシン！？」

花鈴が絶望そのものといった顔で叫ぶ。

プリズンナノマシン。

それは、特に危険な捕虜や囚人相手にのみ使用が許可されたナノマシンだ。

だいたい注射器などで、体液と同じ濃度の食塩水とともに注射されるものだが、これを注入されたが最後、看守や監視人に逆らう事が一切出来なくなり、逆らおうものなら先刻の彼女達の様に神経を操られて硬直させられたり、激苦痛を脳に送り付けられたり、また命令どお

りに体を動かされたりするといった、文字通りの絶対服従の超微小拘束具、だ。

「そ、そんな馬鹿な……！これはそのあまりの危険性と人権無視性からたとえどんな凶悪死刑囚相手でも、かなりの使用制限と使用許可の為の膨大な法的手続きが必要とされる代物……！

あまりに嚴重に管理されすぎて八州役人でもそう簡単に扱えない代物を……な、何であな

たが持っているの……」

滑稽なほど青ざめながら、理花は喚くことしか出来ない。

“こっ、これでは……100パーセント逃げる事が出来ないッ!”  
雷が答える。

「ああ、この日の為にマオがかなり危ない橋を渡って手に入れたんだって。貴方達に注入したそれを手に入れるために蓄えの3分の1が無くなったと、ぼやいてたよ。」

「くっ……」

下唇をかみしめて、悔しさをこらえる二人。

なんといつ、用意の良さ。こんなもので用意するとは……

花鈴が食いしばった歯の隙間から絞り出すように、雷に聞く。

「……ブリズンナノマシンまで使って私たちを拘束して……あなたは……いや、貴方達は一体何をしようといつの!？」

雷は背を向けて、壁から淡く光っている八角形をくぐりながら、

「それも朝食をとりながら教えてあげるよ。」

まあ、そつ「結界域」を展開しないで。少なくとも、僕は、僕たちは貴方達に仇成そつとはしてないから。

少なくとも、今は、ね。」

二人は顔を見合わせ、それから鼻からため息をついた。

どの道、今はこいつらに従っしか選択肢がないと。

雷の背中に、すごく鮮明な赤色で、

“崩壊突撃”  
ほうかんとうげき

という言葉が染められているのを確認する。もとの拳法着が白に近い水色だから余計に鮮明に見える。

“山をも揺るがす突撃、ね……”

その大げさな言葉に理花は呆れる。

“世界を滅ぼすだの、山をも揺るがす突撃だの、こいつは一体どこの末期の中二病患者だつつの。”

……しかし最悪なのは、こいつがただ口先だけで訳の分からん寝言をほざいているだけのものの道理の分からんガキではなく、下手をすればあの……あの郭深猫よりも格上かもしれない武俠だということよね……

そこまで思い当り、理花は自分の想像にゾッとする。

こいつは。こいつらは。本当に。

もしかしたら知ってはいけない何かを、本当に知っている……

世界の根底がひっくり返るほどの何かを。

「……………」

さつきから寒気が、止まらない。

しかし、ここまで来たらもう、毒を食らわば皿まで、といった心境だ。

何とか笑いの形に理花は唇をめくりあげ、虚勢を張る。

「ふん。いいわよ。聞いてやろつじゃない。せいぜい私たちの度肝を抜くような与太話のネタ、披露してみる事ね。」

八角形の発光体に触れるのはちょっと怖かったが、なんかぐにゅり」といった感じの、まるでゼリーのような感触の後、すぐに景色が牢獄から、何か普通の民家の短い廊下に変わる。

その突き当たりに、拍子抜けするほど普通の民家と変わらない、広いリビングとオープンキッチンがあった。

「あ、はい一人ともおはよう、朝食、用意できてるわよー」

マオが気安く二人に朝の挨拶をしてくる。

マオは水色のタンクトップに、水色の縞縞模様のショーツといった下着姿に、エプロンをつけただけの格好でフライパンを握っていた。

男ならだれもが鼻の下をのぼす格好だが、あいにく二人ともノンケだ。レスじゃない。

理花も花鈴も返事をしない。ただ「フン」と鼻息で返事をするのみ。

メニューはできたてのトーストにたっぷり蜂蜜を塗ったもの、

卵を二つ使った半熟のベーコンエッグにキャベツとトマトを添えたもの、

そして何故か味噌汁。ここだけ和風。

デザートにバナナ、飲み物は牛乳、だ。しかも牛乳とは別に、「UHT」も用意されている。

“豪勢な朝食だ。ありがたく頂くとしよう。”

理花も花鈴も無言だったが、マオと雷の二人は他愛も無い話題で仲良く談笑している。マオが一方的に話しかけて雷はただ頷くだけ、というものではあるがそれなりに楽しそうではあった。

あまりに能天気を楽しそうだったので、少々理花は癪に障った。なので、食事が終わるのを待たずに早々に質問することにする。

まずは当たり障りのない事から。

「……聞きたいことがあるんだけど。」と、理花。

「ん？ななに？」と、マオ。

「あなた、形意拳の達人である以前に、<sup>ウロウロウロウ</sup>八卦掌の達人でしょっ？」

「ぶっふん？」と、少し目を丸くする郭深猫。

<sup>ウロウロウ</sup>八卦掌とは、グルグルと円周を歩きながら技を練るのが特徴的な、武術の一派だ。

本来八卦拳という門派名なのだが、しかし拳を使う事は稀で、むしろ掌打を多用するところからいつしか八卦掌と呼ばれることになった。

体をひねりながらくるくる回ったり、手を開いた状態で技を繰り出すから、一見して踊りか何かのように見える。

だがあれは常に敵の外に回り込もうという戦法を表しており、掌打を多用するのもこっちの方が変化して敵を打ち据えるのにちょうどいいからであり、見た目とは裏腹に意外に荒っぽい門派なのだ。

「どうしてそう思うの？」と、マオ。

「まず、昨夜『鉄塊の古』を倒したときに使った、あのステップ」

理花は続ける。

「爪先を外に向けながら斜め前四五度に進めるあの歩法、確か八卦掌の『はい歩』っていうものよね。

それだけじゃなく、『大蛇の張』の攻撃や『鉄塊の古』の攻撃を捌いたあの『突き上げ受け』、確か八卦掌の手技の『穿掌』よね。八卦掌拳士はあの手技で攻撃するのみならず防御するのだとか。」

理花の指摘に、うん、とつなづく郭深猫。

「全問正解。その通りよ。」

私、以前から形意拳だけじゃままならないって感じてたのよ。

形意拳は攻撃力を 当たって効かせる技術を求めるあまり、確実に当てる技術がどうしてもおろそかになってたからね。どうしても自慢の攻撃が当たらなくてイライラしてたの。そこで形意拳の特性である剛直、豪快とは正反対な拳法、陰険で卑怯な感じの八卦掌に目を付けたの。

いや、陰険で卑怯といったら語弊があるけど、つまりはそれだけ使いやすくて実戦的っていうんじゃない？ 剛直、豪快という言い方、別の言い方をすれば大雑把で融通がきかないってことだしね。八卦掌って最初から相手の側面に回ってあわよくば後ろに回り込むのを目的にしてるじゃない。

この拳法の攻防理論と形意拳の攻撃力って驚くほどマッチしててね。八卦掌を習得してからは面白いように攻撃が当たるようになったわ。

まあ、そんな感じ。 ほか質問は？」

次は花鈴からだった。

「あの、張の奴を思いつきり宙に浮かせたあの『岱手』って技、何？ シロート相手ならともかく、あいつほどの武俠を浮かせるなんて結構すごい事なんだけど。」

「ああ、あれね。」

あれは八卦掌の、いわば奥儀に属するものでね。詳しい原理は流石に企業秘密。そこらへんは察してね。」と、マオ。にべもない、とはこの事だ。

まあ、武俠が自分の切り札をそうそう明かさわけがない。



次は理花からだ。

「 どうして、私達の本名を、その女装少年が知っているの？」

「それは簡単」

といって、テーブルの下から、

「これの中身をみたから」

……私達の『ボロコソ』二つを取り出した。  
なるほど。

それなら話が速い。二人は苦み走った顔になってしまつ。きっと本名だけではないのだろう、知られたことは。

「正直言つと私達の狙いは『これ』なのよねー。ま、ところどころプロテクトがかかってたけど私ハッキングも得意だから。中身の方、隅々まで見せてもらつたわよ。ほんと隅々まで、ね。」

例えば、貴方達の、交換日記みたいなメールのやり取りの後とかも、ね。」

「 ！！」

瞬間的に、理花と花鈴の顔が、耳まで真っ赤になる。

マオはケラケラ笑いながら、

「いやー。二人とも仲が好くつてお熱い事で。まるで付き合つて間もない百合ん百合んの年の差レスバカップルみたいな、見ているこっちが恥ずかしくなりそうな甘い言葉の囁きあいはないかな読みこたえがあつたわよー。ウププのプー」

マオの「ケ」に仕切った言い方に、理花と花鈴は瞬間的に殺意を全開。

「キエ ！」

「カア ！」

二人は顔を真っ赤にしながら手直にあつた皿を手にとり、マオの顔面目がけて叩きつけんと振り上げ。

そこでプリズンナノマシン発動。

ビビタアッ！……と強制的に二人の体は硬直してしまふ。

「ぬぐぐ…」「ぐううう…」

二人は呻くことしか出来ない。

「まあまあ落ち着いてお二方。私は仲の良さを褒めただけよん。血がつながってないのにこんなに仲の良い母娘つてすばらしいと思うわ私。とりあえず食器置いてくれない？」

「……………」

猫そのものの顔でニタニタ笑つマオに、二人は従うしか出来ない。

「……断つてきますけど、私達、そんなんじゃないですからね」と、理花。

「私達、純粹な意味での母娘ですからね！」「と、花鈴。

「あーはいはい、そーゆーことにしときましょー。」「と、二人の弁解を、笑い飛ばすマオ。

さらにムカッ腹が付いたが、なんとか二人は我慢。代わりに理花は

「 大体私達のボロコソなんかとつてどうしようといつの！？」と詰問。

マオはシレッと答える。

「そんなの決まってるじゃない。悪い事すんのよ。  
これって単体でスーパーコンピュータばりの容量があってインストールされてるソフトもかなり便利な代物なんですよ？」

まあ、貴方達を生かしてんのもこれを使いたいが為なのよね。

たしかこれって、持ち主の脳波が途絶えたら自動的にシステムダウンするんだっけ？機密情報を守るために。でしょ？」

「……………」

二人は絶句する。かろうじて理花が、

「……よく調べてんじやない。わざわざプリズンナノマシンまでかっぱらってまで私達を拉致るだけの事はあるわ」

と、かすれた声で言っしか出来ない。

「まあね。でもこの持ち主が死んだら自動的にシステムダウンするこの機能、持ち主の八州役人さんが捕まったり△△をするような弱い奴じゃないって前提の、もういシステムよね。  
ま、私や雷にかかればどいつも弱いってことになるから仕方がないのかも。

それでほかに質問は？」

マオの言い草にますますムカつ腹が立ったが、なんとか我慢して、今度は理花が質問。

「それで、雷って言ったかしら？」

貴方     “エレクトロニカルライマ 八極” って何？」

と、雷に質問。

雷は、うん、と一回肯いてから、

「     武術の流派の名前、さ。」

まあ……伝承者は今現在僕一人しかいない、さびれた拳法だけどね。

人と戦う際には、雷が耳を覆う暇もなく落ちるように、力と技で圧倒する

まあ、とどのつまり、

そう言っ立ち上がり、後ろを振り向く。

その背中には、

“崩壊突撃”の赤文字が。

「     といった拳法かな」

そう言っ、また席に座る雷。

大げさな拳法もあつたものだ。

ただ 大げさなだけならいいのだが。  
「なるほど。」

それであなたの名前は雷、というわけ?。」と、花鈴。  
雷は少し頬を掻いてから、

「いや。それはただの偶然の一致」と律儀にこたえる。

「ちなみに」と、口を挟むマオ。

「認めたくないけど、私より強いわよ、雷は」

と、あっさりそう言う。

花鈴は少しだけ苦笑を洩らし、

「 でしょっね」

といった。

自分らの勤通り、か。プリズンナノマシンの事も相まって、本格的に、これはまいった。

「じゃあ次は私」と、花鈴。

…… 本題はこれだ。

「さっき、その女装少年くんが、ここは空間圧縮して持ち運びやすくしたプライベートルームって言ってたけど、どういつわけ?」

たしかに42年前の結果域発生現象で、科学はもう昔の人間から見たらオカルトにしか見えない領分まで踏み込んだのは確かだわ。 ” 結果域 ” 発生における解明研究の産物として、空間や時間を、伸ばしたり縮めたり出来る、という事も不可能じゃないとか。

しかしそれはまだ仮設段階の域を出てなくて、まだ試作品の実用化にすらいたって無いはず。

貴方達の言葉を信じるなら、私たちはオーバーテクノロジーの真ただ中にいるという事になるわね。

一体こんなオーバーテクノロジー、どこから持ってきたわけ?」

いろんな裏事情に詳しくて一般には出回って無い技術をも使っている八州役人<sup>わたくし</sup>から見てもこれは異常に過ぎるわ。

…… それともただ単に私達を煙に巻いてからかうためだけにそんな与太話を?。」

理花の質問に、郭深猫は「んーそうね……。」と視線をぐるりと回しながら少し考え、

「貴方達、 ” 戒族 ” って、知ってる?。」

そのマオの言葉に理花と花鈴の二人は

「戒族!?!」「戒族ですって!?!。」

突然理花と花鈴が声を上げる。

「知ってるも何も…… それ八州役人の第一級極秘文書の一つの中に乗ってあったわ。なんでも大昔の文明黎明期に滅ぼされた民族って……。」と花鈴。

かつてものすごい怪力で「異思の物共」を倒す戦闘民族だったが、逆にその力を恐れたほかの人々に、数に物を言わせて滅ぼされた。

そついつ話だ。

「ってなぜあなたが八州役人の様な特別な職についている者しか知らない単語を知ってるの?」愕然としながら、理花。

その二人の言葉に、マオはニヤリ、とする。

「その大昔に滅ぼされたはずの、戒族の末裔が、実は生きていたら?」

「!?!」

二人の顔がしかめられる。

その二人に、マオは続ける。

「ちなみに説明するけど、

“戒族”はいわゆる『民族』ではなく『同胞団』とか『秘密結社』といった方が正しいわね。種族の差はなく、選ばれた者が、戒族の一員となる。

そして『その戒族って一体何なの?』と貴方達に聴かれる前に答えるけど、

まあ、戒族とは大昔からその言い伝えられている「怪力」で以って「異思の物共」を倒す使命を帯びた、『正義の集団』って所ね。

そして私達はその『正義の集団』たる、戒族の一員に最近選ばれた者たちってわけ。」

正義の集団。

……なんて胡散臭い。

理花と花鈴は顔をしかめる。

「……まあ貴方達は内心『うさんくさあ……』と思っている事が手に取るようにわかるわ。

まあ分かるけど、今のところはこの説明で無理矢理納得してね」

そう言っぺるりと舌を出し、笑つマオ。

「……」

その仕草が、本当に腹に「物含んでいるようで、理花と花鈴は氣にくわない」

だが「無理やり納得しろ」と言っている以上、この説明以外言つつもりはなさそうだ。

「……だから、なの?」

大昔から、異思の物共と戦っている自称、正義の味方集団としての『よくある特権』で、この家みたいなオーバートテクノロジーを使う、と?と、理花はマオに確認をする。

「その通り」と、マオ。

「ああ、さらに説明を補足すると、何故表向き、戒族は滅んだことにしているのか?と、聞かれる前に言っけど、

まあ、そっちの方がいろいろと都合がいいからよ。いろいろと、ね」

かつてものすごい怪力で「異思の物共」を倒す戦闘民族だったが、逆にその力を恐れたほかの人々に、数に物を言わせて滅ぼされた。

その大昔に学んだ、対抗策、か。

すると、さっきまで黙っていた雷が突然口を挟んできた。

「……僕は、戒族、じゃないよ。元、戒族、だ」

そう言ってそっぽを向く。

「もう知つてのとおり僕の目的はこの世を滅ぼすことだ。

戒族だの「異思の物共」だのもうどうでもいい。もはや自分と、自分の半径5メートル以内の範囲の事しか眼中にない。

「……こんな奴が、戒族を名乗っていいわけがない」

「……」

「……」

「……」

とたんに、何故か気まづくなるあたりの空気。

マオは「ン、ン、ン……」とわざとらしく咳払いをしてから、続ける。

「ま、まあそれはともかく。……そしてこれが、空間圧縮、なんてオーバーテクノロジーを使える理由。私達が貴方達と負けず劣らず、特殊な人間、だから。

まあ今日の所は、こんなところでもいい。」

「まだよ。まだ、肝心の事を聞いてないわ」

と、花鈴。

「晴京大虐殺」

「……」「……」

この単語が花鈴の口から出た時、場が瞬間的に静まり返る。

しかし、

「これについてききたいわ。主に真相について。

あなたはこの事件の当事者でしょ、洗いざらいこの事件について聞きた……」

「ああ、それはまた今度。

話せば長くなるから」

と、マオはにべもなく返答を後回し。

本当ににべもない。当然花鈴は「……」と不満タラタラの顔だ。

しかし今度は理花の方が話を終えようとしているマオに、少しだけ食いさがる。

「あ、じゃあ最後に、一つだけ」

「ん？、なあに？、短めな質問でお願いね」と、マオ。

「ええ。」

「……貴方達が、戒族、という『秘密結社』の一員で、私たち以上にいろんな裏事情に詳しい事は分ったわ。」

だからもしかして。

……本気の本気で、この世を滅ぼすことができる方法を知ってたりするの?」

ズバリ聞く理花。隣で花鈴が「……………」と、顔を引き締めている。

これにはマオでは無く、雷が答えた。

ほぼ即答である。

「もちろん」

「……」

理花と花鈴は雷の方を見やり、渋い顔をする。

しばし沈黙が場を支配した後、質疑応答の時間はこれで終わりにしてもいいだろうと判断したマオが締めくくった。

「じゃあもうこれで続きは次回にまわしてもいいわよね?」

さてそれじゃあ二人とも、命令よ。動かないでくれる?」

ブリズンナノマシン作動。

ピタッと二人の体が自身の意志とは関係なく、勝手に硬直する。

どうやら、自分たちの体内に注入されたブリズンナノマシンは、「命令」という単語に強く反応するらしい。

「!?」「……………」

一体何をするといつのだろう?

四肢を全く動かせず、顔をこわばらせてマオの拳動を眺めるしか出来ない理花と花鈴。

見ると、マオはリビングの隅にあった三面鏡の化粧台の方へ行き、引き出しを開けて、何かの箱を取り出す。

そしてマオは硬直して恐れおののいている二人の目の前のテーブルに、その箱を置き、ふたを開ける。

そこにあつたのは……粘土、である。

よく子供の教材兼、おもちゃとして使われるあの粘土だ。

それ以外の何物にも見えない。

しかし、理花と花鈴はこれが何なのか一目で見当がついた。

“あ、これは……変装用の粘土……無貌の土……”

これは皮膚呼吸のできる特殊な粘土で、主に顔に塗りたくったあと、なりたい顔の形に入らとかで細工をして、別人になり済ますための道具だ。理花も花鈴も八州役人として潜入捜査とかをする際、よく使っている。

マオはそれを手にとってこねながら、

「貴方達とっても目立つ容顔してるから、少し地味になってもらうわね。

あ、雷、じゃあそろそろ支度してね。」

「ん」

マオの言葉に、短く返答してから、三面鏡の化粧台の方に向かう雷。見ると、慣れた手つきで自分に化粧を始めた。

たちまち紅顔の美少年が、絶世の美少女になっていく。

……多少面食いな理花にとってその過程は思わず口を半開きしたまま眺めてしまう興味深いものだったが、その視界をマオが粘土をこねながらふさぐ。

「じゃ、ちつとひんやりするけど我慢してねー。」

程よくほぐれた変装用粘土を、マオはまずは理花の方から塗りたくり始めた。

美狗からの仕事を引き受けた、その翌日。

纏州のはずれにある、旅人や商人などが足を休めるための、いわば宿場町とも言つべき町。その一角のベンチに、金と雑狼は座っていた。

二人の後ろに戦車と、戦車を牽引していた犀三頭がいる。犀三頭　クリとくらとクレ達は桶に顔を突っ込んで、中身のご飯をモリモリ食べている。

「……いい天気だな、雑狼」

「ああ。日差しが実に心地いい」

と、二人は暇そうに天気ネタを話して時間をつぶしている。

その二人に後ろからいきなり声がかかる。

機械合成音だ。

（ヒメそうね二人とも。人が必死こいて働いているといつの……）

金はだるそうに後ろの方を首だけ振り返って見、

「……なんだ美狗、おまえの式神か……」

いやいや、お前を待ってたんだよ」

と、何事もなさそうに言う。

それはかなり大きな、人の上半身くらいは全長がありそうな蝙蝠、である。だからもちろんそんな蝙蝠が翼を広げていると横幅がかなりでかい。

リアルな造形のコウモリではない。ミカルにデフォルメされており、目の所が縫いぐるみみたいにボタンだ。

が、しかしそんな蝙蝠の羽根は全く動かず、羽ばたいてもいないのに宙に浮いている。

しかもその蝙蝠の体色はどぎつい真つピンクで、腹部にはテレビのような画面が組み込まれており、そこに美狗の顔が映っていた。

その式神が、音もなく大気を揺らがせることも無くホバリングして降りてきて、ベンチの背もたれに音もなく着地。

彼女はデスクワークが専門だが、この武術全盛の時代、鍛えるべきことは鍛えているのだろう。でなければ式神を操れるほど、“結界域”を込める事は出来ない。

「で、なんだよ美狗。ケータイではなく式神の方をよこすなんて。」

再びベンチに座り、背もたれに止まっているピンクの「ウモリ」の、腹部に移っている美狗に話しかける金。

「うん。新たな情報が入ってね、そのための対策としてとある品物を渡そうかと思ってね。」

「情報？対策としてとある品物？」

「雑狼もベンチに座りなおしながら、画面に映る美狗に聴き返す。」

「うん。実は今回の、『郭深猫八州役人拉致事件』が起こる『5日前』にね。」

『八州連盟交流中央研究所』で強盗事件が起きてサ」

『八州連盟交流中央研究所』。

いわばここは同盟関係にある八州の最先端で、文明根幹を支えている科学技術・武導技術を日夜研究・開発しているいわば（ほぼ）国家の頭脳といつべきところだ。

八州役人とはもちろんゆるい協力関係にある。

しかしあまりに最先端すぎる技術の開発ももちろん行われており、同じ国家機関だがしかし八州役人とはべつたりという訳ではなく、八州役人でさえも知らないもしくは扱えないモノや事もあるのだとか。

「強盗？そいつは穏やかじゃないな。そこの『コンビ』とかならともかく、あそこかで……」  
と、金。

「まさか……」

今回の事件との関連性を美狗は匂わせてあり、それに関して雑狼は閃くものがあった。

「郭深猫が何かを盗んだ、と？それもヤバそうなのを？」

「うん、と美狗はまじめな顔でうなづく。そして声をひそめて、

「（ボソボソ）プリズン・ナノマシン数人分を」

「……！？」

二人は驚きに呻く。とはいえ、内容が内容だ。声は美狗と同じく控えめに。

「（ヒソヒソ）プリズン・ナノマシン！？」

「うお！おい、第一級の国家機密もんじゃねーか！？それが数人分！？しかも『5日前』かよ！何で『ユース』になんかつたんだよ！なぜ八州役人を動かさないんだよおえら方は。プリズン・ナノマシンだぞ？！」

金も雑狼もその実物は触ったことも無いし、見たとしても画像程度でしかないが、その危険性というか『多分使う機会があったら性犯罪に使ってしまうだろうないや絶対』といったほどの利便性をよく知っている。だからこそものすごい使用制限が為されているという事も。

そんな代物が盗まれて、騒ぎにならないとは。

金の当然の疑問に、美狗は肩をすくめ苦笑し、

「メンツ、って奴じゃない？第一級の国家機密の品を、しかも数人分ぱくられるなんて、研究所直属の『インテリジェンスガーディアンズ』にとっては鼻柱グシャッ！もいいところだわ。」

だから八州役人に知らせず、『マス』に隠して自力で解決しようとしてたみたい。



でもどうやらそれが裏目に出たみたいね。

ズバリ犯人は郭深猫、とまでは断定されてないけど、しかし昨日今日の内に八州役人さん2人が拉致られたでしょ？状況証拠から言って郭深猫がナノマシンを盗んだ犯人としての可能性が大よね。

便利だと思わない？相手は八州役人、しかも二人。

この猛者を拘束するのに、プリナノは必要不可欠かも。」

プリナノ？雑狼は首をかしげる。

……ああ、プリズンナノマシン、ね。

ともかく。

「……だとしたら、やばいな……」

雑狼は眉をひそめる。

「確かそれは注入した奴を拘束するのみならず、自由自在に操れるんだっただよな？下手をすればナノマシンで操られた八州役人さんが襲いかかってくるのが十二分にあり得ないか？」

「あり得るな……郭深猫や不確定要素のみならず、最悪救助すべき人間を敵に回しちゃうってこともありうるのか……いや、できればプリナノを盗んだ犯人が郭深猫、という予想が外れて欲しいんだが。」

金も難しい顔をする。

“そこで二人とも、手を出して”

式神の腹に移っている美狗がにんまり笑つ。

「ん？」「いつか？」

金は左手、雑狼は右手を式神の方へと差し出す。

すると、式神のピンク色のコウモリは前かがみになり、そして口から「げろげろり」と何かを二人の手の上には吐き落とす。

「これは……」

と金。

それは、ガス噴射式の注射器だった。銃の様な形で、引き金の前にあるカートリッジの中で透明な液体が揺れていた。

“コンピュータウイルスよ”と、美狗。

“十中八九八州役人さんはプリナノを打ち込まれているとみて間違いないわ。そう想定して、私急いでプリナノを無効化するウイルスナノマシンを作ったの。”

使い方は簡単。体のどこでもいいからそれを押しつけて中身のウイルスナノマシンを注入して。そしたら八州役人さんは自由になれるから。

まあ、私の予想がただの杞憂で、使う機会がなければそれにこしたことはないんだけど。”

「オイオイ、国家機関の人間が作ったナノマシンを、無効化できるのか？」

式神から手渡された注射器を矯めつ眇めつ金。

画面の中の美狗はチチチ、と右人刺し指を左右に振って、

「確かにプリナノと同じものを作れと言われたらさすがの私でも手に余るわ。

でも作るよりは壊す方が簡単なの。ウィルスを作るのも、ね。私の計算だと120パーセントプリナノを無効化できるわ。」

「『電脳界の黒死病』と謳われた私のクラッカーとしての腕前を信じなさい。」

と、美狗は胸を張る。その動きに合わせて、大きな乳房がぶるんと大きく揺れる。

「『電脳界の黒死病』って。それ謳われてんじゃなくて確実に悪口だぞそれ。」と、雑狼。

「『何かそのあだ名。はじめて聞いたが、ぴったり過ぎだろ』と、金は苦笑。

「貴方達が私に対してどんなイメージを抱いているのかよくわかる微笑ましい台詞ね。

まあいいわ。あとそれと、渡したいものももう二つあるから一回手だして」

「おう」「わかった」

もう一回ピンク色の「ウモリ」手を出すと、げろげろりと二人の手の上にあるものを吐き落とす。

「……『ゴーグル?』と、雑狼。

一目見るだけで、それは『ゴーグル』と分かる代物だが、しかし蔓やグラスのところどころになにか奇妙な回路が走っている。

「二人とも、(無貌の土)って知ってる?」

「?ああ、それってスパイとかが変装用に使う粘土だったっけ?」

と、金。

美狗は、

「そう、その『ゴーグル』はその粘土を使った変装を見破るための者よ。

(無貌の土)はもちろん八州役人も使っているわ。それを奪って郭深猫は変装するために使う可能性が大だわ。

それは見る対象の、『結界域』を読み取って、粘土ではごまかせない素顔を読み取るの。使い方の説明書も渡しとくわね。

あ、それとこれ、私ら裏の世界の人間でも手に入りにくい『ゴーグル』なんだから、丁寧に扱ってよね」

げろる、と式神が薄い小冊子を吐き出す。

つくづく用意のいい女だ。その小冊子を受け取りながら雑狼は美狗の完璧超人ぶりに苦笑。

乳といい有能ぶりといい嫁にするならもってこいの女かもしれないが、しかし100パーセントしりに敷かれまくってしまうのが目に見えているから、なかなかときめけない。

「オーケーありがとう美狗。あと、もう一つ頼まれてくれないか?」

「ん?何?」

「おまえはさして気にしてなかったんだろうけど、一応、郭深猫が連れていたというゴス少女の顔、調べといてくれるか?」

“その少女が気になるの?”

「ああ、お前が送ってくれたあの現場の写真を見て感じたんだが、もしかしたらお前がノーマークだったこの少女の方が郭深猫よりヤバいかもしれん。

いや、おれの勘が、ね……杞憂だと、いいんだが」

”。

一瞬キョトンとする美狗。

ゴスロリ少女の方が郭深猫よりヤバいと言われてもピンとこないのかもしれない

しかし美狗は二人の、とくに“ 武俠としての勘 ”というものに多大な信頼を寄せている。二人がこつこつ以上、「もしかしたら……」と思う美狗。

“ わかったわ。調べてみる。

あ、あと郭深猫の逃走ルートだけど、今あんた達がいる街を通る大街道を通る可能性が高いわ。その渡したゴーグルで毎日街道を監視して。

うまくいきやぶち当たるかもよ。”

「うまくいけば、ね……」

実にめんどくさい手段だが、ここまで“ 後衛 ”がいろんなものを用意してまで頑張ってくれたのだ。今度は現場の人間が頑張る番だろつ。

“ そつそつ、手渡したその秘密道具、壊したらもちろん弁償してもらっかんねー。

じゃ、わたしはこれで。がんばってねー ”

と、式神の腹の画面の中の美狗がそつ言ったきり、ブツンと映像が切れる。

そのままどぎついピンク色の奇怪なでかい「ウモリは首もなく、羽ばたきもせず、まるで見えない糸に釣りあげられたかのような感じで浮くと、

ヒンンッ!と空を裂いて何処かへと飛び去った。

「はえーな……もつ見えなくなったぞ……」と、金。

「いいなあれ。俺達も欲しいな式神」と雑狼。

「でも高えぞあれ。美狗ぐらい金儲けが上手くなかったら手え届かんだろ」

「まあ、ないものねだりしてもしょうがない

さて……おや?」

と、雑狼は気づく。

いつの間にか群衆が遠巻きに囲んでこちらをちらちら見てるのを。

群衆の中の一人の子供が母親に「ママ。あれ欲しー。アレかってー」とねだっているがしかし勿論「無理よ。我慢なさい。指差しちゃだめです」とたしなめられている。

金が苦笑する。

「こつやら美狗の式神が目立ち過ぎたようだな」

雑狼も苦笑して

「まーシヨッキングピンク色のでっかい「ウモリ」だ。しかも腹ん所にディスプレイ画面が内蔵された。あれで目立つなつ一方が無理だな。

しかしあいつのあのセンス、なんかならんか……」

「なる訳無いだろ。まあそれはともかく。」

「……移動するか」

「ああ」

「それじゃあ、今日はちょっと外出しましょうか」

そう言つと、やおらマオはベルトから何かを取り外す。

それは一見キーホルダー式の留め具の付いた、八角形の形をした鏡に見えた。

鏡の淵に八卦の刻まれた、いわゆる八卦鏡と呼ばれる、持つ者に幸運をもたらすという、まあオカルトグッズの一つだ。

しかし、そこらのファンシーショップで買える普通の八卦鏡と違つのは、何かいわくありげなボタンがいくつが備わっているところである。

そのボタンの一つをマオは『ポチッ』と押す。

……すると鏡の部分から『ハアッ……』と光がわき出て、虚空に

物置

唐住区

外に出る

武器を取り出す

もう一つの桃源鏡を手元に転送

といった文字がホログラムで浮かび上がる。

「それは……あ、もしかして!？」

何かをひらめいたのだらう、理花が声を上げると、

「そう。これが私ら戒族自慢の秘密道具。“空間圧縮”した家とかを持ち運べる鏡、その名も

“桃源鏡”。ちなみに桃源鏡の“きょう”は故郷の郷じゃなくて鏡の鏡ね。」とマオが答える。

「その鏡から出てる文字の中に(武器を取り出す)っていう項目があるところを見ると……」

ああ、黒衣僧との戦闘の際、貴方や雷が馬鹿銃や化け物槍を取り出したのはその鏡からだつたの……

そう花鈴がきくと、雷の方が肯定した。

「その通り。こうやって……」

雷もマオにならつて、ベルトに下げていた桃源鏡を外してその鏡についてあるボタンの一つを押し、虚空に文字を『ポウッ……』と浮かばせた後、“武器を取り出す”という文字に、人刺し指で触れる。

すると桃源鏡から「ぬっ!」といった感じで、昨夜見たあの化け物槍の柄らしき鉄柱が、石

突きの部分だけ現れたではないか！

「オオツ……！？」感嘆の声を上げる理花と花鈴。

「あの時どつから武器出してたのかと思っていたんだけど……これは気づかないわ……」と、理花。

「……というわけ。それでもちろん“外に出る”という文字を触れると」

と言いつつマオが鏡から浮かび上がっている“外に出る”という文字に人差し指で触れると、その文字からさらに光が「バアッ……！」と放射され、その光が一人くぐれそうな大きさの八角形の形に固定される。

その八角形の形に固定された発光体に顔を近づけ、何故か視線をきよきよらせるマオ。  
？発光体の向こう側でも見えているんだろうか。というか見えるものなのだろうか。  
理花と花鈴はマオのその動作に、首をかしげる。

「よし表にはだれもいないわね……」

はいそれじゃあしゅっぱーっ！

そう明るく言いながら、マオはその八角形の形に固定された光の中をくぐっていく。  
続いて表に出よつとする雷に、理花は聞く。

「……何のために外に出るの？」

普通、ほとぼりが冷めるまでこもる方が安全だと思っけど？

いや、囚われの身としては頻繁に外出する機会があれば、それだけ脱走する機会が増えてあ  
りがたいけど……」

やけっぱち気味な理花のセリフに雷は「っ」答える。

「釣り、だよ理花さん。」

自分を少しでも外に出すことでそう

「<sup>ディアオ</sup>刃を、おびき寄せるためさ……」

「……ディア……オ……」

いぶかしむ理花に雷はふっと微笑み

「まあ、いすれ話すよ」

そう言つて八角形に固定された「出入口」をくぐっていく。

マオと雷の、理解不能な行動の数々に理花と花鈴は首をかしげながらも、プリズンナノマシン  
を入られた捕虜である以上、二人についていくしか無かった。

「ひゃー。にぎわっているわね」「」

「うん」

とある宿場町。

上は黒のタンクトップにジーンズのハーフパンツ、さらに変装用として茶髪のかつらをかぶり、大人しめのメイクという格好になったマオ。これだけで印象がだいぶ違う。と、ゴシック・ロリータの格好でツインテールという髪形に女装した雷はそこで8月の熱気をさらに暑くさせる人々の活気にはしゃいでいた。

感じとしては天京のにぎわいと同じだが、どちらかといえばこちらは武装した冒険者や賞金稼ぎ、また一攫千金を狙う冒険商人といった武侠の人間が圧倒的に多い。

それもそのはず。ここには竜巢<sup>ドラゴン</sup>があるからだ。

竜巢とは、言ってみれば「異思の物共」が特に大量に発生する「異思の物共」の本拠地といった場所であり、たいていは洞窟の形となっており、人々が「結界域」に目覚める前は、竜巢がある場所近辺は超危険地帯に指定されていた。

竜巢はどこどこに点在し、この宿場町にある竜巢もそのひとつである。

本来なら竜巢がある場所近辺は人々はもちろん立ち寄れる場所では無かった。

しかし人々が「結界域」に目覚め、なおかつ数年前に「異思の物共」平定完了宣言<sup>1</sup>がなされてからは、竜巢は「危険地帯」ではなく、「狩猟解放区」となった。

“結界域”を展開し、「異思の物共」をこえる戦闘力を手にすれば、「異思の物共」はとてつもない「獲物」なのである。

岩巨人の体はとてつもない石材になるし、獣形や植物型の「異思の物共」はいい食材になるし、また<sup>2</sup>  
た<sup>3</sup>  
靈幻種の類は捕獲は困難だが、しかしひとたび捕獲し、しかるべき技術で加工し、精製すれば何らかの極上の漢方薬となるのだ。

もちろん狩りのための得物となり下がったとはいえ「異思の物共」も只でやられている訳ではない。やはり強い種族の「異思の物共」はいるし、一月に一人か二人の割合で竜巢での狩猟の際、「異思の物共」の反撃を受けて落命する武侠も少なくない。

しかしそういった危険を冒してでも「異思の物共」を狩って手にできる利益は実においしいのだ。

この宿場町は宿場町本来の役目とは別に、竜巢によるそういった諸々の利益の発生で糧を得ている。下手をすれば「本業」よりそれで儲けているかもしれない。

ちなみに何故こういった竜巢が発生するのか、今現在でもわかってない。

竜巢の一番奥底に行けば分かるかもしれないと幾度も冒険者の集団が一番奥まで潜ろうとしているが、当然奥に行けばいくほど「異思の物共」の抵抗が激しくなり、何より最下層に行こうとすればするほど遭遇する危険性の高い<sup>4</sup>恐竜種<sup>5</sup>の存在により、今現在もうまくいってはいない。

恐竜種の存在は人々が“結界域”を手にした今でも「犯されざるべき死線」<sup>デッドライン</sup>として存在している。

そういつた恐竜種の存在をたやすく屠れる武俠なぞ、数えるほどしかない。

例えば世界最初の武俠 植田盛雄とか、

“もしくは今、ただのおのぼりさんになっているだけの猫耳族の小娘にしか見えない郭深猫、とか……”

もしくは、人畜無害そうな美少女のなりをしている女装少年とか……”

暗鬱な気分ではしゃぐマオと雷から少し離れて随行している理花と花鈴は取り留めもなくそう思う。

今の彼女らの顔は、“無貌の土”を使ったマオによる特殊メイクで、美人でもなければ不細工でもない。実に特徴のない顔にされている。服も群衆に交じってしまえば特徴のない、こちらの量販店で買いそろえたものだ。

……ふと、道の路肩にずらり並んでいる露店には、特にお菓子を扱ったものが多いのに気づく。

「何か見渡す限り駄菓子屋はつかね……」

と、花鈴が心に思ったことをそのまま吐露すると、手前にいたマオがこう答えた。

「そりゃそうよ。この街に入る際かったパンフレットによると、この街にある竜巢は、とくに昆虫形の「異思の物共」が発生しやすいとか。

昆虫形の「異思の物共」の体液からはいい甘味料がとれるって知ってるでしょっ？」

特にいい甘味料が期待できる蟻妖怪<sup>アントマイン</sup>が特に多く発生するそうよ。」

そのせいかこの街にある竜巢は、ズバリ通称「蟻の巣」って呼ばれているんだって。

まんまよねー。もちっとひねねって感じよねー。」

手にしていた小冊子をめくりながら、そう答える。

「ふうん……それでお菓子屋が多いのねえ。」と、花鈴。

「みたいね。そのせいか、この街はパティシエたちのちょっとした聖地になっているみたいね」と、マオ。

それを聞いて、

「ねえねえ、ちよつとお店に寄ってかない？パンフにさ、どのお店が良いかのってない？」

と、ウキウキしながらマオに聞く花鈴。食べ歩きは花鈴の趣味にしてある意味生きがいだ。言い切ってしまうは生きざま、といっても過言ではあったりなかったり。

「そおねえ、この先にある“シュークリーム専門店「ギウギ」って所はどーお？」

マオも嬉々としてそう提案する。

「ウオ！屋号からしてそそるわね、いいいい」

自分の今の状況忘れてんのか。

ノリノリで答える花鈴に、理花の肩間にしわが寄った。

「ん、ごほん！ 余ソボソ何敵となれ合っているんですか花　さん！」

…… 本当は大声で叫びたかったし、名前を叫びたかった　もちろんそれとなく助けを求めるため　のであるが、プリズンナノマシンが作動して声の音量が勝手に小さくなり、あまつさえ名前の所だけ発音できなくなる。

プリズンナノマシンの高性能ぶりに内心齒噛みする理花。

「　あ。そ、そうだったわ…… 自重自重」

まじめな顔になり、取り繕う花鈴。

「いいじゃない美香ちゃん　せつかくお菓子の名産地にきたんだから、体重計が牙をむかない程度に楽しみましようよお　」

何かやたならなれしく偽名で呼ぶマオに、さらに理花は柳眉を逆立てる。

「グッ……あのね……」

プリズンナノマシンのせいで文句ひとつ碌に言えないことが分かってても、それでも何か言ってやろうと再度口を開けたところで、

雷が「くいくい」と理花の服の裾を引っ張った。

「　ん。」

理花が雷の方に注意を向けると、雷は一軒のお菓子屋の二つを指差す。

「あそこ……」

見ると、パンケーキ屋さびよん　という屋号の屋台だ。

目を引く鮮やかな黄色の看板にデフォルメされたかわいらしいウサギが描かれてあり、その屋台の隣で小さい女の子が、客寄せの演出なのだろう、ちよとしたピエロの格好をしてオカリナでポップな明るい感じの曲を演奏していた。

そこから甘い、いいにおいがしている。繁盛しているのだろう、それなりに客が列を作っている。

「パンケーキかあ。んーいいにおい。うん、よさそうね、三時のおやつはこれにしましょう。美香ちゃんもいいでしょあ。」

あくまでなれなれしいマオに本格的にイラッとくる理花。

「だからあのね……」

文句を言おうと再度口を開こうとしたが、声がしりすぼみになる。

何故なら雷が

「………(ー)」

と、切なげな上目づかいで理花の方を見やっているのである。

「う………」

その雷のあまりの「いたいけぶり」に何故かすごい罪悪感を募らせる理花。

…… そんなナリして野朗のくせに反則だわそれ。

理花は嘆息。

「…… 勝手にすれば、私達はおくまで捕虜。好きになさい。」

「イキイ美香ちゃん話がわかるウー　」



なぜか花鈴とマオが敵味方の垣根を越えて仲良く両手をパチンと合わせて歓声を上げる。自分の今の状況本当に忘れていたこのボケエルフ。何仲良く敵と手を取り合ってたんのよ。そんなに甘味が大事かと言ったかなんで私が分からず屋のポジションなのよそれとも私の器が小さいだけかそうなのか。

瞬間的に胸中に湧いたドス黒いアレを必死に押し戻そうとしている理花とともに、さっそく列の最後尾に並ぶ面々。

しかしいい匂いがする。屋台の軒先にぶら下がっているメニューはパンケーキにかけるソースが描かれてあり結構種類が多い。

見ると、背の高い、黒髪で黒縁めがねをかけたヒュマン族の青年がふつくとパンケーキを焼いている。

この屋台の主なのだろう。色男とは言いが、落ち着いた物腰といい誠実そうな目の輝きといい穏やかな笑顔といい、確実に魅力的な好青年と断言できる男性だ。女性ならたいてい「結婚相手ならこの人」というだろう、そんな青年だ。

そしてその隣でゆるくウキウキのかかった腰まである茶髪を、仕事の邪魔にならないようにひとまとめに結わえたヒュマン族の女性が、青年が焼き上げたパンケーキをトレイに乗せた後、ナイフで一口サイズに切ってから、お客の注文した蜂蜜（もちろん蟻妖怪の体液からとったもの）やらチョコレートソースやらをかけた後、フォークとともにお客に笑顔で手渡している。

美人で実に端正な顔立ちをしてはいるが、決して近寄りたいたいという訳ではなく、どこかところとしたたれ目は縁側で日向ぼっこをしている猫を思わせる愛嬌を備えてあり、男女問わず接するものを和ませる雰囲気があった。口元の黒子がなまめかしい。きっと男はこういった人を結婚相手に選ぶのだろう。理花はそう思った。

と。よく見ると細い体形なのに腹部だけ大きく盛り上がっている。

妊娠しているのか。

その女性がこちらに声をかける。順番が回ってきた。

「はいお待たせしましたお客様、いらつしやませ、4名様ですね？」

その容姿にそぐわぬ朗らかないい声だ。

「ええ、私は普通にマーガリンを乗せた奴をひと」「私は蜂蜜をかけた奴二枚！レラ（偽名）は？」「チョコレートソースの奴を二枚」「私はアップルジャムをかけた奴を三、いや四枚！バナナチップトッピング入りで！」

先頭の理花が自分の注文を言い終わるより早く、マオが勢いよく注文し雷が注文し花鈴がたたみかけるように注文。

そんなに糖分に飢えてんのかおまえら。何より落ち着け悪食エルフ。娘として少々どこるか過分に恥ずかしいわい。

そう思い、甘味を前に渋い顔をする理花。

「つぶぶ、ありがとございます、それではさっさと現になります、少々お待ちくださいね」

左手を頬に添え、目を細め、にっこり笑う女性。その左手に結婚指輪が光っている。

「ええと、お二人は夫婦なんですか？」

焼きあがるのを待つ間の時間つぶしに、そう女性と男性に声をかける理花。

「はい、結婚して10年になります。最近二人目の子供を授かりまして」

そう幸せそうに微笑み、自分のお腹を撫でる女性。

「え！10年になるんですか！どつからどつ見ても新婚さんしか見えないのに！」

「うわすこい若いですねお二方！しかもラブラブ！うっらやっましいー！」

マオと花鈴の冷やかしに、はにかむ夫婦。

「そうよもう毎日うちのママとパパ、朝から晩までラブラブでさー、私何かいつも見せつけられて大変なんだから。」

と、屋台の隣で、E口の格好して、オカリナを吹いて客寄せしていた女の子までもがそう冷やかしてくる。

「んもっ、この子ったら……」

眉を八の字にしつつも頬を赤らめ、おっとり微笑して女の子の頭を撫でる女性。おんなのこはあたまをなでられたのがうれしいのか、「えへへへへー」と笑つ。

不意に、雷が口を開く。小鳥のように美しい美声で。

「お姉さん、おなかの赤ちゃん、男の子なんですか、女の子なんですか」

と聞く。これには女の子が答えた。

「お医者さんの話だと男の子なんだって。弟がもうすぐできるんだって。今から楽しみ！」

と期待に胸を膨らませている女の子。そんな女の子に雷はうん、とほほ笑んで肯いてから、

「元気な赤ちゃん、産んで、今よりもっと、幸せになってくださいね……」

そう上目づかいで言つて、美しい妊婦に微笑みを送る雷。

雷の様な美少女（の格好をした男の子）に祝福されて、悪い気をする人はいない。

「つぶぶ、ありがとっね、お嬢さん」

そう言つて女性は雷の頭をなでた後、「ちゅっ」と額にキスをした。

「えへへ、あなたぐらいいかawaii女の子なら、妹も悪くないかもねー！」

と女の子に言われ、雷はシャイそうに顔を赤らめながらうつむき、

「あり、がとっ……」と礼を言つ。

その微笑ましい光景を見て、怒りはむしろ冷えて固まるように理花の胸中で煮え、静かにその冷たい熱気は理花の頭から頭頂へと立ち上った。

……世界を滅ぼすとかほざいているくせに、赤子に祝福を送っているんじゃないこの女が腐つてきたようなナリの人殺しのガキ風情が。白々しいわ。

我ながら汚すぎる、感じの悪さ全開の罵倒を、それでも腹の中で毒づくことを理花は止める事が出来なかった。

一人の人物が、何をするでもなく、ただ立っていた。

カーキ色のフード付きのマントをはおった、冒険者武俠らしき人物。

フードですっぽりと顔を隠しているせいか、男性なのか女性なのかははっきりと分からない。ただ、背丈があるので、おそらくは男性なのだろう。

異様な風体ではあるが、この街には冒険者武侠が多く、大体そう言った類の人間はこの人物と大して変わらない格好をしているので、この人物だけが浮いて見える、という事はない。

故に、さながら空気の様に、道ゆく人々は、大してその人物を気にかかる事なく、通り過ぎていく。

と。

その、人物がとある方向に顔を向ける。

とある出店の隣にある、ベンチ。

そこには四人の女性らが。

その彼女らの姿を視認したのであろうその人物は、フードの下で口の両端を下弦の月の様に釣り上げた。

パンケーキが焼きあがり、屋台の近くにあったベンチに皆が腰かけてから、マオが

「あ、そうそう新聞見てごらんない、二人とも、貴方達の上司、結構思い切ったことをしてくれているわ。」

そう言つてマオは新聞を理花と花鈴に手渡す。

「上司、ええと、九娘さんより上といったらもう役人長しかないから……」

「ああ、黄ちゃんね……思い切ったこととてどんな？」

理花はきょとんとしてるだけだが、花鈴はどこかこつ、いやそんな顔をしている。思い当たる何かが、あるのだろう。

疑問を口にしつとにかく新聞を開く二人。

それは八州役人役人長 黄点世が大々的に民間に協力を云々、という記事だった。

「……」「……」

二人は黙つてその記事に目を通している。

「いやびつくりしたわ、しばらくはあんたらの仲間がひっそりと私を探すものとはかり思つてたんだけど、理花ちゃん貴方の式神を逃がした昨日今日の内にまさか

こつとも早くあんたを見限るとはね、あまりの決断の速さに私ら少々びびったわ」

と、マオ。

そのマオのセリフに「フン」と鼻を鳴らして答え、バサツと新聞を閉じてから返す花鈴。

「まあ 黄ちゃんならそれくらいするでしょうね。上手くいきや黒衣僧をツブせるチャンスなんだし。もつとも、貴方が元 私らのお仲間に掴まったらの話だけだ」

「ちょ……九娘さん、元つて……」

少したじろぐ理花に、花鈴はしかし冷静だ。

「もう過去形にした方が賢明よ、理花ちゃん。私がなくなった以上、黄ちゃんに逆らえる奴はいないわ。まあ、元同僚たちが多少黄ちゃんに逆らってくれたらいいんだけど、それは期待できないわ。それは理花ちゃんもよく知っていると思うけど？それに黄ちゃんと私、仲悪かったしね……。」

仲間二人のピンチととらえずに、黒衣僧と私という、目の上のたんこぶを消せるいいチャンスにしか思わないんでしょうね黄ちゃんは……」

「……。」

苦み走った顔でそっぴつ花鈴に、理花は沈黙するしか出来ない。

そう。黄点世八州役人役人長とはそっぴつ男だ。

どうやら花鈴の言っ通り、過去形にして割り切るしかないのだろう。理花はそっぴつ思った。もはや私と花鈴さんは八州役人ではないのだろう。

とはいえこれからどうすればいいのか。このマオと雷は自分たちのホロコンを使って何かよからぬことをし終わるまでは私達を生かしてくれるみたいだが、その後どうすればいいのか。理花は内心頭を抱える。

……と。

「……？なんです？」

理花が眉をひそめる。

見ると、マオが猫そのものの顔でにやにや笑っている。

「ぶっつん？どうやらその黄ちゃんこと黄天世さんはどうやら噂にたがわぬすんこい冷血漢らしいわね？」

曰く、法と秩序を守るためなら暴虐も辞さないといっむちゃくちやな性格だとか？あまりに人を殺しすぎて、付いたあだ名が

“土饅頭屋”……もしくは、生き埋め屋、と……。」

マオのその言葉を少し訂正する花鈴。

「性格、といつのは違っわね黄ちゃんの場合。」

あの性分は最早、機能」といった方がしっくりくるわ。」

ヒュウ、と口笛を鳴らすマオ。

「機能、ね……」

ねえねえ、世間に流布している“土饅頭屋”の噂ってさ、どこまでが本当でどこまでが嘘なの？」

マオの質問に、投げやりに、しかし真実をさらっと口にする花鈴。

「全部本当の事なんじゃない？まあ、私の目から見て、そこらに流れている噂のそれ以上でもそれ以下でもないわ」

うわお、と肩をすくめるマオ。

「私や雷や貴方達も相当キてるけど、流石花鈴、貴方の上司よね。」

あ、ちょっと気になったんだけどさ、性格じゃなく機能って表現したのって何でなの？なんか冷血漢を通り越して機械そのものみたいな印象を受けるんだけど？詳しく聴いていい？」

そのマオの質問に、花鈴は肯定する。

「機械そのもの、といえばそうでしょうけど、それよりもそうね……もうあれは“現象”といった方が的確かも知んない」

私ら八州役人に限らず司法機関に属する人間の役目は即ち“最大多数の人間の幸福のために最大少数の人間を切り捨てる”事にあるわ。一万人の幸福のために9999人を犠牲にする。

……ああ、口に出して言うことやっぱ気にくわないわねこの理屈。ハッキリ言って残虐非道もいいところね。でもズバリ言いきってしまえば私ら司法のやっていることはこれだわ。

そしてこの理屈を過剰に体现しているのが黄ちゃんよ。

多数を生かすために、少数を殺しつくす。のちの禍根一つ残らぬよう。

彼のあだ名の一つ“虐殺精密天秤”は彼のこの氣質をこの上なく言い表しているわ。

身分の上下関係なく、性別の区別関係なく、老年若年関係なく、種族の区別関係なく。

天秤にのった、量の少ないほうの皿を切り捨てる。天秤の、量の多い方を生かすために。

肝心なところだからもう一度言うわ。

身分の上下関係なく、性別の区別関係なく、老年若年関係なく、種族の区別関係なく、よ。

何の迷いもためらいも無く、大局から見て少数の皿にのった命を、殺しきる。

……私には無理ね。あんなに己を殺して生きるなんて。まあ大抵の人間が無理なんだけどさ。

あそこまで滅私できるなんて、もう機械を通り越して“現象”ね。人類全体の、質量保存の法則”というものが“ヒトノカタチ”をとったらあんな感じかしらね。

ハッキリ言って寒気がしたわ。

たとえばテロリスト集団“ケイオスレーベル”に家族を人質に取られた際、何の迷いも

ためらいも無くその人質になった家族を完全無視して自ら先陣を切って“ケイオスレーベル

”を壊滅するなんて、ね……」

さらりとそんな事まで言う花鈴に、理花は

「ちよつ……花鈴さん、いい加減しゃべりすぎ……」

と流石にたしなめるが、しかし花鈴は

「大丈夫よ、理花ちゃん。高がこんなことをしゃべったぐらいで、彼の弱点になると思っつ、

それにもう私達、八州役人じゃないんだし。いろいろ鬱憤が溜まってるんだしさ、いいじゃない  
い」

といい、理花はその台詞に「……」と、沈黙するしかない。



「……そういう意味じゃ黄ちゃんは八州役人の理想形よね。そんな黄ちゃんが大好きな私って八州役人失格かしら？」

いやもう、貴方達のおかげで八州役人じゃなくなっただけで」と、笑いながらマオに聞く花鈴。

その笑顔は、いろんな葛藤を経た末の、凄味があつた。

しかしマオは軽く

「さあ？人間失格よりましなんじゃない？」

と、答えるのみ。

さらに続ける。

「まあ、私が嫌いなのはそう、その最大多数の人間の幸福のために最大少数の人間を切り捨てて考えるかしらね。どうやらその黄点さんとは私、仲良くなれそうもないわ。

だってさ、」と思わない？

最大多数の血にのつた人間が「生きているだけ害にしかないクズ」ばかりで、最大少数の血にのつた人間が「何としても生きてほしいとても大切な誰か」ばかりだった場合どうすんの？ってさ。

それでも少数の血にのってしまった血を切り落とすんですかってね。

イヤそんな極端に人間の質のバランスが偏るなんてまずないとは思っただけでさ、でもどうしても私こう思っちゃうのよね。

……そうやって切り捨てちゃいけない誰かを切り捨てて切り捨ててそうやって出来てしまったのが今のこのくそつたれな世の中なんじゃないかってね。

そう思う私ってただの屁理屈魔かしら？」

……」

花鈴はそのマオのセリフをしばし吟味するように沈黙した後、肩をすくめ、

「さあ、私には何とも言えないわ。斬新な考えだとは思っけど。

まあ、屁理屈魔というより自己中って感じだけどさその考えって。多少手前勝手なゴリ押しに聞こえるわ

って屁理屈魔も自己中も意味はだいたいおんなじかしら？」

「まあ……そうよねえ」と、自分で認めるマオ。

「……まあでも、いいんじゃない？」

そう言っただけで花鈴はマオを肯定する。

敵だというのは、今の自分はその敵の捕虜になっているというのに、そいつを肯定するとはえらい器だ。理花は感心する。流石は私の母親、て所か。

……まあさすがに、あの八州役人役人長に対する鬱憤が溜まってるってのももちろんあるのだから。

「私はさ、人間いくらでも自己中でもいいと思うのよ。結局人間やりたいことしか出来ないし、しちやいけないってわかったしね、黄ちゃんの手で。」

ただ、自分にしてほしくない事は誰かにしない。自分の欲しいものをもらいたいなら、まず相手の欲しいものをよく考えて差し出す。というルールさえ守れば、もうそれだけでいくらでも我を通していいと思うんだけどさ。」

何で世の中こんな面倒くさい事になるんだか、ね……」

といって微笑笑を漏らす花鈴。

しばし、沈黙が場を支配する。

……それは一部の人間にしか守れないルールだからです、花鈴さん。

その二つのルールは人として当たり前前の掟。でもその当たり前前のルールを守ることの、なんと難しい事か。

人間というのは本当に愚かな生き物で、本当に自分の欲しいものが何なのかすら分からなくて、だから自分が大切だと思っている人が本当は何を求めているのか全然分からない、アホな生き物で、それが分かっているのに解決策が全然閃かない、救いようのない存在で……

そんなセリフが瞬間的に、理花の喉元まで出かかった。しかし理花はそれを飲み込む。

そんな分かり切ったこと、言っただけ野暮だとそれこそ分かり切っていたからだ。それに何よりそんな弱音、吐いた時点で負けだと理花は知っていた。

だからぐっぐぐとさえる。

しかし。

「だからこそ」

今度は先刻まで口を閉じていた雷が、不意に口を開く。

「僕は自分の人生を自分で決める事を赦さずに、誰かの奴隷になることばかり強要して、ただ奪う事しか教えず、ただ奪う事しかない、この世界が憎くてしょうがないんだろぅな……」

……

その雷のセリフに、理花はハッ、と鼻を鳴らす。

理花の耳にはその言葉は屁理屈の中でも最低の部類にしか聞こえない。かっこつけんな、末期の中二病の人殺し風情が。

「それじゃあさ、レラちゃん、聞いて言いますか？」

わざと厭味ったらしく、そう雷に聞く理花。

実にとげのあるその響きに、雷のみならずマオも花鈴も理花に注目する。

そう言っつてフォークでピツ、と、食べていたパンケーキを提供してくれた『さびよん』の仲のいい新婚そのものとしか言いようのない夫婦とその娘を指す。

三人はフォークの先で、笑顔とともに接客をしている。

「あのひとは、貴方から何かを奪ったのかしら？」

私の価値観からすれば、むしろお値段以上の価値のあるおいしいパンケーキを与えてくれた、生きてていい人だと思うのは私がお安い女だからかしら？



あの人も憎むの？誰を傷つけて生きているわけでもない、これからさらに家族が増えるであろつささやかな喜びをかみしめている家族を？

世界を滅ぼすとかおバカなこと言ってるけど。

世界を滅ぼすことはあいつた家族おも終わりにしちゃうつてことよ。そこらへん分かってるの？」

雷は無言で無表情。その白哲の美貌は理花の言葉程度では少したりとも歪んでないように見える。

しかし。

静かに雷のフォークを持っている右手がきゅ…と握りしめられたのを、理花は見逃さなかった。

「……だいたいあなたこそ他人から一体いくつの生の尊厳を奪い、踏みにじってきたのよ。

私さあ、あなたの様に『自分だけがおきれいで正しくて、だから何をしても許される』って考えている奴って大嫌いなよね。

そりゃ私が見たところ黒衣僧どもの様な死んで当然のクズからしか命を奪っちゃいけないけどさ、でも、略奪は略奪でしょ？

そんなに奪う事しかない世界が気に入らないっていつんなら、奪いまくっている貴方こそが自殺すればいいんじゃない？

そしたらさつさとこの世からおさらばできるんだしさ。万事解決よ。

あれ、何か私間違ってる？」

「……」

「……」

雷は無言。そしてマオも無言。だてつきり生意気なことを言った理花に対して、プリズンナノマシンで制裁を加えるものばかり思ったのに。それを覚悟で理花はこの毒舌を展開したのだ。しかし二人は沈黙したままだ。マオは聞こえなかったふりをして無視をし、雷は表情をこそ変えなかったが少しだけうつむく。花鈴はムラムラしながらこつちを見ている。

やがて弱々しく、雷は微苦笑を漏らす。

「僕自身、何度もそう思ったよ。

世界を滅ぼす。その決断のなんと愚かで、なんと無様で、なんと最低な事か。

でもね、理花さん。僕はね。それでもね。

それでも、たったひと……」

そこまで言いさして、不意に雷は言葉をつぐむ。

「……ふ。」

急に黙った雷に、何事が起きたのかと「？」と理花はちよつとだけ雷の顔を覗き込む。

その雷の目は、黒衣僧との戦いで見せた、澄んではいるが何物も映さない不気味なまなざしだ。

道を挟んでちょうど今いるベンチの反対側に立っている旅籠の窓のちょうど一角を見据えていた。

「じつかしさー、雑狼、ほんとに郭深猫らはここを通るのかなー。ここ竜巢とお菓子しか無い街だぜ？まあ主な街道沿いの街に全部検門が敷かれてて、この街が街道から一番離れてて検門が緩い所で、おそらくここが一番郭深猫が通りやすいとは思っただけさ」

露骨な、説明的口調。

とある安宿の一室。

金と雑狼らは美狗から道具を受け取った後、場所を移動してこの、特に人通りが激しい道を視界に収められる宿に泊まり、ルームサービスの類を一切断った後、張り込みを開始した。その一日目だ。

標的を発見した際に、いつでも追跡に移れるよう、荷物は戦車に積んで、身軽にしている。

金の露骨な説明的口調の質問に雑狼はフツと笑う。

「金、お前まさか本当にこの街が一番検門が緩いなんて思っているのか？」

その雑狼の質問に、金も同じく笑って、

「まさか。だからこんなあからさまな網の中なんてさ、普通通らんだろ。

まあもしかしたらあえて、裏の裏をかいて郭深猫がここに飛び込むかもしれんが望みは薄いと思うな」

金も雑狼も気づいていた。

この街のそこかしこに、民間人の格好をした捜査官の気配があるという事を。

おそらく八州役人の……中には、黒衣僧の息のかかった者もいるだろう。

例えば戦争の際、敵を包囲して殲滅しようとする際の注意として、“決してガチガチに囲んではならない”と言う事がある。

仮にそうやってガチガチに敵兵を囲んだ際、敵兵はもちろん死に物狂いで突破しようとする。

そういう状態になった兵とというのは「窮鼠猫をかむ」の諺通り、とても危険なのだ。

自暴自棄になつて限界以上の力をふるう。仮にそう言う風に死に物狂いとなった敵を殲滅できたとしても味方に甚大な損害出る可能性が高いし、最悪包囲網を突破されることだってあり得る。

ではどうしたらいいかというと、“包囲網の一部を意図的に緩め、そこに敵を誘い込む”のだ。

迂闊なものなら喜び勇んで包囲の緩んだそこに飛び込み、そして「助かった」と油断するだろう。

そこに罠を仕掛けているとも知らずに。罠というのは逃げる場所にこそ仕掛けるものだ。

そして今回の場合、その「意図的に包囲を緩ませて罾を仕掛けた場所」こそ、この街だと金も雑狼もたちどころに見抜いていた。

故に金は、郭深猫はここには来ないと主張してていたが、しかし雑狼は反対に

「いや、この街にあえて飛び込む望みは濃いと俺は思う」

と主張した。

さらに雑狼は続ける。

「郭深猫が、尾ひれの付いたうわさ話を隠れ蓑にするだけの女なら、とうの昔に清京大虐殺のあと、まもなく黒衣僧どもにとっ捕まっている筈だ。何せ少なくとも黒衣僧にだけは素顔が割れているからな。黒衣僧どもは下素集団だが、決して無能ではない。

その無能ではないはずの黒衣僧から、何年も逃げおおせた輩だ。裏の裏をかくてこの街を通るだろうよ。」

雑狼のその主張に、金は鼻からため息を漏らす。

「……だとしたら、その黒衣僧すら騙しおおせる巧妙な手段で擬態した郭深猫を、どうやって俺らが見つけたもんな」

「何、郭深猫だけを見つける必要はない。」

そう言っただけの目のあたりを指差す雑狼。

そこには美狗から借りたあの特殊ゴーグルが。

それを装着して、雑狼は締め切ったカーテンの隙間から、眼下の雑踏を監視している。

「これに反応するものだけを追ってほしい。まあ、気長にやろう」

「もちろんだ。まあ大丈夫だろう見つかるまいと郭深猫が油断してくれているといいんだが」  
金も雑狼の隣で、特殊ゴーグルをはめてカーテンの隙間から眼下の雑踏を監視しながら、そんな甘い希望的観測を口にする。

と。不意に金のポケットから振動が。携帯電話だ。

「と失礼。」

取り出してみると、メールの着信があった。美狗だ。

「何だ？美狗からか？」

と、雑狼。

「ああ……（頼まれていたゴスロリ少女の映像、ホテルの監視カメラにあった奴をパクってきた）  
だつてよ。どれどれ……」

雑狼も金の携帯を覗きこむ。

とたんにヒュウ、と口笛を鳴らす金。雑狼も「ほっ」と軽く感嘆する。

「カア~~~~ワイ~~~~！」

こりやまたすこい美少女だなオイ！やっべおれどちらかつつとお姉さんのいつか大人の女とかが好みなのに口々に目覚めそうだ！

何？か四六時中誘拐犯とかに狙われてそうだなこの子！

金は軽く浮かれているが、雑狼は渋い顔になっていく。

「……もしかしたらこのいたいけな美少女も……となると、なんといつか、暗鬱な気分になるな……」

雑狼のその台詞に、金も「……」と、笑いを引込める。

そんな金に雑狼はこう進言する。

「この少女のなりも擬態と思った方がいんだろつな。何せ郭深猫や八州役人の二人もそうだったんだから……」

一気に冷めたらしい金は携帯を閉じ、気を紛らわすように、真面目に眼下の雑踏の監視を再開。

「いやまあ……102名もの黒衣僧やったのは郭深猫か八州役人の二人がやったことでいいんじゃない？」

と金はいづが、しかし雑狼はかぶりを振る。

「おまえ自身どう思っ？あの写真見て。どう思っ？」

と、雑狼自身もそこはかとなく嫌そうな顔になりながらも、しかしきつちりと指摘する。

金は

「まー俺らのアテが外れることを切に祈りたいぜ……」

こんな子まで中身が「異思<sup>バケモノ</sup>の物共」とかだったら世も末……」

といっている最中に、金が硬直した。

それを鋭敏に察する雑狼。

「どっした？」

雑狼の言葉に返事をせず、金は先刻閉じた携帯を再び取り出し、開く。

「……まさか」

雑狼は金の視線の先を追う。

美狗から借りたゴーグルのスイッチをいじって、視界の倍率を拡大し、拡大して、さらに拡大。

「あ」

雑狼も硬直。

隣で金が、ゴーグルを付けたり外したり、またつけたりして、見比べている。

手元にある携帯の映像と、ゴーグルで視認した、ベンチに座っている一人の少女の姿を。

ややあつて金が、

「なあ……さっき美狗が送ってくれたこの写メの女の子が、

白っぽいロスリ半袖になって髪形をツインテールにしたら、大体あんな感じにならないか……」

……いやもしかしたらあの子が」

「あんな感じになるものならないも、隣を見る」

雑狼の言葉に習って隣を見る金。

そこには何の変哲もない、そこら辺にいくらでもいそうな、美人でも不細工でもない、凡庸な容姿のマライカ族とエルフ族の女性がゴーグルに移る。

次の瞬間。

（無貌ノ士 ノ反応99.9%）

（結界域 反応ニ基ズク素顔ノ割り出し開始）

とゴーグルの視界の下端あたりにそうテロップが出た後、

マライカ族とエルフ族の女性の顔の隣あたりに、割り出された素顔の画像がそれぞれ現れる。

それは、その素顔の画像は、どこからどう見ても誘拐された八州役人の、“遥 美香”と

方 九娘 の顔そのものだった。

「！」

「ベング、だ……！」

驚きとともに、張り込みを開始して早々に犯人<sup>ホシ</sup>と、拉致された八州役人さんを発見できたことに喜びが湧いてくる金と雑狼と。

不意に。

ベンチに座っている、

白を基調とした半袖の、

ゴシック・ロータの格好をした美少女が、

ついと、

顎を上げ、

視線を上に向けた。

その時、

偶然か、必然か、

金と雑狼の視線が、

その少女のそれと交錯した。

次の瞬間！

ソワッ！！

と金と雑狼の背筋に、すさまじい悪寒が走った！

「……！」

「……！」

殺 雑狼と金は一度は八州役人の幹部にスカウトされるほどの実力を有し、“爆裂千手観音”、“春雷の斬空脚”と言つ物々しい二つ名で呼ばれるほどの武侠である。そんな彼らがそう謳われるほどの死線を潜り抜けてこれたのも、ひとえに理性と直感、天秤に掛けなければならぬ状況に陥った際、迷わず直感の方を選んでこれたからである。

……直感と気の迷いその区別はどう付けたいのか。それは武侠として生きる上で必ず考えなければならぬ命題だ。

この命題において、金は相棒の雑狼と時に討論し、時に書物をひも解き古人の考えに触れ、時に沈黙考して考えた結果、こう定義付けている。

即ち、そう感じても次の瞬間手のひらを返したように移ろう感情を“気の迷い”とし、

『何やら理論の裏付けはできないが、妙に確信を持って断定できる感情』を“直感”としている。

これはそう理論で表しても実際に、これで瞬間的に区別がつけられる、というほど使える理屈ではないが、金は経験上、『直観は皮膚感覚と仲がいい』と気づいていた。

例えば頭の中で『もしかしたら……』と思っても触覚に何の反応もなければ気の迷いとし、頭の中で『もしかしたら……』と思った瞬間、皮膚といつか触覚に『ピリッ』とか『ネチヨッ』とかそういう反応が起つたら、それを直感と判断してその感覚を信じる事になっている。

金は『もしかしたら』とか『どっちを選ぼう』とか瞬間的に何かを選択しなければいけない状況に陥った際、皮膚感覚の微細な反応を 本当に微細すぎて聞きとり辛く、故に常に感じよう

感じようと準備してなければならぬ 直感からの声と解釈し、今の今まで、少なくとも痛い目を負つても死んだり首をくくらなければならぬほどの大損をこつむつたことはない。

仮に痛い目を見たり損をした場合も、それは十分挽回できるものだったし、後から考えて『あの時、痛い目をしたけど今、結果的にいい方へと転んでくれた』モノだったりする。

例えば今現在、それなりに有名になれるまで生き残れたという事実がそれである。

……そうやっていつも皮膚感覚を通して自分を助けてくれた直感が、かつてないほどの大声で、皮膚感覚を通して大絶叫している。

そう。……大絶叫である。

即ち

“逃げろ 今すぐ！全力疾走で！！”

「……↑」

「……↑」

思わずカーテンの隙間をを素早く閉め、ゴーグルを外し、顔を見合わせる二人。

見ると、雑狼の顔が真っ青になっている。きっと今の自分の顔色も、今の雑狼と遜色ない悪さの顔色になっているだろうと、金はそう思った。

逃げろ そう感じてても、次の瞬間手のひらを返したようにうつろ わない。全然。全く。

逃げろ 何やら理論の裏付けはできないが、妙に確信を持って断定できる。……胃に来るほどに。

全身の皮膚の触覚がビリビリ唾うほどに。

そして二人は。

異口同音に、叫んだ。

「 逃げろぞっ！……」

そう叫んだあと二人はカーテンごとバーン！と窓と網戸を開け、何の迷いもためらいも無くそこから身を躍らせた ……

「……どつたの？雷？」

流石に反応がいつもとおかしいと気づいたのだろう、マオが雷にそう声をかける。

雷はゆらり、とベンチから立ち上がりながらも、視線は正面にある旅籠の一室の窓を外さず、クシャリと手に持っていたプラスチックのトレイを握りつぶし、そっちの方を見もせずに手直にあつた肩かこにフオークこと放り投げる。

見事にこみはスリーポイント獲得。

「見つかった。どこのだれかはわからないけど、とても優秀な方がこの網の中にいたらしい

……」

「！」

雷の言葉に、顔を瞬時に引き締めるマオ。

次の瞬間。

理花と花鈴は声を上げた。

「ああ！？」と、飛び降り自殺？！」

「ウン？ て、ほんとだわ！！」

見ると、周りの群衆もそちらを見て、「おおおっ？！」「おい、人が飛び降りたぞおっ！！」

「つわあ ……！」と騒いでいる。

そちら。即ち。

先刻から、雷が凝視していた一点。

正面の旅籠の、六階の向かって右端の部屋の窓だ。

その窓がいきなり勢いよく開いたと思った次の瞬間、武俠らしき格好をした人間二人がいきなりそこから飛び降りたのである！

「飛び降りたんじゃないわ……」

ポツリと漏らした雷のつぶやきに、「？！」と眉をひそめる理花。

「逃げているの。こっちが感づいたのを悟った瞬間に、迷わず逃走することを選択した。

……素晴らしい判断力よ、ね……」

半端な女口調。

そう言つて雷はどこか楽しそうに、うれしそうに微笑した。まるで花で編んだ首飾りを首にかけてもらった少女そのもののように。

状況が状況でなければ、観る者を男女問わず思わずドキッとさせずにはいられないほど、いい笑顔で。

事実、ちょっと理花は不覚にもときめいてしまった。

二人が即座に窓から身を躍らせたのは、もちろん自殺なんかの為ではない。逃げるための階段を使って降りていたのでは、追いつかれる。脊椎反射でそう判断した後、窓から脱出することをコンマ零点一秒の速さで選択した。

もちろんこのままでは地面と衝突して大けがを負う。最悪死ぬだろう。

だから階段を使って降りるより当然早い空中の自由落下の間に、二人は自慢の“結界域”を即座に展開する。

途端、金の体からは黄色の、雑狼の体からは茶色の光が「フッファアアアアアアアアアッ!」とほとばしり、そして楕円形に近い形になって二人を包む。

しかし、“結界域”と言うものはなぜか衝撃だけは防げないものだ。高い所から落ちた際の衝撃に対しては心もとない。二人ほどの武侠の“結界域”ならば多少衝撃は軽減されるが、あくまで多少、だ。

しかし二人はあわてない。髪が逆立ち、バタバタとふるさく服の裾とかがはためく中、ただ眼下のぐんぐんと迫る地面を集中して見つめるのみ。

そして地面に衝突する瞬間。

二人は体を斜めにひねって着地。

足の裏で地面に触れた瞬間、流れるように太もも、尻、腰、腕、肩、そして最後に背中と瞬きする間に次々に接地面を移動。頭の方は自分の今そを見るように前に倒しておいたからノーダメージ。摩擦により衝撃を完全に分散、もしくは吸収し、もしくは流す。

“結界域”の効果も相まって、二人は無傷。

この受け身は軍隊に従軍していた経験のある金が発んだ技術の一つだ。落下傘が開かなくなるといつ絶対絶命の状況で、本当なら両足で受ける落下の衝撃を全身数か所に分散、ダメージを強度の打撲程度に抑える「五接地展開法」といつ受け身だ。雑狼もこの受け身を金から教わり、練習して物にしている。

そのまま一回転した勢いで立ち上がると、さながら一陣の風の様に駆けだす二人。

目指すは 駐車場にある愛車。

必死の形相でこちらに向かって駆けてくる主人二人の気配に、さっきまで寝そべってくつろいでいた、戦車を牽引する犀三頭はあわてて立ち上がり、「グ、グオオオ!」「と、吠える。

「そオイ!」「トオウ!」と掛け声一閃、ドアを開き、即座にとび乗る金と雑狼。

そのまま運転席に乗った雑狼は急いでシンクロドライブスを起動、「ハイ!」という掛け声とともに車体の表にあるマニピレーターを操り、犀三頭に鞭をくれる。

たちまちけたたましい音とともに駆けだす戦車。ついで雑狼はクラクションを盛大に鳴らして、何事かと集まってきたヤジ馬を散らせる。蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う群衆。その群衆の間を、金にも引けを取らない手綱さばきで、縫うように駆けさせる雑狼。

「ようしつ戦車に乗っちゃえばこっちのもんだ! 荷物をあらかじめ全部戦車の中に置きっぱなしにして正解だった!」

「何なんだよ! 何なんだよあれ! シャレになってない! ものっつっシャレになってない!」



金は座席の後ろにしまっておいた愛用のショットガンを、まるでしがみつくように抱える。顔は真っ青だ。ガタガタと震えている。

そして恐怖を少しでも紛らわせようとするためなのか、普段以上にべらべらとまくし立てる。  
 「あああ、あんな感覚は初めてだ！どんな「異思の物共」の大量に囲まれても恐竜種に遭遇してしまってもヤバイ感じの悪徳武侠とやり合う羽目になってもあそこまでひどい恐怖は感じなかったのに、何なんだ！あれはやばい！やばすぎる！一目視線があっただけでこんなに生存本能がサイ「スリラー」にガンガン警報を鳴らすなんて生まれて初めてだ！

あああはは ……

美少女の皮をかぶった核弾頭が何かだ！！

くそ、もお世も末だよこなクソッ！」

「黙ってる口を閉じてる舌をかむぞッ！」

悲鳴の様に金に警告を叫びながらも、シンクロデバイスが必要以上に強く握りしめる雑狼。その手がぶるぶる震えているのは、なにも限界までデバイスを握りしめているせいで筋肉が緊張しているせいだけでは無かった。

「おお、なかなかイカス戦車に乗ってるわね、あいつら。犀よ犀。うわお速い早い！」

雷とともに戦車を走って追いかけているマオが、やたらのんきなことを言っている。

ビュビュウといった風切り音を鼓膜に感じるほど速い。

速い戦車はもちろんのこと、それを追いかけているマオと雷もとにかく速い。もうちょっとしたつむじ風といっても差支え無いくらいだ。

二人に遅れて、理花と花鈴が追っかけている。

八州役人として鍛えた脚力をもつてしても、追いかけるのがやっただ。

本当のところ、当然この際に雷とマオが駆けだした方向とは正反対の方向へと逃げたいところなのだが、しかし体内のナノマシンが作動して、二人の意志とは関係なく、雷とマオに追従してしまう。

「やはり体内のナノマシンをどうにかしないと如何ともし難いわね……」とつめく花鈴。

「ええ、でもどうしたら……」と、唇をかみしめる理花。

前方に視界を戻す理花。

見ると、雷とマオが速いといっても、やはり戦車の方が速いのだろう、僅かつつ僅かつつではあるが雷とマオが離されていく。

ふと、雷が何かをベルトから取り外す。

桃源鏡だ。

その取り出した桃源鏡を、何を思ったのか雷は戦車に向かって素早く投擲。

見ると、投擲された桃源鏡の裏側が、何故か『ボウ……』と淡く光る。

それはなんとというか、さながら接着剤のような効果のしくみなのだろう、投擲された桃源鏡は裏側から戦車の後部の装甲に『びとっ』とへりついた。

あの戦車が、もし「結界域」を展開していたら投擲された桃源鏡をはじいたのかもしれないが、しかしあの逃走している武俠二人も街中で流石に「結界域」を展開するのははばかれたのだろう。

展開すれば銃器にも勝る凶器になる「結界域」は基本的に、街中で展開することはこの国や地域でも一部の場所（道場とか）や状況（正当防衛とか）を除いて禁止されている。それを犯せばもちろん罰金ものだ。下手をすればムシヨ行きた。故に一応そのルールを守ったのだろう。

……なんだかよく分からないけど、どうやらそれが仇になりそうね……

なぜか漠然と、理花はそんな予感がした。

町はずれの荒野。

「よし！ストオーツプ！」

手綱を引っ張り、停車させる雑狼。

「よし、あいつらの気配も「結界域」も 感じないな！」

街を出て数十分間戦車を走らせた後、金いわく「美少女の皮をかぶった核弾頭」の気配が感じなくなったのを見計らい、ようやく緊張を解く二人。

「……ぶふ~~~~~」

安堵の息をつき、雑狼はシンクロデバイスに、金は座席にもたれ込んだ。

金は額にびっしりと浮き出ているやな感触の汗を袖で拭いながらも、しかし手持ちのショツトガンを手放さない。

「……あれはやばい……あれはシャレになってない……少なくともオレはそう感じた……あんなちっちゃい女の子に対してそつびびっている俺は……情けないか？」

「……何ぼぞいてやる」

雑狼も額の冷や汗をぬぐいながら、

「一般ピーポーならともかく、武俠として飯を食って、あれを見て突っ込んだらさぞかしい声で歌ってくれそうなカナリアだな」としか見れないんじゃないやあそいつはただの雑魚だ……

たぶん……いや間違いなく、あれが何らかの「黒幕」に違いない……」

しばらく、二人はそのまま無言でぐったりしていたが、金が、

「なあ……このままこの件、無かった事にしようか……いや無茶苦茶気になるけど、命あつてのものだねだと思っしや……」

「……うん……」

呻く雑狼。雑狼は金の考えに否定的なそぶりではあるが、安いプライドの為に命をドブに捨てるような選択をする愚かものではない。そんな愚かものなら、「爆裂千手観音」と謳われるほどの武俠になりあがれるわけがない。

しかし、危険だからといって素直に引き下がるような腰抜けがそこまで有名な武俠になれるわけでもない事も確かだ。

ややあつて雑狼はボツリと、



“脱出だ!”

零コンマ一秒の内にそう判断した二人は、座席の目の前にある『脱出ボタン』を迷わず押す。次の瞬間、*「バシユ」*と戦車の屋根が一気に開き、二人は座席ごとほのか上空へと飛ばされる!

その飛ばされた座席から、お釈迦になったショットガンと携帯電話がこぼれおちる。

そのまま空中に飛ばされた座席の下の部分と背もたれの後ろから、落下している前にボウッ!とジェット噴射が起こる。

そのまま滞空。この『座席ロケット』はこのまま小一時間かなりの高速で飛ばせるほどの燃料が積んである。

座席が空中に浮くと同時に肘かけから飛び出した、このロケット状態になった座席を操るためのレバーを即座に握り、金は

「とりあえず前方12時の方向へ戦略的撤退!」と叫ぶ。

「おう!」と答える雑狼。

次の瞬間 再び殺気。

再度、*「パハン!」*と銃声。

「そう何度も同じ手を食つか!」と、金。

『結界域』、展開!と、雑狼。

そのまま、暴風雨が唸るような音と共に、二人を中心にかんりの濃度の『結界域』が展開される。先刻ならともかく、距離が開いて、結界域の拡散した銃弾など恐れるまでも

しかし。

自慢の、自身の『結界域』が、威力が拡散して弱くなった はずの銃弾に突き破られる信じられない感触。

「!・!・!」

その後、*「ヒス!」*、*「バス!」*と、燃料のポンベに穴があく音。その後漏れた燃料が、引火する音。

「うおわっちゅ!」「うそだろ!」

とっさにシートベルトを外し、燃え盛る座席ロケットから飛び降りる二人。

高い空中とはいえ、ホテルから飛び降りた時の高さほどではない。

二人は空中で一回転して慣性を弱めた後、無事に着地。とっさに飛び降りたから、服に火は移ってない。

燃えている座席ロケットが、地面とぶつかり上げる金属の悲鳴とともに、顔を上げる二人。

その視線の先。

燃え盛る座席ロケットの炎に照らされ。

まるで、郭深猫すらをも手下にでもしているような優雅さで。(実際そうなのだろうと二人は直感した)

あの絶世の美少女が、何の感情もこちらに見せず、ただこちらを呆<sup>ぼう</sup>と眺めていた。

唯それだけ。それだけなのに。

その姿の　なんと恐ろしいほどの美しさか。

「へへ……こりやまいつたね……」

虚勢全開の笑みを浮かべ、ゆつくりと立ち上がる金。

そうして、眼前の美少女に声をかける。

「なあお嬢ちゃん、いつたいどうやってこの戦車を追ってこれたんだい？ その魔法の種を、お兄さんにすこし教えてくれないかなあ？」

しかし、目の前の美少女　雷は優雅に微笑むのみ。

「まあ……」

その笑顔も相まって、こんな状況なら素直に聞き惚れるであろう美声。

読者諸兄に種を明かそう。と言ってもそんな大げさなものではないのだが。

雷が持っている桃源鏡を戦車に張り付けた後、マオの持っている桃源鏡から自分たちの居住空間の中に入った後、もう一つの桃源鏡を手元に転送<sup>3</sup>する機能で、表<sup>4</sup>においてあるマオの桃源鏡を手元に戻してから、じっと待っていたのだ。居住空間の中で。

雷の桃源鏡を張り付けた戦車が、油断して停車するのを。

そしてその後、表<sup>5</sup>に出て、まずマオが発砲したわけである。

閑話休題。

雷の後ろから、マオと理花と花鈴がぞろぞろと表れる。

それを見た金が

「へへい八州役人のお二方！ すぐに助けてその無粋なマスク、外して差し上げますから、しばらくお待ちくださいね〜！！」

と朗らかに言う。

その金と雑狼の姿を見た理花と花鈴が、少し目を丸くする。

「あら、あの人たち……」もしかして……

「あら、あなた、この人らを知っているの？」

と、マオが聞いてくる。

ふいと顔をそむける理花。

「知りません。しっていたって誰が教え

（ブリズンナノマシン、作動）

まずその筆手を付けたホビット族の青年の名は殺　雑狼。21歳。ボクシングの達人でそのあまりの手数<sup>6</sup>の多さから、「爆裂千手観音」と恐れられるほどの実力者。

黒髪長髪のヒューマン族の青年の名は金　アボクリファ 黙示録。

十中八九偽名と思われる。推定23歳。テコソドー使いで、その実力は折り紙つきで、相棒の雑狼氏と並び『春雷の斬空脚』と恐れられるほどの実力者。

二人とも八州役人の幹部候補としてスカウトされるほどの実力者ですが、それを断り、未だに在野の冒険者として活躍中。」

自分の意志とは裏腹に、べらべらと口走ってしまう理花。ふと。

その理花のセリフに対して、考え込むように沈黙している雷とマオ。金。

この名前からして彼はきっと然州の出身なのだろう。然州という国では、この名前はよく聞かれる名前だ。

よく聞く名前だけあって素晴らしい響きの名前だ。なんというかこつ、イメージ的にピカピカしていい感じた。

何せ金だ。

それはいい。それはいいんだが。

黙示録。

……黙示録って何だ黙示録って。

そこまで考え込んでいた雷とマオはつん、と一回背いてから、異口同音に金に向かって尋ねた。

「質問。あんた（貴方）、一体どこの漫画からその名前をパクった（とった）の？」

その二人の質問に苦笑する金。

「……何故かな。おれの苗字を知った奴ってどうして皆一様にだいたい似たようなことをきくかな」

「いや聞くだろふつ。ほんと黙示録って何だ。今日日どんなに漫画を読み過ぎた奴でも素面でそう名乗るやついねーぞ。」

「うかい加減教えてくれよ、何でそんなにかれた偽名名乗ってんだ？ いや俺らこんな商売してんだから偽名で通すのはわかるんだけどさ、もっとまじな名前なのられか？」

と、雑狼。どうやら金の苗字の由来は、雑狼も知らないらしい。

しかし金はチチチ、と右人差し指を左右に振り、シレツと

「男は少しぐらいミステリーな部分があつた方がモテるだろ？」

「いやドン引きだろ」

雑狼は冷静な突っ込みを崩さない。

何か金と雑狼の掛け合いがいつまでも続きそうだったので、マオが嘴を挟む。

「じつかし貴方達がああ『爆裂千手観音』と『春雷の斬空脚』と謳われる有名な在野武侠とはねえ。さすがだわ、八州役人役人長の黄点世さんの思いつきの良さにもびびったけど、まさか事をやらかしたわずか二日後に私らを見つける奴がいるとは、ね。」

ナイス執念だね。そんなに賞金<sup>おかね</sup>がほしい?」

マオのその「お褒めの言葉」に、金はへと笑い、

「見つけるだけで割と大ピンチだがね。命を取るか賞金を取るか今ちよと相方と相談して天秤にかけてたところさ。」

その……何もなんだい?その子。一目見るだけで背筋がぞんぞんするんだが。

この寒気が君の美貌からくるものだけならば大歓迎なんだがね」

と言って冷や汗びっしり浮かべながらも、雷にウィンク。

自分で大ピンチと言っている割には結構余裕がある。

……合格だ。雷は凄艶に微笑む。

中身は男だが、今の雷の格好は絶世の美女だ。金と雑狼の二人は知らず、ゴクリと生唾を飲む。

「悪くない。なかなかの豪胆さだ。……これならば問題はないな……」

「何がだい?ままごことのお相手かな?」

金の軽口を肯定する雷。

「ああ。」

……少し、むしゃくしゃする事があってね、(と言っちら、と理花の方を見、)しばらく僕とままごとしてくれないかな?かっこいいお兄さん方」

そう言っ右目でウィンクし。

す……と右足を前に出す雷。

ふと、雷のセリフに違和感を感じ、首を傾げる金と雑狼。

「……僕?」

間抜けそうに首を傾げる二人がおかしかったのか、くすくすと「アティッシュ」に笑つ雷。

刹那

発破が爆発したのかと疑わんばかりの爆音とともに、雷の「結界域」が青白い死の輝きを伴って展開!

「……ッ!」

これが、人一人が出せる「結界域」か!?

一瞬凍りつく二人。

だがそれも一瞬だ。

瞬時に二人も「結界域」を展開!

「ッ……かッ!」と雑狼は短く叫んでから一気に踏み込み

「フィュッ!」と同時に金もテコンドー独特の腹式呼吸で肺腑から気合を発すると同時に踏み込む!

はい!

理花と花鈴、そしてマオまでもその踏み込みの鋭さに息をのむ。

さらに驚くのは　二人は両足どちらも浮かさず地面に接したままだという事だ。なのに速い。

まるで靴裏にローラープレートでも仕込んでいるかのような滑らかなすり足移動。

“あれならこの凸凹した荒地の上にあっても、バランスが崩れる事はない！”と驚く理花。だが理論的にそうであってもあんなになめらかに移動できるには少なからず修練が必要だろう。

その動きは、道場なんかではない、実戦で磨かれた鋭さがあつた。

あれだけ距離があつたのに、一瞬だ。一瞬で二人は雷との間を詰めてしまった。

「へえ」

雷もすこしだけ驚く。

少しだけ、だ。

雑狼は瞬間的に理解していた。この少女の青く輝く“結果域”を見た瞬間、この者は自分たちにとつての死線だ。しかも逃げようにも逃がられない類のものだと。

だから金は瞬間的に腹をくくつた。ならば踏破する、それだけの事。死ぬ様なら、それまでの存在だったんだと、己を嘲笑えばいいだけの事。

イザ事に当たつてはいたたちの様に憶病なほど慎重、しかし「打つて出た方が生存率が高い」と判断した後の豹変の速さ。この切り替えの速さこそ二人がここまで生き残つてこれた秘訣だ。

「始めッ……」

物心つく前からテコンドーをたしなんでいた金の癖で、最初の一撃目はどうしても故郷の言葉で開始、と叫ばなければ落ち着かない金。だがこもつた気合はまさしく兵器。

その気合と同時に、ナジュンデ、ヨフチャチルギ下段横突き蹴り。

見事なすり足で一氣に間を詰めた勢いで左軸足ごとスライドしながら、正面から見て頭肩・腰・ヒザ・かかとが一直線になるよう真半身になり、かかとを内側に回しながら右膝を上げ、そして上半身を前に傾けながら雷の左膝にかかとを振りおろす。右手はガードも兼ねて雷の顔の方に伸ばす。

本来上半身は後ろに倒すのだが、金はこの蹴りだけでカタがつくとは微塵も思っていない。この後たたみかけるように連打をするために前に傾けたのだ。

結果的にそれが金を救った。連打は確実に不可能だったが。

一氣に間を詰め、不意を打ったつもりだった。

しかし右かかとを振りおろしきらないつちに、さらに雷は間を詰める！

「なっ……」

と同時に伸ばした金の右腕の下に自身の右腕を潜り込ませながら、同時に右膝で金の右太も



もの内側を蹴り上げる雷！  
激痛。

「おおっ……」

さらに立て続けにその右足で金の右足の内側を擦っていくイメージで、金の軸足の左膝へと雷は蹴り返し

「ぬわっ……」

すんでの所でその雷の右関節蹴りを金は上体を急いでさらに前に倒しながら下方へ左手の平押しブロック。雷の右関節蹴りは股の下に逸れる。

“あぶねえ……上半身を後ろに倒していたら、間に合わなかった！”

しかし次の瞬間。

雷の蹴りが金の左脛の内側にかすったのだろっ、ゴウあッ！とその部分がえぐれる。  
しぶく血煙。

「うおおっ……」

まるでそこに大口径の弾丸が当たったような痛みに、苦痛に叫ぶより先にむしろ驚きに声を上げる金。

“え、うそ……俺より蹴りの威力がある……”

そのまま雷は金の左軸足をこするよつに降ろして行き、金の伸ばした右腕の下にもぐらせた自身の右腕をガイドに金の右脇にもぐり込み、右肩で体当たりをぶち当てる。

「くはあっ……」

肋骨が二、三本折れる感触とともに吹っ飛ぶ金。

この間0.6秒。

間を開けずに。

「シュー……」

と鋭い呼吸とともにすり足のスライドの勢いのまま、雑狼が右ストレート掌打。

刹那。

雷は右膝を鳩尾ぐらいまで高く上げながら（見えた白と水色のストライプ）同時に右手が前左手が後ろになるよつに掌を重ね、視界上の雑狼の顔　とりもなおさず右ストレート掌打の軌道上　へその両掌をすばやく突き出す。

頭は顎を引き額を突き出すよつに下げ、伸ばした腕の両肩と両耳をくっつけ、完全に両掌の後ろに隠し、体を少し前傾させる。

重ねた雷の掌にバシィッ……とさえぎられる雑狼の右ストレート掌打。このとき雷は左膝を少し曲げ、かかとを浮かさず軸足となっている左足の裏全体をぴたりと地面に付ける事により衝突時の衝撃を地面に逃がす。

「クウッ……」

そして次の動きは一拍の動きだった。

右手が雑狼の右ストレート掌打を払い落とし、あげた右膝を踏み込みながら、伸ばした左手が雑狼の右上腕屈筋に添えられるのは。

そしてそのまま雷の左親指は深々と雑狼の上腕屈筋にめり込む！

激痛。

「くおわっ!!」

動きが硬直する雑狼に向かって、さらに連撃。雷は左膝を上げながら右掌打を雑狼の頭部に振り降ろす！

その時雑狼は直感した。武俠としての勘が。

“この掌打を、受けてはならない!!”

「つおっ!!」

雑狼はとっさに左足を素早く右後ろに大きく回しながら右半身になり、さらに上体を後ろにそらせる。

鼻先をかすめる雷の振り降ろし右掌打。

するとどうだろう。

触れてもいないのに雑狼のつま先の前の地面が爆砕して、僅かではあるが陥没した！

「……!!」

濛々と巻き起こる粉塵。

“あ、あぶねえ……つかつに受けていたら左腕が消し飛んでたッ!”

研ぎ澄まされていた自分の直感に感謝。

しかし驚愕する暇は無かった。

「つぶぐつ!!」

雑狼の右脇に激苦痛。

見ると雷が左足を踏み込みながら雑狼の右上腕部から左手を離し、そのまま流れる様にはなつた左掌打が雑狼の右腕の上から滑らすように内側にもぐりこみ右脇にめり込んでいた！

「つぶあぁ……がぁぁあッ!!」

派手に吹っ飛ぶ雑狼。

この間0.7秒。

合計で二秒も満たない超高速の攻防。

しかし持つている方だとマオは感心する。

「へえ……やるじゃないあいつら。物々しいあだ名は尾ひれだけではないようね……」

マオはしっかりと気づいていた。

金の右脇に雷が右肩で体当たりをした際、金の右手が雷の服の奥襟を掴んでひっぱり、同時に左手が雷の背中を押して雷の突進力を弱め、自身のダメージを軽減させたことを。

雑狼の時もだ。右脇に雷の左掌打がめり込む直前、雑狼はとっさに右足刀で雷の左脛を蹴って体勢を崩すとともに後方へ飛んで衝撃を後ろに逃がしたのだ。

だから二人は派手に後ろに吹っ飛んだのだ。まともに攻撃を喰らっていないから。雷が本気では

ないにしろ、もし衝撃が二人の“体内”に浸透していたら、二人はその場で“爆砕”しただろう。

「グッ……ぬ……う……」

何とか身を起す二人。

二人は、“結界域”を体内に展開、自然治癒力を活性化して負傷の回復を急ぐ。

雷はというと、ぼんやりとそんな二人を眺め、待っている。

……早くかまって、お兄さんがた。そうでないと僕、さびしい……

声を出さず、唇の動きだけでそう妖しく流し目で誘う雷。二人は読唇術の心得もあるから、読み取れる。

ゾクリ、とくる二人。

金と雑狼だけではなく、それを見ていた理花と花鈴も。もちろんマオも。

年に似合わない、大した悪女ぶりだ。

それだけを見ると儂げで、思わず構いたくなるのだが。

金は「ぶ」と血の塊を排出しながら、左唇の端をゆがめる。

「くそつたれ……オイ雑狼、俺らあの嬢ちゃんのままごと遊びのお人形さん扱いだぜ……信じれるか？」

雑狼もカフツと唇の端から血の筋をたらしながら鼻で笑う。

「ふん、まあここで子守りを放棄するなんて、陰毛の生えそろうた年長者のすることではないな……」

いい感じに体も魂もぎゅんぎゅんと過熱<sup>ヒート</sup>してきた。

しかしこりゃやばいな。

ビビる以上に、どうやら自分たちはあの少女の色香にあてられたらしい。

これでもしかして一目ぼれって奴か？それともつり橋効果？

ああ、何をビビる必要があったというのだ。全く。

こんな美少女を前にして。

全身を駆け巡るアドレナリンとドーパミンが酷く、非道く心地いい。

シイイイイイイイ……と蒸気のような、美姫に巡り合えた喜びを吐き出す金。

フヒユウウウウウウウ……と湯煙の如き、自身の全存在が湧きたつ瞬間を楽しめる高揚感を吹き漏らす雑狼。

そして二人は獰猛な笑顔を浮かべながら、目で誘う。

ああ、自分ら、これは本気でこの少女の色香にあてられたな、と思いながら。

雷は微笑む。優雅に。危ういまでに艶やかに。

雷は流し目で、応える。右手を伸ばして、小指から順に指を折りたたんで、誘いながら。そうして再度激突する直前。

「「「「「」」」」」」

その場にいる全員が、いつせいにバツ！と一点の方へ顔を向ける。

調度その方向は、さっきまで全員がいた、街の方だった。

何か、とてつもなく邪悪な、“結界域”の気配。

「「の感じ　ディアロボス 天魔！？」と、マオ。

「え、何？」「でいらるばす？」と、金と雑狼はきょとんとしている。

「　ひッ？！」

途端、理花が短く悲鳴を上げる。

「……………」

花鈴も、硬直している。

何故なら。

……………　シッ！………

雷の全身から、下手をすれば視認できるんじゃないかと思わんばかりの濃度の怒りが、放射されていったからだ。

「お……………」

恐る恐る、金が雷に声をかけるが、雷はそれに頓着せず。

「……………ディアオ　ッ！………」

そう雷の口から、呪詛が漏れた。

四、怒ド《破界の漢》

処世といつものを語る上で、“やつてはいけない事”はそれこそ数多あるが、その中でも五本の指に入るものがある。

それは、“力こそが正義”を信条としないこと、である。

これを信条とすることは、いわば「私はいつか自分より力のあるものにフチ殺されたいと思います」といつ、自殺志願者の遺言の出来損ないみたいな宣言を周りにしているようなものである。

事実、「力こそが正義」を信条としたものは例外なく私に抹殺されるか、再起、絶対、不可能にされている。

彼の者たちは、諸行無常うえにはうえが盛者必衰いる、という当たり前の理ことわりを失念している。

b Y 石田戎右著・梁園不要論

疾走。

もはや残像しか残さず、砂煙のみを残して弾丸のように、下手をすればそれに匹敵せんばかりの速さで走る雷。

それに2、3歩遅れてついて行っているマオ。

「ちょ……一人とも、飛んでる私達に近いスピードで走れるなんて凄過ぎだわ!？」

その二人のすぐ傍の空中を、花鈴を抱えた理花が不本意ながらも、付いて行っている。

走りではもう完全に追い付けないから、移動手段を飛翔にきりかえたのだ。

しかしこの速さ。

花鈴を抱えてスピードが落ちているとはいえず、羽で飛ぶのに匹敵するほどだとは。

トトトトトトトトトトトトとこちらに迫りくる爆走音。

理花がそちらを見ると、あの金と雑狼ののつていた犀三頭が牽く戦車だ。

「まったくこれからだつてのに無視シカトこきやがって!俺らが予備の座席を付けるまで待って言うのが聞こえなかったのか!パンツ見えてんぞ!」

窓をおろしながら、助手席の金が怒鳴る。

そちらをちら、と見、すぐに視線を前に戻して

「別に。こんな一銭の得にもならないこと。そんな事に付き合う必要はないよ。」

他人事ひとことでしよつ？」

と、そっけなく、雷。

ハッ、と嗤う金。

「じゃあ嬢ちゃん、きさん（貴様）、何でそぎゃん一銭の得にもならんこつちやしよつとしてんねん！？」

と、地ぢの口調で思わず訊く金。

無茶苦茶だ。隣で雑狼が「おまえ何処の生まれだ……」と呻いている。

フと。雷はしばし考え込む様に少しうつむき。

そして答える。

「人生は短かくて、とても自分の事だけを考えて生きてるヒメは、ないから……。」

「……………」

雷のその台詞に、思わず間抜け面になる金と運転席の雑狼。理花と花鈴も、だ。

普通、逆の考えをしないかそこは？

「……」

しばし考え込んでから。

「面白……おもしろいな嬢ちゃん。」

ディモールト面白く考えだ、そりゃ……………」

そう言つて「ヤリ、と笑んでから、

「いいだろう、気に入った！面白そーだからのつけてつてやんよ！」

雷はちら、と金を見、

そして「ふふっ」極上の微笑みを返した。

「……感謝します」

そう言うや否や、滑り込む様に空いた窓からするり、と入り込む雷。

そして危うげなく、ふわり、と金の膝の上に乗る。

「うおびつくりした！身軽だな嬢ちゃん……………」

金の方をちら、と見上げ、

「じばらく、お願いします……私の事は、レイって呼んでください……………」

と軽く頭を下げる。

あんなに速く走っていたのに息を切らしてはいない。だが多少は汗をかいたのだろう。この少女の体臭が金の鼻孔をくすぐる。

「……」

知らず、脈拍が上がる金。口コンじゃなかったはずなのに。

俺らより確実に強くて、しかも可愛い。とても。

「……一体どこの無敵超人だ嬢ちゃん……」

「？」

微笑んだまま、首を傾げる雷。

「私もおねがい！」と、さらに空いた窓からマオが飛び込む。

マオは雷の膝の上を通り越して運転席の雑狼の方まで滑り込む。

「うおおぶね！？」って「うう、俺の上に座ろうとすんな、前が見えん！」とあわてる雑狼。

「いいじゃない、代わりに手綱は私がつるわん のつけててくれたお礼に私のおっぱい、揉んでいいわよ でもあんまり強くしちゃいやよかんじちゃう」

マオの柔らかな肢体に思いつき密着され、真つ赤になる雑狼。

「揉ッ……だ、だれがするかってーの！ああもオ美狗といいどうして俺の周りの女はこんなのはっかなんだ！？」

「美狗って？彼女？」

「知るかッ！」

一方理花と花鈴も戦車の屋根の上に乗る。

「ぶっはー！重たかったー！花鈴さん少しは間食控えてくださいよー！」

「ひどー！私にそれ死ねってのー！？」

と、娘に文句を言ってから、花鈴はマオに

「ねえマオー！風圧で、無貌の土」がやたら食い込んで痛いんだけどもう外していい？」と、やたらなれなれしく運転席のマオに聞いてくる。

マオもなぜかなれなれしく

「うーんも この二人にはばれちゃっているしなあ……あ いいわよ二人とも、はがしていいわ」

と、なんと驚くことに気安く許可を出した。

これは確実に舐められている。理花はそう思った。

「……なんか私達、完全に舐められてますね……」と、顔の特殊メイクをぺりぺりとはがしながら、理花。

「まーいいんじゃないとにかく息苦しくなくなっ」と、花鈴もパリパリと顔の土をはがす。ともかく。

突き進む戦車の進行方向では、黒煙が濛々と上がっていた。

「うおっヒッでえなこりゃ！？」

金が呻く。

竜巢の「異思の物共」からとれる甘味料がウリの、お菓子の名産地。

さつきまで、平和そのものだった町並み。  
それが、火の海に包まれていた。

とりあえず戦車から降りる一行。

「生存者はいるのか!？」

周りを見渡ししながら、雑狼。

しかし、町はあらかた火の海になってはいても、人の気配はおろか、死体の気配すらない。  
まあ、見て心地いいものではないが、焼け崩れた建物に下敷きになった焼死体とかが見当たらない。

しかし、道のそこに一目で致死量と分かる量の血痕が残っているのだが。

「うまく避難できたのかしらこの街の人たち?」

「そうなん……ですかね?しかしじゃあ、そこらへんの血痕は一体……」

と、首を傾げる理花と花鈴。

「……」「……」

雷とマオは険しい顔でそこらへんの炎を見据えている。

「まさか……この街の竜巢の「異思の物共」が一斉に総反撃を開始したとか?」

「いやそれこそまさか、だ……この街にはたくさん武侠とかがいたし、何より「異思の物共」の総反撃程度でつぶれるほどやわな所ならここは「甘味料の名産地」にはならず、とつの昔にツブれてんじゃないあ……」

「……だよな」と、言葉を交わす金と雑狼。

「それに多量の血痕がそこそこにあるけど」

と、花鈴。

「何と言うか……戦闘といつか街の人たちが抵抗とかをした形跡がないわ。ただ血がブチまかれてて、ただ町が火に包まれてる。……なんなのこれ?」

不意に、雷が口を開く。

「来た」

「チッ……早いわね」

雷とマオの視線は炎の向こう側。

「……」「……」「……」

殺気。

身構える4人。

そして揺らめく炎に、何かの人影が浮かぶ。

一人。二人。 十人。二十人。

いや この気配は人ではない。



「ふん。どうやら『異思<sup>ムシケラども</sup>の物共』がネギしょってやってきたみたいだな」

唇の端を吊り上げる雑狼。

ガイン！と籠手の拳を打ちつけて、火花が飛び散った後、構える。

「どういつ経緯か分からんが、こいつらの総反撃が上手くいった後の様だな」

と言いつキユキユと金は自分の手の甲に何かをはめる。

雑狼のそれより一回りふたまわり小さいが、両刃の短い刃の付いた、手の甲だけの籠手。

それから軽く靴の踵を打ちつける。

即座にシャキン、とつま先から刃が出る。もう一度踵を打ちつける。刃が戻る。

揺らめく炎から出てきた存在は、そのものずばり『異思の物共』。

蟻が人間並みに大きくなり、二足歩行を شدしたような化け物。人間にとって拳にあたる

部分が大きく固く発達していることから、硬拳<sup>スリクマン</sup>蟻と呼ばれている種族。

カマキリが人間並みに大きくなり、二足歩行を شدしたような化け物。左手はふつつ（？）

に緑色の外骨格におおわれた手だが、右手の手首から先は短い、しかし鉋の様に分厚い緑色の

片刃の刃物が手の代わりに生えていることから、短刀<sup>ダガー</sup>螳螂<sup>マンテイス</sup>と呼ばれている種族。

その2種類の『異思の物共』が一二つ十と表れ出る。

金がマオに声をかける。

「とりあえず休戦だ。存分にやり合っ前に、害虫駆除および人命救助とシャレ込もつ」

「ありがとう、恩にきるわ。」

あ、あと金さん、貴方の憶測は外れよ」

「あん。」

「こいつらは自発的に表に出てきたんじゃない。ただあいつの邪気にあてられて、のぼせているだけ。」

見なさい、奴らを」

マオに促され、『異思の物共』に視線を転じる金。皆もそれに倣う。

……と。

見ると、夢遊病者の様にこのこ出てきた『異思の物共』はなぜか苦しそうに身を丸めてぶるぶると震えている。

「……………」

そしてそのうち一体が。

不意に。

『ギッ……ギギギッ……ギギッ……』

と呻いた後、

「アングヤアアアアアアアアアアアアアアアスッ!!」

と叫んで上体をガバッ!とそらした途端!なんと体のサイズが一五倍に膨れ上がった!

「ッ!」

この個体だけではない。ほかの硬拳蟻や短刀蠅螂も一様に「アングヤああアアアス!」「ッギアイイイイイイ!」と叫びながら、上体をそらし、一五倍のサイズになっていく。

「な、なんだ!?新種かこいつら!」

と、雑狼。

「いや、ちょっと待て!奴らの体の表面を見る!」

叫ぶ金。

見ると、この場にいる「異思の物共」全員の体から、「結界域」が立ち上っているではないか!

「……嘘……」呆然とつぶやく理花。

「そんな馬鹿な!」「結界域」を展開できるのは、俺ら人類だけだったはずだ!こいつら「異思の物共」はそれが出来ないはず!と、狼狽する雑狼。

「まさか……やつは新種!?俺ら人類の「結界域」に対応できるように進化した新種なのか!」

と、うつろたえる金。

花鈴は雷とマオを見やる。

「そーいや何か、天魔とか何とか言っていたわね。こいつらがそうなの?」

雷は肯定する。

「ええ。」

私達の知り合いに、<sup>ディアオ</sup>刁っていうやつがいてね……」

いいにくそうに、マオは頭をかきながら、続ける。

「そいつつけたいな才能を持っていね、」

「邪気」……

そうとしか呼べないモノを、操れるのよ……」

「……」邪気。」

この場にいる、雷以外の者が思いつきり首をかしげる。

「邪気」とはまた、<sup>オカルティック</sup>妄言的な単語が出てきたものだ。首を傾げた者は皆、そう内心眉に唾をつける。

「ええ。普通の『異思の物共』の中に、さらに限界以上の奴の、邪氣<sup>まがき</sup>を無理やり入れることで変異して出来たのがあいつら。体のサイズを見てわかるとおり、筋力も敏捷性も倍に倍化。しかも、結界域<sup>けいきいき</sup>まで出せるようになってるからいわゆる『装甲』も厚くなっている。

とくにやっちゃいけないのは取っ組み合い。筋力が倍になって、結界域<sup>けいきいき</sup>まで出せるようになっているから掴まれたらそこで終わり。どうしても組み打ちをしたいのなら相手につかまれず、こっちが一方的につかめる角度から組んだ方が賢明。

弱点があるとしたら普通の『異思の物共』より格段に知能が劣ってしまっている事。これは限界以上に『異思の因子』を込められたせいで脳が圧迫されているせい」

その説明を聞いて金が、なぜか能天気な

「あ、そーなの？ なーんだびびって損した」

と言ってから、ストレッチを始める。ゆっくりと右足を上げた後、膝の裏に右腕を添えて、さらに上げて膝を伸ばす。かなり柔らかい。膝が胸にびつたりとつき、伸ばした脛が頬にくっつく。爪先を直角に曲げ、かかとを天に向ける。

そうして片足で立つたまま、グッ、グッ<sup>グッ</sup>と伸ばした後、左足も同じストレッチ。

「まあ驚きはしたが、頭悪いってえんならいくらでも付けこむ隙があらあな。『結界域』も、出せるとはいえそこらの雑魚武俠程度の濃度だし」

「まあ安心しろ、レイとやら」と、雑狼が続ける。

「武術つてのは自分よりでかくて強くて素早い奴をボテくり回すための悪知恵の集大成だ。

こいつら程度なら、いかようにでもなる」

雑狼は四跨立ちになってから両膝の上に両手を置いて、グッ、グッ<sup>グッ</sup>と肩を入れて、腰回り周辺の深層筋群をストレッチ。

その物言いは、傲慢ではあるがその瞳には一切の油断も無ければ隙も無い。彼我の力量差を正確に計って、そう結論を出したのだから。

何よりそれは二人と手合わせした雷が理解していた。

雷は優雅に微笑むと、

「……お気をつけて」とだけ言う。

その笑顔に、少し頬が赤くなる金と雑狼。全く大した悪女だ、と内心ひとりごちる二人。雷の性別を知っているマオはぶぶツと嗤い、理花と花鈴は「気の毒に……」と気まずそうにしている。

ふと。

花鈴はマオに聞く。

「……本格的に聞きたいことがたくさんあるわ。

その刁<sup>てい</sup>って奴、何ものなの？」

そいつとあんたらは、一体どういつ関係？」

その、出て当然の花鈴の質問にマオは面倒臭そうに「ん

……」と自分の頭を掻いて

「…まあ、そうね……」

貴方達の言う「晴京大虐殺」に大いにかかわっている、とだけ、今はいいましょうか……」

と、底知れない笑みをこぼすマオ。

「……！？」「……？」「……ッ」

そのマオの言葉が聞こえていた雑狼と金と理花は思わずマオを見やる。

「……後で絶対話さないよ……」と、花鈴。

…疑い出したらキリがない。

今はこいつらを殲滅する事だけに意識を裂こつ。花鈴はそう決めた。

「あれ、そついや雷、槍は？」

マオは鳳凰　あの馬鹿銃　を取り出しながら、雷に聞く。

「いや、いい」

ぶらぶらと手首をゆすりながら、

「奴とやり合うとなると武器は使えないからね、今のうちに素手での戦闘のウォーミングアップをしろかないと」

「……」

それを聞いたマオも、何を思ったか鳳凰をしまつて素手になる。

理花と花鈴は訳が分からない。

「ちよつと、あんたらはそれでいいかもしれないけど、私達はどつなんの？」と花鈴。

「私の「牙狩り」と花鈴さんの「阿」云、返してよ！どうせ私達、プリズンナノマシンで自由にならないんだからさ！いいじゃない！」と理花。

そんな二人に、マオはポイポイ、と何かを投げてよこす。

「じゃあ、それあげる」

受け取ってみると、それは耐刃 防弾繊維で編まれ、要所要所に鉄片が埋め込まれた戦闘用の手袋だ。これを手に嵌めて戦えという事か。

「…って、そりゃあこれはありがたいけどさ、使い慣れた武器の方がいいに決まっているじゃない！」

当然理花は抗議するがマオは取り合わない。

平然と

「捕虜の扱いは最後まで気を抜かない。それがマオクオリティ」と猫そのものの様に嗤う。

「……」

武俠の鑑だ事。二人はもう黙って素直にその手袋をはめる。

「よし」

マオが声を出す。

見ると、「結界域」を展開している「異思の物共」 「天魔」達はじり、じり、と間合いを詰めている。

そしてその天魔たちに雷はスッ……と右手を差し伸べ、そして。

「招！」(招「かかって来い」という意)

と叫んでボッ！と手招き。

途端。

「ギイイイイエええエエッ！」「あぎょオオオオオオオッ！」と奇声をあげて襲い来る天魔達！

金が叫ぶ。

「ッしゃアッ！」

雑狼も。

「来いおらアッ！」

そして、鼓膜を劈く爆裂四散音が六つ

六人も「結界域」を展開！六色の輝きが、辺りを照らす！

戦闘、開始。

「ッらアッ！！」ダッ！と駆けだす金。

その金に接近してきたのが短刀螳螂。

「ギエエエッ！」と叫びながら右手の刃物の部分を繰り出す。

「シジャ  
始め！」

それに対し金は高く右膝を上げながら上体を上に伸ばし

「ギエッ！」

それにつられて短刀螳螂の注意が上に向く。

とたんに短刀螳螂は金を見失う。

「フッ」

実は金の、膝を高く上げながら上体を上に伸ばす動きはフェイント。次の瞬間、金は右半身になりながら横向きにかがんで胴と左膝の部分を低くし、しゃがんだのだ。だから一瞬短刀螳螂は金を見失う。

そして上げていた右膝を伸ばし、短刀螳螂の右膝に向かって横突き蹴り。このとき左手の中指は地面に軽く触れている。これだけでも蹴りのバランスが違う。右腕はいつでも自由に動けるよう準備。

「フイユ！」

バキヤ!と一気味よく膝関節がへし折れる音。

そのまま金は短刀蠅螂のへし折れた右足の外に自身の右足をおろしながら、ハンドナヒマキ左手刀防御で敵の右肩と右肘の間を押さえて相手の腰の回転を止めながら踏み込み、すれ違いざまに喉に向かって右正拳突き。アブチュモク手の甲にはめた刃が首を切断。短刀蠅螂は悲鳴を上げる事すら出来ずに絶命。

その隣では雑狼が硬拳蟻に右拳で殴りかかっている。

だが雑狼は構えもしない。

硬拳蟻の拳が届く直前。

転瞬

雑狼は腰を深く沈めながら素早く左真半身になりつつ左足を進めつつまるで獲物を狙う蛇の様に下から上へ左手を跳ね上げ、硬拳蟻の首をのど輪で思いつきり吊り上げる。このとき左肩と左耳はぴたりとくっつけるように頭を下げ、さらに右前腕は左手を跳ね上げると同時に右目の前でガードを固めているから鉄壁だ。

硬拳蟻の右拳は雑狼の肩をかすめる程度に終わる。

正直な話、『どんなパンチも、首を押さえてしまえば防げる』のだ。これはこれで高度な技術ではあるが、無駄に多く技術を習得しようとしていざ実践の際にどれを使おうかといちいち迷うよりはいい。

雑狼は『道場屋』ではなくあくまで『武俠』だ。

「ギッ……!」

思いもかけず強い力で首を吊りあげられ、息がつまる硬拳蟻。

そのまま雑狼は

「そオイッ!」

と気合一閃、顔の前でガードにしていた右腕の拳を握り、その拳槌部分を硬拳蟻の顔面に叩き下ろす。

「ブギャブッ!」?

そのまま拳槌を振りぬく雑狼。硬拳蟻の顔面は割れ、勢いあまって後頭部は地面に叩きつけられ、硬拳蟻の首から上は完全に粉碎。

……そして右半身に構え、右手は顔前に、左手を中段に置いた構えをとった花鈴にも硬拳蟻が襲いかかってくる。

「ギャおウッ!」

硬拳蟻は花鈴に右ミドルキックを放ってくる。その右ミドルは中段に置いた彼女の左前腕の肘よりの所に命中。

……たしかにこの硬拳蟻は頭が悪い。そんなにダメージを与えられるわけでもないのに、構えの上に蹴りを出すとは。普通の状態の「異思の物共」ならもっと賢しい物だと花鈴は経験上知っ

ている。

これは花鈴が左腕でガードしたとみていいが、しかし花鈴は内心驚いていた。

“痛ッ……！”

結構痛い。タカが硬拳蟻風情の蹴りだといつのに。なるほど、頭が悪くなっている代わりに筋力が倍になっているという雷の言葉は嘘ではないようだ。おまけに“結界域”付きだ。

“こりゃいつまでも受けてはいけないわね……”

相手の足が伸び切っていて、それが引き戻されるよりも早く、即座に反撃に移る花鈴。

花鈴は素早く左肘の下に右手を置く。わかり切っている事ではあるが、蹴った足は必ず引くものなので、右手を左肘の下に置いておくと自動的に相手の足が落ちてくる。それを右手と左前腕で挟んでキャッチ。

「アッ！」

そして花鈴は一気に相手の顔に向かって両手を上げて硬拳蟻の足をブン投げる。

この時自分の“結界域”で、敵の“結界域”を相殺する事も忘れない。

バランスを崩し、鈍い音とともに後頭部を地面にしたま打ちつけ、痙攣する硬拳蟻。

その硬拳蟻の顔を思いつき踵を振り降ろして、とどめ。敵、完全沈黙。

さらに別の硬拳蟻が「ギャオオオッ！」と奇声をあげて攻撃してくる。今度は左ストレート。

それに対し花鈴は右足を踏み出して右半身になりながら右手を開き相手の顔の方へ素早く向けてのばす。このとき同時に左手で自身の顔をカバー。頭を、右耳と右肩がくっつくように顎を引いて下げる。こうして顔面を両掌の中に完全に隠す。

そして硬拳蟻の左拳と花鈴の右手のひらが触れた瞬間。

花鈴は人差し指を軸に掌全体を親指側にクリッとひねり、剛力で放たれた拳を難なく受け流す。

そして次に引き戻されていく硬拳蟻の腕に、人差し指を軸に今度は手のひら全体を小指側にひねり戻し、粘りつくように付いていく花鈴の右手。

「ギウッ！」と呻き、硬拳蟻は付いてきて接近してくる花鈴を引きはがそうと、第二撃の右ストレートを放つ。より早く。

花鈴は左肘を、掌を相手に見せるように完全に返すようにして敵の拳に向かって突き出すと同時に左足を右足のそばに寄せてからその後すかさず少し右前にインステップ。このとき左肩と左耳はぴったりとくっついている。

硬拳蟻の拳が突き出した花鈴の左肘にぶち当り、砕ける。

実際のところ、拳というものには存外にもろいものである。手を構成する骨の数々は、細長く、もろい。しかも手首の関節はぐらつきやすい。いくら硬拳蟻の拳が発達しているとはいえ、人体を模してしまっている。以上、そのもろさは変わらない。

そこに花鈴は人体でも12を争うほど硬くて頼りになる肘で、さらに一番小さい小指の骨を横から狙ったのである。案の定、硬拳蟻は「ッぴギャアアアッ……！」と悲鳴を上げる。正直、拳を

骨折する痛みというものは、「こんな痛みを味わうくらいなら、殴られた方がまだ」と、つい思ってしまうほど強烈なのである。

花鈴の右手の動きは止まらず、粘りつくように硬拳蟻の左手を下に払い落としていく。

花鈴は屈していた左肘を伸ばし、硬拳蟻の左首筋に手刀をぶちこみつつ右手は硬拳蟻の左脇に差し込みぐるりと回して左肩を後ろからつかむ。

そうして左肩関節を極めながら首筋に叩き込んだ左手刀を一気に下へ押しつけつつ右足を軸に左足を大きく後ろに回しながら遠心力を使って硬拳蟻の顔面を下方へ叩きつけるように投げる！

「ぐっぴん！？」

顔面から地面へ飛び散る硬拳蟻の体液。その後頭部へ花鈴はさらに右かかとを振り降ろす。さらに外骨格の破片ごと飛び散る硬拳蟻の体液。

理花の方にも「天魔」は襲い掛かってくる。

短刀螳螂の、理花の腹部に向けて突き出してくる右手の刃物の部分を、理花は腹部を引っ込ませ腰を落しながら右足を一步引いて後ろに引きつつかわし、その直後左足を左前45度の角度に、つま先を内側に向けながら左半身になりつつステップインして、左手刀を短刀螳螂の右手首に叩き込んで痛め付けながら払い落とす。

と同時になくなった理花の右貫手が外側から内側に向かう軌道を描いて短刀螳螂の右目を大きくくえぐる！

「ギョアッ！？」

痛みと驚きで動きが止まる短刀螳螂に、理花は右貫手を返す刀でそのまま手刀の形にし、短刀螳螂の上腕部にその手刀を叩き込んで敵の右腕を自身の体の外へ流して封じ、そうしてフリーになった左手を拳槌の形にして短刀螳螂の顔面へ繰り出す。

しかしその左拳槌を、喰らうてなるものと短刀螳螂は左腕でガード。

しかし理花はそのさらに上に行く。

理花は左拳槌をほどこいて手を開き、ちょうど鶴のくちばしのような手の形にしてその短刀螳螂の左腕にひっかけ、下方に押しつけてガキッ！と左腕が上、右腕が下になる様に交差して封じ込める。

再び右腕が翻り、もはや守る物のない無防備な短刀螳螂の顔面に、右掌打が叩き込まれる。グボギッ！と鈍い音。右掌打の威力が強すぎて、顔がほぼ真後ろを剥き、頸椎がへし折れる。

しかし理花はそれで終わったと油断しない。その右掌打で螳螂の頭を掴み、地面にその後頭部を叩きつける。破砕音。短刀螳螂はビクンッと痙攣したきり動かなくなる。

さらに前方2時の方向から硬拳蟻が襲いかかってくる。

「ジュアッ！」

と奇声を上げながら右ストレート。しかし理花はあわてない。

理花は半歩踏み込んで右半身になりながらその右拳を右手で上から払い落とす。後ろ足の左足を右足に寄せ、さらに右足を再度踏み込みながら今度は左手の平の手刀よりの所で敵の右



肘のあたりを跳ね上げて、同時に頭を少々前のめりにするように下げて硬拳蟻の懷に潜り込む。

「ふっ」

硬拳蟻は理解できない。筋力の差は一目瞭然なのに、こつもやすやすと自分の腕が払われてしまふのを。

これにはコツがある。

理花は硬拳蟻の腕を、必要分以上の力で触ったり、掴んで引っ張ろうとしてはいないのだ。

そういう風に障ると、相手の腕も鋭敏だから何らかの作為を感じ、皮膚感覚で「警戒」してしまい、相手は全力で抗おうとし、ままならなくなる。

このとき握るのではなく「置きに行く」感覚で相手に触れるのだ。こちらが意識してないため、相手も自然に触れさせてくれる。

そのまま手前に引くと、抵抗の意思のない相手は驚くほど簡単にバランスを崩す。「対立」せず「同調」すれば、筋力の多寡に関係なく相手を崩すことができるのだ。

例えるなら羽を梳く様に理花は相手の拳をとかしたのだ。

しかしだからと言って右腕が無効化されても、もう片腕がある。

「ギアッ」

とわめきながら懷に潜り込んだ理花に対して硬拳蟻は左フック。

しかし理花はそのフックに対し、右掌を硬拳蟻に見せるように手首を返しながら右肘を八ヶ上げ、迎撃。硬拳蟻の拳と理花の肘が接触。碎ける硬拳蟻の拳。理花の左手は硬拳蟻の右腕を制したままだ。

と、同時に跳ね上げた右膝が硬拳蟻の股間にヒット。ひるむ硬拳蟻。

そのまま屈していた右肘を伸ばして硬拳蟻の左腕を捌いて掴み、

「ふっ」

と同時に短い呼吸と共に理花は左足を一步前進しながら硬拳蟻の顔面に顎を引いて額を突き出し、頭突きをぶちかます。

「ギャブッ！っ」

と体液をまき散らしながらのけぞる硬拳蟻に追撃。顎に向かって両掌打を突き上げ、と同時に上体を前傾させながら前蹴りを硬拳蟻の下腹に叩き込む。

ぐぎッ！と衝撃に耐えきれず、脊椎が半ばでへし折れる音。硬拳蟻は地面に倒れるまでも無く絶命する。

そして雑狼に、短刀螳螂の一匹が袈裟切りに雑狼の首筋目がけて右手の刃を振り降ろす！

「こゝとあぶねえ！」

しかしこの時雑狼は右手の刃を見ない。刃を見てはいけないのだ。「ひとは顔の向いたほうに進む」という単純な事実。顔の向いたほうに体の重心が動き、自然に足が出ていくという生理が人にはある。だから雑狼は短刀螳螂が刃を振りかざした瞬間、刃を見ず、むしろ短刀螳螂の

空いた右脇を見る。

スカツ……ととにかく雑狼は頭を下げながら左足を左斜め前45度の角度に踏み出し、短刀螳螂の攻撃をよける。この時雑狼は右手を挙げて短刀螳螂の右上腕あたりを押さえて敵の腰の回転を止め、こつちに体を向ける事が出来ないようにする。

そうしてから左フック手刀をがら空きの右脇に叩き込み、そして続けざま頭突きを同じところに叩き込む！

「わたたあ！」

「ブエッ！？」

口から体液を吐き出し、痙攣する短刀螳螂。

「ギエエエエッ！」「ガアアアア！」

そこにはかの「天魔」達が殺到して攻撃を繰り出す。

しかし雑狼はあわてない。すかさず倒した短刀螳螂の首の後ろを左手で掴んで釣り上げ、そのまま「天魔」達の攻撃線上へと短刀螳螂の体を振り回す！

「……ッ……」

悲鳴を上げることもできずに雑狼の楯にされて味方の刃を、拳を受けて絶命する短刀螳螂。

「ソラソラそらあッ……」

その楯にした短刀螳螂の陰から雑狼は右ストレート掌打を連発し、次々に「天魔」達の顔面を砕く。お手頃な「楯」があるから防御面は当座の所は安心だ。

「グオオオオオッ！」

と叫びながら、死角から硬拳蟻の一匹が理花に向かって攻撃を繰り出す。

「ッとアフなっ！」

これに対し理花は飛びこむ様に前転をして回避。

「天魔」が普通の「異思の物共」より頭が悪くて助かった。死角から攻撃してもその時に叫んでしまっただけは不意打ちになるわけがない。

地面が陥没する轟音。

理花が立ち上がりざまよく見るとその硬拳蟻は右手に折れた角材を持っていた。その角材に、

“結界域”を込めて握っている。

「ギシャアアア！」

再度その角材を振りかぶる硬拳蟻。

それに対し理花は左足を左斜め前に踏み出して右膝をついて敵の体の外側に身を置きながら、左手を右手の下にするように手を頭上で交差して突き出す。

振り降ろす硬拳蟻の腕が交差した理花の腕と接触した瞬間、すかさず理花は右手をおろして棒を持つ敵の手のちょうど肘あたりを下からつかむ。同時に左手を伸ばして敵の肩甲骨あたりに置き

「ぽっ……」

立ち上がりざま理花は右膝で硬拳蟻の股間を蹴り上げる。

『ギイイッ！』

そして右足をおろすと同時に敵の胴体の上部に自分の腰が来るように掴んでいる右腕を下に引いて硬拳蟻の上部を下げ、体の位置をずらすと同時にすかさず右手をずらして硬拳蟻が持っている棒をつかむ。

「もういいしょー。」

今度は左膝を跳ね上げ、下がった硬拳蟻の顔面を蹴り上げる。と同時に棒を奪つ。

『ギブオオオオ！』

膝をもろに食らい、棒立ちになるように上体をのけぞらせる硬拳蟻。

その無防備な首の前面に、

『せいー。』

思いつきり振りかぶった後、奪った棒の先端を硬拳蟻の喉笛に叩き込む。勢いあまって首が千切れ、吹っ飛ぶ硬拳蟻の頭。

「……っと忘れていた！クリクラクレ！GO！！」

「グオオオオウッ！ー！！」

金の命令を受けて走り出す、戦車を牽引している犀たち。

“結界域”を展開。そのまま巨体に似合わないスピードで弾丸のように「天魔」の群れへ疾走。

『ギイイイイ！ー！』『アアアアアガアアアアッ！』

と奇声を上げ、「天魔」達もその戦車に突進していく。

やはり知能が足りない。

小気味よい炸裂音と共に犀三頭の疾走にひかれ、踏まれ、バラバラに吹っ飛んでいく「天魔」達。いくら“結界域”を展開できるとはいえほんの少し。対して犀三頭の展開している“結界域”

はその「天魔」達よりはるかに濃度の高“結界域”だ。まともにぶつかれば消し飛ぶのは「天魔」の方なのは必定。

「グオガアアア！ー！！」

そのまま犀三頭はUターン。遠心力で戦車本体が旋回。さらに「天魔」達を蹂躪。

“結界域”に鎧われた戦車の装甲にまともにぶつかり、ちぎれた「天魔」の足が、腕が、首が、それぞれの部品が虚空にはらまかれる。

そして犀三頭は爆音とともに戦車を連れて金のもとへ帰還。金は「よしよしよしよしよし！」と可愛い犀三頭の頭を均等に撫でる。

さらに花鈴と理花の前に「天魔」が殺到。

その数十数体。

「グッ？ー」「数が多いッ……！ー」

しかし眼前の「天魔」が飛びかかってくるより早く。

「シャッ！ー！！」

と気合一閃、マオが三才式の右構えから後ろ足の左足を引き上げて左膝を胸まで上げ、脛とつま先を体の内側に向けて股間と右膝をカバー、左手を中段に添えて守りながら前足の右足で

踏み込んで理花と花鈴へと飛びかかっている「異思の物共」のちょうど前方へ一気に飛び込む。

「ッ……」

まるで「マ」送りのような速さで目の前にいた硬拳蟻との間合いが縮まる。

「ッ！ッの間に……ッ……」理花が驚きに目を丸くしている間に。

そうして余った右手は貫手となって硬拳蟻の目に吸い込まれるように叩き込まれる！

「ギャおぶッ……」

途端、硬拳蟻の鼻から上の顔の部分が爆音とともに消し飛んでなくなる。一撃で絶命。

そしてマオは後方右斜め45度の角度に飛び下がる。まっすぐ下がると敵は追撃しやすくなる。しかし斜めに下がられると追撃しにくくなるのだ。

そして再び強襲。マオは左斜め前に左足から飛び込みながらそこにいた硬拳蟻の左手を右掌打で叩き下ろす。途端、やたらあっけなく鈍い音とともにへし折れる硬拳蟻の右手。

さらにマオは右斜め45度に右足を進め敵の外に出つつ右手で自身の顔をカバーしながら左掌打で敵の左肘あたりを叩き伏せる。ここもまるで紙細工の様にはじけ飛ぶ。硬拳蟻の左腕の半ば以上が消失。そしてマオは両手で残った硬拳蟻の上腕を強く自身から向かって左側へひきこみながらつま先を外に向けながら左前蹴りを放ち、かかとで硬拳蟻の左膝を攻撃。途端、硬拳蟻の左腕は肩からひっこ抜かれ、左膝はちぎれる。

そして指先の向きを地面と水平にした双掌打でしつかりと包む様に硬拳蟻の脇腹を撃つ。次の瞬間、撃たれた硬拳蟻の胴体が、まるで発破をかけられたかのようにものすごい轟音とともにはじけて千切れ飛び、上半身は前方にくるとまわり、内臓をまき散らしながら後ろに吹っ飛んでいく……！

この間0.23秒。この硬拳蟻は悲鳴を上げる 否、自分が死んだことにすら気づく暇なく

“分解”されて逝く。

「……」「……」「……」

知能が下がったとはいえ、さすがにうるたえる「異思の物共」。さすがにこの猫耳少女が超危険生物兵器だと気づいたようだ。

しかし何より愚かなのは、彼女だけが超危険だと判断してしまったことだ。

雷も動く。接近する小柄な少女を愚かにも「組み易し」と判断してしまった短刀螳螂が、雷の腹部に右手の刃のような爪を繰り出す。

その中段の攻撃を、雷は右半身になりながら右手で内側から手首に向かって刃物のように鋭く受ける。

するとどうだろう、まるで実際に刃物で切られたかのように右手首から先がやたらあっけなくすっ飛ばす！

渋く体液。

「ギン……ッ……」

そしてそのまま雷は左足を右足のそばに寄せた後、左手で相手の右腕を抑えると同時に右足を踏み込みながら右肩で体当たり。

その直後。

なんと雷の体当たりを喰らった硬拳蟻の体が、バラバラに砕け散ってそこから中にはまかれる！

あたりに飛び散る硬拳蟻の体液。

ばらまかれる砕け散った外骨格の破片。内臓。

うるたえるほかの「天魔」ども。

しかし一匹の勇敢な(考えの足らない)短刀螳螂が雷の胸を水平に向かって左から右へ切ってくる。

それを後ろ足の左足を下げ、腰を引いてかわす雷。

短刀螳螂が今度は向かって右から左へ切り戻してくるのを、

「フッ！」

右足で地面を大きく踏み出しながら右手で手首あたり目がけて受ける。枯れ枝がへし折れる音と共にもげて地面に落ちる短刀螳螂の右手。

「ゲッ……」

短刀螳螂が悲鳴を上げ、逃げるなりなんなり何らかの変化をする前に雷は自分から半円を描く様に右腕をあげて粘りつくように短刀螳螂の手首から先の右腕を、下から上へ大きく崩す。

と同時に空いた敵の脇に向かって左足を踏み込みながら左肩で体当たり。

「グゲバッ……」

この短刀螳螂の上半身も内側から爆発したように爆裂四散。

さらにムキになった硬拳蟻が雷に右ストレートを放つ

雷はこれに対して、握りの緩い 指一本はいるくらいに握りの緩い左拳を、硬拳蟻の正中線をなぞるように下から上へとハネ上げる。難なく硬拳蟻の右手首の内側と雷の左手首の外側が交差。

そのまま左足を一歩進めながら左肘を、左拳が左耳の真横に来るように屈していく雷。その勢いで、自身の前腕部で硬拳蟻の右拳を外へとはじいていく。

そのまま少し前傾しながら右掌打を繰り出す。それをガードする硬拳蟻。

それが最大の失策。ガードするのではなく避けるべきだったのだ。

ボグン、とへしおれる硬拳蟻の左膝。なんと雷は、右掌打を繰り出すと同時に、同じ側の右足で下段直蹴りを硬拳蟻の左膝にはなつたのだ。右掌打に気を取られていた硬拳蟻は致命的なダメージを喰らうまでついその同時攻撃に気付けなかった。逆のくの字に曲がっていく硬拳蟻の左膝。

さらにはじけ飛ぶ硬拳蟻の左腕！なんと雷の右掌打が硬拳蟻のガードした左腕を打ち砕いたのだ。

雷の、白魚のような手が、硬拳蟻の、鉄棒みたいな腕を、たやすく。

その硬拳蟻が絶望の悲鳴を上げるより早く。

雷は繰り出した右足を引くことなくそのまま硬拳蟻の股の下に踏み出し、同時に下から上へ右腕を屈して右肘を突きだす。左腕は掌で硬拳蟻の右腕を制したまま、後方へ伸ばしていく。

そして雷の右肘が硬拳蟻の鳩尾に触れた途端。

もはやそれは「爆撃」。「打撃」の範疇には、決して収まるものではなかった。

硬拳蟻の上半身が「消失」。生々しい音と共に硬拳蟻の外骨格と体液と内臓、その他諸々が碎け散る。吹っ飛び、後方にまき散らされる。

後に残ったのはU字型にえぐれて残った硬拳蟻の下半身のみ。

「……………」

「天魔」共ももちろん、花鈴も理花も金も雑狼も絶句。

破壊力が違う。全然違う。全く違う。

雷とマオの攻撃が繰り出されるたび。

まるで紙の様に「天魔」共が「爆撃」されて吹っ飛んでいく。

こんな真似、ほかの四人には出来ない。四人ほどの実力者でも。

雷やマオの様な、一見戦闘にはあまりに不向きな外見の少女達が、見るからに破壊の権化、としか言いようのない「天魔」共を屠殺している様は。

最早言語を絶するとしか言いようのない光景だった。

理花や花鈴や金や雑狼や犀三頭よりも。

一見明らかに弱者としか見えない、雷とマオが、

たやすく「天魔」達を屠って行く。

ほぼ一撃か二撃だ。

彼女ら(？)の手足が「天魔」の体に接触するたび、そこが「爆発」して消し飛んでいく。

しかもそれは剛力に任せたものではない、確かな攻防技術に裏打ちされているものであった。

「ウンだろ何この戦闘力……」呆然と、雑狼。

もう四人はする事がなく、ただ雷とマオが「天魔」達を「爆撃」しているのを見ているだけだ。

格が違う。桁が違う。

「……なんだそりゃア……なにこのチートぶり……ありえんだろ……」

金が皆を代表してそう漏らす。

「うっわもしかして俺達相当手加減されていたのか……」

呆然と、雑狼。

「そりゃまあ、ね」

聞こえていた雷が、「天魔」を屠殺しながら、その美声で返事をする。

「ただの憂さ晴らしで人殺しなんて、ね……………」

僕は殴り合いが割と好きだけど、人殺しとかはあまり、ね……」

「……」「……」

その台詞に、金と雑狼は言葉も無い。

実に頼もしいがハッキリ言って納得できない。

しかし6人と三頭が「天魔」達をたやすく葬っても。

炎の陰からゾロゾロゾロと、次から次へとまた新手の「天魔」が湧いてくる。

舌打ちする雑狼。

「チッ……負ける気は全然せんが切りがねえな！」

「戦車に乗って一気に突っ切るか!？」

と金。

しかし雷は、

「いや。もうだいじょうぶ……」

と静かに言う。

「ええ?!この状況のどこら辺が大丈夫だと……」

と金が雷に聞くより早く。

「時間切れだから」

と雷が言った途端

急に、「天魔」達の動きが止まる。

「……!?!これは……」

理花が眉をひそめると同時に。

ビシ、ビシリ、と「天魔」達の体に亀裂が走り、

「あら!?!」

と花鈴が目丸くしている間に。

サラサラサラ……

サラサラサラサラ……

と「天魔」達の体が一匹残らず砂の様に粉々になって崩れ始めたではないか!

「なッ!?!?!これは一体……!?!」

呻く雑狼に、皆に説明する雷。

「言っただしょう?普通の「異思の物共」に限界以上の「異思の因子」を入れてなってしまったのが「天魔」だって。」

そう。限界以上。明らかに容量を超えて、異思の因子をねじ込まれてしまった「天魔」は、実質あと数分の命になってしまっから……こんな風に

そう説明している間にも「天魔」達だった粉は風に吹かれ、散っていく。あとにはもう、うその様になにも無くなっていた。

そう。嘘のように、何も。後に残ったのは、もとの火に包まれた町並みのみ。

ダストトウダスト アッシュトウアッシュ  
「塵は塵へ、灰は灰へ、か……ハッ……そのごつい呼び名に似合わず儚い命だ事……」

乾いた笑みを漏らす金。

「ぶふう~~~~~ ああ嫌な汗かいた……」

そう言つて額に浮き出ている脂汗を手の甲で拭う花鈴。

「天魔」たちは頭が悪く単純な攻撃ばかりで対処しやすいことこの上無かったが、しかし普通の「異思の物共」よりも筋力と反射神経が倍になってしかも「結界域」まで出せるようになっていた分、「しくじれば危うい」という恐れがあったのだ。

皆負傷らしい負傷はなかったが、全員そう言つた恐れによる疲労を感じていた。

「さてどうしたもんかな」

と、不意に金が雷の方を振り向く。

「もーハッキリ言つてお嬢ちゃん、悔しいが君は俺らよりも強いかなわんかなわん。もう君とはやり合いたくないが……しかしそれだとどうしたもんかね？俺らの立ち位置が宙ぶらりんになる。君は確かに俺らと同じ人殺しではあるがしかし君は君なりの「義」を持っていることがわかった。黒衣僧をぶつ殺したのもその八州役人のお姉さん方を拉致つたのも何か理由があんだろ？」

できればそこらへん話してみない？もしかしたら俺ら力になれるかもよ……」

と、ダメでもともとで懐柔策に走る金。

雑狼はその金の後ろで呆れていた。当然だ。あつて間もないしかも「獵犬と狐」といったファーストコンタクトの間柄だ。そんな奴にシレつと込み入った事情を話す間抜けが武俠をやつてるわけがないダメでもともと過ぎだ。

それに対して雷は

「うん……どうしようか、な？」

と考え込む。

オイオイマジかよ、と雑狼は呆れ、金はお、ラッキー！言ってみるもんだ、と喜色を顔に表す。

「ちょっと雷……」

と、マオも雷をたしなめようとしている。そんなマオに雷は

「いいっ」

とやんわり遮る。

「少なくともこの人たちは、全く利にならないと分かっている、僕の行為を手伝ってくれた。その行いは、少なくとも僕にとっては信用に値する。」

この人たちを信用して、それが僕にとって仇になるのなら、それこそ大歓迎さ。信用して、あだになって死ぬ様なら、その時は僕が間違っていた、という事でいいんだし、さ」

そう言つて 透明に、透明に微笑む雷。

「……」



黙りこくるマオ。

そのほほ笑みは、美しいが、観る者の心を言いよのない不安にざらつかせる微笑みだった。

「他人の手に、自分の人生の選択権を、ゆだねるな」

不意に、金ではなく、雑狼が、雷にそう言う。

あからさまに、とがめる口調で。

お、といった感じで相方の方を振り向く金。

「俺達を信用して、それが僕にとってあだになるのならそれこそ大歓迎だ、と？あだになって死ぬ様なら、その時は僕が間違っていたという事でいい、だと？」

馬鹿言っちゃいけない、人を勝手にリトマス紙にするんじゃない。

俺達が「おまえは間違っている」と言ったら、素直に「はいそうです」と何も考えずに頷くのか？もしかしたらお前が正しいのかもしれないのに？

いいが、人の意見や話に耳を傾けることはいい事だ。しかし決断はおまえ自身が下さねばならない。

少なくとも俺は、他人に判断の責任をゆだねてて恥じ入る事を知らない馬鹿を、人間扱いするつもりはない。なるべくそいつの話も聞きたくはない。

たとえば敵かどうかも分からん奴に自分の選択権を預けて、味方の乳牛猫を心配させるような小娘とか、な。

それとも何か？その乳牛猫はいくらでも変わりがいるからいくらでも心配をかけさせてもよいと？

フン、とんだあばずれだな小娘。おまえは自分のそんな軽率さが、ほかの誰かを悲しませることになるかもしれないと想像も出来ないただのガキだ」

そのづけけしたものの言いに、しかもあてこすりの屁理屈が過分に加味されたその台詞に、金は狼狽する。

「お、オイ雑狼……」

マオは雷の後ろで、「ち……乳牛猫……」と頬をひきつらせている。

「……つん」

と、つなずく雷。

「僕の見立てたとおりだ」

そう言っ、雑狼に向かって微笑む。

「あつて間もない小娘に、そうやって親身になって叱りつけてくれるような人、信用しない手はないわ……」

マオに見せた、透明で、透明で、だからこそ見る者の心を不安にざわめかせる微笑みを。

「……」

顔をしかめる雑狼。

根拠はないが、この時雑狼は

“危険だな……”

と直感した。

この少女は、純粹に強いただけではない。

かかわる人間全てを良くも悪くも惹きつけ、どこか誰も、本人すらもあずかり知らない所に巻き込んで攫って行ってしまうような、言いようのない危うさを持っているような……

「お……」

雑狼はそんな雷に対してさらに言い募ろうと口を開きかけた。

その次の瞬間！

殺氣。

「！！！！！！」

それも特大級の物が頭上から。

「さ、散開ッ！」

元、ではあるが八州役人の総元締めをやっていた癖でそう花鈴が叫ぶと同時に、その場に  
6人全員が脊椎反射で後方に大きく飛び下がっている。  
そしてその一瞬後。

「オオオオオアアアああアアああガアアアあ アアアアアッ!!」

はるか天空からその殺気が隕石の様に落下してきて。

轟音。それは地面が大きく陥没する音。

爆音。それは軽く地割れが起きる際の音。

激音。それはその衝撃で大きく地面が縦に揺れる音。

「なッ……なな、なッ!？」

背中の羽根も使つて飛び下がった理花が、着地せずに低空に浮かぶ。

「な、なんだっ?! え、隕石か! ?」

と、震動に四つん這いになりながら、金。

「そ、それと、も 新手か!？」

横に転がりながら、雑狼。

「ああ」

と、最後の雑狼の言葉を肯定する雷。  
雷とマオだけは立っている。

この揺れまくっている地面の上で。

「新手の方だ、よ……」

その雷の言葉を無言で肯定するように。  
のそり、と。

隕石の様に振ってきたその殺気の塊が、立ち上がった。  
まるでそれは絶望が山のようにそびえているみたいだった。

「え……もしかして、……サイクロプス 単眼巨人？」

呆然と呻く理花。

3メートルにも届かんばかりの巨軀。

緑青におおわれた銅像みたいな、緑色の肌。

その緑の皮膚の下の発達しきつた筋肉は、まるで鉄が意識を持つてうごめいているかのようだ。  
素足で、上半身裸。来ているのは、裾がズタズタに裂けたズボンのみ。

剃髪しているその面には、目は二つなく、巨大なひとつ目があるのみ。

右手に何か持っているようだ。が、炎の揺らめきで、何を持っているかはよく見えない。  
その立ち上がった殺気の塊みたいな、その人影は、まごう事なき単眼巨人だった。

人類史上で、数多ある民族の中でも特に異彩を放つ民族がいる。

それがこの単眼巨人族だ。

見た目のとおり、その体躯と腕力で以ってほかの人種を寄せ付けない戦闘力を持ちながら、しかし性格は温厚。見た目とは異なり、かなり高い知性と精神性を有しており、特に機械工学と

科学知識と法律学と経済学の基礎を他の人種に先駆けて開発した偉大なる開発者集団とし

エンジンニア

ても知られている。

今現在その単眼巨人族は人里離れた山奥とかに集落を造り、他の人種との交流で様々な技術提供をしながらもひっそりと住んでおり、その知性と精神性から、至高の賢民族 と他の種族に敬われている。

その単眼巨人族を敬うのはもちろん理花と花鈴もだ。他の人種と比べ比較的寿命の長い彼女らは、過去に数回単眼巨人族と交流した経験があり、どの単眼巨人も口数が少ないが性格は温厚で思慮深く、中には今でも親交のある単眼巨人もいる。

……その、親交のある単眼巨人のだけれど、理花と花鈴にこんな忠告をしている。

はぐれ者の、私と同じ同胞と呼ぶのもはばかられる輩には注意しろ、近づいてはいけないと。

「花鈴さん……」

と、理花は花鈴の顔をうかがう。

花鈴は厄介なことになったと、顔をしかめている。

「ええ……どうやらこいつ何か悪さをして部族を追放された奴のようね……」

いくら単眼巨人族が性格が温厚な種族と言っても、それはあくまで平均値としてそう言

われているだけのことであり、そういった統計というものには常に例外というものが残念ながら存在する。

やはり単眼巨人族も同じ不完全な人類の一員であり、その中にはやはり過ちを犯す者もいれば邪悪を働く者もいる。

そういつたものは当然山奥の集落を追放され、そのまま野に下って幫ヤクザの仲間入りをしてしまふものだって当然いる。

花鈴と理花は、この単眼巨人もそのたくいだと見当をつけた。理花と花鈴の知る、今も親交のある単眼巨人は、こいつの様に無意味に不快な暴力の空気をまき散らしたりはしない。花鈴のそのつぶやきが聞こえたのだろう、その単眼巨人は花鈴の方をじろり、と見やる。

「おいその工ルフ！何知った風な口をきいている！」

その外見にふさわしい、弩羅を鳴らすようなだみ声。

「俺が部族を追放されたのではない！俺が奴らを見限ったのだ！そこを間違っな！」

そう言つて花鈴に怒鳴りつけた後、今度はその赤々とひかる単眼を雷へと向ける。

「俺の名は鋼頭王。我が主、刃ディアオ様の命により、貴様を始末しにきた」

そう名乗りを上げた瞬間

ザザザッ！と　なんとあの黒衣僧の集団が、鋼頭王と名乗ったその単眼巨人の後ろから、武器を構えて現れたではないか！

「え？！なッ……黒衣僧！？」「あれ！？なんかあの単眼巨人のおっさんが奴らを率いているっぽく見えるのは気のせいか！？」

うるたえる雷とマオの以外の四人。

そんな四人に雷は、こんなことを教える。

「ああそつだ、いい事を教えてあげよう」

そつ言う雷の眼差しは半眼になり、美しくも刃物のように鋭い。

「こいつが、刃ディアオ」と呼んだ奴は、実は黒衣僧どものスポンサーだったりする」

その雷のセリフに、理花と花鈴は堂目する。

「なッ……スポンサーですつて！？」

それは八州役人にとって、のどから手が出るほど欲しい黒衣僧の弱点。

黒衣僧といつものは、ハッキリ言つて世論を敵に回してしまつて、とうの昔に解体されてもおかしくない組織だ。その組織が今も健在であるのは、この外道集団に資金提供しているものがないからだ。

黒衣僧ほどの大きい組織に対して資金提供をして、世論を強引に無視できるほどの権力や財力を有する者はそう多くはない筈なのに、しかし一体どういつからくりなのか今の今まで全く調べがつかなかった。

それが、名前だけとはいえ、こつもあつさり分かつてしまつとは。

最大の皮肉は、役人長に見限られて、もはや八州役人でなくなつてから知ってしまったという事だ。

単眼巨人の、鋼頭王はふふん、と鼻を鳴らす。

「しかし刁様の御心はよく分らない。何を理由にこんな小娘を恐れているのか……」  
その鋼頭王のセリフに、

「やあ……」

と雷は答えながら、自身の右肩を左手で抱き、自身の左腰を右手で抱いてわずかにその身をくねらせながら、囁く。紅もさしてないのに、桃色に輝く唇が。

「僕の虜になるのが怖かつたんじゃない……」

と、誘つように、鋼頭王を上目使いで見やる。

その雷の媚態に、鋼頭王はにまアアア……とだらしなく口を半開きにして、よだれを垂らす。  
「ククク……なるほどな……確かにこれはたまらんものがあるな小娘……」

いいだろう！刁様は雷、貴様を始末する際、派手にやってもよいと気前良く許可を下さつた！  
始末する前に役得三昧とさせてもらおうぞ！

淫猥に口元をゆがませながら、ズシン、ズシン、と足音高く鳴らしながらこつちに接近してくる鋼頭王。

と。

炎の揺らめきをまたいで近づいてくる鋼頭王に対して。

ポツリと。

「おいデメエ……右手に持ってるのは何だ」

金が、なぜか震える声で鋼頭王に詰問する。

「あ……よく聞こえんな、なんだハッキリ言ってみろチビ」

「右手に持っているのは何だつってんだこのウドの大木野朗ッ！」

炎の揺らめきでよく見えなかった鋼頭王の右手元。

それが鋼頭王が近寄つてきたおかげでよく見えてきた。

見えて、決して心地よいものでは確実に無かつたが。

「あ……これか？この事かチビ」

にんまり笑いながら、その右手に持っている物を眼前に掲げる。

それは、長い長い鉄棒に、趣味の悪い団子のように串刺しにされて連なつた……

人の生首の群れ、だつた。

「~~~~~ッッッ~~~~」

絶句する6人。

「あ……」

その中で、理花が声を上げる。

鋼頭王の掲げた鉄棒の、生首の中に、  
見覚えのある顔があった。

あのパンケーキ屋の、仲の良い家族の生首みつた。

まるで新婚同然に仲が良かった夫婦の、そして今度新しい家族として弟ができる喜びに胸を膨らませていた女の子の顔が、

恐怖と絶望に凍りついたまま、鉄棒に ……

「ウワあ~~~~~~~~ハッハッハッハッ！……」

そして6人が絶句して凍りついたのを合図にするかのように一斉に黒衣僧達が大笑いしながら、まるで旗を立てるかのようにな、

なんと鋼頭王が掲げ持っている鉄棒と同じく、数多の生首が連なった鉄棒を地面に立て始めたではないか！

「クッククッ……いやああ楽しかったぜえ……」

と、頼まれもしないのに鋼頭王がべらべらと自慢話を始める。

「刁様が気前良く派手に暴れてもよいと太鼓判を押してくれたからなア……それで雷、貴様を始末するついでにちよつと遊ぶ事にしてな。」

こいつらと、後ろの黒衣僧たちを親指で指し、を使つてこの通りの先にある広場までこの街の住人を無理やり集めてな。ちよつと、誰がこの先のとがった鉄棒を投げつけて一番多くニンゲンを串刺しにできるかゲームをしたわけよ。

ああほんと楽しいもんだぜえええ……あの鉄棒が刺さつて刺さつて刺さりまくつた時の悲鳴の大会唱はよあ~~~~…

その後適当に竜巢の「異思の物共」を解放して適当に街に火を放つてもお最高だぜえええ……！

そう親切かつ得意げにまくしたて、そして再び「ワッハッハッハッハッハッ！……」と嗤う黒衣僧と鋼頭王。

鋼頭王は、その生首の連なった鉄棒を、放り捨てる。

さつきまで、ほんのついさつきまで、平和だった街の住人。

それを（ヒマつぶし）のため……その為だけに。

それをめちゃくちゃにして、楽しいとほざくか。

この生ゴミ共が。

ブツン。ブツン。

理花と花鈴の、理性のたがが、はじけ飛ぶ音が聞こえたような気がした。  
バツン。バツン。

金と雑狼の堪忍袋の緒が、千切れ飛ぶ音が聞こえたような気がした。

「あなた」

今、怒りに脳髓を沸騰させている6人を代表するかのよう、マオが鋼頭王に声をかける。

「あなた、こんな真似をして、赦されるとでも思っているの？」

「ああ！赦されまくりだ！見さらせ！」

と、マオの問いに答えた直後、

「フン！」

と、気合一閃

なんと鋼頭王の体から、

理花、花鈴、金、雑狼ら四人とは比べ物にならないほどの「結界域」が展開される！

「「「なっ……」」」

驚く金と雑狼と花鈴と理花。

そして。

「っおりゃッ！」

その「結界域」のすこさに大気がおおられて、この場にいる全員を吹き飛ばさんばかりに強風が吹き荒れる。

「解くと見よ！」

そのまま鋼頭王はしゃがみこんで、地面に向かって頭突きをかます！

直後。

鼓膜が耐えきれないほどの轟音とともに地面が再び陥没！さらに地割れが起こり、再度直下

型の地震が発生！！

「「「~~~~~」」」

さらに大きく後ろに飛び下がり、衝撃に対して回避する6人。

……ゴゴゴゴゴゴゴ……

それは、災厄というものが、人の形をとったもの、としか言いようのないものだった。

衝撃で周りの燃えていた建物が吹っ飛び、その中心部で巨大なクレーターが出来て、さらにその中で冗談のように大規模の「結界域」が展開されていた。

「ハッハ~~~~~」

ダンッ。

そのクレーターの中心部から、っ飛びでクレーターの淵まで飛んできて、着地する鋼頭王。

『どうだカトンボ共！見たかこの素晴らしいパワーをオオオオ！』

このパワーを持ったこの俺を裁けるものなぞ皆無！！皆無皆無皆無ウウウウッ！！

カこそが正義ッ！！正義こそが力ッ！！故に勾様の次に力のある俺は何をしても正しいのどウウああああああ！！」

「「「そうだそうだ、その通りだあ

……」」」

その鋼頭王の主張に、後ろの黒衣僧らも賛同する。

その鋼頭王のあまりに余りなその台詞に

「……おい、その三流端下のやられ役野郎」

と、金が低く抑えた、しかし抑えきれないほどの怒気を込めて鋼頭王を侮辱する。

「……あー?」

ビシッ……とこめかみに血管を浮かばせながら、鋼頭王。

「何か言ったか、そのチビ」

ものすごい殺気。

“結界域”の強さも相まって、視線だけでも人を殺せるほどの濃度。

現に鋼頭王の視線が通った空間は異様なまでに凍り付き、そしてその視線を浴びた金の“結界域”がもろに揺らぐ。

しかし金はそれでも一歩も引かなかった。

「ああ言ったさ。貴様の事をやられ役、といったんだ。

その年で耳が遠いのか?このウドの大木<sup>ビッグウッド</sup>」

「ワッ!」

鋼頭王を中心に、空気が地面が震える。鋼頭王の“結界域”が怒りで白熱している。

鋼頭王の後ろに控えていた黒衣僧たちがそれにたじろぎ、数歩後ろに下がる。

しかしそれでも金は微動だにしなかった。唯一動いたとすれば左手をスボンのポケットに入れたことぐらいか。(もちろん箆手の刃の部分がポケットの外側に出るように)

「貴様、よほどこの世に未練がないと見えるな」

「お前がな」と、鋼頭王のセリフに即返事を返す金。

「貴様のような不細工は不細工らしく身の程をわきまえて遠慮して生きていればまだ救いがあつたといつのに……」

予言してやろつ。

貴様はこれから貴様と違ってハンサムでそして強いこの金様にボテくりまわされて死ぬ。

この結末は貴様がその醜惡な面<sup>ツマ</sup>で産み落とされてしまった時点で決定事項だ」

ギシッ…ギシギシッ…ッ!

空間が。

鋼頭王の怒りに染まった“結界域”の影響で。ガラスに罅が入る様に歪んでいく。

「ひ、ひいいいい……」「あわ……あわわわ……」

後ろの黒衣僧たちが情けない声をあげてさらに引く。

さらにはつきりとこめかみに怒りの痕跡を浮かべながら、鋼頭王は無理矢理笑つ。

「……ああ。確かにその予言は成就するな。

貴様のツラが二目と見れないほどボロボロになってそして首から下が消えてなくなるといつ意



味でな」

金も、口の端に不敵な笑みを浮かべる。

「その未来は確実にやってこないな。」

何故なら貴様は生涯勝者にはなれないタイプだからだ。

貴様が今まで生きてこれたのはそう　この金様に無様にぶち殺されるためだけに天が生かしておいたに過ぎない事を骨の髄まで教えてやろう……」

次の瞬間。

轟風と共に金の「結界域」が周囲に展開。

しかし、鋼頭王の「結界域」に比べ　小さい。

不敵な笑みを浮かべたまま、しかし自身が不利なのを悟り、「チッ……」と舌打ちをする金。

「フン」と、獰猛な嘲りの笑みを浮かべる鋼頭王。

そこに

ザッ!という足音を立てて、金の横に並ぶ雑狼。さらに見ると、花鈴と理花も並んでいる。

「お前だけか?」つげんな、金」と、雑狼。

「お前　それと、あんたら……」と、金は花鈴と理花を見やる。

「あの粗大ごみの右手に持っている鉄棒に刺さっている生首の中にね」と、理花。

「つい先刻　ちょっと、ほんのちょっとだけど、仲良くなったホットケーキ屋さんの親子三人の分があるのを見せてね」

理花は、右目に悲しみを、左目に何より怒りをたたえ、鋼頭王の右手で凍りついているあの三人の首から、それでも目をそらさない。

「元、とはいえ八州役人の女がそれを黙ってみている訳にはいかないじゃない?」と、花鈴は金にウインク。

金はフックと笑い、

「　　武侠の女のはしくれなら、男同士の決闘に水を指すもんじゃないと思うが?」

そっぴい金に花鈴は

「そっぴいカツ」付けたいなら」

と、金の、ポケットに入れた左手を指し、

「恐怖を必死に握りつぶそうと前腕にそんなに力を入れてるもんじゃなわい、ボーヤ」

その花鈴の指摘に、少し目を見開き、しかし諦めたかのように金は苦笑を洩らす。

「はれたか……」

そっぴい言って左手をポケットから抜く金。

金の左手は、ブルブルと震えるほどきつく固く、握りしめられていた。その拳の指の隙間から、緊張の汗がにじんで漏れている。

理花が口を開く。

「それにあんな下素野郎にいちいちフェアな戦いをしてやる必要はないわ。純粋な数に押され

て惨めに惨死するのがお似合いよ」

そう言つて、鋼頭王をねめつける。

しかし　　そう言う理花も震えていた。

当然鋼頭王は余裕だ。

「フン……小虫はやはり小虫らしく群れたがるものだな……

いくらでもかかつてこい、ウジ虫共」

静寂。

場は凍りついて微動だにしない。

否。

鋼頭王と、金雑狼、理花、花鈴らの、結界域が中間でぶつかり合い、砂塵が悲鳴をあげて舞い上がっている。

寂。

……そして一人と四人の、結界域が最高潮に達し。

一気に動こうとした……！

その直前。

バツ！と一本の手がその緊張を遮った。

雷である。

一人と四人の、結界域のぶつかり合いを前に、なんと平然とその中間にいた。

バタバタと服があらわれ、その小柄な体はすぐに吹き飛ばされそうなものだが、しかし足に大木の根が生えているかのように微動だにしない。

「ふふ」

「間」を外されて、少しつんのめる四人といぶかしむ鋼頭王。

そして雷は金にこう言った。

「あまり強い事を言うものじゃないわ……弱く見えるわよ」

あの美声で静かに、しかしはつきりとそう言われ、当然カチンと来る金。

「あのな……」

文句を言いかけ、しかしすぐに言えなくなる。

何故なら、雷が左人差し指で「そっ……」と優しく、しかしぴたりと金の口をふさいだからだ。

「何も言わないで……」

眠りに就こうとする幼子に、子守歌を歌って聞かせる母親の様な、静かな、やさしい声色でそう言われ、「……」と沈黙するしかない金。

そしてクルッ、と金達に背を向け、鋼頭王の方に向きながら、自身の服の襟と髪に手をかける雷。

「貴方達はただ口を閉じて静かに」

そう続けながら強引に自身の服をびりびりと引きちぎりながら、同時に頭のかつらを外しつ  
つ

そしてあの、ドス低い地声で台詞を締めくくった。

「 僕の背中の、灼熱 だけを見ていて」

やぶれた服の下から皆が想像するような下着 は、現れなかった。

あらわれたのは、あの水色の拳法着。

あらわれたのは美少女と見紛うほどの白皙の美貌の少年。

あらわれたのはそう、あの背中の、下の生地が水色だけにやたら映える

……

あの赫い、崩壊突撃”の四文字。

「ほお」と感嘆の念を漏らす銅頭王。

「ッ!?!」「つつそ?!?!」と目を丸くする金と雑狼。

「こ声がやたら低いッ!?!」

え、ちょッ……

お、男をオ!?!」

悲鳴じみた声を上げる金。

「え……じゃ……俺はその……男に少々ときめいて……」

呻く雑狼。

雷は顔だけ後ろを振り返り、「ふふ……」とほほ笑む。

そうして銅頭王に向き直り、そして歩を進める。

……その後ろで金が「おえええええ……」、「雑狼が「えれえれえれ……」と胃の中の内

容物を体外に逆流リバースしていて、その隣で理花と花鈴は「気の毒に……」と苦笑しているの言う

までもない。

その理花と花鈴の横に、マオが立つ。

「まー今回は雷に譲ってやってよ、みんな」

「マオ……」と、花鈴。

見ると、いつの間にかのんきにマオはキセルを取り出し、それをくゆらせている。

「雷はね、何よりも嫌いな。あいつの様に……」

キセルを食われるマオの口元は笑っているが、しかし目は笑っていなかった。

「力に溺れて腐れた根性になった輩がね」

鋼頭王は目を細めた。

こっちに歩み寄ってくる雷に、威嚇がわりに「結界域」のこもった殺気をさっきからぶつけている。

……のだが。

しかし雷自身は体表からわずか数ミリしか「結界域」を展開してないのに、鋼頭王の「結界域」付きの殺気なぞ唯の涼風、とばかりに平然と歩み寄ってくる。

「金とか言うチビの様に虚勢を張っている様な力みが全くない

内心舌を巻く。

「なるほどこの胆力：力様が気にかけるわけだ……」

そして一足一刀……一歩踏み込めばたちまち互いに必殺の一撃を繰り出せる間合いのギリギリのところで、雷は足を止める。

そうして鋼頭王を見上げる雷の瞳には、

慈悲も、恐怖も、憐れみも、憎悪も無かった。

まるで路傍の石でも見るかのよう」。

見上げているのに見下していた。

なんといつ残酷。

そう。そのまなざしには、残酷しか無かった。

その視線に、少々癪に障る鋼頭王。自然と憎まれ口が出る。

「フッ……男だったとはな……力様もなかなかの粋人だという訳か……」

クククッ……その尻穴に、どれだけ刀様の物を注がれたんだ小僧？」

だが鋼頭王の台詞を雷は無視。

「マオ」

後ろのマオに呼びかける雷。

「んっ、なあに？」

雷と同じく、「鋼頭王の結界域」付きの殺気の直中であって、この女も平然としている。

「こいつの心を惨めにぶち砕くための殺し方をするための、知恵をくれないか」

その雷のリクエストにマオは呑気に「ん　そおねえ……」としばし腕を組んで黙考。

ややあつて、

「あ、じゃあこんなのはどお？」

と雷に近寄り、そして何事かを耳打ちする。

……たちまち雷の口元が軽く笑みを形作る。

「うん。　それはいい考えだ。……ありがと」

「ん。どーいたしました。」

雷の礼にそう返事をしてから、マオは「ちゅっ」と雷の左頬に接吻。また元の後ろの位置に戻るマオ。

それを待っていて見ていた鋼頭王は「フン」と鼻で笑う。

「ほお？俺の心をブチ砕く殺し方とな？そいつは愉快的ジョークをきいたもんだ。それで？その中身の具体的な方法は何だ一体？」

その鋼頭王の問いに、

雷は一切の感情をかいだ無表情になり、「こう答える。

「ハンデだ」

そう言つて雷は、

爪先で地面を深く掴みながら腰を腿と地面が水平の位置になるまで落とし、そう、まるで見えない椅子に座っているかのように腰を深く落とし、両腕を肩の位置まで上げ、肘に少し余裕を持たせて眼前へ伸ばす。手首から先は、指一本はいるくらいに緩い握りの縦拳に。

いわゆる馬歩、という姿勢だ。別名騎馬式とも言つ。このやたらと重心の低い姿勢を長時間とする事により、武俠は足腰を鍛えるのだ。

……しかし見事な馬歩である。写真を撮ればそのまま武術の教科書に載せる事が出来るくらいだ。

が、見ての通りこれはあくまで鍛錬の為の姿勢である。この実戦の際にこんなことをする雷に、鋼頭王は首をかしげる。

「僕はこの馬歩のまま、貴様の攻撃を三回、受けよう。

そしてその後、僕は一回だけ攻撃しよう。

そしてその一回の攻撃だけで、貴様を葬ろう。

さあ、三回。存分に攻撃するがよい。」

その雷のセリフに、金 雑狼 理花 花鈴ら四人は「！？？！……ッ」と絶句。

鋼頭王とその後ろの黒衣僧たちも一瞬ぼかんとしてから、

「ブッ……ブワアアア~~~~~~~~ハッハッハッハッ！」

「ブハハハハハハハハハハハハハハハハハハッハッ！」

と、そろって大爆笑した。

当然である。どう見積もっても体格差がありすぎる。なのに雷はモロに、しかも三回攻撃を受けるというのだ。

正気の沙汰ではない。

「ハッハッハ……！確かに！微動だにせぬ貴様に三回攻撃して、そして耐えきられたらさすがの俺もプライドがぐちゃぐちゃだろう！なおかつ貴様のきゃしゃなお手で、しかも一撃でブッ殺されたらさぞ地獄で肩身の狭い思いをするだろうな！しかし貴様、本気でそれをする

つもりかね！？」

ひいひい嗤いながら、そう嘲る鋼頭王にしかし雷は無表情。

「さっさとかかって来いウドの<sup>ビッグシット</sup>大木が。貴様がここで無様な醜態さらして死ぬ事は、金さんが言ったとおり、貴様がその醜惡な面で生まれてしまった時点で決定事項だからな」

「……………なんだと？」

ビシリッ……………！と、再度鋼頭王のこめかみに怒りの筋が。

「最初っから全力で来い。そうだ、貴様の得意なあのかへなちよこ頭突きでな。もしかしたら惨死の運命が変わるやもしれんぞ？まあ、貴様のその運命が変わる確率は笑えるほど低いかな」

シ……………ン。

その、美麗な容貌とは似ても似つかない、汚い毒舌。

再度凍りつく空気。

……………ゴクリ。

誰かが生唾を飲み込む音がやたら大きく響く。

そして勝負が始まった。

一方的な殺戮と同意義の。

「……………ぬかせえ」

ッ……………！」

大きく地響きを立てながら、一気に雷との間を詰める鋼頭王。

「貴様なぞ我が頭突きを使うまでもないッ！」

そう言っ左腕を振り上げる。

「<sup>ジャブ</sup>左拳で十分だあ

ッ……………！」

そう叫んで怒りの、結界域”を込めた左拳を雷に向かって振り降ろす！

直後。大規模地震のような振動が発生。

と同時に鋼頭王の左拳と、それに接触した雷の頭を中心に、”結界域”同士の衝突による閃光反応！！

「うおわッ……………」

「まぶしッ……………」

思わず瞼を閉じる四人と、黒衣僧たち。

「……………」

ややあつて。

皆がそろそろと瞼を上げ、そして、

そして、信じられないモノを見た。

「痛ッ……!?!」

よろめく鋼頭王。鋼頭王の呻き。

なんと、鋼頭王の左拳が裂け、血が滴っているではないか!

「「「なッ!?!」」」

四人と黒衣僧全員が驚愕に喉を詰まらせる。一人、マオだけが平然と、キセルをくゆらせている。

そして一方殴られた雷は……

無傷。

額の一部から、「シューウウウウ……」と煙が上がっている。

おそらくそこに鋼頭王の左拳がヒットしたのだろう。

しかし、雷は先刻と変わらぬ無表情。

どこからどう見ても……無傷。

そして、何事も無かったかのように、ポツリと言。

「あと二回」

と。

「「「~~~~~ッ!?!」」」

この場にいる、雷本人とマオ以外、全員絶句。

「~~~~~ッ!?!」」

鋼頭王にいたっては、ドオッ!と冷や汗を滝の様に流し始めている。

「え、ウソだろオイ!?!」と喚く金。

「き……効いてない!?!」と、我が目を疑う雑狼。思わず自分の頬をつねってみたりしている。その横で花鈴と理花も、目の錯覚じゃないかと何度も目をこすっている。

が。

眼前の景色はそうする前となんら変わっていない。

雷が平然としていて、鋼頭王が痛そうに左拳をかばっているという光景は。

「「「~~~~~ッ!?!」」」

この場にいる、雷とマオ以外全員絶句。

……だが虚勢を張るためか、ややあつて、取り繕う様に不敵な笑みを浮かべる鋼頭王。あまり取り繕いきれては当然なかったが。

「フ……フン!さすが勾様の目に適うほどの事はあるようだな!」

よ、よかろう……ならばお望み通り全力で行くぞッ!」

途端。

大気が、振動し、この場にいる全員の三半規管を揺らす。





ただ一言、金が額にびっしりと脂汗を浮かべながら、

「あり得ん……」

と呻くのみ。

見ると四人全員脂汗を浮かべて震えている。もちろん黒衣僧たちも、だ。

鋼頭王の方はまるでさっきまでの傲岸不遜ぶりがうそのように恐怖で縮こまっている。

そして。

「う……うそだ……」

嘘だッ！こんなことッ、あり得る筈がないッ！

嘘だああ                      ツッ！「！」

そう叫び、自暴自棄のようにダンッ！と空高く跳躍。

「なんだッ！？」と、雑狼。

「おいまさかッ……」と、金。

天高く跳躍した鋼頭王は重力に引かれるまま自由落下。そしてグルグルグルと空中で縦回転を開始、そのまま重力と回転の勢いを加味させた、最後の頭突き。

こんな派手な真似、プロレスとかならともかく実戦で出来るわけがない。

相手が動かない    あえて、動かないからこそできる最大威力の頭突き。

ツッ！「！」

「き、消えてなくなれえええええ」

そして激しく縦回転しながら隕石のように落ちてきた鋼頭王の額と、

どこを見ているのか無表情なままの雷の額の上側が、

接触。

……直後。

ツッ！「！！！！！」

「をわああ」

ッ！「ひょええええ」

「！！！」

「ギャああ」

ツッ！「！！！」

この場にいる全員の鼓膜を破らんばかりのすさまじい炸裂音と共に、地面が大きく揺れ、「爆心地」からあり得ないほどの閃光。

そしてその「爆心地」が。

大きくすり鉢状に。

地面が陥没。

……………。

……………。

……………ややあつて。

「……………」

……

クツ……耳が……」

キーン……と耳なりを響かせて馬鹿になっている耳をかばいながら、その場にしゃがんでいた金がそろそろと体を上げ、きつく閉じていた瞼を開ける。

ゴゴゴゴゴ……

その視界に映ったのは、大きく、家一軒が入らなばかりに大きく陥没した地面。そこから、多量の白煙が舞い上がっている。

「……どつなつたんだ……！」と叫んで、すり鉢状に陥没した地面の淵にかけよる金。

「まさか……いやしかし……！」雑狼もそれに倣い、駆け寄る。

何がまさか、なのか。

何がしかし、なのか。

そう言った雑狼自身訳が分からないまま、駆け寄る。

見ると、向こう側で黒衣僧の面々も、陥没した地面の淵に駆け寄っていた。

そして同じく駆け寄る花鈴と理花。

白煙が邪魔で、陥没した地面の下がどうなっているのか目視出来ない。

が、その時運命を司る何者かが気をきかせてくれたのが、ヒュウ、と都合よく一陣の風が吹いて、邪魔な煙を一掃する。

そして。

その場にいる全員が、どつなつたのかを見届けた。

「嘘……」

かすれた声で、呻く理花。

しかしその呻きは、その場にいる全員の、嘘偽らざる本音を的確に代弁したものだっ。

「うっ……」

陥没した地面の中心あたりから、苦しげな呻きが聞こえる。

……鋼頭王の。

なんと雷は馬歩の姿勢のまままったく、信じられない事に全く変わらず、そしてその雷の足元あたりに鋼頭王が額を両手で押さえてうずくまっているではないか！

両手で押さえた額から、一筋の血が滴っている。

ぐ……ぐ……ぐ……」

ダメージは結構あるらしい。弱々しく顔を上げる鋼頭王。

そして雷と目が合い、ビクンッ……と身をすくめる鋼頭王。

雷の眼差しに、慈悲も、恐怖も、憐れみも、憎悪も無かった。

ただ、残酷なままだった。

心境的にも、実質的にも、もはや完全に見下していた。

「あ……あひゃひょわ~~~~~……」  
 ショジョオ~~~~~……

世にも情けない意味不明の呻きと共に、失禁し、股間を濡らす鋼頭王。  
 そしてわかり切ったことを、それでも律儀に宣告する雷。

「これでゼロだ。」

次は僕の番だ、な……」

ペキッ……

その時マオは、

「あ、聞こえた……」

と意味不明の事を言い、にやにやと笑い始めるマオ。

「え……？聞こえたって、何が？」と、隣にいた理花が聞き返す。

「きまつているじゃない」

フックと鼻で笑うマオ。

「鋼頭王の心がもの見事にへし折れる音、よ。」

いや……おかしいわあ！「ペキッ」よ、「ペキッ」！なあ……んてかっるい音なのかしら！「マッ  
 チ棒かってる！どっせなら」ドグシヤアア~~~~~！とか「ボッ」オオ~~~~~ン  
 ン！」とか派手な音を出せえッの！

いや……全く人としての格の高さが偲ばれる音だわあ！

そう言つて大笑いし始め、バシバシと手をたたくマオ。

「む……無茶言つぜ姉さん……」

それを聞いていた金は顔じゅう脂汗にまみれながら、ひきつった顔で。

「傍で見ているこっちの心までもがフチ折れたつていつのに……」

そして陥没した地面の中心で、雷は馬歩の姿勢を解き、ゆっくりと

しかし確実に鋼頭王の

そばまで近寄り始めた。

ゆっくりと。

そして確実に。

まるで誰の許へも確実に訪れる、死の運命<sup>さだめ</sup>。そのものように。

「ヒッ……へッ……？！」

ガタガタガタッ！と滝の様に脂汗を流しながら滑稽を通り越して哀れなくらい震え、そして

「ッ、こっちくんなあ

ッ」

と叫びながら、近づいてくる雷に向かって右ストレートを放つ鋼頭王。

しかし当然雷はあわてない。

むっとした顔になり、

「四発目。」

ルール違反。

…… ペナルティ、だ」

そして雷は。

再度深く腰を落としながら右半身になり、緩い握りの拳が右耳のそばに来るように前腕を屈しながら右肘を下から上へ振り上げるように鋼頭王の右拳へと突き出す。

左腕はバランスを取るためか、自身の後方へ。

そして鋼頭王の右拳と雷の右肘が接触！

次の瞬間。

音を立てて砕けたのは、鋼頭王の拳の方！

「ぐギャアアア~~~~~！！？」

響き渡る鋼頭王の絶叫。

「バカねあいつ」

と、マオが何の感慨も抱いてないような顔で紫煙を吐き出す。

「敵の攻撃してくる拳脚に対して肘を合わせるのは、雷の得意技だっつーのに」

「っ……………ぐッ……………！」

ズンッ。

激苦痛に呻きながら音を立てて、その場で膝を屈する鋼頭王。砕けた右拳を左手でかばっている。

ザッ。

そうして戦意を失った鋼頭王の眼前に、雷が。

「お…………おねが…………ゆるし…………て…………」

その雷に、無様に命乞いをする鋼頭王。

しかし雷は返答しない。

その代わり、目をつむる。





その後。

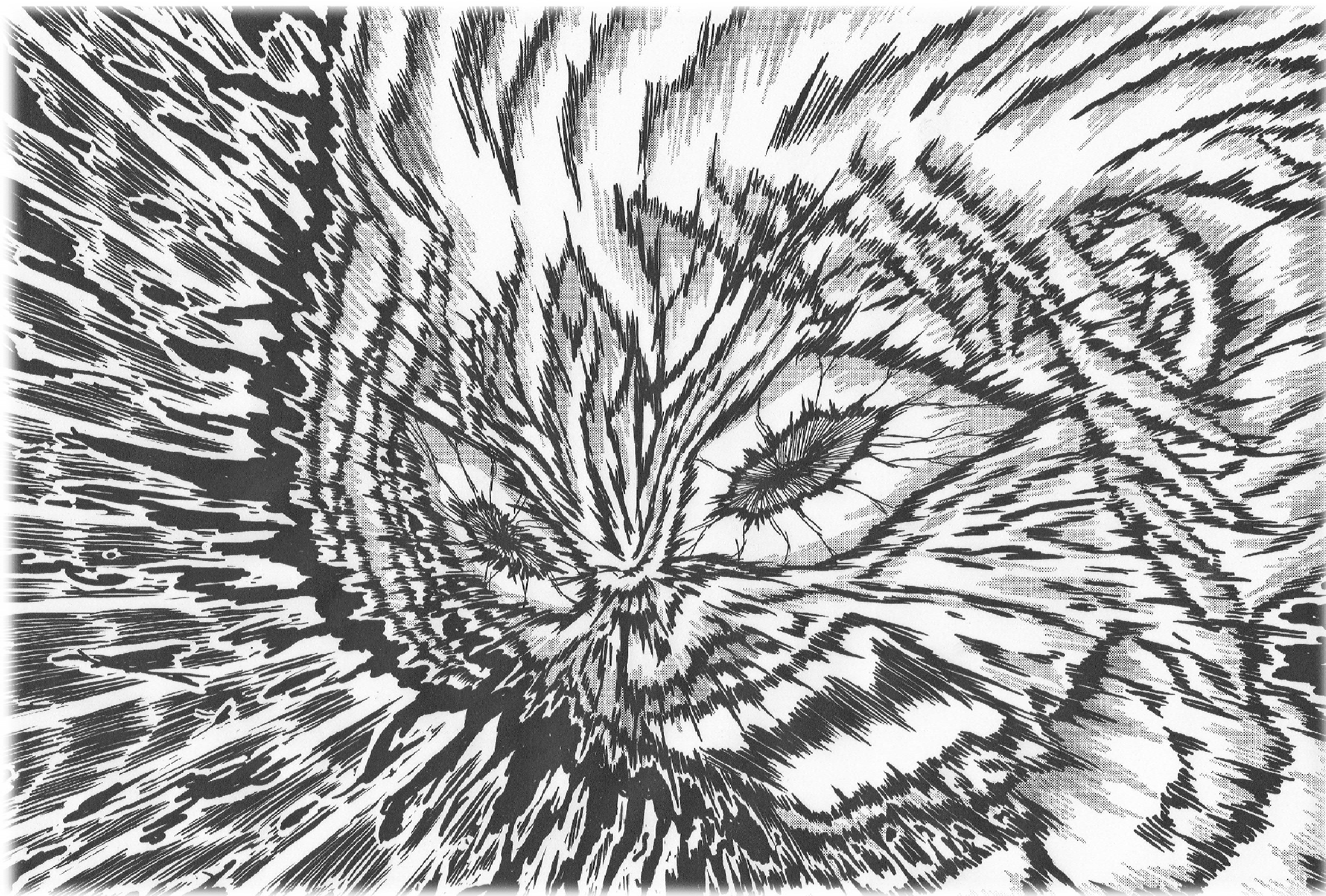
ゆっくりと再度瞼を上げ。



そっ。

“雷、と、いつその存在を構成するすべての要素が、一気に変質した！”





禍ッ！！！！

まずその眼は顔の上半分を占めんばかりに見開かれ、  
顔の上半分を占めんばかりに眼が巨大化し、

瞳孔もそれに伴って巨大化、

そして瞳孔は縦につぶれ横に伸び、

その横長になった瞳孔を中心に、激怒を表す血管が白目の部分に放射線状に多量に血走り、

その眼は、凶眼となるッ！

眉間に盛大に皺がより、

それだけではない、

その盛大に皺の寄った眉間を中心にこれまた放射線状に、狂気を表す皺と血管が盛大に浮かび、

口は顔の下半分を占めんばかりに開かれ、

その開かれた口から、目に映る存在全てを噛み砕き噛み殺さんばかりに食いしばった歯が現れ、

その顔は、狂相となるッ！

そして雷の爪先から髪の毛の先に至るまで、全身から、  
目視できるほど濃度の濃い、

コルタールの様にドス黒い

“憎悪”が、

あたり一面に

まき散らされてまき散らされてまき散らされるッ！！！

「！！！！！！！！」

その時。

金が、

雑狼が、

理花が、

花鈴が、

黒衣僧たちが、

何より間直でそのコルタールの様にどす黒い憎悪を浴びた鋼頭王が、  
そろって自身の時の流れを滞らせたッ！！

この場にいる全員がその一瞬で雷 信文という存在が何であることを理解した。

これが……さっきまで翳りのある白皙の美貌を有したあの美少年か？

あれは……人ではない……

化物ですらない……

人の形をした……

絶望 破滅 そして虚無そのもの！！

そして。

雷は右手の平を頭上に掲げ。

そして硬直している鋼頭王の頭頂部目掛けて振り降ろすッ！

刹那。

雷の右掌低が鋼頭王の頭頂部に接触したその刹那。

雷のその肺腑から“爆音”がとどろいた。

「シッシッシッ……！！！！」







鋼頭王の頸椎が一気に粉々に粉碎、  
音を立てて、  
信じられない事に、  
まるで亀、そうまるで亀のように、  
鋼頭王の頭が、

顔の半ば以上が埋まるまで、胴体にめり込んだッ！！！！



「「……」」」

もはやこの場にいるマオ以外全員、言葉が出てこない。

鋼頭王の顔の半ばまで埋まった頭と胴体の隙間から、  
何よりグリーンと白目をむいた単眼から、  
噴水の様にものすごい勢いで血煙が上がる。

そして理花と花鈴と雑狼と金は聞いた。  
マオがポツリと、しかし確実にこう言ったのを。

「<sup>レイ</sup>雷 <sup>シンブン</sup>信文に ……」

そして雷は至近距離からその鋼頭王の返り血を浴びながら、小指と薬指、親指を折りたたみ、



人差し指と中指を伸ばした左手で、「ピッ」と首を搔つ切るジェスチャーをしながら、踵を返す。

ぐら、と後方に揺れる鋼頭王の死骸。

「……  
「<sup>にのうちいらす</sup>二打不要」

そうマオが吹き終えると同時に、ズズ……ンン……とお向けに鋼頭王の死骸が倒れ伏した。

こうして勝負は終わった。

一方的な殺戮と同意義の。

「ハ……はひえ……」

その様子を見て、金は間抜けな感嘆と共に腰を抜かして尻もちをつく。

「マ……マオの姉さん……」の打ち不要……

あまりに「」の打ち不要すぎるでしょアレ……」

実際に鋼頭王に繰り出した攻撃は二発ではあるが、一発はペナルティだし、あれはもう一発だと言っていないだろう。

「あああ……あれが……

“キティアルティマ八極拳”といつものなの？！

あんな無茶苦茶なのがッ！……」

「ええ。」

理花の喚きに、あっさりそう返すマオ。

最早皆それ以上言葉も出ない。

フツ……と雷は、あのまともに直視できない凶眼から、もとの翳りのある白皙の美貌へと元に戻る。

その髪の毛から爪先に至るまで、鋼頭王の返り血でぐっじょりと濡れている。

そうして手櫛で髪をぬぐい、

手に付いた血糊をビツとはらい、

半眼になって虚空を仰ぎ、

ふ……う……

と息をつく様は、

あまりに恐ろしくて、怖ろしくて、

畏ろしくて、

それを通り越して

…… 美しかった。

その美しさに……この場にいる女はおるか男も皆揃って見とれてしまっていた。

「……………綺麗……」

ぱつり、と理花が迂闊にも漏らしてしまう。

「……理花ちゃん？」

と、花鈴が聞きとがめる。



ハッ、と、自分の失言に気付く理花。

「べ、別に何も言ってませんよ、ファファ、花鈴さんッ……」  
動揺してしまい下手なラップの様に答えてしまう理花。

そして雷は不意に「桃源鏡 から」すっつっつ……と自前のあの規格外のサイズの槍を取り出す。

ちなみにそれを見た金と雑狼が「ゲエエッ……なんてでかすぎる槍だあッ!」「いやあれもウ電柱だろッ!」「っつーか一体どこにあんなでかい槍を隠すスペースがッ!」と驚いている。

そのまま雷は「タンッ!」と地面を蹴り、一瞬飛びで陥没したクレーターから飛び出る。

金 雑狼 理花 花鈴 ヌオらのいる側の淵ではなく。

黒衣僧らのいる側の淵に。

「ひッ……ッ!」

黒衣僧らは恐怖に身をすくめ、二三歩後ずさる。

しかし、それだけだ。それだけしか出来ない。

後はもう、そのまま恐怖と絶望に身をすくませて震えるしか出来ない。

雷に一番近い位置にいた黒衣僧が、涙と脂汗と失禁と脱糞にまみれながら、

「お……お願……いしま……ゆ……赦し……見逃して……」

と、命乞いをする。

……その命乞いに雷はふ……と、優しい笑みを返す。

もしか見逃してくれるのか。

そう淡い期待を抱いて、「へへ……へへ……」その黒衣僧の一人が笑い返した

その直後。

通過上にあつた酸素分子をも焦がし、轟音とともに雷の豪槍が真一文字に一閃。

一瞬にして空に打ち上げられる、黒衣僧たちを構成していた肉片骨片血そして絶望と激

苦痛の断末魔の響き。

「~~~~~ッ……」

槍の間の外に残されていた黒衣僧らは恐怖に凍りついてもう悲鳴を上げる事すら出来ない。

そしてもうあと二三回瞬きをする間に、彼らは呼吸をすることも心臓を動かすことも脳波を出す事も出来なくなっていた。

さらに振られる雷の豪槍。

一回。二回。三回。四回。五回。

そして六回。

六回、槍が左右に振られるだけで、この場にいるすべての黒衣僧らの血煙と断末魔が空を彩り、そしてそれきり沈黙した。

……そしてこの場にいる黒衣僧らを余裕で葬った雷は、物言わぬ肉塊どもにこう吐き捨てた。  
「赦して。見逃してください、か」

そのまなざしには、慈悲も、恐怖も、憐れみも、憎悪も無かった。  
もうそれらを通り越して通り越して通り越してその果ての……  
残酷しか、浮かんではいなかった。

「貴様らが戯れに殺したこの街の人々も、そう哀願したろうな。  
そう哀願した者らに、貴様らは何をした？」

そして雷は、鋼頭王が放り捨てた、生首の連なった鉄棒の許へと歩みよる。  
正確には、あのホットケーキ屋の、三人家族の生首のもとに。

「……」  
恐怖と絶望に凍りついたまま、虚空をにらんで固まっている三人の首。

雷は無表情の仮面をかぶったまま、三人の臉を順に指で押し、閉じさせてやる。  
そうしてから。

雷は“結界域”を展開。  
途端。

「シユウウウウウ……」と静かに首を立てて、ゆっくりと鉄棒と生首たちは、分解されて、虚空へと散っていく。

そして気がつけば、もうこの世のどこにも、鉄棒に串刺しにされた生首の数々といつ、そんな代物はもうこの世のどこにも存在しなくなっていた。

「……」「……」

クレーターの対岸で、五人は神妙な面持ちでそれを見ている。  
ふと。

……どこからか、何かやたらと重たく、腹の底に響くような音が。

ゴゴゴゴゴゴ……

「ん！」「な、なんだっ……」

と、金糴狼理花、花鈴らがうろたえてあたりを見渡す。

その時四人は気づく。

いつの間にか、空が暗くなっているという事に。

マオだけが、実に不愉快そうに「フン」と鼻を鳴らす。

「すべての物事は鏡のようになっていて、私利私欲で人を殺す者は、逆にそうされても決して文句は言えない……」

そうポツリとつぶやいてから、  
そしてバツ！と天を仰ぐ雷。

「その事はッ！僕はもちろん、バツ！……貴様が一番よく知っている事だッ！  
なのになぜこんななめた真似をするッ！……」

答えるバツ！……

その雷の視線のはるか先には。

「みてーあれ！ー！」

指差す花鈴。

「なにアレ！ー？でつか！ー！」

驚愕に喉をふるわせる理花。

天を覆い尽くし、影を大きく落とす存在。

それは城……否、要塞だつた。

いくつもの砲門が連なり、分厚い城壁で自らをよろい、そして反重力発生装置により、宙に浮く、異様な建造物。

移動要塞「刁城」。

それがこの物騒極まりない建物の名前。

その建物の、一番高い城壁の上に。

「フ……決まっている。」

この世には死ななきや治らない類の莫迦が、私を含め予想外にいつ、唯それだけのことだろつ、よ」

これだけの距離が開いているといつのに、雷の叫びが聞こえたのか。

後に、「輝ける虚無」とも、「全てを無に還す慟哭」とも呼ばれることになる漢が。

少なくとも、この世界において玩弄者であると同時に道化である者が、下弦の月の様な笑みを漏らした。

はい、以上で体験版幻想武侠片はおしまいです。ここまで読んでくださり、誠にありがとうございます！  
とうございます！

もし続きを読みたいと思ってくださいるならば、是非本編の幻想武侠片をダウンロードしてください！

お待ちしております！（山下弋也）